

研究紀要 ー19集ー

研究主題

自己の育ちを支える小・中・高一貫した進路学習の在り方を考える
～「進路学習のステップ」の作成と指導形態「進路」の実践～

2012. 2. 10

障害者の権利に関する条約が国連総会により採択され、日本も条約の批准に向けて、障害者制度改革推進本部から「障害者制度改革のための基本的な方向性」が報告されたり、中央教育審議会特別委員会での「論点の整理」が示されたりして、様々な検討が行われてきています。平成23年7月には、障害者基本法の一部が改正され、8月5日に公布・施行されました。その中では、

(教育) 第16条 国及び地方公共団体は、障害者が、その年齢及び能力に応じ、かつ、その特性を踏まえた十分な教育が受けられるようにするため、可能な限り障害者である児童及び生徒が障害者でない児童及び生徒と共に教育を受けられるよう配慮しつつ、教育の内容及び方法の改善及び充実を図る等必要な施策を講じなければならない。

2 国及び地方公共団体は、前項の目的を達成するため、障害者である児童及び生徒並びにその保護者に対し十分な情報の提供を行うとともに、可能な限りその意向を尊重しなければならない。

3 国及び地方公共団体は、障害者である児童及び生徒と障害者でない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない。

4 国及び地方公共団体は、障害者の教育に関し、調査及び研究並びに人材の確保及び資質の向上、適切な教材等の提供、学校施設の整備その他の環境の整備を促進しなければならない。

と記されています。この中には、今後、特別な教育的支援の必要な児童生徒に対して、多様な学びの場を設定すること、また、個人の意思を尊重した就学指導のあり方について検討を加えること、さらに、特別支援学校の教育について、今まで以上に質の高い教育を行うこと等の今後の特別支援教育の充実に向けた方向性がしっかりと示されていると考えています。特に特別支援学校における教育については、個別的教育支援計画をもとに一人ひとりの子どもたちの卒業後の豊かな生活を目指した教育の実践を行うか、言い換えれば、子どもたちの出口(高等部卒業後)をいかに教育を通して保障していくのか、そのことの大切さがさらに問われるようになってくると思います。

また、特殊教育から特別支援教育へと教育の充実が図られている中、学習指導要領が改訂になり、今年度から小学部が完全実施になりました。平成24年度には中学部が、平成25年度には高等部が学年進行で完全実施となります。特に高等部の改訂の中では、(本校の研究とも大きく関わってきますが)「自立と社会参加にむけた職業教育の充実」という観点から、特別支援学校高等部学習指導要領「第1章総則第2節第4款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項 4 職業教育に関して配慮すべき事項」の中で、

(3) 学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域及び産業界や労働等の業務を行う関係機関との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなど就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする。

と示され、職業的自立を一層推進することの重要性も高まってきています。このことについては、当然のことですが、高等部の段階での教育だけで達成できるものではなく、小学部からの一人ひ

とりの発達に応じた組織的・系統的な取り組みが重要になってくると考えています。

このようにめまぐるしく障害のある方に対する制度改革が続けられている中、本校では、平成8年度から子どもたちの内面（研究基調P 1 参照）に焦点を当てた研究を継続し、子どもの行動を起こす原動力となるものや一つのことを継続し続けるために欠くことのできない要素等を探り、それを育てるために必要な教育課程とはどのようなものかを話し合い、実際に教育課程を編成し実践を行い、修正を加えるという研究に取り組んできました。研究のための研究ではなく、研究の成果や課題を分析し、子どもたちのよりよい変容を求める実践に役立つ研究を継続してきたと自負しています。今回は過去の研究の中で課題として挙げられてきたもののうち、「進路」ということに焦点を当てた研究になっています。「子どもたち自らが将来の仕事や生活に憧れを抱きながら、日々の学校生活を充実して過ごし、自らの意志で進路を決定し、周りの人と良好な人間関係を築きながら自らの力で新たな人生を切り切っていく。」そんな「生きる力」を身につけさせることができる進路学習になるようにとの願いを込め、小・中・高一貫した進路学習のあり方について、各学部で実施した研究授業を全教師で分析することで明らかにしていこうとしています。前述してきた動向からも、特別支援学校が直面している今日的課題に取り組んだ内容になっているのではないかと考えています。

本日は年度末のご多忙中、研究発表会にご参加いただきありがとうございました。皆様の忌憚のないご意見をいただき、今後さらに研究を深めて参りたいと考えております。ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年2月10日

長崎大学教育学部附属特別支援学校長

池田 英俊

自己の育ちを支える小・中・高一貫した進路学習の
授業の在り方を考える
～「進路学習のステップ」の作成と指導形態「進路」の実践～

総目次

はしがき

I 研究基調

1	テーマ設定の理由	1
2	研究の目的	8
3	各学部 of テーマ設定について	9
4	研究組織	9
5	研究計画	9
6	研究の経過	10
7	研究成果と今後の課題	19

II 小学部の研究

	研究の概要	25
1	小学部研究テーマについて	25
2	研究の方法	29
3	研究の経過	30
4	研究成果と今後の課題	46

III 中学部の研究

	研究の概要	54
1	中学部研究テーマについて	54
2	研究の方法	58
3	研究の経過	59
4	研究成果と今後の課題	86

IV 高等部の研究

	研究の概要	95
1	高等部研究テーマについて	95
2	研究の方法	97
3	研究の経過	98
4	研究成果と今後の課題	119

V	個人研究及び部研究以外の取り組み	131
---	------------------	-----

(巻末)	研究紀要バックナンバー一覧	138
------	---------------	-----

あとがき

I 研究基調

目次（研究基調）

I 研究基調

1 テーマ設定の理由

（１）本校研究の流れから	1
（２）近年の障害者（児）施策や特別支援教育に関する動向から	2
（３）学校教育目標から	3
（４）第１８次研究の研究課題から	4
（５）第１６次研究の研究課題から	5
（６）第１９次研究に向けた取り組みから	6
（７）「小・中・高一貫した教育」と「授業研究」という研究の 方向性から	7
（８）最後に	8

2 研究の目的

	8
--	---

3 各学部のテーマ設定について

	9
--	---

4 研究組織

	9
--	---

5 研究計画

	9
--	---

6 研究の経過

（１）本校の指導形態「進路」（進路学習）の定義について	10
（２）職業観・勤労観のとらえについて	12
（３）本校研究課題とキャリア教育について	15
（４）「進路学習のステップ」について	15

7 研究成果と今後の課題

（１）指導形態「進路」の定義の見直し	19
（２）小学部からの進路学習の内容創出と高等部までの系統性	19
（３）「進路学習のステップ」の作成と授業実践	19
（４）「進路」の概念化と「進路」に関する用語の整理	20
（５）教育課程運用上の成果と課題について	20

《引用・参考文献》

《参考資料１》こころチェックリスト	23
《参考資料２》こころチェックリストの項目の定義	24

I 研究基調

(全体研究テーマ)

自己の育ちを支える小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を考える
～「進路学習のステップ」の作成と指導形態「進路」の実践～

1 テーマ設定の理由

(1) 本校研究の流れから

本校では、平成8年度（第13次研究）の児童生徒の内面¹に焦点を当てた研究に始まり、「自己の形成」に関することを一つの研究基盤として、研究を進めてきた。平成8年度からの4年間（第14次研究まで）は、「子どもの内面に焦点を当てた評価の在り方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～」と題して、授業改善の方法を探るため、評価表や目標チェック表、授業分析表などを作成し、授業分析の方法を構築している。そこで、本校が重要視したことは、児童生徒の内面の形成的評価²を積み重ねることであり、個々のより確かな内面の変容を大切にすることであった。

第15次研究以降も、本校の特徴的な研究基盤として、自己の形成の研究に取り組んできた。

これまでの本校研究の流れを、以下のようにまとめた（第13次研究以降）。

表1 研究のあゆみ

次・ 紀要 NO.	年度	研究主題	研究内容と成果
13	H8～9年度 (1996～1997)	子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善 ～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～	診断的評価表と目標構造図 (単元の目標分析)
14	H10～11年度 (1998～1999)	子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善 ～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～ (その2：形成的評価から授業改善の方法を考える)	形成的評価システム(個別 目標チェック表、授業分析 表)
15	H12～13年度 (2000～2001)	教育課程の再編成その1 ～アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形 態等の改善の手がかりを探る～	児童生徒のアセスメント機 能をもつ内容表試案 ver.1 の作成
16	H14～16年度 (2002～2004)	教育課程の再編成その2 ～実践的課題研究と卒業生の実態調査をととして、自立と 社会参加をめざした新教育課程再編成の手がかりを探る～	「からだの学習」指導内容、 「アイデンティティの形 成」、「進路を切り拓く生徒 を育てるために」
17	H16～18年度 (2004～2006)	教育課程の再編成その3 ～自己の形成へつながる教育課程の創造～	教育課程4区分の編成(く らし、いきがい、まなび、 からだ)と内容表 ver.2
18	H19～21年度 (2007～2009)	自己を育む授業実践 ～「こころチェックリスト」 ³ を取り入れた授業設計～	「こころ」区分の設定、「こ ころチェックリスト」作成

新研究内容に取り組むに当たり、近年の障害のある方に関する施策の流れや、特別支援教育に関す

¹ 内面とは、「関心・意欲・態度」といった情意面や、「感じ方・考え方・判断の仕方」といった認知面の総体で、子どもの行動を起こす原動力や行動基準となるもの。(本校研究紀要第13集より)

² 形成的評価とは、指導の途中でそこまでの成果を把握し、その後の学習を促すために行う評価のことである。学習者が現段階でどの程度目標を達成できているかを見る。

³ 第18次研究で作成した、本校独自の児童生徒の内面や自己の形成を判断する指標である。「夢」「自立心」など10の項目と70の下位項目で構成されている。(p.23参照)

る動向を踏まえる必要があると考え、ＩＣＦによる新しい障害観の概念的枠組みの変化や 2009 年 3 月告示の学習指導要領改訂などについて理解を深めることにした。

（２）近年の障害者（児）施策や特別支援教育に関する動向から

①国際生活機能分類（ＩＣＦ）について

2001 年、WHOにおいて、ＩＣＦが採択された。ＩＣＦは、人間の生活機能を「心身機能・身体構造」「活動」「参加」の三つの次元でとらえ、それらの生活機能に支障がある場合を「障害」としてとらえた。また、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子などと相互に影響し合うものと説明し、従来の考え方とは異なる「新しい障害観」を提示した。

ＩＣＦでは、前身のＩＣＩＤＨと異なり、環境因子が加わっていることが、その特徴の一つである。国立特別支援教育総合研究所によると、子どもの「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の状況を環境因子や個人因子、子どもの気持ちなども含めた相互作用のもとで全体的にとらえ、その中でどのような指導や支援を行えばよいかを検討するために、ＩＣＦを活用することを想定している。例えば、「授業づくり」における指導内容や指導方法といった教師の支援や指導も環境因子に含まれる。指導をすれぱできること、環境を整えればできることなどに一層目を向け、子どもたちの学びを支える適切な指導と支援について改めて見つめ直す必要性をＩＣＦは示唆している。

②学習指導要領の改訂について

2009 年 3 月、特別支援学校幼稚部教育要領、小学校・中学部学習指導要領及び高等部学習指導要領が改訂された。今回の学習指導要領解説「改訂の基本方針 2」には、「社会の変化や幼児児童生徒の障害の重度化・重複化、多様化などに対応し、障害のある子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な教育や必要な支援を充実する」との表記があり、以下のアからエの観点から改善を図る、としている。

- ア 障害の重度・重複化、多様化への対応
- イ 一人ひとりに応じた指導の充実
- ウ 自立と社会参加に向けた職業教育の充実
- エ 交流及び共同学習の推進

今回の学習指導要領改訂の大きなポイントの一つは、「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」である。そして、高等部学習指導要領「第一章総則 第2節教育課程の編成 第4款教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」に「キャリア教育⁴を推進」という文言が記載され、学校のエ育活動全体を通じ、職業教育と進路指導の充実が求められている。児童生徒の将来を見据え、職業教育と進路指導の一層の充実を図るという観点で、学校教育全体についてキャリア教育の視点で見直す必要性が求められている。文部科学省から出された「小学校キャリア教育の手引き」（平成22年）によると、「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と述べられており、特別支援教育においても、小学部段階からの取り組みの重要性が認識されている。しかし、小学部段階から高等部卒業まで一貫して行うためのキャリア教育に関する教育課程上の明確な位置づけや指導内容は各学校で取り組まれているところである。

⁴ 「キャリア教育」とは、「キャリア概念」に基づいて、「児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」。端的には、「児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てる教育」。「キャリア」とは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」としている。（「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月28日））

（３）学校教育目標から

本校では、学校教育目標を次のように著している。

個々の児童生徒の教育的ニーズに応じた教育を行い、一人ひとりの自己教育力を高めながら可能性を最大限に伸ばし、自立的な生活を送り、積極的に社会生活に参加できる人間の育成を目指す。

①生きる喜びをつくる

自立と社会参加を目指すには、いろいろな生活体験を通して生きる喜びを抱くことが大切である。児童生徒は知的好奇心や興味関心を抱き、課題に対して自ら考えて主体的に行動する経験を通して、成就感や喜びを味わうことができる。そして、それを原動力にして意欲的な生活を送り、自己実現に向けて精一杯取り組んで欲しい。

②生きる力を身につける

自立と社会参加を目指すには、個々の特性と発達に即した生きる力が必要である。

自己を育み、自分のよさやできることを発揮するために必要な態度及び知識・技能を身につけて欲しい。

さらに、社会の一員として自分にあった進路を自己選択・自己決定し、生き生きと働いたり余暇を楽しんだりして、生活を充実し、豊かなものにして欲しい。

本校の学校教育目標は２つの柱で形成されている。この２つの目標を説明する文言のどちらにも現れる言葉に、「自立」と「社会参加」がある。

ここで、本校の「自立」と「社会参加」の定義を見てみたい。

自立とは… 本校研究紀要第 16 集、17 集より

- その人の能力に応じて、生活する上で必要な知識・理解・技能・態度を可能な限り身につけていくこと。そして、それらを積極的に生活に生かそうという主体性をもっていること。
- 上記の力を発揮して何らかを成し遂げようとするとき、必要に応じて自らの意思で他者に援助を求め、それを自分で選びとりながら課題を達成していくという主体的な生き方をすること。ただし、自ら意思を表現したり援助を求めたりすることが難しい人の場合には、他者からの援助を快く受け止めながら活動することを含めて考えたい。

社会参加とは… 本校研究紀要第 16 集、17 集より

- 自ら生きがいや満足感を感じることができる社会生活の場に参加すること。このような社会生活の場とは、家庭、地域、余暇活動の場、就労の場など、その人の能力や生き方に応じたものである。そして、可能な限り、家庭から出て、家庭以外の人とのかかわりをもって充実した生活を送ることが望ましいと考える。

近年のノーマライゼーションの進展に伴い、「自立」の概念が従前よりも広くとらえられる傾向にある。学校教育法第 7 2 条の改正に合わせて、学習指導要領の「自立活動」においても「心身の障害の状態を改善し、又は克服する」のではなく「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し…」と改めている。「学習上又は生活上の困難を…」とより具体的に改めているということは、学習場面や生活場面においても、より集団を意識しているのではないかと考えられる。すなわち、「自立」の概念が「互いに支え合いながらの自立」も含まれてきている傾向にある。

この「自立」と「社会参加」は、研究紀要第 1 6 集によって得られた定義である。私たちは、子どもたちの自立と社会参加をめざして、日々の教育活動を展開していると言える。本校では第 1 1 次研

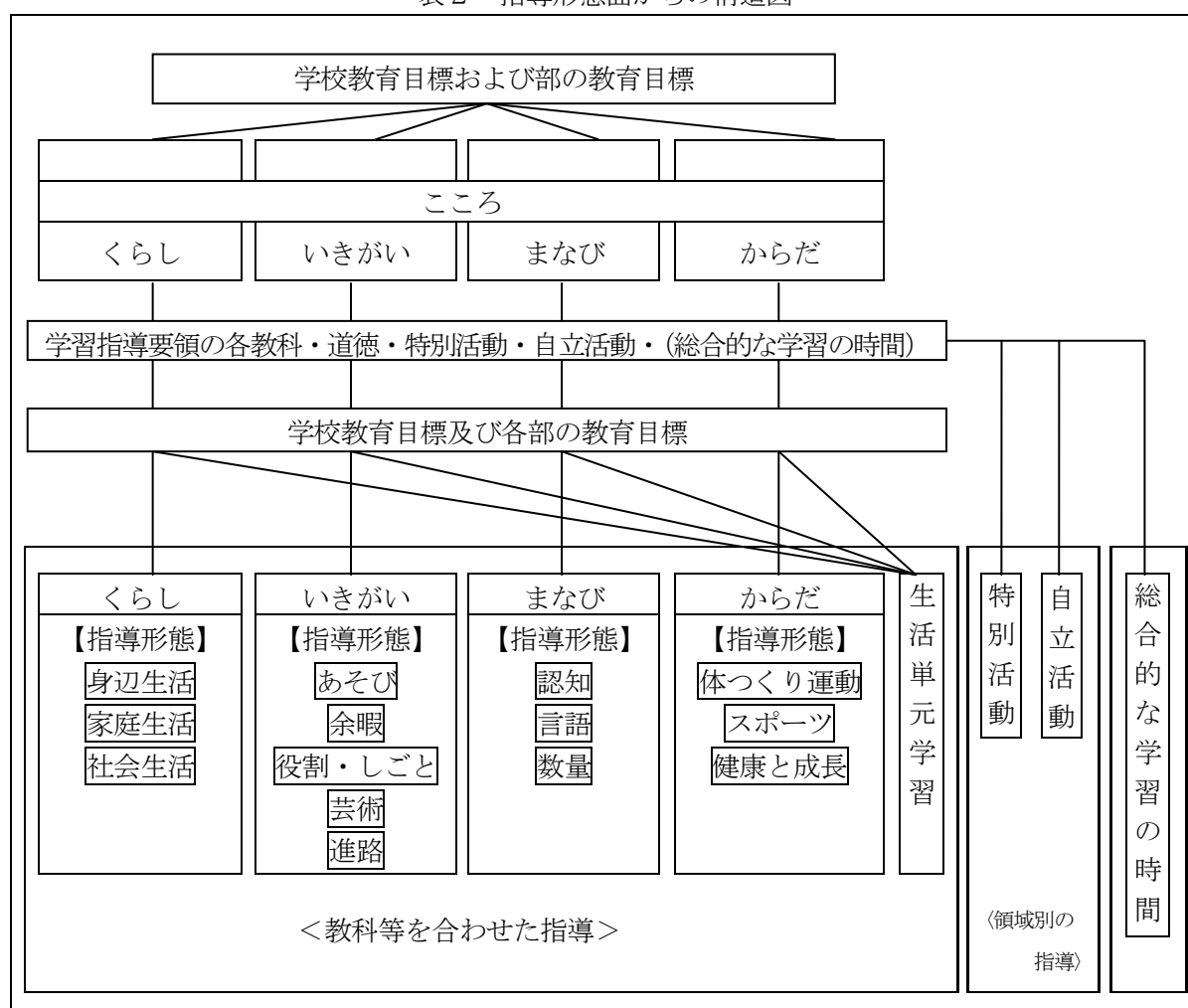
究（平成3年～5年）、第12次研究（平成5年～7年）において「自立」をキーワードとして研究に取り組み、「自立観」を共通理解するとともに、自立を支える指導方法の在り方についても検討を行った。第11次研究以来の「自立観」を踏襲し、第16次研究により定義づけられた「自立」と「社会参加」は、現在でも本校教育理念の根幹をなしている。

さらに第16次研究・高等部における学部研究において、「自立した社会生活に必要な知識・理解・技能・態度や、自分で選択・決定すること、よりよい自分を思い描きながら前向きに努力することなど、知識・技能面だけでなく、高等部段階での生徒の大人に対する憧れなど、発達段階に応じた生徒の内面も合わせて育てていきたい」として、「自立と社会参加」と本校の進路指導で目指すものがあることを明言された。この16次研究での研究成果により「大人の自分づくり」につながる自己理解や前向きな姿勢などの内面の育ちの重要性が示され、本校の教育理念として引き継がれてきている。

（４）第18次研究の研究課題から

本校研究は、平成12年から平成18年まで教育課程を再編する研究を行ってきた。平成19年から平成21年の第18次研究においては、本校教育課程の中核になる「こころ」区分を創設し、全ての指導形態において「こころ」の目標を設定し、運用を図っている。小・中・高一貫して行っている教育課程の構造図を表2で表す。

表2 指導形態面からの構造図



※ 小学部では指導形態「スポーツ」「総合的な学習の時間」、中学部・高等部では指導形態「あそび」を除く。

「こころ」区分を創出した第18次研究の「今後の課題」において、課題として述べられている課題は、以下のような点である。

- ・新しい指導形態・項目の検証
- ・区分同士の関連と、各部における区分の重みづけの検証
- ・指導形態設定の見直し
- ・「自己の形成」に関する様々な視点による指導内容の見直し（「様々な」という点において）
- ・各授業において「こころの目標」の全体的な検証

前述した課題に共通して言えることは、新教育課程の4区分のすべての指導形態において「こころ」の検証と「こころ」区分の“重みづけ”の検証がなされていない、ということが言える。このことには第18次研究において、新教育課程の「モデルカリキュラム」を編集したが、各学部での活用と検証、さらに学部間での確認作業を行っていないことが不十分だったことが考えられる。現在、第17次研究の成果である4区分で構成される新教育課程を再編成し、「こころ」区分を創出した約10年間の研究の継承と実践の蓄積を行ってきたが、前述の課題をもとに実際の運用段階では様々な検討課題が出てきているのが現状である。新教育課程のさらなる効果的な改善を図るためには、授業実践や指導方法の議論、検討がなされなければならないと考えた。

国立特別支援教育総合研究所のプロジェクト研究平成13年度～平成15年度「21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎的研究」によると、教育課程の編成や改善を図るためには、「校内の教育課程編成のシステムの確立が必要」とある。その際、「教育目標のとらえの整理、教育課程のとらえの整理…等について、校内での検討が必要になる。知的障害教育の各教科や自立活動の考え方、具体的な指導方法の設定の仕方、年間指導計画の立て方や授業展開等が、授業実践を通じて議論されることで、学校全体の教育課程の編成が一層柔軟になることが期待される」とある。さらに、同平成18年度プロジェクト研究「特別支援教育における教育課程の編成・実施の推進に向けた実際研究 特別支援教育の充実に向けた教育課程編成」によると、「教育課程の編成、改善のためには、授業及び指導計画の評価・改善に関する資料を年間を通じて蓄積し、分析・検討していくことが大切である」とある。

本校は、約10年の教育課程研究の成果により、特色のある新教育課程を編成することができた。その検証には、実際の授業による分析が不可欠である。授業研究を通して、様々な教育活動のとらえやねらいを明確にし、教育課程について、さらに改善できるよう本研究を進めていきたいと考える。

（５）第16次研究の研究課題から

第16次研究の「まとめと展望」には、次のように記されている。

「他の提言との関係づけも図りながら、本校の一貫教育の理論的背景を確立した上で、小・中・高一貫した教育課程の理念や学校教育目標・めざす人間像などの再構築を行うこととなる…今回各部が実践的研究課題の成果として示した『一人ひとりの教育的ニーズに応じる教育課程の在り方（提言1）』『からだの学習の在り方（提言2）』『進路指導の視点から見て、小・中学部で大事にすべき点（提言3）』といったことは、他の部の教育課程再編成にも生かされていくことと考える」とある。

提言1については、記述の通り、第17次研究において「一人ひとりの教育的ニーズに柔軟に対応でき、尚且つ小・中・高すべての部が同じ指導の枠組みとして指導できるカリキュラム」として4区分を創出した。提言2の中学部による「からだの学習の在り方」については、区分「からだ」に指導形態「健康と成長」として小・中・高それぞれの学部で年間指導計画を作成し、実践を重ねている。

そして、提言3の『進路指導の視点から見て、小・中学部で大事にすべき点』については、第16次研究において提言はなされているものの、以後実践、検証がなされていない現状にある。また、第17次研究以前には学習内容は存在しても、「進路」として位置づけられておらず、第17次研究にお

いて小・中・高とも教育課程を一貫して4区分に再編成し、学部毎の指導形態が確立された。しかし、区分や指導形態のとらえについては、学部内での運用に留まっていることが多い。第17次研究成果により創出された区分「いきがい」は、指導形態「あそび」「余暇」「役割・しごと」「芸術」「進路」の五つで構成されている。指導形態「進路」の指導に当たって、高等部の週時程には組み込まれているが、小学部、中学部においては、最終学年にのみ実施されている。小学部、中学部での実際の学習内容は、進学先の授業や活動を経験することであり、時期は学年末にのみ設定されている。第16次研究の提言が全校で検討されていない現状である。

そこで、本校の進路学習として、小学部、中学部全体で指導すべき内容があるのかどうか、検討していくとともに、第16次研究・高等部研究において提言された内容について再考し、進路学習について全校研究として取り組む必要があると考える。

（6）第19次研究に向けた取り組みから（平成21年9月～平成22年3月）

前研究（第18次研究）の「今後の課題」に、次のように書かれている。

『こころ』区分の内容の創出は、各授業の『こころの目標』のすべてをもって内容の創出とし、所期の目的は達成されたが、全体的な検証には至っていない。しかし、その検証には、本研究の成果である『教育システム』と『形成的評価システム』の円滑な運用とその**授業実践**が必要であり、時間をかけた検証が期待されるところである」と、授業研究の必要性が述べられている。

（4）（5）で既述の通り、各4区分や指導形態・項目の検証を行っていない。そこで、本校の職員を4つの区分に希望をもとにグループに分け、区分ごとに小・中・高一貫という教育課程上の視点から授業実践について考えるグループ研究を行うことにした。

グループごとに取り組んだ内容は表3に表す。

表3 区分別によるグループ研究の取り組み（平成21年9月～平成22年3月）

	「くらし」グループ	「いきがい」グループ	「まなび」グループ	「からだ」グループ
研究課題	「掃除」の時間の指導形態を明確にする 各学部の指導方針と支援の方法について検討する	小学部3組の指導形態「しんろ」の授業を考える	「認知」の指導内容表を作成する	「健康と栄養」という視点から、中学部の授業に使える教材を考える
上記の課題に取り組む目的	小学部、中学部は、指導形態「家庭生活」で週時程に設定されているが、高等部は朝の会の前に帯状に取るようにしている。指導については、各担任に任されていることが多いので、学部毎に指導の方針や指導方法など、まとめた資料を作成した。	高等部の指導形態「進路」の占める割合が大きく、中学部でも「将来の生活」の内容が少ない感じがある。小学部で指導形態「しんろ（将来の生活）」の授業研究を行い、本校の一貫教育、自己の形成が見えるような授業が示唆できればと考える。今後指導形態「進路」が、区分「いきがい」にある意味を検討していく。	本校の「まなび」区分の指導内容は、指導形態「認知」「言語」「数量」で構成されている。「認知」に関する取り扱いが各部で異なっており、とらえも曖昧である理由と、内容表（ver.2）からさらに、具体的な内容が記された物があるとよい、との考えから、指導内容を段階別に分け、内容表を作成した。	各部、「肥満」に関する授業を考える。これまで、系統性のある指導はなされていないが、実際に卒後の課題では肥満傾向が挙げられる。肥満の項目で内容表（ver.1）がないことと、内容表（ver.2）が授業に盛り込まれている実態が分からないことから、肥満予防（食事の管理・適度な運動）の教材について考えた。

研究成果	・小学部は全組同じだった指導形態「そうじ」のモデルカリキュラムを、各組一枚ずつ設け、目標や内容を細分化した。中学部のモデルカリキュラムの目標を変更した。 ・「掃除」の指導内容は、どの学部でも大事な内容である。系統性で考えると、「掃除の仕方」(小)「知る」→(中)「覚える」→(高)「自分です」となるのではないかな。 ・学部で1枚ずつ、学部の指導方針、指導目標、指導の方法、個別のめあて等明記した資料を作成して、共通理解できた。	・指導形態「しんろ」について、指導案を作成し、小学部3組の授業を行った。題材名「中学生に变身しよう」 ・実習に結びつけるものではなく、将来の生活を児童生徒がいかにイメージできるかを授業研究の柱にし、小、中、高でのつながりを見ることにした。 ・授業の構成では、ゲストティーチャーとして他部の先輩や教師を登場させたり、児童に中学部の制服を着せたりして、子どもの夢や希望等、心を大切に授業をすることができた。	・指導形態「認知」の定義を、「見る、聞く、手指の操作等」をすることを通して、環境からの情報を取り入れたり、環境に働きかけたりする力を育てる指導形態」と見直す。 ・指導形態「認知」の指導内容は、今まで「視知覚」「聴知覚」「手指の操作」となっていたが、それ以外にも、「仲間分け・属性」「模倣」「絵カード理解」「指示理解」「連想・推測」等を設けた。 ・指導場面においては、「学習」「作業等」「自己管理」「遊び・ゲーム」に分けられた。	・準備運動の実態を、内容表(ver.1)の各段階に小3組、中・高3年生の児童生徒を当てはめ、実態表として使用できることを確認した。 ・児童生徒の肥満傾向の割合をグラフで表した。「軽度肥満」～「高度肥満」の児童生徒の割合は、高等部になるにつれ高くなることが分かった。 ・「食べ物の栄養素(栄養コースターと評価表)」「おやつを選び方(時間・量・バランス)」「よい便について(ロード・オブ・便の教材)」の3班に分かれて教材を作成した。
------	---	---	---	--

グループ研究後のアンケートでは、

- ・今後の研究の方向性に沿った研究をするべき(研究の視点が不明確)
 - ・これまでの「自己の形成」の研究を継承し、妥当性を検証すべきなどの、縦割りの研究会で本校の教育課程を考えることに戸惑った意見がある一方、
 - ・一つのテーマに基づいた授業や教材を考えることができた
 - ・縦割りの研究を行うことで、学部間の情報交換が必要ではないかな
 - ・各部の情報交換をすることができ、モデルカリキュラムを見直すことができた
 - ・各部の教育活動を知り、小・中・高のつながりを考えられるようになった
- (「まなび」グループ)
- などの、肯定的な意見が挙がった。

特に、区分「いきがい」のグループ研究からは、

- ・区分「いきがい」だけ見ても、指導形態の幅がとても広いのではないかな。
 - ・高等部の指導形態「進路」にかかる時間が多い。(他学部の教員から出た意見)
 - ・今回の授業研究を通して、小・中・高の教員の連携ができ、教師同士のコミュニケーションが必要ながよく分かった。
 - ・区分「いきがい」における「進路」の在り方を、授業で実践することができたが、「進路」の小・中・高一貫したつながりでは今後に向けて課題もある。
- などの課題が複数挙がり、本研究への方向性が示唆された。
- 以上のように、縦割りのグループ研究で協議された内容を推進していく必要性があり、小学部から高等部までの進路指導、進路学習の系統性を考え、具体的に実践できる方法を検討していくことが必要であると考えた。

(7)「小・中・高一貫した教育」と「授業研究」という研究の方向性から

「一貫」とは、方針・方法・態度・考え方に矛盾がないことであり、「一貫教育」とは、「同一の学校で、小・中・高で継続的、効果的に行う教育課程、教育活動である」(佐賀大紀要 2009)と、考え

られている。「一貫教育」に大切なことは、学校全体を貫く理念だけでなく、継承され、検討される環境づくりも大切であることが分かる。

本校は、小・中・高一貫した教育を教育課程運用上、次のようにとらえている。本校研究紀要第17集によると、「12年間の学校教育を貫く理念を確立することが小・中・高一貫教育の必須条件であり、その理念を具体化した教育課程を構築していくことが本校の使命」とある。既述の通り、本校の第17次研究成果により、「くらし」「いきがい」「まなび」「からだ」の4区分を創出し、運用を図っている。第18次研究では、「こころ」区分を創出し、各学部のすべての指導形態において「こころの目標」を立て、モデルカリキュラムを作成した成果がある。しかし、各部「授業分析表」を用い、形成的評価システムを導入した授業研究を行ったが、学部内での検討に留まり、全体での協議を行うには至らなかった。

（８）最後に

前述したような本校の小・中・高一貫した進路学習を実現するためには、どのような視点で授業と授業研究を行う必要があるのだろうか。次のようなことが考えられる。

- ・小・中・高の継続的・一貫性のある指導を目指す
 - ・「こころ」に関する目標、「こころ」区分に関する指導内容を継承する
 - ・VTRにより実践を記録し、記録による分析や評価の妥当性を検証する
- 等が挙げられる。

日本では古くから授業研究が行われてきており、現在も日々全国各地で「授業研究」を研究主題に励んでいる学校は多い。一般的に授業研究会では、学習指導案に沿って進められた授業を見て、授業後、参観者と一緒に、児童生徒の学習が期待通りに進んだかどうかを話し合う討議会が開かれる。このように計画・実践・討議のサイクルを通し、教師が互いの授業を見合うことで資質を高めたいこうとする姿が求められる。

世界的に広がりを見せている「授業研究」を「レッスンスタディ」と呼ぶが、その視点からは、次のようなことが書かれている。「授業研究」は、「研究した授業、つまり教師と一緒に計画、観察、議論する授業を意味している。授業研究はこの研究が中核となって、どのように授業（指導）が改善されていったか、というその過程を意味している」と「授業研究」を定義している。そこでは、教師がともに学び合う共同体の在り方を研究の対象領域としている。特に、特別支援学校においては、チームティーチングによる授業が行われることが多く、児童生徒の目標設定から評価に至る一連の流れは、児童生徒にかかわる教師が意思の疎通を図り、指導に当たることが非常に大切である。

本校は「自己の形成」を研究基盤にして約15年が経過している。児童生徒の実態の重度化、多様化、特別支援教育を取り巻く情勢など、その流れに適宜対応しながら、新教育課程を創出してきた。このように、小・中・高一貫した教育が新教育課程により備わったことを、本校独自に研究開発してきた「自己の形成」の継承研究により、指導形態「進路」の授業を通して検証するとともに、小学部・中学部・高等部を通して実践できる進路学習の理解・推進を図りたいと考え、本研究主題に取り組むことにした。

2 研究の目的

小学部から高等部までの一貫した組織的、系統的な観点から、進路学習の意義をとらえ直し、進路学習におけるねらいやキーワードの共通理解を図るとともに、児童生徒が生きることの喜びや期待感を感じながら将来の生き方を考えることにつながる指導内容や指導方法について、授業研究を通して明らかにする。

小学部段階から、系統的、発展的な教育活動を「こころチェックリスト」（p.23参照）の大切にしたい項目をもとに明らかにし、授業を実践していくことで、小学部低学年からの進路学習の実現が可能となり、今の学習が将来の生活につながっていくと考える。

3 各学部のテーマ設定について

《小学部》

「なりたい～なれるかなあ？」
～わくわくドキドキ夢ふくらむ「しんろ」の授業づくり～

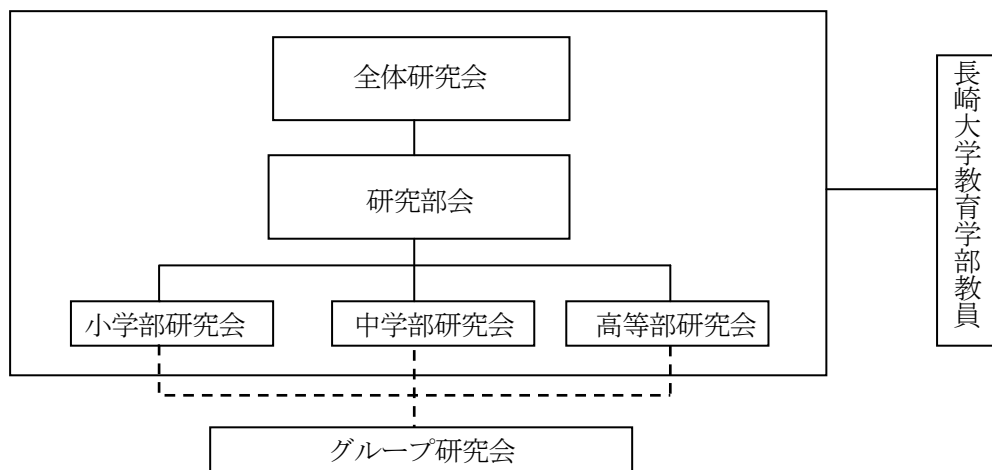
《中学部》

支えあっている生活に気づき、これからの自分に期待する授業づくり

《高等部》

大人になっていく自分を見つめ、将来へのビジョンを描く授業づくり

4 研究組織



5 研究計画

年度	研究内容
2010 年度 (平成 22 年)	○学校教育目標、めざす人間像の確認や検討 ○職業教育（職業観・勤労観）、キャリア教育について ○本校の進路学習の定義、在り方について ○進路学習のステップについて ○授業研究会 ＜指導形態「進路（将来の生活）」＞ ・小学部全組・中学部全学年・高等部 2 年
2011 年度 (平成 23 年)	○進路学習のステップの作成 ○授業研究会 ＜指導形態「進路（将来の仕事）」＞ ・小学部全組・中学部全学年・高等部全学年 ○紀要原稿の検討 ○指導形態「進路」の定義の見直し、確認

6 研究の経過

(1) 本校の指導形態「進路」(進路学習)の定義について

①第16次研究(平成14年4月～平成16年7月)の「進路学習」のとりえ

先述の、第16次高等部研究では、「進路学習」の指導内容・計画が体系的に組織されていないことを受け、「進路学習」の在り方を検討している。第16次研究紀要では、

「進路学習は、進路についての情報や現場実習の経験、進路先見学などを通して、自分自身について、そして、仕事や生活など、生き方・在り方を考える学習」

である、ととらえている。

内容については、

- ・進路に関心や希望をもつ
- ・成長の過程を振り返り、大人としての実感をもつ
- ・将来の自分について考える
- ・進路の情報を得る
- ・自分を見つめたり、障害を理解したりする
- ・情報をもとに、能力や適性を考えて実習先や進路先を考える
- ・実習をとおして自分の能力や適性を知り、自己理解を深める など

が挙げられている。

本校では、進路指導⁴の中に進路学習を位置づけている。第16次研究時(高等部)では、進路学習を進路指導の中核として研究を行っている。このときの進路学習を行う指導形態については、HR(学級活動)、生活単元学習(校外・現場実習の事前・事後学習を含めて)、総合的な学習の時間の三つの形態で行っている。

②第17次研究(平成16年8月～18年7月)以降の「進路学習」のとりえと、第19次研究(本研究)での検討後のとりえ

第17次研究では、「教育課程の再編成 その3～自己の形成へつながる教育課程の創造～」と題して、新教育課程を創出し、「くらし」「いきがい」「まなび」「からだ」の4区分に整理した。指導形態「進路」は、その中でも「いきがい」の区分にある。

定義を比較した表は、以下のとおりである。

表4 指導形態「進路」の定義

旧(平成16年8月～平成22年3月)	新(平成22年4月以降)
○ 定義 指導形態「進路」は、自分の将来の生き方を自己選択・自己決定できるように「自己の形成」を図るものである。具体的には、先輩の様子や様々な進路先の情報を知ることによって自分の将来に対して見通しをもつことや、憧れの先輩たちの姿から現在の自分を客観的に見つめ直す機会をもつことで、少しでも先輩に近づこうと努力すること、不安をもちながらも自分の将来の生き方をみつけようと試みること等を通して、「自己」を形成する学習といえる。 児童生徒には今現在も将来も熱中するものがあると感じながら社会のなかで生きてい	○ 定義 指導形態「進路」は、自分の将来の生き方を^{※1}考えることができるように「自己の形成」を図るものである。具体的には、先輩の様子や様々な仕事、生活についての情報を得ることで、自分の将来に^{※2}期待感をもつことや、憧れの先輩たちの姿から現在の自分を客観的に見つめ直す機会をもつことで、少しでも先輩に近づこうと努力すること、^{※3}葛藤しながらも自分の将来の生き方をみつけようと試みること等を通して、「自己」を形成する学習といえる。 児童生徒には今現在も将来も熱中するものがあると感じながら社会のなかで生きてい

⁴ 進路指導は大きく進路学習と進路相談からなっており、HRや生活単元学習、総合的な学習の時間で行っていた進路学習は、第17次研究により区分「いきがい」・指導形態「進路」に統合された。

って欲しいと思う。「こうしたい」という自分の思いや考えをもち、それを何とか実現しようと主体的に活動しながら、社会の規範やルールに従って、みんなと共に生きること喜びを見いだす社会の一員になって欲しい。以上のことから、区分「いきがい」において、指導形態「進路」を設定し、以下のように定義した。

自分の将来に対する知識・情報を知ることや実際の体験を通して将来の生活を実感する

指導形態「進路」は、区分「いきがい」の他の指導形態「あそび」「余暇」「役割・しごと」「芸術」を基盤にしている。指導形態「あそび」は、生きるエネルギーであり、自ら主体的に生きていこうとする基本的な姿勢が培われることから、主体的な生き方を模索する指導形態「進路」の根底に必要である。指導形態「芸術」「余暇」は、趣味につながるもので指導形態「進路」の余暇活動の側面において生きがいを支えていくものである。指導形態「役割・しごと」は、自らが他の人や所属グループのために活動することに有用感を覚え、生きがいのもてる日中活動を送るために必要であり、社会的活動を自ら選択し、主体的に参加することを目指す指導形態「進路」を学習する上で、基盤となるものである。

○指導にあたって

指導形態「進路」は、項目「将来の仕事」と「将来の生活」の二つで構成している。項目「将来の仕事」は、現場実習の事前・事後学習を含め自分の将来の仕事についての内容を取り扱うものである。項目「将来の生活」は、将来の生活、支援、余暇の情報や進学先のことを知る活動を取り扱うものである。

具体的には、小学部、中学部の最終学年においては、実際に進学先の授業や活動を経験することを通して、進学先での活動に見通しをもたせることを通して、各部間のスムーズな移行を目指すことが主なねらいとなり、さらに中学部においては、高等部の項目「将来の生活」にある自分の成長を知ることやこれからの生活に興味をもつなどの指導内容も取り扱うことになる。高等部においては、進路先の先輩たちの姿を見て「自分のめざす姿、憧れの姿」をもつことで、今の自分と憧れの姿を客観的に比べ、「自己」を客観的に見ることで、「自己の形成」に結びつけたい。また、現場実習などの機会に、実習先を選択することを通して、最終的には、自分の生き方を「自己選択・自己決定」できるようにしたい。

て欲しいと思う。「こうしたい」という自分の思いや考えをもち、それを何とか実現しようと主体的に活動しながら、※⁴社会の規範を意識しながら、みんなと共に生きること喜びを見いだす社会の一員になって欲しい。以上のことから、区分「いきがい」において、指導形態「進路」を設定し、以下のように定義した。

自分の将来に期待感を抱きながら、知識・情報を得たり、実際の体験をしたりすることで、将来の生活を見つめる

指導形態「進路」は、区分「いきがい」の他の指導形態「あそび」「余暇」「役割・しごと」「芸術」※⁵と相互に関連している。小学部にある指導形態「あそび」は、生きるエネルギーであり、自ら主体的に生きていこうとする基本的な姿勢が培われることから、主体的な生き方を模索する指導形態「進路」に※⁵つながっている。指導形態「芸術」「余暇」は、※⁶自分の楽しみを見だし、生活に潤いや安定をもたせる意味で、生きがいを支えていくものであると考えられる。指導形態「役割・しごと」は、自らが他の人や所属グループのために活動することに有用感を覚え、生きがいのもてる日中活動を送るために必要であり、社会的活動を自ら選択し、主体的に参加することを目指す指導形態「進路」を学習する上で、※⁵関連は深い。

○指導にあたって

指導形態「進路」は、項目「将来の仕事」と「将来の生活」の二つで構成している。指導形態「進路」では、仕事や働くことへの興味・関心をもつことや進級、進学、進路先に夢や憧れを抱いたり葛藤したりしながら、自分の生き方、在り方について考える学習を取り扱う。

具体的には、小学部では、お兄さん、お姉さんや中学生になることへの憧れや期待感を育てたい。また、体験的、模擬的な活動を通して、仕事に対する関心や理解力を高めたい。中学部では自分の成長を知ることや、先輩などの身近な人に憧れの気持ちをもち、これからの生活への期待感を高めたい。また、いろいろな仕事が自分の生活とつながっていることを理解できるような内容を設定していく。高等部においては、進路先の先輩たちを見て「自分のめざす姿、憧れの姿」をもち、今の自分と憧れの姿を客観的に比べ、「自己の形成」に結びつけたい。また、現場実習などの機会に、実習先を選択することを通して、最終的には、自分の生き方を「自己選択・自己決定」できるようにしたい。卒業後、社会参加するためには、進路先の様子を見たり仕事を経験し

卒業後、社会参加するためには、進路先の様子を見たり仕事を体験したり、実際の支援を経験することも重要である。 実際の指導に当たっては、児童生徒の実態（将来のことをイメージできるか、実際の経験を通さないと実感できないか、意思表示が難しいか）に応じて指導することが必要である。 その他に留意する点は、 ・本人の意思を確認すること ・他者評価と自己評価を対比させ客観的に自己を認識させること ・「自己選択・自己決定」することの大切さを伝えること ・選択の観点を提示して考えさせること ・相談窓口などの情報も提供しておくこと、などである。	たり、実際の支援を経験することも重要である。 実際の指導にあたっては、児童生徒の実態（将来のことをイメージできるか、実際の経験を通さないと実感できないか、意思表示が難しいかなど）に応じて<u>学習方法や学習集団の構成を工夫しながら指導することが必要である。</u> 特に、<u>一人ひとりの児童生徒の実態に応じて、身近な人への憧れの気持ちをもたせたり、将来の生活への期待感やめざす姿などを抱かせたりするために、意図的で積極的な働きかけや環境づくりは重要である。</u>
---	---

※ 部分は、検討すべき内容、は、検討後の内容である。

※1. 小・中学部から授業内容を考えるので、含みが多い表現に。

※2. 「期待感」には、「前向きな気持ち」の意味合いを持たせる。

※3. 「不安」には、「気がかりで落ち着かない」というネガティブなイメージがある。「葛藤」「迷い」のような表現にする。

※4. 「肯定的な自分（自分が認められていること）」「楽しみを見いだす」「自分の生き方、在り方を考える」という区分「いきがいの姿からは、「社会規範やルールに従って」という言葉と方向性の違いを感じる。「社会規範やルールに従って」の部分は、他区分（「くらし」など）でできないか。→「社会規範」の部分の必要性を検討した。

※5. 区分「いきがいの」定義にあるように、「相互に発展・関連」という意味あい。（グループ研で検討済み）

※6. 「趣味につながる」だけではない。「自分の楽しみ」「日常生活の潤いや安定」：指導形態「芸術」「余暇」より。

（２）職業観・勤労観のとらえについて

本校の第16次研究高等部研究では、「進路を切り拓くために大切にしたい力」として、三つの力を明らかにした。「人間関係を形成する力」「課題を解決する力」と、「職業観をつくる力」である。

この「進路を切り拓くために大切にしたい力」を考えるにあたって、「全ての子どもたちの職業観・勤労観を育むために一児童生徒の成長に応じた学習プログラムの枠組み―（国立教育政策研究所生徒指導研究センター，2003）」を参考にしている。この報告書の中で、職業観・勤労観の形成について、「子どもたちの内面の成長・発達と深くかかわること」「時代や環境の変化に大きく左右される事柄であること」が特徴として示された。実際の指導に当たっては、①子どもたちの発達の変化や発達課題を明らかにすること②そうした課題の達成に必要な能力・態度を幅広く取り上げること③各学校段階ごとに具体的に示すこと、の必要性が挙げられ、この報告を受けて、第16次研究時に「進路学習の内容とステップ」が作成された経緯がある。

では、その後、時代の流れにおいて「職業観・勤労観」は、どのように考えられてきたのだろうか。

文部科学省は、2006（平成18）年11月に「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き ―児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てるために―」を示した。研究分野において、知的障害児教育だけでなく、通常の小学校、中学校、高等学校においても「キャリア教育」として、勤労観、職業観の意義や内容が大きく取り上げられるようになった。

特別支援学校の高等部では、以前から進路指導として自分の将来の職業について考える授業や職業体験を取り入れている学校が多いが、どのような指導形態で教えるかは学校によりそれぞれである。

「特別支援学校高等部学習指導要領」（平成21年3月告示）の「総則」には、学校の教育課程の編成において「キャリア教育の推進」が規定され、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選

扱することができるよう、校内の組織体制を整備し、教師間の相互の連携を図りながら、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」と示されている。狭義の「働くこと」について考えさせる学習だけでなく、「自己」と「働くこと」との関係づけや位置づけを重要視し、児童生徒一人ひとりの職業観・勤労観を育てていく学習を行うことが求められていると言える。

本校でも本研究の中で、「職業観・勤労観」を本校の教育課程に基づいて考えることにした。(図1)

その際、佐賀大学文化教育学部附属特別支援学校の『「はたらく生活」を目指す道筋モデル』と岩手県立総合教育センターの「発達段階における勤労観・職業観を育てるための指導・支援の割合」を参考にした。

この2つの文献の「職業観・勤労観」の関係においては、「勤労観」が基礎となり、その上に「職業観」が形成されている。「勤労観」は、「日常生活動作と基本的生活習慣に関する力」と、「社会生活や家庭生活に主体的に参加し、自らの役割を果たす力」の二つの力が考えられ、「職業観」は、「実際の働く力」と「職業的な自立に必要な力」を育てていくと考えられている。

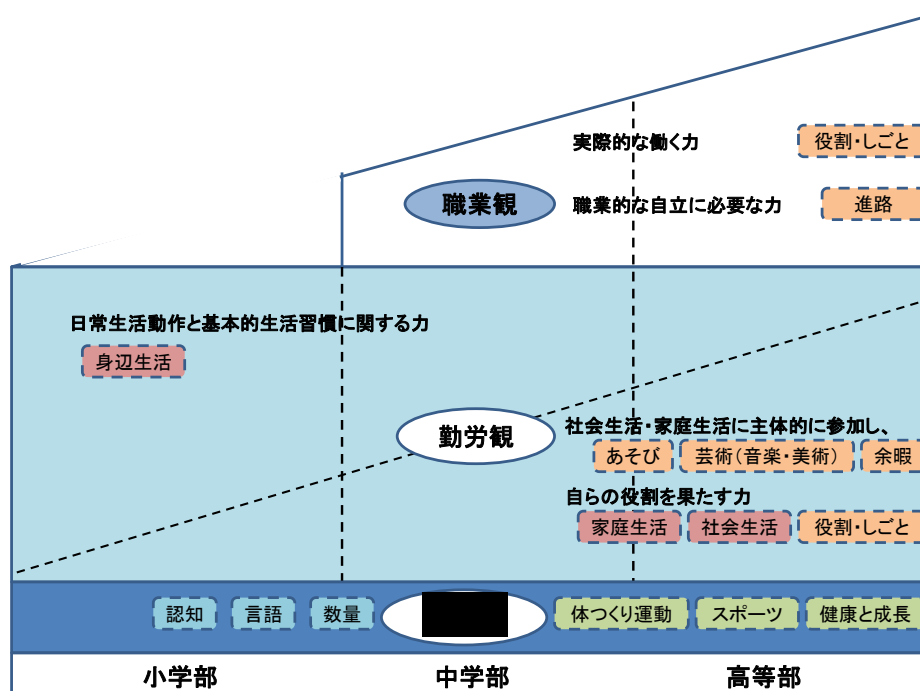
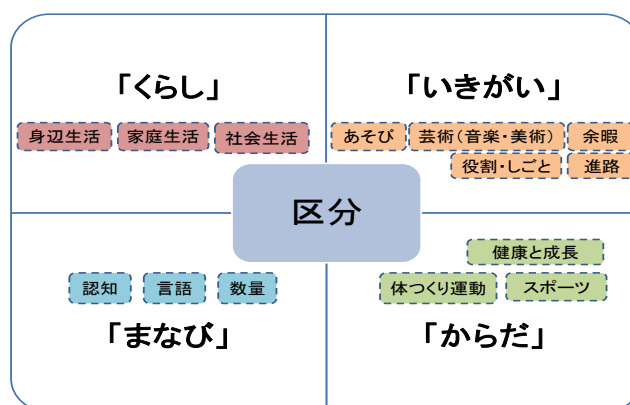


図1 「職業観・勤労観」と本校教育課程の関連図



[解説]

本校の教育課程から、職業観・勤労観の育成へ当てはめてみたところ、図1のようになる。

- ・《土台》の部分は本校独自のとらえである。区分「まなび」と区分「からだ」の各指導形態は、「職業観・勤労観」の支えとして、土台となる部分である。
- ・区分「くらし」と区分「いきがい」の全ての指導形態が「職業観・勤労観」のそれぞれの力について分散して当てはまることが考えられた。区分「くらし」と区分「いきがい」の各指導形態で「職業観・勤労観」を養うと言える。
- ・「勤労観」のうち「社会生活・家庭生活に主体的に参加し、自らの役割を果たす力」に該当した指導形態は、区分「いきがい」の中の指導形態「進路」以外の全ての指導形態が当てはまる。第17次研究において、区分「いきがい」の各指導形態は、指導形態「進路」の「根底に必要」「支えるもの」と記されている。このことから、「勤労観」の「社会生活・家庭生活に主体的に参加し、自らの役割を果たす力」に該当する指導形態は、進路学習を支える指導形態であることが分かった。
- ・「職業観」は「実際の働く力」と「職業的な自立に必要な力」である。この2つから考えると、指導形態「進路」と「役割・しごと」が当てはまる。しかし、研究会での協議において、「職業観」を構成する力が表記の二つでよいのかどうか、との意見が挙がった。
- ・その結果、「職業観・勤労観」は、本校の全ての指導形態が該当しており、つまりは教育課程全般で支えていることが分かった。

本校の進路学習である指導形態「進路」は、区分「いきがい」にあり、教科等を合わせた指導である。本校の様々な指導形態から、本校の「職業観・勤労観」を考え直すいい機会となった。しかし、本校が長年「自己の形成」を大切にしてきたことから、指導形態「進路」を含む教育課程全般で児童生徒の「職業観・勤労観」のみを育成しているわけではない。このことは、本校の指導形態「進路」及びこれと関連の深い指導形態（指導形態「役割・しごと」等）が「働く」ための「職業的な力」の育成のみを目指しているわけではない、ということが言える。

2002（平成14）年、国立教育政策研究所生徒指導センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」には、「望ましい職業観・勤労観」という記述がある。

「重要なのは、正しいとされる一律の『職業観・勤労観』を教え込むことではなく、生徒一人ひとりが働く意義や目的を探究し、『自分なりの職業観・勤労観』を形成・確立していく過程への指導・援助」であるとしている。その際、『自分なりの職業観・勤労観』という多様性を大切にしながらも、それらに共通する土台として、以下のような『望ましき』を備えたものをめざすことが求められる」として、情意・態度面での「望ましき」の要件が、以下の3点において記されている。

- ①一人ひとりが自己及びその個性を価値あるものとする自覚
- ②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通した、職業・勤労に対する自分なりの構え
- ③将来の夢や希望の実現をめざして取り組もうとする意欲的な態度

この「望ましい職業観・勤労観」の観点、特に、①～③にあるような「自己」「自覚」「夢」「希望」「態度」などの視点は、本校の研究基盤である「自己の形成」を支えるものと重なる部分が多い。「望ましい職業観・勤労観」の育成という視点からのみでなく、本校は学校生活全般で「自己」を大切に、「夢」や「希望」をもって生きていくことができる児童生徒の育成を目指している。第17次（平成18年度）研究では、「自己の形成」に最も関連が深い区分として区分「いきがい」に指導形態「進路」を設定している。この研究を高等部で運用してきた「進路学習」の内容を、指導形態「進路」として統合した経緯がある。本研究を進める上で、これまでの実践から指導内容や指導計画が適切であるかどうか等、もう一度第13次研究以降の「自己の形成」の研究基盤から、「自己」の何を大切にしているのかを見つめ直す必要がある。さらに、小・中・高一貫で考える指導形態「進路」として培いたい「力」は何か、小・中・高の授業実践を通して確認していくことが求められていると言える。

（３）本校研究課題とキャリア教育について

平成１１年の中央教育審議会答申において「キャリア教育」という提言がなされたことに始まり、その後「キャリア教育」に関して、それぞれの学校において様々な取り組みがなされている。

これまで特別支援教育（知的障害）において、職業教育・進路指導については従来から重視された領域・教科を合わせた指導である「作業学習」等の取り組みがある。しかし、従来の知的障害児を対象にした職業教育・進路指導に関しては、必要な知識・技能及び態度を身につけることに重点が置かれ、「働くこと」に向けての進路指導が主であったようである。

宮城教育大学紀要第４２集によると、「将来、社会人・職業人として自立し、時代の変化に力強くかつ柔軟に対応していけるようになるためには、教育の早い時期から幅広い能力を段階的に支援すること」と「キャリア教育」の必要性が述べられている。国立特別支援教育総合研究所の報告書（平成２２年３月）には、「キャリア教育」を体系的、系統的に推進するため「キャリア発達段階・内容表（試案）」が提案されている。「キャリア教育」のまず第一の特徴は、早期から児童生徒のための学習内容を系統的に行う必要性を挙げている点である。

一方、本校は以前から「自己の形成」に関して研究基盤があり、職業教育・進路指導においては独自の道を辿っていると言える。本校の指導形態「進路」の定義（p.10 参照）において、指導形態「進路」は、「自己を形成する学習」ととらえており、第１８次研究からは「こころ」区分を本校教育の中心に据えて指導、支援を行っている。しかし、指導形態「進路」は高等部を中心に組み立てられており、「小学部段階から」または「系統立てて」という点で指導形態「進路」の内容が明らかになっていず、その必要性も現段階では検証できていない。この点は、本研究で明らかにしていかなければならない。

「キャリア教育」の第二の特徴は、児童生徒の人格的発達を目的としている点である。既述の通り、本校は「こころ」区分を教育の中心に据えている。本校では、教育活動全般にわたって児童生徒の内面の形成を重視していることから、共通している点であると考えられる。ただし、指導形態「進路」の区分が「いきがい」にある意味を再確認しながら、本校の進路学習に求められている内容は何か、本研究を通して再考していく。

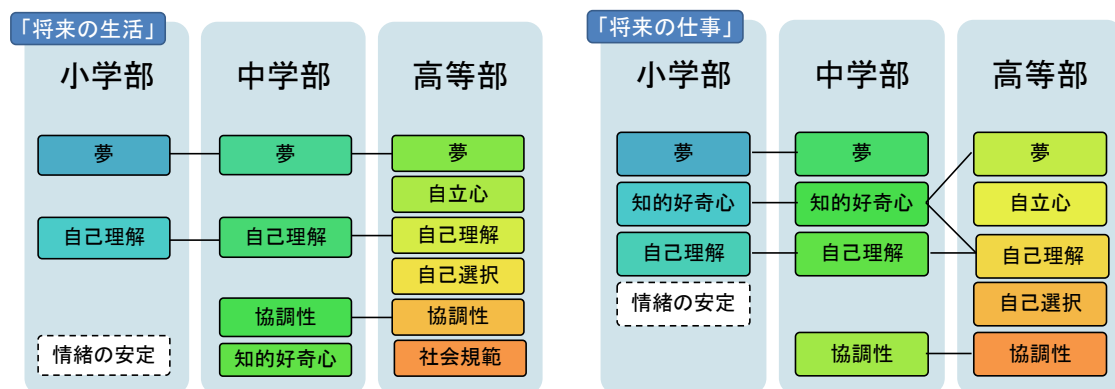
また、国立特別支援教育総合研究所の研究では、「キャリア発達段階・内容表（試案）」を作成し、小学部・中学部・高等部のそれぞれの時期で育てたい力を表しているが、各観点が難しすぎて児童生徒の実態に合わないという報告があるとされている（「知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究」）。本校でも児童生徒の多様化に伴い、高等部においても知的に重度の生徒への進路学習の在り方や高等部の生徒一人ひとりの実態に応じた「自己理解」「自己選択・自己決定」へのアプローチには課題が残されていると言える。「小・中・高一貫」という側面とあわせて、「個々に応じた」という側面で授業内容を考えていかなければならない。

本校の教育課程には、「こころ」区分を中心に据えている。「こころ」区分がどの指導形態にも組み込まれている点はモデルカリキュラムで明確に示されている。今後は、指導形態によって「こころ」区分の「どの部分」を重視していくか、「こころ」区分の妥当性（目標や評価）についても、実践や協議を通して明らかにしていくことが問われていると言える。

（４）「進路学習のステップ」について

本校の小学部段階から行う指導形態「進路」の授業の中でねらう「こころ」区分の内容を、「こころチェックリスト」（p.23＜参考資料１＞）の１０個の項目の中から分類し、系統立てて小・中・高一貫した教育を行えるように「進路学習のステップ」という形で表した。（p.17、18）

本校の研究成果である「こころチェックリスト」やモデルカリキュラムの下部（網掛け項目）をもとに、指導形態「進路」で「大切にしたい項目」を学部や縦割りグループで繰り返し考え、内容の系統性について検討を加えた。その結果、１２年間共通した項目だけでなく、学部独自に必要な項目も表すことができた。（図２ p.16）



※ 情緒の安定 は、主になる項目ではないが、進路学習を行うにあたって、補足的に「大切にしたい項目」である。

図2 指導形態「進路」における「こころ」区分の推移

「進路学習のステップ」にある「ねらい」は、「大切にしたい項目」より具体的になっており、各学部の授業を通して、児童生徒に何をねらうのかを簡潔に表したものである。学部によっては一つのねらいから、さらに細かく細分化して表されることもあったが、優位差をつけ、上位のねらいにまとめることで「ねらい」が明確になり、一連の流れが見えやすいものとなった。「こころチェックリスト」と関連が深い「ねらい」には、網掛けを行っている。「ねらい」を協議していく上で、「大切にしたい項目」について考え直され、改善された点もある。（小学部は「情緒の安定」を「将来の生活」のみに表記していたが、「将来の仕事」にも項目を起す。中学部は、「将来の生活」では主にねらう事項ではないとし、当初存在した「自立心」を削除した。高等部は、「協調性」「自立心」などを情緒の安定と表記していたが、実線に変更など）

この図で表されている「夢」「自己理解」などの項目は、第18次研究紀要の「こころ」区分の定義による。（p.24＜参考資料2＞）

これらの「ねらい」を確実に授業内容に盛り込むために、学部の指導内容を編成し、学部、学年ごとの内容についても関連性をもたせていく。各学部の目標に関するつながりや支援・指導の妥当性の指針、評価の視点となるものである。

また、授業でねらうことを「こころチェックリスト」の項目の中から見えやすくするため、各学部どの授業で何の観点が重要視されているか、把握できるシートを「進路学習のステップと題材との関連表」として作成している。各学部の「進路学習のステップと題材との関連表」については、各学部研究において載せることにする。

さらに、本校の教育課程と授業の要素を表しているシートとして存在するモデルカリキュラム、年間指導計画、指導内容表 ver.2、単元別指導計画（高等部のみ）に反映し、改善することで児童生徒一人一人に応じたよりよい授業づくりが図られていくと考える。

7 研究成果と今後の課題

本研究は、本校教育理念の中核である「自己の形成」を念頭に置きながら、指導形態「進路」の小中高各部による実践的研究を行うことで、小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を提案した。そこで、成果として挙げられることと課題について、以下にまとめる。

（１）指導形態「進路」の定義の見直し

第１７次研究「教育課程の再編成その３—自己の形成へつながる教育課程の創造—」により、指導形態「進路」の定義や区分「いきがい」の中にある意義を確認することができた。合わせて、第１６次研究で提言している進路学習について、自分の生き方・在り方を主体的に考える学習であること、将来の自分を思い描きながら前向きに努力するといった大人に対する憧れを抱くなど内面を育てていきたい願いを含んでいることを再確認することができた。これは、「こころ」区分の１０の項目の中から、小学部から高等部で行う指導形態「進路」の中で「大切にしたい項目」として「夢」「知的な好奇心」「自己理解」などの項目を抽出したことについて協議を重ね、系統性を考えることができたことにある。これらは、本研究で再考した指導形態「進路」の定義に反映している。今後も定義について検討し、本校の進路学習の方向性を確認していきながら、実践を行っていく必要がある。

（２）小学部からの進路学習の内容創出と高等部卒業までの系統性

第１６次研究以後、小・中学部から大事にすべき進路学習について提案がなされていたものの、その後の教育課程の再編成により、高等部でのみ計画的に進路学習が行われている現状にあった。本研究を通して、小学部から高等部までの指導内容、「進路学習のステップ」や「進路学習のステップと題材との関連表」を作成し、系統性を考慮した進路学習を考えることができた。さらに、小・中学部については、単元や題材の配列を考えた年間指導計画を作成することができ、次年度も引き継いでいくことができる体制をつくることができた。

ただし、上記のような成果が挙げられるものの、小・中学部で指導形態「進路」にかけられる時数には他の指導形態にかかる時数との関係から制限を加えざるを得ない。また、進路学習と関連のある内容のうち、進路学習の基礎学習はどういった内容があるのか、その中でも小・中学部ではどのような内容に重点を置くべきなのか、指導形態の枠組みを超え、進路学習と関連のある指導形態についても検討していく必要がある。現段階では指導形態「進路」の指導内容を明らかにし、実践したに留まっており、区分「いきがい」を含め、他の区分における進路学習の内容については、今後検討を重ねる必要があると考えられる。

（３）「進路学習のステップ」の作成と授業実践

本研究では、全校で「進路学習のステップ」を検討しながら、指導形態「進路」の授業づくりに取り組んできた。各部の各項目すべてにおいて、計６回の授業研究会を設け、「大切にしたい項目」の妥当性や授業内容について活発な意見交換ができた。他学部ではどのような授業を行っているかを知ることができたことは、意義深い。しかし、授業実践においては各学部で検討した内容を取り入れた実践に留まっており、学部間で系統性をもたせ、つながりがある内容にはなっていない。授業づくりの核となるキーワードが各学部では挙がっているものの（小学部では「憧れ・期待感」、中学部では「夢・協調性」、高等部では「自己決定」や「自己理解」など）、それぞれのキーワードを学部を超えてどうとらえるか、どのように実践しているか、どうつなげるかなどは、未検討のままである。今後は、実際の指導内容でのつながりを見ていく必要があり、本校に在籍する児童生徒一人ひとりの卒業後という将来を見つめた指導内容の検討ができたとき、真の「一貫性・系統性」のある授業が展開できるようになる。

また、本研究において、学習集団の構成の仕方については授業研究会を通して協議をすることができたが、より支援の必要な児童生徒に対しては、学部独自に学習内容や方法などの方向性を探ってい

る段階である。今後は、一人ひとりの児童生徒に、何を優先的に学ばせるか、重点的に学ばせるべき指導内容は何かなどについて検討を行い、集団での効果的な学習の方法を見出し、本校独自の一人ひとりの児童生徒に対応できる進路学習の在り方を体系化する必要があると考える。

（４）「進路」の概念化と「進路」に関する用語の整理

本校には、指導形態「進路」があり、独自の定義をもっている。「進路」という言葉は一般的に使われる言葉であるが、時間軸で考えると、少なからず「将来の」ことを言い表している言葉であり、現在を懸命に生きている子どもたちには少し難しい概念であることが想像できる。

授業研究会において、「進路」という言葉の意味について話題に挙がった。「進路」とは、「将来進む方向」という意味合いがあり、「将来の生き方・在り方」が「進路」であることを考えると、学校教育で使用される「進路」とは、とても広義なものであり、児童生徒のよりよい進路（卒業後豊かに生活するための人生等）のために学校はあると言っても過言ではない。しかし、広義なとらえのままでは、児童生徒の学ぶべき内容について焦点が定まらなくなる。教師がこれらの点について共通の見識をもつことで、児童生徒に共通の意識で指導にあたることが明確になっていくと考える。

本校では進路指導、進路学習、指導形態「進路」と進路に関連した用語が多く使われている。これらの用語のとらえについても、検討を重ねていかなければならない。

また、本校の学校教育目標にも「進路」という言葉が使われている（本稿 p.3 参照）。「社会の一員として自分にあった進路を自己選択・自己決定し…」という学校教育目標についても同様、本校の「職業教育・進路指導」として何を指すのかは今後も検討していく必要があるだろう。

（５）教育課程運用上の成果と課題について

①モデルカリキュラムと内容表 ver.2 の改訂

今回の第19次研究において、指導形態「進路」の授業を考えていく上で、学部（学年）に一つだった指導形態「進路」の「モデルカリキュラム」を、項目「将来の生活」と「将来の仕事」の二つに分けて考えることができた。「大切にしたい項目」が「将来の生活」と「将来の仕事」では異なり、目標や指導内容も違うことによる。本研究は、紀要第16集、17集、18集の成果や提言をもとに本校の進路学習の在り方を考えてきた。今後の実践を継承していき、よりよいものにしていくためにも、フォーマットとしてのモデルカリキュラムや内容表 ver.2 を見直し、書き換えたり確認したりしながら、引き継いでいく必要がある。

②個別の教育支援計画「本人の願い」の欄の記入について

2007年の特別支援教育の開始から強調されている「一人ひとりの教育的ニーズの把握」と「適切な指導及び必要な支援」について、障害のある子ども一人ひとりに「個別の教育支援計画」の必要性和その充実と活用が問われている。

各学部の研究会において、「児童生徒の『将来』を何年後に設定するか」が問われた。各学部検討した内容は、高等部は具体的な「自分の卒業後」を実習などを通して想定しやすい。中学部は「高校生」を、小学部は「身近なお兄さん、お姉さん」を想定できるのではないかと、ということが話し合われた。このような「姿」が思い浮かばない児童に関しては空想上の夢や憧れを表すことも大切ではないかという意見が出された。本校の児童生徒全員が将来に向けて遠い、近いにかかわらず、「なりたい」思いや願いを共有し記録するとともに、「何故それになりたいのか」の理由を引き出し、個別の教育支援計画の「本人の願い」に反映できるようにしていきたい。

進路指導を効果的に進めるためには、保護者との連携が重要になる。保護者と共に教師も子どもを支える支援者の一員となり、子どもがどのような願いや希望をもっているのか、そのような生き方によいようにしたら近づけるのかを共に考えながら、保護者の気持ちも受け止めつつ、子どもたちが自分でよりよい進路を切り拓いていくように支援することが大切だと考える。

《参考・引用文献》

- 菊池一文（2011）知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究．独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究紀要第38巻
- 菊池一文（2011）キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善・充実を図るためのツールの開発と試行．独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究紀要第38巻
- 吉田昌義・藤田誠・関口トシ子・進路指導21研究会編著（2008）特別支援教育（知的障害・自閉症）における進路指導・支援―担任のためのガイド―．ジアース教育新社
- 湯浅恭正・吉田茂孝・新井英靖・高橋浩平・小川英彦・広瀬信雄編（2011）発達障害児のキャリア形成と授業づくり・学級づくり．黎明書房
- 秋田喜代美 キヤサリン・ルイス編著（2008）授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない．明石書店
- 梶田叡一（2008）新しい学習指導要領の理念と課題 確かな学力を基盤とした生きる力を．図書文化
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）
- 岩手県立総合教育センター特別支援教育室（2008）特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック 実践・資料編
- 岩手県立総合教育センター特別支援教育室（2008）特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック 理解編
- 佐賀大学文化教育学部附属特別支援学校（2009）研究紀要第14集《学びをひらく教育の創造》豊かな社会生活への移行をすすめる小中高一貫した教育支援の追求―将来の「はたらく生活」をめざして―
- 佐賀大学文化教育学部附属特別支援学校（2011）研究紀要第15集《学びをひらく教育の創造》豊かな社会生活への移行をすすめる小中高一貫した教育支援の追求―一人一人に応じたキャリア発達の支援の在り方―
- 宇都宮大学教育学部附属特別支援学校（2009）研究紀要第24号 将来の自立を目指した教育内容とその実践
- 宇都宮大学教育学部附属特別支援学校（2011）研究紀要第26号 ICFを活用した個別的教育支援計画の在り方～豊かな社会生活を送るために～
- 和歌山大学教育学部附属特別支援学校（2011）研究集録第16号 児童生徒の生涯につながる支援を探る―「8つの教育的支援の柱」に基づいた教育実践を通して―
- 宮城教育大学附属特別支援学校（2009）研究紀要第42集 豊かな社会参加につながる授業づくり（1年次）～ICFの視点を取り入れた児童生徒理解を通して～
- 宮城教育大学附属特別支援学校（2010）研究紀要第43集 豊かな社会参加につながる授業づくり（2年次）～キャリア発達段階を踏まえた指導内容の構築を通して～
- 宮城教育大学附属特別支援学校（2011）研究紀要第44集 豊かな社会参加につながる授業づくり（3年次）～ICFとキャリア教育の視点を取り入れた授業実践を通して～
- 愛媛大学教育学部附属特別支援学校（2011）将来の「働く生活」を実現する教育 キャリア教育に基づく支援内容・方法の検討
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2007）プロジェクト研究H18年度 特別支援教育における教育課程の編成・実施の推進に向けた実際研究―特別支援教育の充実に向けた教育課程編成―
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2008）平成18・19年度 課題別研究報告書 知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2010）特別支援教育におけるICF-CYの活用に関

する実際的研究 平成 20～21 年度研究成果報告書

- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2010）知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究―「キャリア発達段階・内容表（試案）」に基づく実践モデルの構築を目指して―（平成 20 年度～21 年度）研究成果報告書
- 中央教育審議会 キャリア教育・職業教育特別部会（2010）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（第二次審議経過報告）
- 中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申案）
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会（2010）特別支援教育のためのキャリア教育の手引き 特別支援教育とキャリア発達. ジアース教育新社
- 文部科学省（2010）小学校 キャリア教育の手引き
- 文部科学省（2009）特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部指導要領
- 文部科学省（2009）特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1997）研究紀要第 1 3 集 子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善 その 1
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1999）研究紀要第 1 4 集 子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善 その 2
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2002）研究紀要第 1 5 集 教育課程の再編成その 1 ―アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る―
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2004）研究紀要第 1 6 集 教育課程の再編成その 2 ―実践的課題研究と卒業生の実態調査をとおして、自立と社会参加をめざした教育課程再編成の手がかりを探る―
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2007）研究紀要第 1 7 集 教育課程の再編成その 3 ―自己の形成へつながる教育課程の創造―
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2009）研究紀要第 1 8 集 自己を育む授業実践―「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計―

教育課程 区分に「こころ」から内面の育ちをみる

長崎大学教育学部附属特別支援学校

「こころチェックリスト」

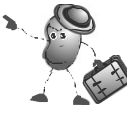
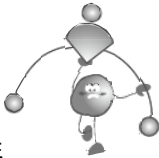


氏名

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
親や教師からの干渉を嫌がる	何でも自分でしただがる	自分でできることは自分でする	「しなければいけないこと」に取り組もうとする	自分から取り組もうとする	自分なりに目標をもって取り組む	前向きに取り組む	活動に対して考え工夫して取り組む	「野球選手になりたい」など「一になりたい」と言う	先輩や身近な人に憧れる	欲しいものがある	やってみようと思える	行ってみようと思える	したいことをする	好きなことを思う存分する	好きなことに根気強く取り組む	関心があることを探索する	いろいろなことに「やってみよう」と思って取り組む	上手になるために何度も経験、練習する	快、不快が分かる	信頼できる大人のそばにいたいと思える	叱られると、泣いたり、「いいことではない」と感じたりする	友達が好きでいようと一緒に遊ぶ	苦手なことに自分から取り組もうとする	活動自体に喜びを見いだす	クラスの友達、決まったグループで一緒に行動する	相手に合わせて行動する	仲間や兄弟と一緒に役割を果たす	指示が分かっている行動する	リーダーが分かっている行動する	役割を見つけて協力する	他の子が困っていることに気づく	相手のことを思っている手伝う	「やっとなね」「できたね」と声をかけあう	仲間の良さを言う	友達を心配する	周りに声をかけながらリーダーとなって取り組む	困っている人を手伝ったり助ましたりする	友達ばかりでなく、周囲の人にも気を配る

40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	記入者	年月日
身近な人（親など）の表情を察し返す	からだの快、不快など今の気分を伝える	自分のしたいことを言う	嫌なこと、したくないことを伝える	尋ねられたことに対して自分の考えを言う	物事に対して感じたことを他者に伝える	周囲に流されないで自分の気持ちを正直に伝える	相手の気持ちを考えながら自分の意見を言う	大人の真似をする	順番を待ったり玩具を譲ったりする	「だめ」と言われてやめる	生活上よく使うルールを守る	約束を守る	してはいけないことや取っかいいことを自分で考えて行動する	自分の言動の善し悪しが分かる	苦手なことでも続けて取り組む	我慢する	不安や期待を交互に繰り返す	好き嫌いを言える	「上手ね」と言われて喜ぶ	できるようになつて喜ぶ	頑張ったことが分かり喜ぶ	過去の自分から現在の自分の変化に気づく	得意なこと、苦手なことが分かる	失敗や都合の悪いことでも正直にいう	評価を受け入れる	見られても見られていなくてもする	食べたいものを選ぶ	したいことを選ぶ	選択肢のそれぞれの意味が分かって選ぶ	場合によっては苦手な活動でも選ぶ		

《参考資料2》こころチェックリストの項目の定義

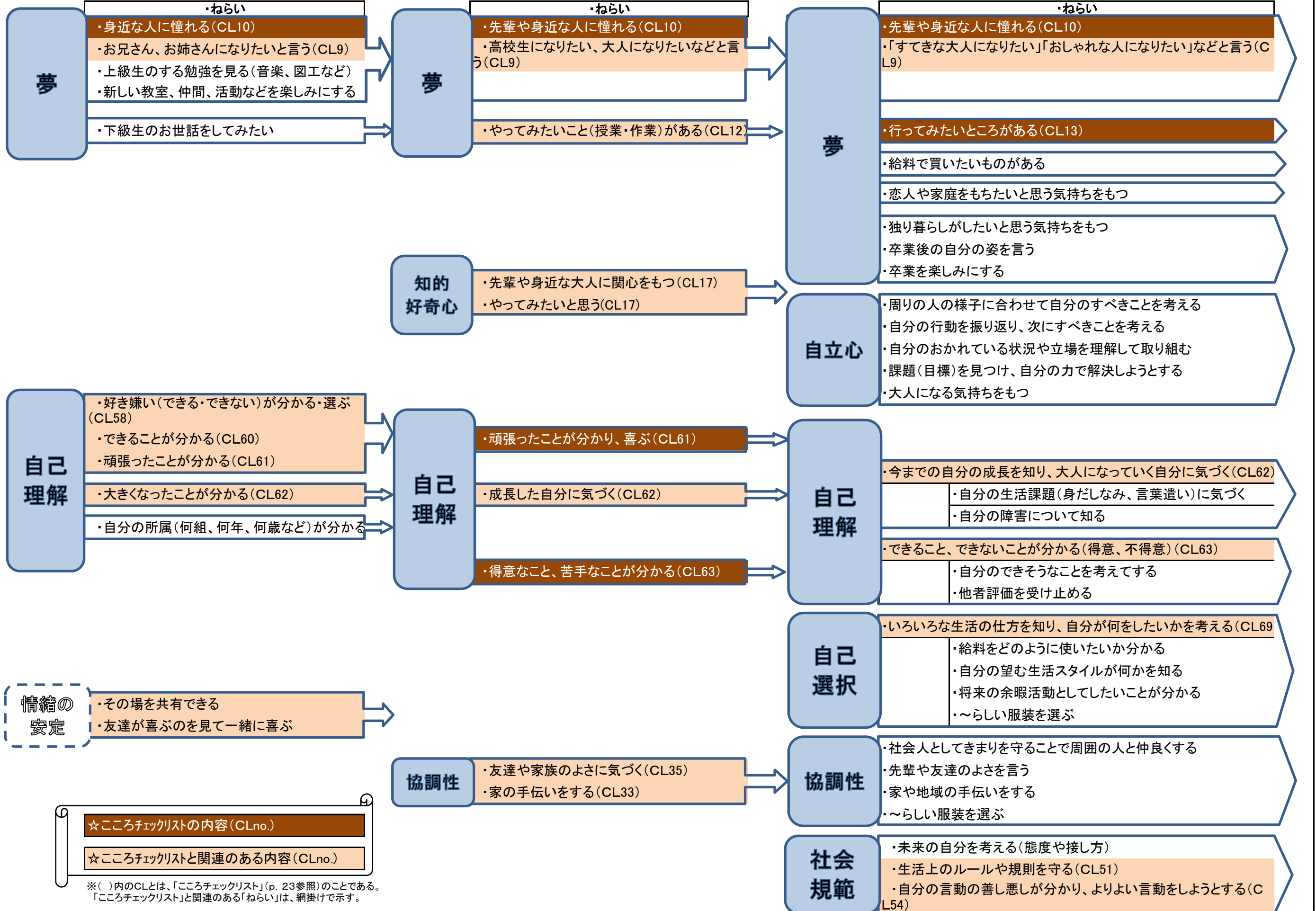
項目名	定義
 自立心	○できるだけ 仲間 の力をかりることなく、工夫したり目標をもったりしながら 自分 の力で物事をやっていこうとする 構え のこと。
 夢	○将来実現させたいと思っている事柄や「～になりたい」という 憧れ 。現実からはなれた空想や楽しい考えのこと。またそれを追い求める気持ち。
 知的好奇心	○未知のことや珍しいことなどについてもっと知りたいと動かされる 気持ち のこと。学習内容など物事に対する 構え 。
 情緒の安定	○そのときどきの、さまざまの、微妙な 気持ち が安定していること。またその状態。
 表現	○他者や環境に対して、自分の 気持ち を表情・身振り・言語・記号・造形物などであらわすこと。特に新奇な経験に対する 期待 や 不安 な気持ち、何かを解決しようとするときや作品を完成させようとするときに 試行錯誤 している気持ちを友だちや教師にあらわしたりすること。
 協調性	○ 仲間 と協力したり、 仲間 に合わせたり、状況を感じとり場面に応じた言動をとったりする性質のこと。
 社会規範	○社会的行為の調整として機能を果たすもの(社会規範の内面化にあたるものが「道徳」となる。)であり、置かれた環境のそれぞれの社会の中で、どう行動したらいいか 迷い ながらも判断したり、社会規範に従った同調行動をとったりすること。
 葛藤	○ 構え や 気持ち の中で相反する 動機 や 欲求 、 感情 などが存在し、そのいずれをとるか 迷う こと。
 自己理解	○社会生活を送る上での困難性の理解やその困難性を補う方法を理解すること。 自分の存在 を肯定的に受け止めること。(例:「喜び」という感情をベースに 自分の感情 を認識したりする)
 自己選択	○自らの判断をもとに、 仲間 の支援を受けながらも、 自らの意思 と力で、 自らの責任 において選択すること。

「進路学習のステップ」 項目「将来の生活」

【小学部】

【中学部】

【高等部】

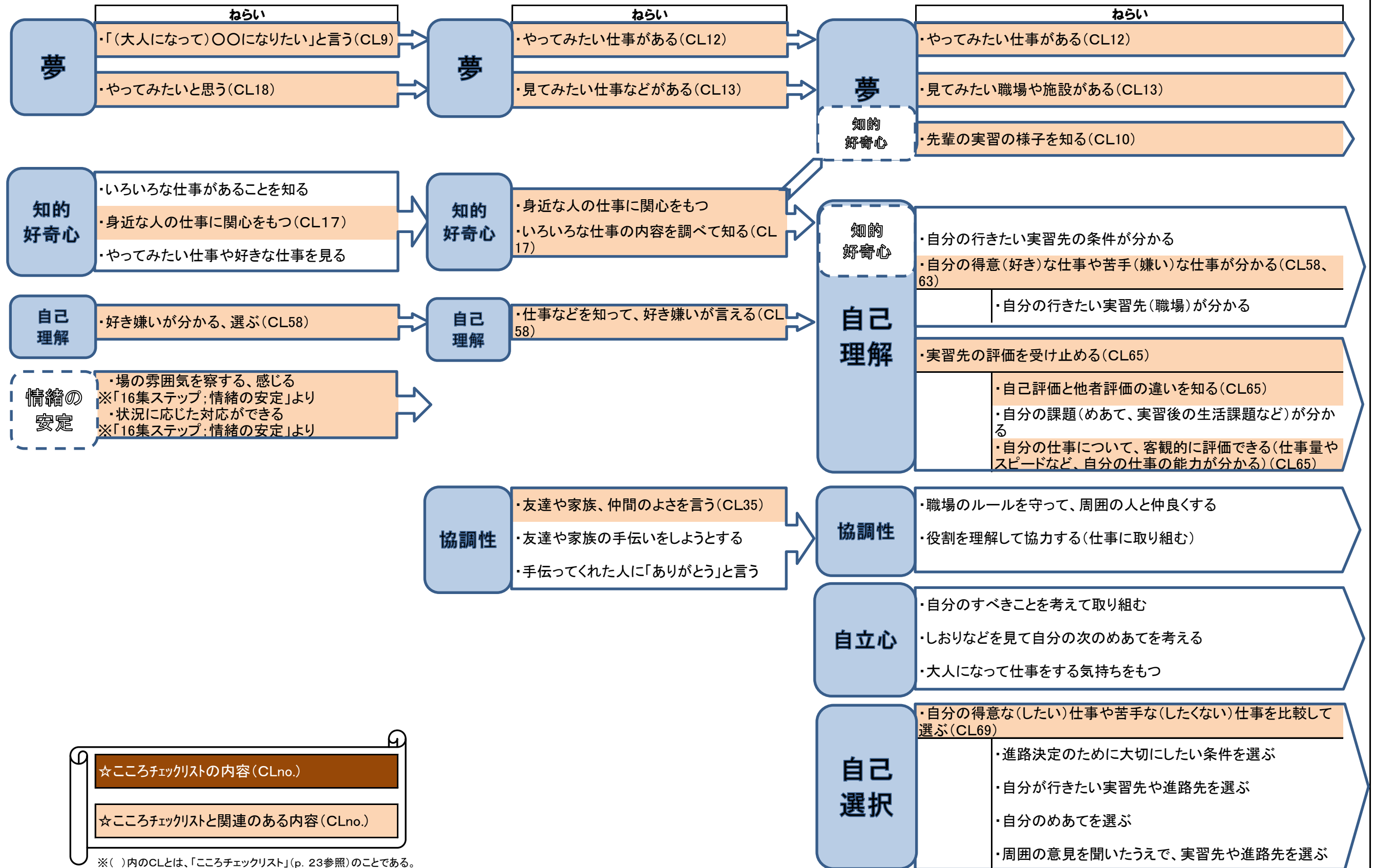


「進路学習のステップ」 項目「将来の仕事」

【小学部】

【中学部】

【高等部】



※()内のCLとは、「こころチェックリスト」(p. 23参照)のことである。
「こころチェックリスト」と関連のある「ねらい」は、網掛けで示す。

Ⅱ 小学部の研究

「なりたい～なれるかなあ？」

～わくわくドキドキ夢ふくらむ「しんろ」の授業づくり～

目次（小学部の研究）

研究の概要	25
1 小学部研究テーマについて	
（1）進路の学習に関する現状	
① これまでの取り組み	25
② 児童の様子について	26
③ 保護者の思いについて	26
（2）進路学習の在り方	
① 「キャリア教育」や新学習指導要領より	27
② 『なりたい～なれるかな?』 小学部の進路学習で大切にしたいこととは？	27
③ 『わくわくドキドキ夢ふくらむ「しんろ」の 授業づくり』とは？	28
2 研究の方法	29
3 研究の経過	
（1）指導形態「進路」のとらえの見直し	30
（2）新しい指導形態「進路」に向けての取り組み	30
（3）指導形態「進路」のとらえ・意義・必要性	32
（4）授業実践	
① 項目「将来の生活」	34
② 項目「将来の仕事」	40
4 研究成果と今後の課題	
（1）成果	
① 授業を作る過程で明らかになったこと	46
② 授業実践後、明らかになったこと	47
③ 一貫性における小学部の役割	47
（2）今後の課題	
① 内容の一貫性	48
② 保護者との連携	48
③ 系統的な指導	48
《引用・参考文献》	
《参考資料》年間指導計画	49
進路学習のステップと題材との関連表	50
指導内容表（ver.2）	51
モデルカリキュラム	52

(小学部研究テーマ)

「なりたい～なれるかなあ？」
～わくわくドキドキ夢ふくらむ「しんろ」の授業づくり～

研究の概要

これまで小学部においては、指導形態「進路」の学習を高学年（５・６年）のみで行ってきた。また、内容も「将来の生活」のみを取り扱い、中学部体験や卒業記念制作など中学部生活へつながるものに限られていた。しかしながら、区分「いきがい」の定義や指導形態「進路」のとらえなどを踏まえると、小学部６年間の積み重ねや低学年からの指導が重要であると考えた。

そこで小学部の研究としては、「将来の生活」「将来の仕事」において小学部低学年段階からどのような内容を積み重ねていくか、授業の中でどのようなことを大切にして指導を行っていくかについて検討し実践していくことで、子どもたちがそれぞれに「近い将来の生活」や「身近に見る仕事」に興味をもったり、期待感をもったりすることができるのかを、授業づくりを通じて模索した。

具体的には、新しい指導形態「進路」（小学部）の枠組み作りとして、まず「年間指導計画」や「進路学習のステップ」の作成、題材でねらいたいことや大切にしたいところの項目などの検討を行った。また、これまでの指導内容表（ver. 2）に新しい指導形態「進路」（小学部）の内容を加えたり、モデルカリキュラムについても検討を行うことにした。

その結果、次のことが示された。

- 指導形態「進路」の枠組みの整理や作成を行うことが、授業の構成や方向性を明らかにすることにつながる。
- 授業実践を通して、「学習グループの工夫」、「ねらいを意識した言葉かけ」、「模擬的な体験活動」が有効であることが明らかになった。
- 「大切にしたい項目」として「夢」に重点を置くことや「情緒の安定」を意識することが、中学部・高等部へとつながる基礎的な力を育むことになる。

今後の課題としては、

- 実際に中学部の指導内容を把握し、つながりがもてるような具体的な内容やねらいについて検討していく。
 - 授業の様子や情報を保護者へ伝えたり、保護者との連携からも児童の「夢」について把握したりしていく。
 - 毎年実施していく指導形態「進路」の授業をいかに新鮮な印象で児童に与えられるか検討していき、見直しを行いながら時代の変化等にも対応する授業を展開する。
- などが示された。

１ 小学部研究テーマについて

（１）進路学習に関する現状

① これまでの取り組み

これまで、進路学習については、指導形態「進路」として、教育課程上、中学部や高等部と同じく区分「いきがい」の中に位置づけ、学習を進めてきた。教育課程の再編成（2007.第17次研究）を行った際、低学年・中学年においては、自らの遠い将来像をイメージしたり、実際に仕事についての知識的なことを学んだりすることは難しいという結果が得られた。そのため、指導形態「進路」を設定していなかった。高学年においてのみ、項目「将来の生活」の内容として中学部の授業体験を位置づけ指導形態「進路」の学習としていた。指導形態「進路」の項目「将来の仕事」については、高等部の現場実習の事前、事後学習に関する内容のため、高学年においても学習を設定していなかった。

ただし、学部や学級での係の仕事や進級などの内容については、児童の状況に応じて、どの学年においても学級活動の時間などを設定して学習を行っていた。また、指導形態「あそび」のごっこ遊びにおいて、お店屋さんやお医者さんなどの仕事を模擬的に経験する学習を行っている。高学年においては、指導形態「役割・仕事」で、畑で作物を作る学習を通して収穫の楽しさや自分の役割について学習を行ってきた。

② 児童の様子について

本校小学部は、MA 1 歳 3 ヶ月～4 歳 6 ヶ月の児童が在籍している。児童については以下のような様子や姿が見られる。

- ・言葉でのコミュニケーションが難しい児童も多く、授業においては、教師と一緒に活動を行ったり、言葉かけの支援やカードなどの教材を使ったりしながら、授業を進めていくことが多い。
- ・体験的な活動では、教師の支援が必要な児童もいるが、自分から取り組んだり、見通しをもったりして取り組む様子が多くみられる。
- ・友達同士で助け合ったり、教師の真似をしてお世話をしたりする様子も見られ、上級生になると下級生に対し優しく接したり、お世話をしたりすることに有用感をもっている。
- ・身近な教師や上級生の行動や姿を見たり、真似したりする様子を見ていると自分もそうなりたいという憧れの気持ちが見て取れる。
- ・テレビの戦隊番組のヒーローや体操のお兄さん、通販番組の様子を真似したり、憧れのヒーローになり楽しむ様子が見られたり、友だちや上級生のしている様子を見て楽しんでいる様子を目にすることができる。
- ・ごっこ遊びや畑での学習などでは、お店屋さんのレジやレストランで料理作りに興味を示し繰り返して行う様子や、収穫物を下級生にプレゼントして、嬉しそうな表情を見ることができる。

このような児童の様子をみていると、直接、働くことや仕事について、ねらいをもって学習しているわけではないが、進路学習へつながる様子は覗える。しかし一方では、自分もしてみたいと思ってもできるか不安だったり、仕方など方法が分からず戸惑っていたりする姿や友だちや教師の誘いがなければしようとしない児童も見受けられる。これらのことから考えると、児童の夢や憧れ、やってみたいという気持ちをねらいとした学習の場の必要性を感じる。

③ 保護者の思いについて

小学部の保護者にとって、自分の子の将来の生活や仕事に具体的なイメージをもつことは、まだ、なかなか難しい様子である。保護者の話を聞くと中学生や高校生、あるいは卒業生の様子を見て子どもの将来像を思い描いている状況である。また、高等部の進路担当から出される「進路のお知らせ」や進路先や福祉行政の方が行う進路講話などで得られた情報はあるものの、小学部段階で家庭ではどのようなことに取り組めばよいのか、どのような進路先があるのかなどについては、不安や戸惑いなどの思いが覗える。保護者は、卒業生の進路先についても興味をもっているが、企業就労や福祉的就労の違いや実際にどのような企業や作業所等があるのか知らない保護者も多い様子である。そこで、2 年前より、保護者自身にも児童の将来の生活や仕事、また、現在の生活について考えるきっかけや機会がもてるようにしたいと考え、小学部保護者のみで進路先見学を実施するようにした。

また、卒業生の保護者より、本校で行われる在校生、卒業生及び教師による親睦会で、次のような思いを聞くことができた。今年 3 月に卒業した K さんは、4 月より福祉的就労で現在作業所に勤めている。今年の父親の誕生日に自分 1 人で買い物に行き、自分のお金で父親の好きなおつまみを自分で選んで買ってきてプレゼントしたのである。父親は買ってきた「おつまみ」の写真を嬉しそうに見せながら、高等部で進路学習や現場実習などを通して、働くことについて学んだことはもとより、小学部、中学部を通して、係の仕事やお手伝いで人の役に立つ経験をしたり、自分で選んだり決めたりする経験をさせてもらったことで、このようなことができるようになったと話された。そして、小学部

から中学部そして高等部へとつながる学習の大切さや必要性についての思いを語られた。

このような保護者の思いを考えると小学部段階から将来や仕事について児童自身が気づいたり、学んだりする機会をもつことも大切と考える。また、進路指導においては、保護者との連携は不可欠であり、小・中・高と一貫した理念のもと小学部の進路学習について実践を行うことは意義があると思う。

（２）進路学習の在り方

① 「キャリア教育」や新学習指導要領より

「キャリア教育」については、特総研より提案されている「キャリア発達段階・内容表（試案）」が提案され、児童生徒の早期から学習内容を系統的に行う必要性が挙げられている。また、新学習指導要領においても「自立と社会参加に向けた職業教育」が改訂のポイントの一つとして挙げられ、文部科学省は 2010 年に「特別支援教育のためのキャリア教育の手引き」を提示し、小学部段階より教育課程の中に位置づけ推進していくことを示している。一方、本校においては、「こころ」区分を教育の中心に据えて教育全般にわたって児童生徒の内面を重視する教育課程を編成しており、児童生徒の人格的発達を目的にしている「キャリア教育」の視点を小学部段階より取り入れた教育課程と共通する点が多いと考える。

「キャリア発達段階・内容表（試案）」や「キャリア教育推進の手引き」等には、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計の能力」「意思決定能力」の領域が示され、内容についても記述されている。しかしながら、その内容を教育課程で、どのように取り入れ実践していくのかについては、各学校に任されている。そのため、小学部においての実践例では、生活単元学習や各教科、特別活動等にその内容を盛り込み実践していることが多い。小学部において、キャリア教育を体系化し継続していくためには、進路学習としてのねらいや指導内容、指導計画の作成が必要である。

② 「なりたい～なれるかな？」 小学部の進路学習で大切にしたいこととは？

児童の将来像（生活や仕事）を考えたとき、今現在は児童自身、遠い将来像をイメージすることは難しくても生活の中でちょっと先の自分のなりたい姿を思い描き、自分の好きなことや楽しみを見つけ、身近なお兄さんやお姉さんに憧れ、進級や進学に夢や希望をもちながら生活していったほしいと思う。児童は大人へと成長する中で自分ができないことを知ったり、現実と夢との狭間で揺れ動いたり、壁にぶつかったりして、葛藤しなければならない状況に置かれてくる。特に社会へと巣立つ前の高等部では、憧れや夢、希望だけでは難しい現実にも置かれることもある。そのようなときでも前向きに現実と向き合っていける児童生徒であってほしいと願う。このような児童生徒を育てていくためには、小学部において、どのようなねらいをもって学習を進めればよいのか考える必要がある。そのため、児童の思いからキーワードを探りたいと考え、「かっこいいお兄さんのようになりたい～なれるかな？」「〇〇レンジャーのようになりたい～なれるかな？」「パン屋さんになりたい～なれるかな？」など近い将来から遠い将来まで、「なりたい～なれるかな？」という児童の思いを大切にしたいと考えた。「なりたい～なれるかな？」という思いの中には、夢や憧れ（夢）だけではなく、好きだからやってみたいという思い（自己理解）やもっと知りたいという気持ち（知的好奇心）、また、不安や戸惑い（情緒の安定）もあることが考えられる。

小学部段階における進路学習で、このような児童の思いを大切にしながら、どのようなねらいをもち、どのように授業づくりを進めればよいのか、小学部から中学部、高等部とのつながりや一貫性の中で小学部が担う役割、また、他の指導形態との関連についても考えながら 6 年間のねらいや内容を焦点化する必要がある。教師自身が進路学習のねらいを意識し、これまでの進路学習の在り方を見直すとともに内容を整理し、系統的に体系化していくことで、継続した指導形態「進路」の取り組みが可能となると思われる。

③ 「わくわくドキドキ夢ふくらむ『しんろ』の授業づくり」とは？

どのような授業においても、児童が「見てみたい!」「聞いてみたい!」「してみたい!」と思う「わくわくドキドキ」する授業づくりをしたいと考える。しかし、一般的に進路学習においては、情報や知識や技能に関わる内容が多く、また、将来といった時間的にイメージがもちにくい内容を取り扱うことが多い。そのため、小学部における進路学習や授業づくりに関する先行研究や実践例は少ない状況である。今回の研究においては、進路学習すなわち「しんろ」¹の授業づくりを行い、小学部の児童の発達段階に応じた授業づくりについても方向性を見出すことができればと考える。

どの発達段階の児童においても「○○になりたいなあ」「やってみたい」「おもしろそうだ」「自分にもできそうだ」「これが好きだなあ」「先生や友達と一緒になら安心」という姿を引き出すような授業づくりを行うために、どのような授業の展開や場の設定（授業構成）が考えられるのか、また、教師のどのような言葉かけや支援（働きかけ）が有効なのか、そして、児童がわくわくドキドキする教材や教具はどのようなものなのかを探り、それらから得られたものを蓄積、検討しながら共有の財産としていきたい。

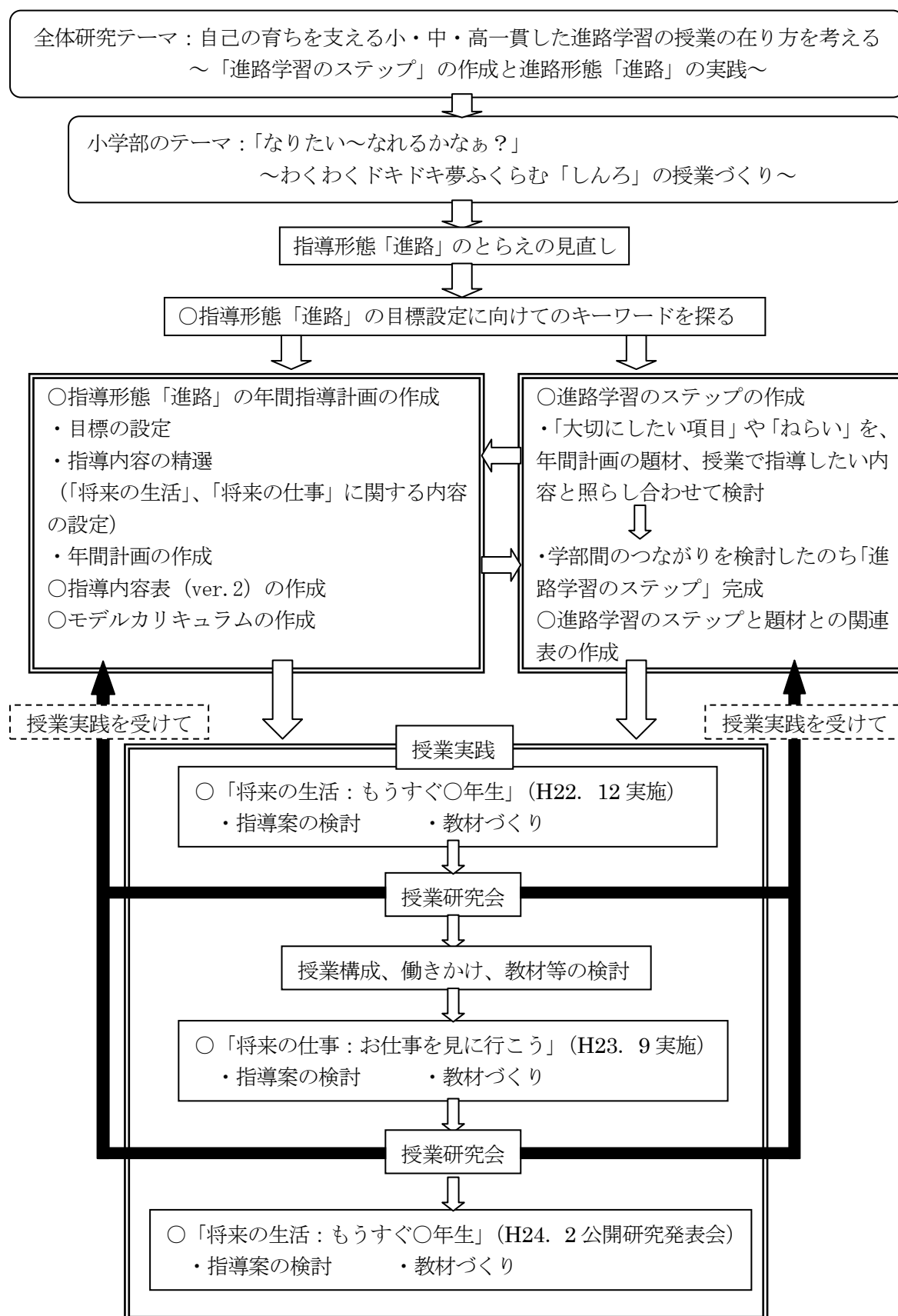
前述の「(1) 進路学習に関する現状」及び「(2) 小学部の進路学習の在り方」より、次のようなことを明らかにしたいと考えた。

- 小学部の指導形態「進路」のとらえ
- 小学部の指導形態「進路」の年間指導計画
- 進路学習のステップと題材との関連
- 小学部の指導形態「進路」の指導内容

以上のことを踏まえ、小学部においては、「なりたい～なれるかなあ?」～わくわくドキドキ夢ふくらむ「しんろ」の授業づくりをテーマとして設定し、授業づくりや実践に焦点を当て、本研究を進めていきたいと考える。

¹ テーマ及び文中の「しんろ」は、小学部の時間割上の名称（授業名）として使用している。

2 研究の方法



3 研究の経過

(1) 指導形態「進路」のとの見えの見直し

研究紀要第17集における小学部の指導形態「進路」では、「自分の将来に対する知識・情報を知ることや実際に体験を通して、将来の生活を実感する学習」ととらえた。ここでは、小学部の児童にとって遠い将来像について考えることは難しく、高学年であれば修学旅行・卒業記念制作・授業体験といった活動を通して自分の近い将来、すなわち卒業や中学生生活を実感できるであろうと考えている。これまで、指導形態「進路」では項目「将来の生活」のみを取り扱い、高学年を対象として以下のようなことを目標に取り組んできた。

○中学部の授業を体験することで、中学生への憧れの気持ちをもつとともに中学生生活への見通しや期待感をもつ（本校研究紀要第17集）

今回の研究のテーマである、小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を考えるためには、子供たちの夢や憧れなどについて、指導を行う上で我々が大切に感じていることを再確認することが重要であると考えた。

それをもとに、これまで取り組んできた様々な指導形態の中から進路学習の視点でとらえた内容を洗い出す作業を行っていった。その結果、次のような内容について見直しを行いたいと考えた。「学級活動」で取り組んできた、学年末の「進級への心構え」・年度初めの「進級した喜び」などである。また、小学部では日常的に縦割りの班活動を取り入れ、子どもたちの縦のつながりを大切にしてきた。その積み重ねの中で「お兄さん・お姉さんだから、頑張ろう」という「自己理解」や「お兄さん・お姉さんになりたい」という「憧れ」が育まれているようだ。そこで、小学部6年間を通して「成長している自分」を感じながら、卒業や最高学年への進級だけでなく低学年から中学年へ、あるいは中学年から高学年への進級についても検討していきたいと考えた。

また、研究紀要第17集では、項目「将来の仕事」については、高等部での現場実習の事前・事後学習にかかわるものとしてとらえていたため、小学部では取り扱っていなかった。これまでは、中学部になって初めて高等部の現場実習見学で「仕事」というものに会い、高等部で自分の「仕事」としてとらえていくという流れであった。そこで、小学部の段階から「仕事」に対する何らかの意識をもたせていくことは中学部・高等部への橋渡しとなり、小・中・高一貫した進路学習の取り組みにおいて意義があると考え、項目「将来の仕事」も検討していくことにした。

これらのことから、以下の点について指導形態「進路」のとの見えの見直しをしていきたい。

- 指導内容について
- 指導目標について
- 指導計画の作成
- 学習形態の検討
- 指導形態「進路」で取り扱う項目
- 指導にあたって大切にしたい事柄

(2) 新しい指導形態「進路」に向けての取り組み

新しく指導形態「進路」を進めるに当たって、まず、目標や指導内容について話し合いを行うことにした。現在の小学部の指導形態「進路」の目標は「**中学部の授業を体験することで、中学部への憧れの気持ちをもつとともに中学部生活への見通しや期待感をもつ**」となっているが、今後、低学年か

らの学習を行う場合、目標の中にどのような**キーワード**が必要かということについて話し合いを進めた。また、この話し合いを進める中で、小学部職員間で「何を子どもたちにねろうか」「大切にしたい項目」についても共通理解を図ることにした。

新しい指導形態「進路」の目標に必要なキーワードについて話し合った内容は、以下の通りである。

- 「憧れ」「期待感」「成長（大きくなっていることを実感）」
- 「楽しさ」「達成感」「先輩への憧れ」
- 「進級」「成長」 子どもたちがわかる言葉でよければ「お兄さん、お姉さん」はどうか。
- 「進級への期待」「上級生への憧れ」
- 「自分の成長を実感する」「先輩の存在を知る（憧れる）」「夢」「『大人になったら～になりたい』の心や気持ち」
- 高等部が「自己決定」というキーワードであると考え、小学部では「自己理解」についての力を低学年から養う必要がある。「自己理解」のキーワードとしては「自分の成長を実感する」「自分のよさに気づき自分の良さを生かす」が挙がるのではないかと。小学部の低学年からは「自分の成長を喜ぶ」「頑張ったことが分かり喜ぶ」「好き嫌いや得意・不得意がわかる」、さらに「自分はこんな人間になりたい」や「自分はこんなことをしたい」という気持ちが表現できるとよい。
- 目標を一つにしないで低・中・高、あるいは低・高に分けて設定してもよいのではないかと。低学年→「進級することへの期待感」「お兄さん、お姉さんになりたいという気持ち」

話し合いの中では、以上のような内容が得られた。この結果をまとめてみると、以下のように、大まかに分けることができた。

話し合いの結果のまとめ	導き出されたキーワード
● 「憧れ」・・・「先輩への憧れ」、「上級生への憧れ」、「お兄さん、お姉さん（になりたい）」、「先輩の存在を知る（憧れる）」など	夢
● 「進級」・・・「期待感」、「進級への期待」、「進級への期待感」など	
● 「夢」・・・『大人になったら～になりたい』の心や気持ち、「自分はこんな人間になりたい」「自分はこんなことをしたい」など	
● 「自己理解」・・・「自分のよさに気づき、自分のよさを生かす」、「好き・嫌いや得意・不得意が分かる」など	自己理解
● 「成長」・・・「成長（大きくなっていること）を実感」、「自分の成長を実感する」、「自分の成長を喜ぶ」など	
● 「達成感」・・・「頑張ったことが分かり、喜ぶ」など	情緒の安定
● 「楽しさ」・・・「自分の好きなことや興味のあることをして楽しむ」など	

以上の結果から、「夢」「自己理解」「情緒の安定」の3つをキーワードとして導き出すことができた。このときの話し合いの内容からは導き出されなかったが、指導内容表（ver.2）²や授業計画を考えていく中で特に項目「将来の仕事」においては、「知的好奇心」にかかわる内容が必要になるのではないかと考え、「知的好奇心」についてもキーワードに加えることにし、「夢」「自己理解」「知的好奇心」「情緒の安定」の4つをキーワードとした。また、この4つのキーワードを小学部における進路学習の大切にしたい項目とすることにした。「将来の生活」の大切にしたい項目は「夢」「自己理解」「情緒の安定」の3つ、「将来の仕事」の大切にしたい項目は「夢」「自己理解」「知的好奇心」「情緒の安定」の4つとした。

² 指導内容表（ver. 2）：各指導形態の内容をまとめて段階別に表にしたもの

この大切にしたい項目をもとに、小学部の進路学習のステップを作成した。しかし、進路学習のステップは、ここに出てきた結果や大切にしたい項目だけをもとにしたものではない。実際に授業を行い、授業を行った結果どうであったか、どのようなことが必要であるか、どのようなことを大切にしたいかなどを考え、授業の内容をフィードバックしながら何度も加除修正を加えて、作成していったものである。（「進路学習のステップ」については、P. 17、P. 18を参照）

また、指導形態「進路」の年間指導計画を作成するに当たっては、小学部の指導形態「進路」の中で、どのような内容を取り上げるとよいと思うか、また、その理由とはどのようなことか（例：「自分の成長について（誕生会）」「学期の振り返り（写真の整理）」「あいさつについて」「係活動について」など）についての検討を行った。

話し合った内容やその理由については以下の通りである。

内 容	理 由
○「係活動（委員長なども含めて）」	→自分の役割を果たすことができる身近な内容である。
○「先輩などのよい点をほめて、皆と一緒に活動する」	→先輩のすごさを感じたり知ったりすることができるようにする。 自分の成長を振り返ること。
○「進級について」 ○「誕生日について」 ○「学級の振り返り」	→特に低学年の子どもは、身近なことや経験していくことで分かることが多いと思うので、新しい年度の始まりや自分の誕生日、これまでに学習したことの振り返りが分かりやすい。
○「班長の仕事」 ○「クラスの中での上級生の役割」 ○「上級クラスの学習内容を知る」	→班長さんのようになりたい（憧れ）→「今の自分でなれるかな？（自己理解）」 →クラスの中では自分がお兄さん、お姉さんという存在→「教えてあげよう」、「頑張らなきゃ」 →進級への期待 ※日々、年々の積み重ねの中に「自分のめざすもの」のようなものを見つけていくことが大切
○「お父さんやお母さんの仕事」 ○「自己紹介をしよう」 ○「進級の喜び」 ○「めあてと評価の学習」	→身近な人の仕事について見たり聞いたり、体験したりすることで、職業への興味関心をもたせる。 →自分の名前（住所）などを言ったり、好きなもの苦手なものを知ったりすることは、人との関係をもつときに重要であり、将来の生活の中でも大切なことである。
○「～さんは1年生、～さんは2年生」 ○夢「大人になったら」「ごっこあそび（ケーキ屋さん、ままごとなど工夫しながら遊ぶ）」	→同じ1組の友達でも、学年が違うこと、先輩の方が上手にできることなどがわかるとよい。次は自分も先輩になる、次は後輩が来るなどが感じられるとよい。複式学級だからこそできることである。 →「大人になったら歌手になります」などのように夢をもつことも、大人になった自分を意識させる。そのことを、遊びを通して体験させることで楽しいと感じるようにする。

指導内容について、以上のような結果が得られた。この結果から、題材名や授業の形態などについて検討し、小学部の指導形態「進路」の年間指導計画を作成した。（年間指導計画については資料P. 49を参照）

（３）指導形態「進路」のとらえ・意義・必要性

本校では区分「いきがい」の中の指導形態「進路」において「自分の将来に期待感を抱きながら、知識や情報を得たり、実際の体験をしたりすることで、将来の生活を見つめる」ととらえた。小学部の指導形態「進路」においては、児童の様子や状況を踏まえ、とらえ・意義・必要性を以下のように設定した。

小学部の授業では、運動会や校外合宿などの学習を中心に学年縦割りでの班活動を行い、児童の学級を超えた関係を大切にしている。そのような関係において、高学年の子どもたちは「自分たちはお兄さん、お姉さんだから、小さな友達に優しくかかわろう」という姿が見られ、低学年や中学年の子どもたちは、その姿を見て、自分もそうなりたいという気持ちをもつように思う。小学部６年間を通して、児童は「自分が分かることやできること」を積み重ねる中で、「お兄さんやお姉さんになっている」ということを実感していくとともに中学部での生活に憧れをいだくことになる考える。また、一方では、テレビ番組のヒーローの真似をしたり、パン屋さんになりたいなどの発言も聞かれたりと、夢や憧れの気持ちの芽生えを感じることもある。児童にとって、自分の将来の仕事や働くことを意識することは難しいが、ごっこ遊びでお店屋さんの活動に興味を示す様子が見られたり、学部や学級での係活動において、自分の仕事としての取り組みに有用感を感じたりして、達成感を味わう様子を覗くことはできる。

そこで、自分の近い将来しか見ることでできなかった児童が、もう少し先の将来に目を向け、ちょっと前を向いて進む児童へと育つことを願い、小学部において、進路形態「進路」を設定した。進路形態「進路」では、小学部６年間を通して成長している自分を感じたり、自分のやりたいことや好きなことに気づいたりしながら**自己理解**をしていくこと、身近な仕事について見てみたい、やってみたいという**知的好奇心**をもつこと、そして、お兄さんやお姉さんに憧れ、進級や進学に期待感をもち、**夢**を膨らませながら成長していくことを大切にしたいと考える。また、教師や友達と一緒に安心して活動したり、活動や環境の変化に見通しをもって取り組んだりすることを繰り返し経験することで、**情緒の安定**を図ることも大切にしながら、中学部、高等部の学習へとつなげていきたい。

指導に当たっては、高学年の児童だけ取り組むのではなく、「～をしたい、～になりたい」という気持ちを育もうとすることで、低学年から指導形態「進路」として取り組むことができるのではないかと考えた。また、項目についても中学部、高等部と同じように「将来の生活」「将来の仕事」の２項目を設定し学習を進めるようする。

項目「将来の生活」では「〇年生になったよ」や「もうすぐ〇年生」という題材を行い、「～年生」という学年への意識を高めることにする。また、「自分のことを話そう」という題材では自分の名前を言ったり、組・学年、好きなことなどを伝えたりすることで、自分の成長を振り返ったり自己理解を深めたりするようにする。そして、「一年間を振り返ろう」では行事等の写真カードや文字カードを見することで、自分の成長について振り返り、次の学年への期待感をもたせる。高学年では「中学生になろう」という単元で中学部の授業を体験したりランニングに参加したりするなど中学部の生活への見通しをもたせることで、中学生になる意識や期待感をもたせるようにしたい。

項目「将来の仕事」では仕事に焦点を絞り、まず身近な係の仕事を決めたり、実際に体験したりすることで仕事について関心をもつように働きかける。次に、児童にとって分かりやすい八百屋さんやレストランなどのお店の模擬体験を実際にやってみることで、仕事の一端を体験させる。そして、実際のお店に出かけて、どのように働いているか見ることで、仕事をしていることを少しでも知って欲しいと考える。仕事という概念を教えることに固執するのではなく、身近な自分の親の仕事について考えたり、体験的な学習を取り入れたりするようにしたい。また、小学部の授業に必要な遊びの要素を取り入れながら、体験を積み重ねることで仕事という言葉や意味を少しでも知ってほしいと考え、学習を繰り返しながら取り組むようにする。

目標は以下のとおりである。

将来の生活	1・2組	○ 学年や所属学級、好きなことやがんばったことなど、自分のことを知る ○ 進級という節目を知る ○ 自分の成長を感じ、「お兄さん、お姉さんになりたい」という上級生への憧れの気持ちをもつ
	3組	○ 学年や所属学級、好きなことやがんばったことなど、自分のことを知る ○ 卒業や進級という節目を知る ○ 自分の成長を感じ、「素敵なお兄さんになりたい」「かっこいい6年生になりたい」という上級生への憧れの気持ちをもつ
将来の仕事	1組	○ いろいろな仕事を体験する ○ 身近な人の働く様子を見て「すごい」と感じたり、「やってみたい」と思ったりする
	2・3組	○ いろいろな仕事があることを知る ○ 自分のしたい系の仕事を選ぶ ○ 身近な人の働く様子を見て「すごい」と感じたり、「やってみたい」と思ったりする ○ 大きくなって「〇〇をしたい」「〇〇になりたい」という気持ちをもつ

指導に関する留意点

- ・ 学習については全学年を対象とするが、発達段階を考慮し、低学年（1、2年生）、中学年（3、4年生）、高学年（5、6年生）に分けてグループ編成をしたり、全体で学習したりと、題材によって工夫する。ただし、中学部の授業体験など、必要に応じて学部を越えた授業を行う場合もある。
- ・ 項目「将来の生活」では、「〇年生になったぼく・わたし」「お兄さん・お姉さんになりたい」の2つの単元を設定し、自分の成長を感じたり、上級生への憧れの気持ちをもったりすることができるようにしたい。
- ・ 項目「将来の仕事」では、「いろいろな仕事を知ろう」の単元を設定し、身近な人の働く様子を見て「すごい」と感じたり、仕事の模擬的な体験を通して「やってみたい」という興味をもったりすることができるようにしたい。
- ・ 3組については、「中学生になろう」の題材を取り扱い、中学部の生活をビデオで見たり、実際にしてみたりして中学部の生活を楽しみできるようにする。また、中学部の授業を体験することで、中学部生活への大まかな見通しをもつことができるようにする。

（4）授業実践

① 項目「将来の生活」

単元「お兄さん、お姉さんになりたい」 題材「もうすぐ〇年生」

授業「電車に乗って新しい学級へ行こう」

ア) 授業の方針

a 「進路学習のステップと題材との関連表」について

今回、「将来の生活」に関する授業の方針を考えていく指針として、各題材ごとに「進路学習のステップ」（P. 17）による大切にしたい項目を、授業内容から検討し合い、次のように関連表としてまとめた。

表1 進路学習のステップと題材との関連表 ～将来の生活～

題材	授業	学習内容 〔指導内容表（ver.2）のⅡ段階〕	大切にしたい項目			ねらい
			夢	自己理解	情緒の安定	
もうすぐ ○年生	電車に乗って新しい学級へ行こう	○実際に教室に行ったり、新しい仲間とかかわったりすることで、進級することを楽しみにする気持ちをもつ	◎	○		・お兄さん、お姉さんになりたいと言う ・大きくなったことが分かる ・下級生のお世話をしてみたい
	お兄さん、お姉さんになろう	○お兄さん、お姉さんになって、やってみたいことや頑張りたいことを選択したり、答えたりする				

※「進路学習のステップと題材との関連表～将来の生活～」(P. 50 表6)から抜粋

※大切にしたい項目の◎は特に大切にしたい項目、○は次に大切にしたい項目を表している。

b 大切にしたい項目について

○「夢」について

- ・本題材において、「夢」は最も大切にしたい内容にとらえている。進級・進学を控えた児童がそれぞれに一つ学年が上がることで「今よりもお兄さん、お姉さんになるんだ」という気持ちの変化と、これまでの上級生を見てきての憧れやこれからの自分に対する期待感を高めて欲しいと考えた。また、そこまでの意識がもちにくい児童にとっても、これまでやったことがない役割や活動を教師や友達と一緒に体験することで、「面白いな」「やりたいな」という興味・関心を抱いて欲しいと考えた。

○「自己理解」について

- ・進級や進学に対する期待感や憧れといった「夢」を育むためには、まずは今の自分と将来の自分に対する認識、いわゆる「自己理解」の部分が必要であると考えた。しかしながら、小学部の児童の実態を見てみると、自分の学年や学級をきちんと理解している者は少なく、ほとんどの児童の認識がまだ不十分であると言える。このことは、小学部の学級編成が複式学級という複雑な構成になっていることにも関係しているであろう。ただ、班での活動の際には、上級生が下級生のお世話をしたり、班長が班のみんなに指示を出したりと、「学年が上がるにつれてお兄さん、お姉さんになる」という認識は、体験的に蓄積されていくことが考えられる。そこで、進級や進学に関する学年や学級の構成や仕組み、自分の学年が一つずつ上がりお兄さん、お姉さんになっていくという認識も、「しんろ」の授業を経験していくことで、少しずつ高まってくるのではないかと考えた。

○「情緒の安定」について

- ・「進路学習のステップと題材との関連表」(表1)からも分かるように、「情緒の安定」は本題材において「夢」や「自己理解」と比べると、あまり重きを置いていない。しかしながら、「情緒の安定」は全ての教育活動の根底で大切にしている内容であり、特に項目「将来の生活」においては、教師や友達と場を共有したり、友達が喜ぶ姿を見て一緒に喜んだりする姿とすることを職員間で共通理解した。

c 授業を作るに当たって

○グループ構成

- ・本時「電車に乗って新しい学級へ行こう」では、はじめは小学部全学年(14名)に対する一斉指導の形をとり、小学部全体の中での自分の位置(学年や学級)を確認しながら自分を含む周囲の友達がどのように進級・進学していくのかを知ることができるようにする。授業の途中からは次年度の学級の集団に分かれて、新しい仲間との活動を体験することで次年度への見通しをもたせやすくするように工夫したい。また、次時の「お兄さん、お姉さんになろう」では、現在の学級において

前時に学習したことを一人ひとりの実態に合わせて振り返るようにするなど、内容によってグループ構成を工夫したい。

○働きかけ

- ・本題材では、学年が上がるということを、子どもたちにイメージしやすい「お兄さん、お姉さんになる」という言葉で表現し、新しい学級になってこれまではやったことがない活動や勉強が待っていることを、模擬的な体験を通して子どもたちが実感することで、「自分もお兄さん、お姉さんになりたい」という期待感を感じて欲しいと考える。また、学級に新しい仲間が入ってくことで、上級生として下級生のお世話をしたり新しい役割が出てきたりすることを知り、有用感を高めて欲しいと考える。私たち教師がこれらの期待感や有用感を「かっこいい」「すごい」などの言葉で子どもたちに伝えるとともに、子どもたちからもそのような言葉や態度を引き出していくことで、夢や期待感を子どもたち同士で高め合える授業をつくっていきたいと考えている。

○教材・教具

- ・本題材では、次年度学年が一つ上がることや新しい環境になることを模擬的な体験を通して子どもたちに感じてほしいと考える。また、なるべく体験的な活動ができるような教材・教具を提示することで、教師の話聞くだけでは理解が難しい児童に対しても見通しをもたせ、自発的な活動をうながしたいと考える。自己理解に関しても学年や学級について考える際に教室の模型や児童の人形（P. 37 写真1）を提示し、実際に子どもたちが人形を動かすことで理解をうながしていきたい。また、次年度の学級の仲間をより意識させるために、それぞれの学級ごとに列車（P. 37 写真2）を準備し移動するようにしたい。進級することについても、新しい学年の数字が書かれたメダルをもらうことで、みんなと一緒に学年が上がっていくことを感じたり、「すごいね」と言ってもらうことで全員に嬉しさを感じたりしてほしいと考える。次年度に対する期待感、将来の生活に対する夢を膨らませることができるよう、子どもたちにはこの題材を通して「やってみたい」「楽しそうだな」とワクワクした気持ちを感じることをできるよう教材を準備したいと考える。

イ) 実践と考察

a 授業の概要

○題材の目標

[内容に関する目標]

- ・4月からの自分の学年や所属学級を知る

[こころに関する目標]

- ・新しい学年や学級への期待感をもつ
- ・上級生へなることへの憧れや有用感をもつ

○題材の計画（全2時間）

- ・電車に乗って新しい学級へ行こう……………1時間（本時）
- ・お兄さん、お姉さんになろう……………1時間

○本時の目標

[内容に関する目標]

- ・人形を動かしたり、教室を移動したりすることで、来年度の学年や学級を知る

[こころに関する目標]

- ・新しい学級で活動することにより、次の学年へのワクワクした気持ちをもつ
- ・上級生の様子や学習の様子を見たり聞いたりすることで、憧れの気持ちをもつ
- ・下級生に新しい役割を伝えたり、お世話をしたりすることで、上級生としての気持ちを味わう

b 学習の過程（表2）

学 習 活 動 (授業構成)	指 導 上 の 意 図 ・ 留 意 点 (働きかけ)	備 考 (教材・教具)
1. 本時の学習内容を知る ○自分の人形を現在の学級に置く ○自分の人形を新しい学級に動かす 2. 来年度の教室が分かる ○列車に乗って移動する 3. まとめをする ○メダルを紹介する	○1組から3組までの教室の模型を提示し、自分で人形を置いてみることで、自分の学級をイメージできるようにする。 ○6年生が遊戯室から退場する様子を見せて、来年度は6年生がいなくなることを実感し、自分も新しい学級になることをイメージしやすくする。 ○新しい学級がどうなるのか、人形を動かしてみることで理解を深め、来年度への期待感を高めるようにしたい。 ○新しい仲間と一緒に乗ることを伝え、次の活動への期待感を高めたい。 ○列車の出発に際しては、車掌と一緒にかけ声をかけて、ワクワクした気持ちを十分に味わわせたい。 ○各教室では、まず一人ひとりが進級メダルをもらうことで、「〇年生になるんだ」「嬉しい」という気持ちを高めたい。 <1組教室> ○新1年生の板人形を使って新しい友達が入ってくることを知らせるようにする。(写真3) <2組教室> ○2年生には、3年生が作った図工の作品や音楽の教科書または楽器を見せ、新しい勉強を「やってみたい」という期待感をもてるようにしたい。(写真4) <3組教室> ○来年度は4年生が小学部で一番のお兄さん、お姉さんになることを伝える。また、メッセージカードを6年生から渡してもらうことで、リーダーとしての期待感を高めたい。(写真5) ○もらったメダルをみんなに紹介する。4年生	○教室の模型と児童の人形 <写真1> ○各学級の列車（3台） <写真2> ○進級メダル ○新1年生の板人形 ○図工の作品 ○音楽の教科書・楽器 ○メッセージカード

3組の教室に着いたぞ！
何をするのか楽しみだなあ！



「3」のメダルを もらったぞ！ 来年は、3年生にな るんだ。やったー！ 中学生の制服、似合 ってるかなあ？ なんだかドキドキ してきたなあ。	はメッセージカードも紹介し、リーダーとし ての気持ちを高めたい。  ○制服を着た6年生が登場し、みんなに中学生 に変身した姿を見せる。  ○全員が4月からお兄さん、お姉さんになるこ とを話し、「お兄さん、お姉さんになるぞ」「エ イ、エイ、オー！」のかけ声をみんなで言っ て、学年が上がる期待感を高めたい。	○中学生の制服 うわーっ！ お兄さん、お姉さ んになってる！ かっこいいなあ！
○6年生が変身した姿を見 る ○教師の話聞く		

c 考察

○授業構成

- ・今回の授業では、小学部全体の一斉指導から各学級に分かれての指導（写真3～5）へと、グループ構成を変化させた授業を展開した。一斉指導の場面では、教師の働きかけや教材の提示に対して様々な反応が子どもたちから出てくることで、周りの友達を意識して「同じようにやってみよう」と、お互いに影響し合いながら行動する姿が見られた。またその後、新しい学級の仲間と一緒に活動する場面では、新しい教室や新しい仲間を十分に実感しながら次年度の活動を体験することで、新しい環境に期待感をもつことができたように感じる。



<写真3 (1組教室)>



<写真4 (2組教室)>



<写真5 (3組教室)>

○働きかけ

- ・今回の授業では、「進級・進学する喜びや期待感を高める」ことを教師全員が念頭に置いて取り組む

など、これまで行ってきた学級活動の時よりもねらいを明確にして取り組むことができた。言葉かけにおいても、進級・進学することを「お兄さん、お姉さんになる」といった言葉を使うようにしたことは、子どもたちがこれまでの班活動などで「お兄さん、お姉さんは、すごい・かっこいい」などのイメージを抱いてきた経験などから、同じように「憧れ」や「夢」を感じながら取り組むことができたのではないかと感じた。

- ・各学級に移動し、次年度の新しい仲間を板人形として登場させたり、図工や音楽の授業に関して作品や楽器などを手に取り実際にやってみたりする活動を設定した。今回の授業実践を通して、自分への気づきや気持ちの高まりが、子どもたち自身の体験から芽生えてくることを実感することができた。さらに、模擬的な体験を通して子どもたちがより確かな見通しや期待感をもてるようになることも明らかになった。

○教材・教具

- ・教室の模型に自分の人形を置いたり、学級ごとの列車に乗り込んだりする活動において、子どもたちは目を輝かせて「やってみたい」「楽しい」というような様子で取り組むことができた。教室の模型では、実際の教室の写真を大きく張り出して雰囲気を出したり、人形には児童一人ひとりの顔写真を貼り、さらに「起き上がり小法師」のように左右に揺らしても倒れないような形にして人形に動きが出るようにしたり、列車では実際の新幹線や列車の色や形を忠実に表現して作ったりと、子どもたちが思わず触りたくなるような教材を作成することができた。直接そのことが次年度の活動に対する「夢」や「期待感」を感じるものではないが、このような教材を提示して子どもたちが興味を示すことで、教師の話や次の活動にワクワクした気持ちで取り組むことにつながったのではないかと考える。また、それぞれの教室での活動において模擬的な活動を促すために板人形や楽器、メッセージカードなどを使用したことで、子どもたちは「来年はこんなふうになるんだ」「楽しみだな」といった見通しや期待感を感じる事ができたように感じる。授業づくりを行ううえで、教師間で試行錯誤しながら作成していった教材の効果が予想以上にあったことを感じる事ができた。



○児童の変容

- ・教室の模型に自分の人形を移動させる活動では、同じ学年の友達が次の学年の場所に移動させるのを見て、自分も同じ場所に動かそうとしたりするなど、「同じ学年の友達と一緒に移動するんだ」、「来年同じ学級に行くんだ」と、何となく感じている様子が見受けられた。また同じように、新しい学級ごとに列車に乗り込む活動でも、周りの動きを見て一緒に動こうとする様子も見られた。このように同じ学年の友達を意識することができるようになってきている児童にとっては、今後の授業において、徐々に上級生や下級生についても意識できるようになってくるのではないかと推察された。
- ・児童の中には、今回の授業を受けたことにより、逆に不安な様子を見せる者もいた。このことは、「来年度こうなるんだ」という見通しをもつことができないまま、初めて本授業で進級するクラスを体験するという活動に「どうなるんだろう？」という不安感のみが高まったのではないかと推測される。しかしながら、今回の授業を受けた後、実際に新しい学年に上がった際には、「ああ、この



ことだったのか！」「やったことがあるぞ！」と授業を受けたときの印象が、現実を訪れた環境とつながり、落ち着いて新しい環境を受け入れることができるようになり、児童によっては結果的に効果が見えたような児童もいた。

- ・ 6年生の児童は、上級生の役割があることやこれから頑張りたいことを、メッセージカードを通して下級生に伝えたことで、自分たちが最上級生として頑張ってきたことを再確認できたようだった。また、中学生の制服を着ることで、自然と「来年は中学生になる」ということが実感できたようである。6年生は、前年にも「中学生になろう」の授業を受けており、中学生の制服を着る経験も2度目であったことから、このような経験を繰り返すことも児童の変容に関係しているように思う。普段自分のことについて質問されても答えることが難しかった児童が、「来年〇〇くんはどこに行くの？」の質問に、「中学生！」と答えるようになるなど、「制服を着る」という模擬的な体験をすることや何度か繰り返し経験することが、より具体的なイメージをもたせる手立てになったようだ。
- ・ 学級での事後学習を含め、自分が何組かを言えるようになったり、「お兄さん、お姉さんになりたい」という意識が、普段の発言や行動に表れるようになったりするなど、児童によっては授業による変容が見られるようになった。しかしながら、大きく変容が見られない児童もいたことから、一度の学習で身につくものではなく、毎年経験していくことにより変容が見られるようになってくるものではないかということも推察できた。

○今後の課題

- ・ 自己理解の面において、＜児童の変容＞でも述べたように、新しい学年、学級になることの理解が一度の授業では難しい児童も多かった。このことは、小学部の学級編成が2学年ごとの複式学級という構成になっていることも大きな要因と言える。今の自分の学年や学級の理解が不十分な児童も多いことから、毎日、目にするような掲示などを設置しておくなど、授業の中だけでなく、年間を通して自然と身についていけるような工夫を行っていくことも必要であることを共通理解した。
- ・ 今回の授業では、進級・進学に対する「憧れ」や「期待感」を児童一人ひとりが高めることをねらって授業を構成したが、全ての児童に対して達成できたかという点、不十分であった部分もあるように思う。＜児童の変容＞でも述べたように、毎年繰り返し経験していくことで達成されていくことも考えられるが、もう一步踏み込んで考えると、今回の授業実践を振り返ってもっと児童に分かりやすい手立てや働きかけがあったのではないだろうか。このことについてさらに検討し、よりよい実践につなげていくことが今後の課題となってくる。

② 項目「将来の仕事」

単元「いろいろな仕事を知ろう」 題材「いろいろな仕事を見に行こう」

授業「どんな仕事があるのかな」

ア) 授業の方針

a 「進路学習のステップと題材との関連表」について

「将来の仕事」の授業を考えていく指針として、大切にしたい項目を、授業内容から検討し合い、表3（P. 41）のようにまとめた。

表3 進路学習のステップと題材との関連表 ～将来の仕事～

題材	授業	学習内容 [指導内容表(ver. 2)のⅡ段階]	大切にしたい項目				ねらい
			夢	自己理解	知的 好奇心	情緒の 安定	
いろいろな仕事を見に行こう	どんな仕事があるのかな	○教師や上級生の真似をしながらお店屋さんの模擬的な体験をする	◎		○		・「(大人になって) ○○になりたい」という ・やってみたい仕事や好きな仕事を見る ・いろいろな仕事があることを知る ・身近な人の仕事に関心をもつ
	仕事を見に行こう	○働いている人の様子を楽しんで見る					
	仕事を思い出そう	○将来なりたい職業をカードの中から選ぶ(やってみたいと思う)					

※「進路学習のステップと題材との関連表～将来の仕事～」(P. 50 表6)から抜粋

b 大切にしたい項目について

○「夢」について

- ・児童たちは、給食時間に「○○が食べたい」など好きな物を考えて選んだり、「(今度の休みに) ○○に行きたい」「○○が欲しい」など、自分のしたいことを考えたり選んだりすることができる。しかし、「大人になったら○○になりたい」という「夢」をもっている児童は少ない。児童の実態から考えると、自分の成長を正確にとらえることが難しい児童がほとんどではあるが、それでも、成長することの喜びや大人になって仕事をするということに憧れ、夢をもってほしいと考える。そこで、本題材では「夢」を一番に大切にしたい項目として取り上げた。

○「知的好奇心」について

- ・「○○になりたい」と思うためには、それなりの知識が必要である。自営業であったり、製造業をしている父親の姿を見たりして、家族(父親)の仕事を理解している児童もいるが、ほとんどの児童が家族(父親)の仕事について理解していない現状がある。また、普段の生活の中で家族と買い物や外食に行ったり、お店屋さんごっこで店員の真似をして遊んだりすることはあるが、店員が「働いている」ということに気づいている児童は少ない。そこで、いろいろな職業を紹介し、楽しく体験することで、いろいろな仕事があるということに気づいたり、「他にどんな仕事があるのだろう」「自分の家族はどんな仕事をしているのだろう」ということを考えたりできるようになって欲しいと思う。そこで、「知的好奇心」も大切にしたい項目として取り上げた。

○「自己理解」について

- ・将来、社会に出て行く児童にとって、自分に何ができるのか、どんな生活をしたいのかを考えるための力はとても大切なことである。自分の好きなものや得意なことが分かったり、言えたりすることは、「自己理解」につながると思われる。本授業でも体験的な活動を通して、「楽しかった」「この仕事が面白い(好きだ)」ということを感じ、「自分は～になりたい」という気持ちを育てて生きたいと考える。そこで、「進路学習のステップと題材との関連表」に挙げてはいないが、大切にしたい項目として考えながら実践を進めていきたい。

○「情緒の安定」について

- ・「情緒の安定」は、特に取り上げてはいない。しかし、本題材だけでなくどのような授業でも大切にしたい項目の一つではある。小学部段階の児童にとっては、「楽しい」と思えることが「○○がしてみたい」という「夢」につながったり、「他には何があるのだろう」という「知的好奇心」をかき立てるための動機として働いたりすると思われる。また、低学年の児童を中心に、自分の気持ちや思いを表現することが難しい児童にとって、「楽しい」と思える授業はそれだけで意義がある。

そこで、本題材でもステップ表に挙げてはいないが、大切にしたい項目として考えながら実践を進めていきたい。

○ 授業を作るに当たって

○題材全体の構成

- ・本題材では、まず、身近な仕事に着目させるとともに、仕事の模擬的な体験を通して仕事を具体的にイメージしたり、仕事への憧れがもてたりできるようにする。
- ・模擬体験をした後、学校近くの商店街に出かけ、前時の学習で体験したような活動（商品の受け渡しなど）をしたり、言葉（「いらっしやいませ」など）を言ったりしているかを見ることで、仕事をより身近に感じたり、「仕事はカッコいい」等の憧れの気持ちをより強く感じられるようにする。
- ・高学年は、仕事カード等を使って、もう一度振り返ることで、どのような仕事があるのか、その仕事はどんなことをするのかなどの知識の定着や、「自分は、〇〇になりたい」という夢がもてるようにしていく。

○グループ構成

- ・本授業「どんな仕事があるのかな」では、はじめ小学部全学年（14名）で一斉指導をし、その後3つのグループに分かれて、3つの仕事を交代で体験するという形で進めるようにする。
- ・グループ構成は、仕事の雰囲気や場の楽しさを味わうことをねらうグループ（b 学習の過程（表4）内のⅠグループ）と、仕事をする楽しさ自体を味わうことをねらうグループ（b 学習の過程（表4）内のⅡ・Ⅲグループ）とに分ける。そうすることで、それぞれの仕事を体験する場所で一人ひとりの児童の実態に応じた支援や働きかけができ、より楽しく活動に参加させたり、仕事に目を向け仕事自体に一生懸命に取り組ませたりすることができる考える。

○働きかけ

- ・一斉指導で使用する絵本「お店屋さん」では、いろいろな店が出てくるため、店の方に児童の意識が向かうことが考えられる。そこで、「お店の人、何て言っているのかな?」「料理を運んでいるね」などの言葉を使い、店ではなく仕事をする人に着目できるようにする。
- ・児童からすると、「お店屋さんごっこ」の延長の活動（あそび）と同じと思うかもしれない。しかし、ごっこ遊びとの違いを強調するために、「上手にできたね」「楽しいね」等の言葉かけを控え、「お仕事がんばったね」「カッコいいね」など、仕事をより強調したり、仕事をすることに憧れをもつことができたりするような支援をする配慮した。
- ・題材全体を通して、児童が仕事とはどういうものなのか、仕事は楽しい・すごいなど、仕事に対しての知的好奇心や夢を育めるような授業を展開できるようにする。

○教材・教具

- ・世の中はありとあらゆる仕事であふれている。そのような仕事の中から、本年度は「商店街（店）」に着目し、「八百屋」「レストラン」「宅配便」の3つの仕事を取り上げる。
- ・話し合いを進めていく中で、「お医者さん」「大工さん」などの仕事も挙げられた。これらの仕事は、注射をする、釘を打つなど、児童が活動内容に強い関心を示し、意欲的に取り組むであろうと考えられた。しかし、児童にとってより身近な存在である仕事は何か、また「どんな仕事があるのかな」の授業のすぐ後に関連した見学ができるものは何か、という視点から検討していった結果、上述の3つの仕事に決定した。
- ・選んだ3つの仕事のもう一つの観点として、友達や教師とのやり取りの楽しさが味わえるもの（八百屋）、作る楽しさが味わえるもの（レストラン）、制服や行動のカッコよさが味わえるもの（宅配便）とし、できるだけ多種の仕事の模擬的な体験ができるように配慮した。
- ・八百屋では、野菜の陳列の仕方を工夫したり、本物のレジスターなどを用意したりし、本物らしさを出すようにする（P. 43 写真6）。レストランでは、教師がお客さんになりいろいろな注文をして、作る楽しさが十分に味わえるようにする。また料理作りでは、簡単に作ることができて本

物らしく見えるような教材を用意する（P. 43 写真7）。宅配便では、宅配便業者から制服やのぼりを借り、家のドアを用意して荷物の集配や配達の雰囲気が味わえるようにする（P. 43 写真8）。このように、場の設定や教材を工夫して、児童の興味・関心を引いたり、本物の仕事の雰囲気が味わったりできるように配慮する。



<写真6>



<写真7>



<写真8>

イ) 実践と考察

a 授業の概要

○題材の目標

〔内容に関する目標〕

- ・いろいろな仕事の模擬体験をしたり、実際に仕事をする人やその様子を見たりすることで、いろいろな仕事や仕事の内容などを知る

〔こころに関する目標〕

- ・いろいろな仕事に関心をもち、「やってみたい」「～になりたい」という気持ちをもつ
- ・仕事をしている人やその様子を見て楽しんだり、興味をもったりする

○題材の計画（1～4年：全4時間、5年：全5時間）

- ・「どんな仕事があるのかな」…1時間（本時）
- ・「仕事を見に行こう」……………3時間
- ・「仕事を思い出そう」……………1時間（5年生のみ）

○本時の目標

〔内容に関する目標〕

- ・八百屋、レストラン、宅配便の仕事を模擬的な体験する
- ・八百屋、レストラン、宅配便の仕事について知る

〔こころに関する目標〕

- ・八百屋、レストラン、宅配便の模擬的な体験などを通して、「～になりたい」「～をしたい」という気持ちをもつ
- ・八百屋、レストラン、宅配便の仕事を楽しむ

b 学習の過程（表○）

学習活動	指導上の意図・留意点	備考 (教材・教具)
1. 本時の内容を知る ○教師の話聞く ○仕事の紹介を見る	○「お店屋さん」の絵本や仕事カードを見て、いろんな店があることや、そこで働く人に着目させる。 ○児童がこれからする活動に見通しや楽しみがもてるように、ST3人がそれぞれの衣装を着て登場し、仕事で使う お仕事しているよ！ えっ？お仕事？	○絵本「お店屋さん」 ○仕事カード お店が、いっぱいあるな…

2. 模擬体験をする ○仕事の体験をする ○順番に回る ・Ⅰグループ：八百屋→レストラン→宅配便（ST1） ・Ⅱグループ：レストラン→宅配便→八百屋（ST2） ・Ⅲグループ：宅配便→八百屋→レストラン（ST3） よし！テキパキ仕事するぞ！  3. まとめをする ○好きな仕事の発表をする ○次時の話を聞く	道具を見せたり、「いらっしゃい」など特徴的な言葉を言ったりする。 ○数名の児童に小道具に触らせたり、言葉を言わせたりして「やってみたい」という気持ちを高めるようにする。 <table border="1" data-bbox="448 353 1106 607"> <thead> <tr> <th>八百屋(1組)</th><th>レストラン(2組)</th><th>宅配便(3組)</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・「いらっしゃい」と言う</td><td>・「いらっしゃいませ」と言う</td><td>・荷物を運ぶ</td></tr> <tr> <td>・商品を袋に入れる</td><td>・料理を作る</td><td>・荷物を積む</td></tr> <tr> <td>・お金のやり取りをする</td><td>・盛りつける</td><td>・ハンコをもらう</td></tr> <tr> <td></td><td>・お客さんに出す</td><td>・運転する</td></tr> </tbody> </table> ○全員が交代で帽子やエプロンなどの衣装を身につけ、体験できるようにする。 ○Ⅰグループは、教師と一緒に活動することで、仕事の雰囲気が味わえるようにする。 ○Ⅱ・Ⅲグループは、交代でどんどん仕事をし、仕事をする楽しさを味わえるようにする。 ○八百屋では、大きな声で「いらっしゃい」と言ったり、手をたたいて客引きをしたりし、児童の関心を引く。また商品を袋に入れる、お金を貰うなどのやり取りを通して、八百屋の仕事が味わえるようにする。 ○レストランの料理は、簡単で本物らしく見えるように工夫し、児童の「やってみたい」という気持ちを高めるようにする。また、児童の作った料理をSTが「おいしそう」など称賛し、作ったり人に食べてもらったりすることの嬉しさや達成感が味わえるようにする。 ○宅配便では、一度にたくさんの荷物を持ったり、素早く運んだりしてみせ、児童が「かっこいい」と思えるようにする。また、荷物を台車に積む、ハンコをもらうなどの活動を通して、宅配便の仕事が味わえるようにする。 ○児童が好きな仕事の発表をするときに、思い出したり考えたりしやすいように、仕事カードや実際に使った道具を見せる。 ○上手に発表できた児童は称賛したり、「～になりたいのね」などの言葉かけをしたりして仕事への憧れの気持ちを高める。 ○次時は、商店街に行き、実際に仕事をしている人を見学する話をし、意欲づけをする。 ○住吉商店街の写真を見せ、次時の活動が具体的にイメージできるようにする。 	八百屋(1組)	レストラン(2組)	宅配便(3組)	・「いらっしゃい」と言う	・「いらっしゃいませ」と言う	・荷物を運ぶ	・商品を袋に入れる	・料理を作る	・荷物を積む	・お金のやり取りをする	・盛りつける	・ハンコをもらう		・お客さんに出す	・運転する	○店の看板、道具、衣装など 元気に「いらっしゃい」って言うんだよ！  ※子どもたちがイメージしやすいような衣装や看板の様子 エプロン着ると、カッコイイね！ ○仕事カードや仕事の道具 どの仕事がしたい？  これ！
八百屋(1組)	レストラン(2組)	宅配便(3組)															
・「いらっしゃい」と言う	・「いらっしゃいませ」と言う	・荷物を運ぶ															
・商品を袋に入れる	・料理を作る	・荷物を積む															
・お金のやり取りをする	・盛りつける	・ハンコをもらう															
	・お客さんに出す	・運転する															

c 考察

○授業構成

- ・小学部全体で授業をすることで、より本物に近い場の設定や教材の準備ができると共に、友達や教師とかかわりながら授業を展開することができた。また、店員役の教師一人ひとりがそれぞれの個性を発揮し仕事の雰囲気を盛り上げ、児童が楽しく活動に取り組めるような授業構成になったと思われる。

- ・本授業では、児童の実態に応じたグループ構成にした。このようなグループ分けにしたことで、Ⅰグループが仕事の体験に来たときは、エプロンなどの衣装を着けた児童に「かっこいいね」「一緒に『いらっしやい』と言おう」など、場の雰囲気や仕事の雰囲気を感じながら楽しく活動させることができた。Ⅱ・Ⅲグループでは、一生懸命に料理を作ったり荷物を運んだりしている児童に対し、「おいしくできたよ」「キビキビと荷物を運ぶことができてかっこいいよ」など、仕事をしていること自体を称賛することができた。また、これらの言葉かけは個に応じたものであるが、同じグループの児童が聞くことによって「自分もああいう風にやってみよう」「かっこよくしたい」と感じることはできるのではないだろうか。実際に児童の活動の様子を見てみると、どの児童も笑顔だったり、一生懸命に取り組んだりしている様子が見られ、仕事や場の雰囲気を味わっている様子が感じられた。



＜写真9「一生懸命に作っている様子」＞

- ・翌日に実施した商店街見学では、落ち着いて参加していたり、商店街の人が仕事をしている様子を興味深く見たりしている様子が見られた。このような児童の様子から、「学校での授業→仕事の見学→振り返り（5年のみ）」という題材全体の授業構成も適当であったと思われる。
- ・高学年のみで取り扱っている「振り返り」の授業に関しては、高学年だけでよいのか、全学年に必要なのか、などのことについて小学部全体で具体的な検討をまだ行っていない。今後、話し合いを通して深めていきたい。

○働きかけ

- ・導入で使った「お店屋さん」の絵本では、何の店かではなく、そこで仕事をしている人を意識できるような言葉かけをすることを心がけた。また仕事の模擬体験では、「楽しいね」ではなく「仕事がんばったね」などの言葉かけをすることを心がけるようにした。しかし、実際の授業の中ではつい「楽しいね」など「あそび」の授業のような言葉かけになることも多くあった。教師自身が指導形態「進路」の授業であることをしっかり意識して言葉かけや支援の仕方の一つひとつに気を配り授業を進めていかななくてはならないだろう。しかしこの反省を受け、翌日の商店街見学のときは、「ほら、お仕事しているね」「『いらっしやい』と言ってるかな」など、仕事を意識させる言葉かけが多く見られた。教師の言動に変化が見られたことは、「進路」の授業への教師自身の意識が高まってきたことの現れであろう。
- ・授業のまとめの場面で児童が好きな仕事を選びやすいように、レジスター、フライパン、荷物とハンコなどの具体的な道具を準備した。どの児童もそれぞれの道具をよく見ており、教師の「どの仕事が好きだった？」という質問に自分で道具を触って意思表示をすることができた。言葉や絵カードだけでなく、具体物を提示することで、より鮮明に授業を振り返ったり、自分の思いを伝えたりすることができると考えられる。

○教材・教具

- ・できるだけ児童が本物の仕事をイメージできるように、それぞれの店のレイアウトや道具に工夫を凝らして教材を準備したり場の設定を考えたりした。児童はそれぞれの仕事の中に入るたび、目を輝かせ、自分からいろいろな道具に触り、意欲的に取り組んでいた。本物らしい教材・教具を準備することにより、仕事を身近に感じたり、達成感をもって取り組んだりすることができたと思われる。
- ・店員役の教師もそれぞれの仕事の衣装をそれらしく見えるように工夫した。また、それぞれの仕事で店員がどのような言葉をどのような様子で話しているかを考えることもした。例えば、八百屋は大きな声で「いらっしやい、安いよ!」と言うし、レストランでは「いらっしやいませ、何になさいますか」と優しい雰囲気で話す。宅配便では、きびきびした動きで仕事の雰囲気を高めるようにした。このような教師の工夫に、それぞれの教師の個性も加わり、児童はどの仕事場面でも生き生

きと活動している様子が見られた。今回のような授業では、教師自身が教材としての役割を担うと考えられる。

○児童の変容

- ・商店街見学では、魚屋の人が魚をさばいている様子や、八百屋でトラックから野菜を降ろしている様子など、前日の授業では見られなかった仕事の場面を見学することができた。これらの場面はほとんどの児童が初めて見ることやあまり馴染みのない場面であることが想定されたが、どの児童も熱心に見学することができた。題材全体を通して、児童の明らかな変容は見られないものの、商店街見学の様子から、仕事に対しての関心が高まっていることが推察される。



＜写真 10「商店街見学の様子」
商品ではなく、店の人を見ている児童＞

○今後の課題

- ・日常生活の中で児童がゴミ集めなどの係り活動を行っているとき、周りの教師や友達に「ありがとう」という言葉をかけられて嬉しそうな表情をしていることがある。自分が係り活動（仕事）をして周りから感謝されることは、「もう一度、係り（仕事）をやりたい」という意欲につながると思われる。このように児童自信が「有用感」をもつことは、仕事をする上での大切な要素の一つであると考えられる。「進路学習のステップと題材との関連表～将来の仕事～」（P. 50 表6参照）からも分かるように、今回の授業では大切にしたい項目として「夢」と「知的好奇心」を挙げていた。「有用感」が関連表のどの項目に関係してくるのか、もしくは、新しい項目として取り上げねばならないのか、また、どのように授業の中に仕組んでいくかなど、いろいろな側面から検討していきたい。
- ・今回、「将来の仕事」の初めての授業であった。将来のことをイメージすることが難しかったり、仕事についての知識が十分でなかったりする小学部の児童にとって、「将来の仕事」を1回の授業で理解させることは難しい。しかし毎年、同じ学習を繰り返すことで小学部の間に6回、この学習を経験することができる。繰り返し行われるこの授業を通して、児童自信が「仕事」について「こんな仕事もあるんだ」「仕事はかっこいい」「自分も仕事をやってみたい」「大人になったら〇〇になりたい」という思いが少しずつ育ってくるのではないだろうか。また、児童が新しいことを覚えたり感じたりしながら「仕事」への知識や夢を積み重ねていけるような授業を展開していくことが必要であろう。毎年繰り返される授業の中で見せる児童の変容を見逃さないようにし、次の授業へとつなげていけるような取り組みをしていきたい。

4 研究成果と今後の課題

今回の研究において、小学部ではこれまでの指導形態「進路」のとらえを見直し、小・中・高一貫した進路学習を目指し、指導形態「進路」の授業づくりを模索した。その中で以下のような成果が表れた。

（1） 成果

①□授業を作る過程で明らかになったこと

今回の研究において、これまでの小学部における指導形態「進路」について、とらえや意義を見直し、新しく実践していくためのとらえや意義・留意点などを策定したことで、授業を実践していく上で必要となる「年間指導計画」「指導内容表（ver.2）」「モデルカリキュラム」「進路学習のステップと題材との関連表」などの枠組みを整理・作成することができた。このことは、年間の計画や目標、指導内容、題材で大切にしたい項目など、今後、小学部の指導形態「進路」を実践していくための方向性が明らかになったとともに、我々教師が他の指導形態との違いを意識して系統的な指導を行っていくための指針が明らかになったということが言える。進路学習として、どのような内容をどういった

形で子どもたちに指導していくのかという、小学部の指導形態「進路」に関する体制や大まかな流れができあがったことは、今回の研究における一番の大きな成果と言える。

② 授業実践後、明らかになったこと

今回、項目「将来の生活」と「将来の仕事」に関する授業実践を行った。その成果については以下に挙げた通りである。

<将来の生活>

- 内容によって学習グループを変化させることで、子どもたちが相互に影響し合い、より効果的な学習を行うことができた。
- 「お兄さん、お姉さん」という分かりやすい言葉で進級について説明することで、イメージが容易になり理解が深まりやすくなった。
- 理解を深めたり意欲を高めたりするためには、体験的な学習を行うことが小学部の児童にとって大変有効であった。
- 模擬的な体験ができるような教材・教具を工夫したことで、子どもたちの「やってみたい」という意欲が自然と高まり、目を輝かせて生き生きと取り組む姿が見られた。

<将来の仕事>

- 指導形態「あそび」とのねらいの違いを意識し「仕事」という言葉を多く使ったことにより、子どもたち一人ひとりが働く人に注目して「憧れ」や「期待感」をもつことにつながった。
- できるだけ本物の仕事をイメージできるように教材を準備し模擬的な体験を行ったことが、子どもたちの意欲的な取り組みにつながった。
- 具体的な道具などを準備するとともに、教師自身の演技で教材としての役割を担うことも大切なことであった。

これらの授業実践により、授業づくりで有効であった点として、以下のことがまとめられる。

- ・学習グループの工夫
- ・ねらいを意識した言葉かけ
- ・模擬的な体験活動

③ 一貫性における小学部の役割

小・中・高一貫した指導形態「進路」の学習を目指すために、全体の中での小学部の役割を考える必要がある。一貫性の中で小学部がどんな役割をもつのかを明らかにし、中学部・高等部へとつなげていくことが大切なことだと感じる。その中で明らかになったことは、進路学習のステップにおいて記述しているように「大切にしたい項目」において「夢」の部分が大きいことである。小学部の段階では「夢」を幅広く捉え、現実的な夢というよりも子どもたちの無限に広がるいろいろな夢についても大切にすることで、今まで自分のすぐ近くの将来しか見ることのできなかった子どもたちに対して、もう少し先の将来に目を向けさせることができるのではないかと、何事にも「憧れ」や「夢」をもつことで、ちょっと前を向いて進むことのできる子どもへと育つのではないかと考える。また、「情緒の安定」を小学部段階で必要なこととして挙げていることも特徴の一つである。進路学習の授業においては知識的な学習が多くなる傾向にあるが、小学部の段階において、落ち着いて話を聞いたり活動したり、進級や環境の変化など自分の将来に見通しをもち安心して過ごすことができるような「情緒の安定」を大切にしていけることが、これから中学部・高等部へとつながっていく指導形態「進路」の学習においては基礎的な力になっていくと考えたからである。

（２） 今後の課題

① 内容の一貫性

成果の部分で、小、中、高のつながりでの小学部の役割については述べているが、実際に中学部の指導内容を把握し、小学部の内容を検討しているのかと言うと、まだその段階に至っていない。小学部の中で独自に検討していった内容が多いことも事実である。「進路学習のステップ」でのつながりはある程度できあがってきたが、今後は内容や具体的なねらいについても中学部や高等部とのつながりをもてるよう、設定していく必要がある。

② 保護者との連携

今回の研究においては、本人の「夢」について詳しい実態把握を行っていなかったことに課題が残る。今後は保護者との連携を取りながら、子どもたちの「夢」について知るとともに、いかにその情報を授業に生かしていくかが、今後の指導形態「進路」の授業においては大切になってくる。また、授業の実践の様子や情報を保護者へ伝えていくことで、連携を取りながら実践を進めていくことが大切になると考える。

③ 系統的な指導

子どもたちは、これから指導形態「進路」の授業を毎年経験していくが、いかに体験的な学習を子どもたちに新鮮な印象で与えていくかということについても検討していく必要がある。また、今後は発達段階やグループ編成、年間計画の時間数などを毎年見直していきながら、時代の変化等にも対応したよりよい指導形態「進路」の授業を系統的に実践していきたい。

《引用・参考文献》

- 長崎大学教育学部附属養護学校（2004）教育課程の再編成 その2－実践的課題研究と卒業生の実態調査をととして、自立と社会参加をめざした教育課程再編成の手がかりを探る－. 研究紀要第16集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2007）教育課程の再編成 その3－自己の形成へつながる教育課程の創造－. 研究紀要第17集
- 長崎大学教育学部附属特別支援学校（2009）自己を育む授業実践－「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計－. 研究紀要第18集
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著（2010）キャリア教育の手引き－特別支援教育とキャリア教育－. ジアース教育新社
- 文部科学省（2010）小学校 キャリア教育の手引き.
- 経済産業省（2009）キャリア教育ガイドブック－学校と企業・地域をつなぐキャリア教育コーディネート－. 学事出版株式会社

表7 指導内容表 (ver. 2)

	I	II	III
将来の生活	○新しいクラスでの活動を教師や友達と一緒にやる ○自分の名前を言ったり、カードを選んだりして、自分のことを伝える経験をする ○教師や友達と一緒に落ち着いて新しい教室に行ったり、友達と手をつないだりする ○上級生が行っている活動を、教師と一緒に写真カードで見る ○行事などの写真カードを見たり、選んだりする ○中学部の生活をビデオで見たり、教師と一緒にやってみたりして、雰囲気を感じる ○中学部の授業を体験し、中学部生活の雰囲気を感じる ○友達が喜ぶ様子を見て、教師とハイタッチをするなど、一緒に喜ぶ経験をする	○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして、新しいクラスでの活動を楽しみにする気持ちをもつ ○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることを選択したり、聞かれて答えたりして、手がかりをもとに伝える ○実際に教室に行ったり、新しい仲間とかかわったりすることで、進級することを楽しみにする気持ちをもつ ○お兄さん、お姉さんになってやってみたいことや頑張りたいことを、選択したり、答えたりする ○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして振り返り、頑張ったことや楽しかったことを伝える ○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、楽しみにする ○中学部の授業を体験し、中学部生活への大まかな見通しをもつ ○友達が喜んでいる様子を見たり教師が促したりして一緒に喜ぶ	○新しいクラスでの活動を知ること、見通しや期待感をもつ ○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることなどが分かり伝える ○進級することが分かり、新しい教室や仲間を楽しみにする ○進級することが分かり、やってみたいことや頑張りたいことを伝える ○文字カードを見たり教師の話を聞いたりして振り返り、自分の成長を感じる ○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、見通しや期待感をもつ ○中学部の授業を体験し、中学部生活への見通しや期待感をもつ ○友達が頑張ったり喜んだりする様子を見て、応援したり一緒に喜んだりする
将来の仕事	○将来になりたい職業を教師と一緒にカードの中から選ぶ ○教師と一緒に働いている人の様子を見る ○教師と一緒にお店屋さんの模擬的な体験をする ○学級の係の仕事を教師と一緒にする ○教師と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする	○将来になりたい職業をカードの中から選ぶ（やってみたいと思う） ○働いている人の様子を楽しんで見る ○教師や上級生のまねをしながらお店屋さんの模擬的な体験をする ○学級の係の仕事を、具体物を見たり、実際に体験したりして知る ○友達と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする	○将来になりたい職業を言う（やってみたいと思う） ○働いている人の様子を興味をもって見る ○自分から楽しみながら、お店屋さんの模擬的な体験をする ○学級の係の仕事を絵カードや文字カードで知る ○いろいろな仕事があることに興味をもつ ○周りの様子を見ながら、自分で考えて行動する

表5 小学部 指導形態「進路」年間指導計画

学期	月	項目	単 元	題 材	授 業		
					低学年(1・2年生) ＜全8時間＞	中学年(3・4年生) ＜全9時間＞	高学年(5・6年生) ＜全16時間＞
1学期	4月	将来の生活	○年生になったぼく・わたし	○年生になったよ	○年生になったよ ＜学級1時間＞	○年生になったよ ＜学級1時間＞	○年生になったよ ＜学級1時間＞
		将来の仕事	いろいろな仕事を 知ろう	係の仕事を 決めよう		係の仕事を 決めよう ＜学級1時間＞	係の仕事を 決めよう ＜学級1時間＞
2学期	10月・ 11月	将来の生活	○年生になった ぼく・わたし	自分のことを 話そう	自分のことを話そう ＜学級1時間＞	自分のことを話そう ＜学級1時間＞	自分のことを話そう ＜学級1時間＞
		将来の 仕事	いろいろな 仕事を 知ろう	いろいろな仕事 を 見に行こう	どんな仕事があるのかな ＜全体1時間＞	どんな仕事があるのかな ＜全体1時間＞	どんな仕事があるのかな ＜全体1時間＞
					仕事を見に行こう (校外学習) ＜全体3時間＞	仕事を見に行こう (校外学習) ＜全体3時間＞	仕事を見に行こう (校外学習) ＜全体3時間＞
							仕事を思い出そう ＜学級1時間＞
3学期	2月	将来の 生活	お兄さん、 お姉さん になりたいな	もうすぐ○年生	電車に乗って新しい 学級へ行こう ＜全体1時間＞	電車に乗って新しい 学級へ行こう ＜全体1時間＞	電車に乗って新しい 学級へ行こう ＜全体1時間＞
					お兄さん、お姉さん になろう ＜学級1時間＞	お兄さん、お姉さん になろう ＜学級1時間＞	お兄さん、お姉さん になろう ＜学級1時間＞
				中学生になろう			中学部の活動を知ろう ＜学級2時間＞
							中学部へ行って 体験しよう ＜体験4時間＞
	3月			一年間を 振り返ろう	一年間を振り返ろう ＜学級1時間＞	一年間を振り返ろう ＜学級1時間＞	一年間を振り返ろう ＜学級1時間＞

(将来の生活)

学期	月	単 元	題 材	授 業	学習内容 [指導内容表(ver.2)のⅡ段階を記載]	大切にしたい項目			ねらい
						夢	自己理解	情緒の安定	
1学期	4月	○年生になった ぼく・わたし	○年生になったよ (1時間)	○年生になったよ	○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして、新しいクラスでの活動を楽しみにする気持ちをもつ	◎	○		・新しい教室、仲間、活動などを楽しみにする ・自分の所属(何組、何年、何歳など)が分かる
2学期	10月		自分のことを話そう (1時間)	自分のことを話そう	○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることを選択したり、聞かれて答えたりして、手がかりをもとに伝える		◎	○	・好き嫌い(できる・できない)が分かる・選ぶ(CL58) ・その場を共有できる
3学期	2月	お兄さん、お姉さんになりたいな	もうすぐ○年生 (2時間)	電車に乗って新しい学級へ行こう	○実際に教室に行ったり、新しい仲間とかかわったりすることで、進級することを楽しみにする気持ちをもつ	◎	○		・お兄さん、お姉さんになりたいと言う(CL9) ・大きくなったことが分かる(CL62) ・下級生のお世話をしてみたい
				お兄さん、お姉さんになろう	○お兄さん、お姉さんになって、やってみたいことや頑張りたいことを選択したり、答えたりする				
			中学生になろう (6時間) ※3組のみ実施	中学部の活動を知ろう	○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、楽しみにする	◎	○		・身近な人にあこがれる(CL10) ・大きくなったことが分かる(CL62) ・上級生のする勉強を見る
				中学部へ行って体験しよう	○中学部の授業を体験し、中学部生活への大まかな見通しをもつ				
	3月		一年間を振り返ろう (1時間)	一年間を振り返ろう	○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして振り返り、頑張ったことや楽しかったことを伝える	○	◎		・頑張ったことが分かる(CL61) ・お兄さん、お姉さんになりたいと言う(CL9)

(将来の仕事)

学期	月	単 元	題 材	授 業	学習内容 〔指導内容表(ver.2)のⅡ段階を記載〕	大切にしたい項目				ねらい
						夢	自己理解	知的 好奇心	情緒の 安定	
1学期	4月	いろいろな仕事を 知ろう	係の仕事を 決めよう (1時間)	係の仕事を 決めよう	○学級の係の仕事を、具体物を見たり、実際に体験したりして知る	○	◎			・好き嫌いが分かる、選ぶ(CL58) ・やってみたいと思う(CL18)
2学期	10月・ 11月		いろいろな仕事を 見に行こう (5時間)	どんな仕事があるのかな	○教師や上級生のまねをしながらお店屋さんの模擬的な体験をする	◎		○		・「(大人になって)○○になりたい」と言う(CL9) ・やってみたい仕事や好きな仕事を見る ・いろいろな仕事があることを知る ・身近な人の仕事に関心をもつ
				仕事を見に行こう	○働いている人の様子を楽しくて見る					
				仕事を思い出そう	○将来なりたい職業をカードの中から選ぶ(やってみたいと思う)					

表8 モデルカリキュラム(将来の生活)

No.		区分	くらし	いきがい	まなび	からだ
高	進路	指導形態	余暇	役割・しごと	芸術	進路
中		項目	将来の生活	将来の仕事		
小						
授業名		しんろ				
目標	内容	○学年や所属学級、好きなことやがんばったことなど、自分のことを知る ○卒業や進級という節目を知る				
	こころ	○自分の成長を感じ、「素敵な中学生になりたい」「カッコいい6年生になりたい」という上級生への憧れの気持ちをもつ				
学習形態		1組		2組		3組
実施時期	単元名	4・10月		○年生になったばく・わたし		
		2・3月		お兄さん、お姉さんになりたいな		
指導内容	将来の生活	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ
		○新しいクラスでの活動を教師や友達と一緒に行う		○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして、新しいクラスでの活動を楽しみにする気持ちをもつ		○新しいクラスでの活動を知ること、見通しや期待感をもつ
		○自分の名前を言ったり、カードを選んで、自分のことを伝える経験をする		○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることを選択したり、聞かれて答えたりして、手がかりをもとに伝える		○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることなどが分かり伝える
		○教師や友達と一緒に落ち着いて新しい教室に行ったり、友達と手をつないだりする		○実際に教室に行ったり、新しい仲間とかかわったりすることで、進級することを楽しみにする気持ちをもつ		○進級することが分かり、新しい教室や仲間を楽しみにする
		○上級生が行っている活動を、教師と一緒に写真カードで見る		○お兄さん、お姉さんになってやってみたいことや頑張りたいことを、選択したり、答えたりする		○進級することが分かり、やってみたいことや頑張りたいことを伝える
		○行事などの写真カードを見たり、選んだりする		○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして振り返り、頑張ったことや楽しかったことを伝える		○文字カードを見たり教師の話を聞いたりして振り返り、自分の成長を感じる
		○中学部の生活をビデオで見たり、教師と一緒にやってみたりして、雰囲気を感じる		○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、楽しみにする		○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、見通しや期待感をもつ
		○中学部の授業を体験し、中学部生活の雰囲気を感じる		○中学部の授業を体験し、中学部生活への大まかな見通しをもつ		○中学部の授業を体験し、中学部生活への見通しや期待感をもつ
		○友達が喜ぶ様子を見て、教師とハイタッチをするなど、一緒に遊ぶ経験をする		○友達が喜んでる様子を見たり教師が促したりして一緒に遊ぶ		○友達が頑張ったり喜んだりする様子を見て、応援したり一緒に喜んだりする
		こころ	自己活動	自立心		夢
自己調整	協調性		表現	社会規範	葛藤	
自己決定	自己理解		自己選択			

No.	区分		くらし	いきがい	まなび	からだ
高	進路	指導形態	余暇	役割・しごと	芸術	進路
中		項目	将来の生活	将来の仕事		
小						
授業名		しんろ				
目標	内容	○学年や所属学級、好きなことやがんばったことなど、自分のことを知る ○進級という節目を知る				
	こころ	○自分の成長を感じ、「お兄さん、お姉さんになりたい」という上級生への憧れの気持ちをもつ				
学習形態		1組		2組		3組
実施時期	単元名	4・10月		○年生になったばく・わたし		
		2・3月		お兄さん、お姉さんになりたいな		
指導内容	将来の生活	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ
		○新しいクラスでの活動を教師や友達と一緒に行う		○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして、新しいクラスでの活動を楽しみにする気持ちをもつ		○新しいクラスでの活動を知ること、見通しや期待感をもつ
		○自分の名前を言ったり、カードを選んだりして、自分のことを伝える経験をする		○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることを選択したり、聞かれて答えたりして、手がかりをもとに伝える		○自分の組・学年や好きなこと、頑張っていることなどが分かり伝える
		○教師や友達と一緒に落ち着いて新しい教室に行ったり、友達と手をつないだりする		○実際に教室に行ったり、新しい仲間とかかわったりすることで、進級することを楽しみにする気持ちをもつ		○進級することが分かり、新しい教室や仲間を楽しみにする
		○上級生が行っている活動を、教師と一緒に写真カードで見る		○お兄さん、お姉さんになってやってみたいことや頑張りたいことを、選択したり、答えたりする		○進級することが分かり、やってみたいことや頑張りたいことを伝える
		○行事などの写真カードを見たり、選んだりする		○写真カードを見たり、教師の話を聞いたりして振り返り、頑張ったことや楽しかったことを伝える		○文字カードを見たり教師の話を聞いたりして振り返り、自分の成長を感じる
		○中学部の生活をビデオで見たり、教師と一緒にやってみたりして、雰囲気を感じる		○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、楽しみにする		○中学部の生活をビデオで見たり、実際にやってみたりして、見通しや期待感をもつ
		○中学部の授業を体験し、中学部生活の雰囲気を感じる		○中学生の授業を体験し、中学生生活への大まかな見通しをもつ		○中学部の授業を体験し、中学部生活への見通しや期待感をもつ
		○友達が喜ぶ様子を見て、教師とハイタッチをするなど、一緒に遊ぶ経験をする		○友達が喜んでる様子を見たり教師が促したりして一緒に喜ぶ		○友達が頑張ったり喜んだりする様子を見て、応援したり一緒に喜んだりする
		こころ	自己活動	自立心		夢
自己調整	協調性		表現	社会規範	葛藤	
自己決定	自己理解		自己選択			

表9 モデルカリキュラム(将来の仕事)

No.			区分	くらし	いきがい	まなび	からだ		
高	進路		指導形態	余暇	役割・しごと	芸術	進路		
中			項目	将来の生活	将来の仕事				
小									
授業名		しんろ							
目標	内容	○いろいろな仕事があることを知る ○自分のしたい係の仕事を選ぶ							
	こころ	○身近な人の働く様子を見て「すごい」と感じたり、「やってみたい」と思ったりする ○大きくなって「〇〇をしたい」「〇〇になりたい」という気持ちをもつ							
学習形態		1組		2組		3組			
実施時期	単元名	4・10・11月		いろいろな仕事を知ろう					
指導内容	将来の仕事	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ			
		○将来なりたい職業を教師と一緒にカードの中から選ぶ		○将来なりたい職業をカードの中から選ぶ（やってみたいと思う）		○将来なりたい職業を言う（やってみたいと思う）			
		○教師と一緒に働いている人の様子を見る		○働いている人の様子を楽しく見る		○働いている人の様子を興味をもって見る			
		○教師と一緒にお店屋さんの模擬的な体験をする		○教師や上級生のまねをしながらお店屋さんの模擬的な体験をする		○自分から楽しみながら、お店屋さんの模擬的な体験をする			
		○学級の係の仕事を教師と一緒にする		○学級の係の仕事を、具体物を見たり、実際に体験したりして知る		○学級の係の仕事を絵カードや文字カードで知る ○いろいろな仕事があることに興味をもつ			
		○教師と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする		○友達と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする		○周りの様子を見ながら、自分で考えて行動する			
こころ	自己活動	自立心		夢		知的好奇心		情緒の安定	
	自己調整	協調性		表現		社会規範		葛藤	
	自己決定	自己理解		自己選択					

No.			区分	くらし	いきがい	まなび	からだ
高	進路		指導形態	余暇	役割・しごと	芸術	進路
中			項目	将来の生活	将来の仕事		
小							
授業名		しんろ					
目標	内容	○いろいろな仕事を体験する					
	こころ	○身近な人の働く様子を見て「すごい」と感じたり、「やってみたい」と思ったりする					
学習形態		1組		2組		3組	
実施時期	単元名	4・10・11月		いろいろな仕事を知ろう			
指導内容	将来の仕事	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ	
		○将来なりたい職業を教師と一緒にカードの中から選ぶ		○将来なりたい職業をカードの中から選ぶ（やってみたいと思う）		○将来なりたい職業を言う（やってみたいと思う）	
		○教師と一緒に働いている人の様子を見る		○働いている人の様子を楽しく見る		○働いている人の様子を興味をもって見る	
		○教師と一緒にお店屋さんの模擬的な体験をする		○教師や上級生のまねをしながらお店屋さんの模擬的な体験をする		○自分から楽しみながら、お店屋さんの模擬的な体験をする	
		○学級の係の仕事を教師と一緒にする		○学級の係の仕事を、具体物を見たり、実際に体験したりして知る		○学級の係の仕事を絵カードや文字カードで知る ○いろいろな仕事があることに興味をもつ	
		○教師と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする		○友達と一緒に落ち着いて移動したり行動したりする		○周りの様子を見ながら、自分で考えて行動する	
こころ	自己活動	自立心		夢		知的好奇心	
	自己調整	協調性		表現		社会規範	
	自己決定	自己理解		自己選択			

Ⅲ 中学部の研究

「支えあっている生活に気づき、
これからの自分に期待する授業づくり」

目次（中学部の研究）

研究の概要	54
1 中学部研究テーマについて	
（1）研究テーマの背景	54
（2）生徒の実態と学部目標	56
（3）指導形態「進路」において大切にしたいこと	57
2 研究の方法	58
3 研究の経過	59
（1）これまでの「進路」に関連した授業の把握	59
（2）指導形態「進路」項目「将来の生活」における指導計画 と「こころ」の目標の設定	59
（3）項目「将来の生活」の授業の実践	62
（4）指導形態「進路」項目「将来の仕事」における指導計画 と「こころ」の目標の設定	77
（5）項目「将来の仕事」に関するアンケートについて	78
（6）項目「将来の仕事」の授業の実践	81
4 研究成果と今後の課題	86
（1）「モデルカリキュラム」からみた指導形態「進路」の系統性	86
①内容の目標の整理	
②「こころ」の目標の整理	
③単元・指導内容の整理、深化	
④「こころ」区分の整理	
⑤「将来の生活」「将来の仕事」の位置づけ	
（2）「進路学習のステップと題材との関連表」から見た指導形態 「進路」の授業	89
（3）指導形態「進路」の研究を通して、さらに共通理解できた 育てたい内面（こころ）	90
（4）今後の課題	91
①指導形態「進路」のとらえ・意義・必要性について	
②小・中・高の一貫性	
《引用・参考文献》	
《参考資料①》研究前のモデルカリキュラム	92
《参考資料②》研究後のモデルカリキュラム	93
《参考資料③》進路学習のステップと題材との関連表	94

研究の概要

中学部では、これまでも教育課程全般を通して進路学習が行われてきた。17次研究においては「自己の形成」を視点に教育課程の再編成が行われ、区分「いきがい」の指導形態「進路」として、高等部の指導内容と関連させ、中学部段階から将来的な生活や働くことへの見通しをもつことができるように系統的に指導内容を設定するようにした。これは平成24年度から実施される新学習指導要領の「自立と社会参加に向けた職業教育の充実」という観点や「キャリア教育」の推進という、進路指導や職業指導を小学部・中学部・高等部の12年間を通して、計画的・意図的に行おうとする流れに似ている。

しかしながら、私たちは18次研究において、こころチェックリストを用いて生徒の内面（こころ）について実態把握をし、個別の指導計画や単元別指導計画¹に活用するとともに、各指導形態で「こころ」区分に関する目標を設定し授業実践を行うことで、「自己の形成」を実践レベルでアプローチしてきた。今回、研究として取り扱った指導形態「進路」も、「自己の形成」に重きを置いて実践していこうと考えた。

そこで、指導形態「進路」において、私たち中学部は、単に高等部の指導内容を早期教育として扱うのではなく、中学部という段階だからこそ、高等部での進路選択や社会人において必要な生徒の内面を明らかにすることや、指導形態「進路」において、その必要な生徒の内面を「こころ」の目標として設定し授業実践することで、これからの生涯にわたる進路選択の土台にすることができないかと考えた。

研究としては、「進路学習のステップ」を作成しながら、「こころ」の目標を明確にするとともに、指導形態「進路」の系統性を考えながら、項目「将来の生活」の指導内容の精選、項目「将来の仕事」の指導内容の創出に取り組んだ。その結果、本研究以前の進路に関連する学習について検討したり、生徒や保護者への「進路」に関するアンケートを生かしたりすることで、「将来の生活」「将来の仕事」をそれぞれに新たな指導内容を含んだ学習へと発展させることができた。そして、授業実践を行いながら検証していくことで、指導形態「進路」を「こころ」に着目した学習として再構築することができた。

成果としては、

- ①指導形態「進路」を進めるうえで中学部で大切にしたい内面（こころ）の把握
- ②指導形態「進路」における「こころ」の目標の整理
- ③中学部3年間における指導形態「進路」の系統性の構築

などがあげられる。また、それに伴う成果物として、「進路学習のステップ」『新しい指導形態「進路」のモデルカリキュラム』『進路学習のステップと題材との関連表』などが作成された。さらに、今後の課題としては、学部間の学習内容のつながりなど今後検討が必要であることが示された。

1 中学部研究テーマについて

(1) 研究テーマの背景

本校はこれまでの研究で幾度か教育課程の再編成を行ってきた。第5次研究でその後の本校の基本となる図1のような構造をもった教育課程を編成し、毎年修正を加えながら長年運用してきた。その中では、主に「木工」「職能」「家庭」等の技能教科において生活場面に生かせる力や態度を身につける学習を行ってきた。

¹ 単元別指導計画とは、各指導形態の単元ごとに作成する指導計画、評価表である



図1 第17次研究以前の教育課程

その後、第13次・14次研究では生徒の内面に焦点を当てた授業改善にも取り組んできた。また、第17次研究では、「自己の形成」を教育課程の理念に据えて再編成を行った。それが、図2である。

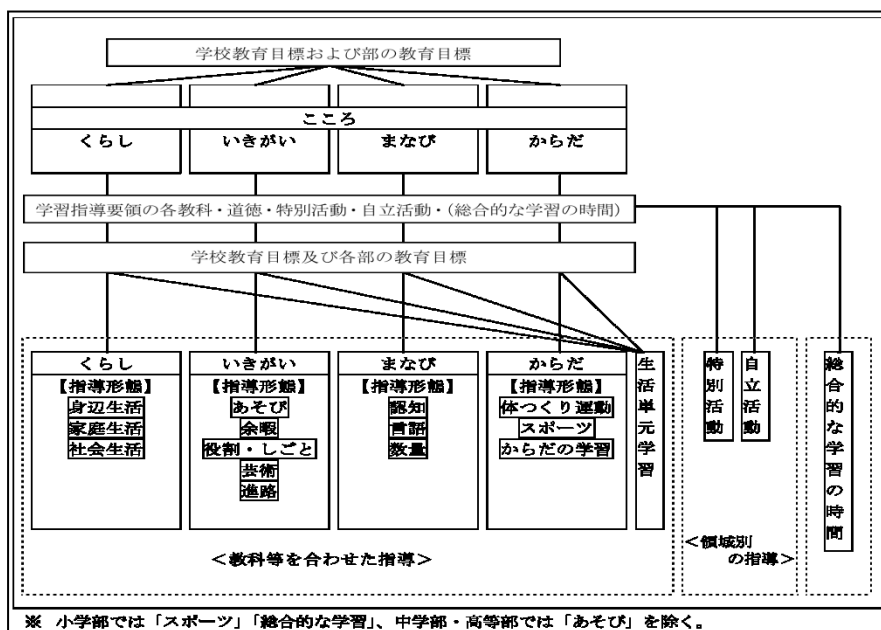


図2 第17次研究以降の教育課程

指導内容を「くらし」「いきがい」「まなび」「からだ」の四つの区分に分類し、更にこれら四つの区分のすべてに関連しながら基盤として支えているものとして「こころ」区分を設定した。そして、これまで「職能」「木工」「家庭」、或いは「生活単元学習」「総合的な学習の時間」「特別活動(学級活動)」等、様々な指導形態の中で(ある意味では担任裁量で)扱われてきた進路に関連する指導内容を整理することと、生徒が自分の将来の生活や進路に夢や希望をもち、自分自身で選択・決定できるように系統的に指導することの大切さことから、区分「いきがい」の中の一つとして、初めて「進路」という

指導形態を設けることになった。その中には、「将来の生活」という項目があり、各学年の題材は次のように設定されていた。

「将来の生活」

1年生・・・「いろいろな仕事を知ろう」

2年生・・・「今の自分、将来の自分」

3年生・・・「自分の進路について考えよう」「卒業生の進路を知ろう」

「高等部の生活を体験しよう」

また、働く際の構えや技能等については、区分「いきがい」の指導形態「役割・しごと」で扱うことになっており、指導形態「進路」と「役割・しごと」の関連が重要であった。

第18次研究において「こころ」区分を構成する10項目と「こころチェックリスト²」の内容からすべての指導形態について、内容の目標だけでなく、「こころ」の目標を設定した指導形態ごとのモデルカリキュラムを作成した。この時に、指導形態「進路」の項目「将来の生活」についても次のように「こころ」の目標が設定された。

指導形態「進路」項目「将来の生活」の「こころ」の目標

「将来について考えることで、今の自分の生活を振り返ったり、憧れをもったりしながら自分に合った進路について見通しをもつ」

ところが、指導形態「進路」には項目「将来の生活」ともう一つ、項目「将来の仕事」があり、これについては、高等部のみで指導内容が設定されており、中学部では設定されていなかった。しかし、実際には、項目「将来の仕事」に該当するような内容を授業で扱っていたり、項目「将来の生活」で設定されている内容が、むしろ項目「将来の仕事」として扱った方がよいようなものであったりした。そこで、今回の研究では、「将来の生活」と「将来の仕事」の内容の整理や、「こころ」の目標の見直し等を行いながら、授業を実践していこうと考えた。

（2）生徒の実態と学部目標

中学部の生徒は、1年生6名（男子4名、女子2名）、2年生5名（男子1名、女子4名）、3年生5名（男子3名、女子2名）の16名である。学級別では男女比にばらつきがあるが、学部全体としてみるとちょうど8名ずつとなっている。MAは2歳代～7歳代の生徒が在籍しており、障害種別では、ダウン症、自閉症、その他がほぼ均等に在籍している。

後に詳しく述べるが、生徒の家族や仕事に対する理解は、保護者が働いていることについてはほぼ理解している。また、多くの生徒が、将来してみたい仕事があると答えるが、普段自分が行っている手伝いや、保護者の仕事を答えることがほとんどで、実際に仕事のイメージができていない。仕事と手伝いの違いがまだ理解できていない段階ではない。とはいえ、自分も何らかの形で、自分以外の人や物に対して働きかける活動をしたいという気持ちがあることは間違いないと考えられる。

中学部の教育目標は、次の通りである。全体的な目標のもとに、本校における指導の枠組みである「くらし」「いきがい」「まなび」「からだ」の四つの区分ごとの目標も設定している。

「中学部教育目標」

○仲間とともに、いろいろなことにチャレンジし、自分の成長を実感しながら社会参加の基礎的な力を高める

・生活の場を広げ、経験を繰り返しながら、社会生活における基本的な態度や知識・技能を身につける。
(くらし)

² こころチェックリストとは、子どもたち一人ひとりの自己の形成を大まかに捉えるための評価表である。(p23 参照)

- ・精一杯作業をしたり、表現をしたりする力を高め、自分の良さに気づき、生活に喜びを感じる。
(いきがい)
- ・基礎的な言語や数量等の力を広げ、思考する力や身近な物事をとらえる力を高める。(まなび)
- ・からだの成長を受け入れながら、動きを広げたり、運動を続けたりする力を高める。(からだ)

(3) 指導形態「進路」において大切にしたいこと

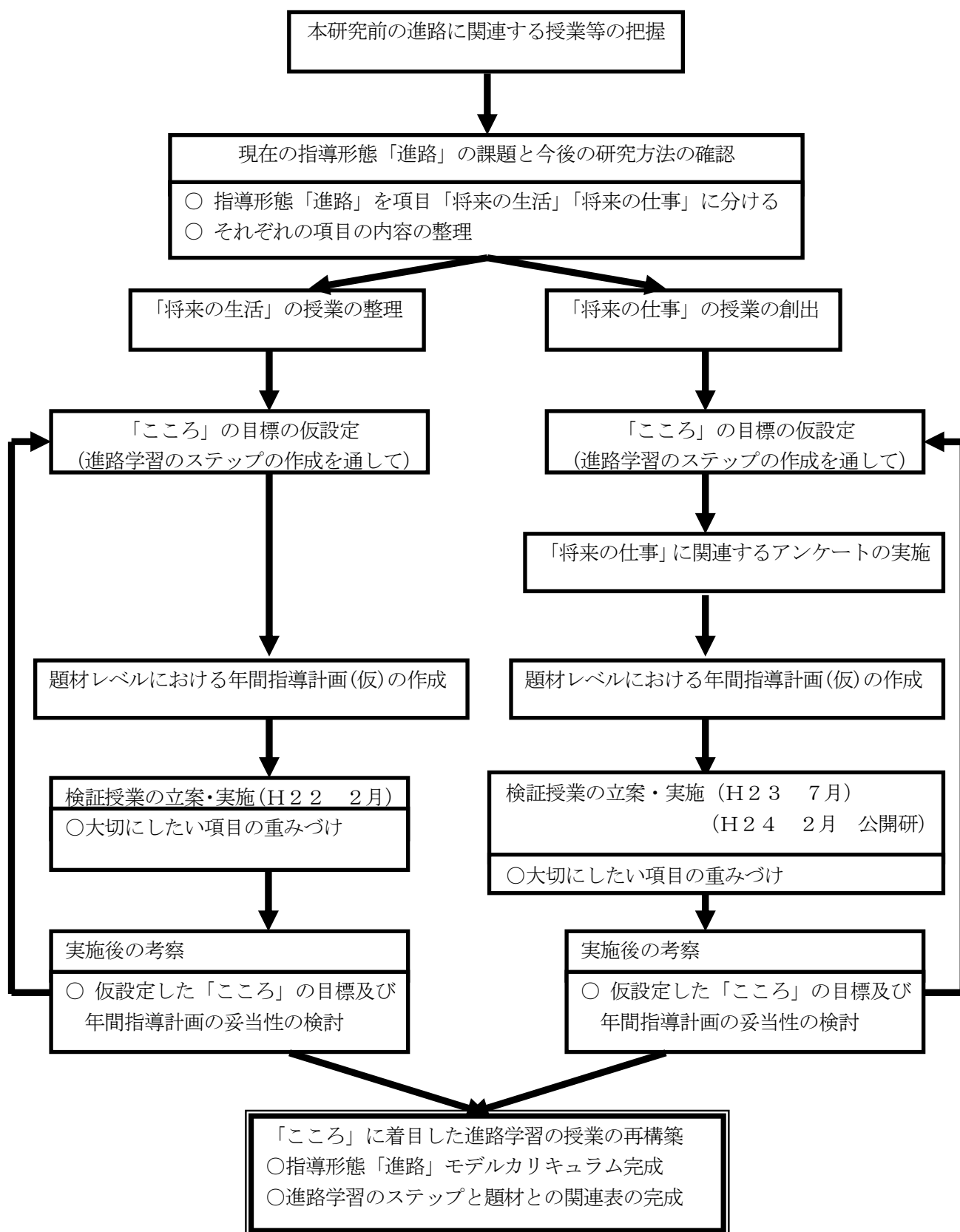
一般的に進路学習と言えば、「進級」「進学」や「自分を知ること」、あるいは「職場体験」やそれに伴う「挨拶や返事、報告、態度」「仕事の仕方」「いろいろな職種を知ること」などが考えられる。確かにそれは重要なことで大切にしたい内容でもある。と同時に、「挨拶や返事は〇〇のようにする」「報告は〇〇のようにする」「仕事をする時は〇〇のようにしないといけない」「仕事には〇〇のような種類がある」など、非常に技術的で知識理解的なことでもあり、短期的に結果を期待するような面もある。そのために、指導場面においては、説明し理解を高めたり、正しいやり方を練習させたりすることに重きをおきがちになる。生徒が理解し技術的にも上達するためには、生徒自らが意欲的・積極的に「もっと知りたい」「やってみよう」と思わなければ、一時的に理解しただけで本当に身に付いたとはいえない。そして、我々は生徒がそう思うような働きかけを必ず行わなければならない。これまで生徒の「内面」や「こころ」に関する研究に取り組んできて、我々はこのことの重要性を切実に感じている。つまり、指導形態「進路」では、技術的、知識理解的な内容を指導する際には、項目「将来の生活」についても項目「将来の仕事」についても、その根底に「気持ちのもち方」あるいは「心構えの在り方」等の生徒の内面に十分働きかけて授業を実践することが大切であるとする。生徒達の内面の部分を中学部段階において高めておくことが、高等部進学後、あるいは将来社会人として生活していく場合の基盤となると考える。

また、指導形態「進路」の学習を行う場合、生徒自身が何気なく過ごしているあたり前の生活に目を向けることから出発することが重要であるとする。そうすることで、社会と自分自身とのつながりを確認し、自分の生活に多くに人々が関わっていること、今まで何も思わずに過ごしてきたことが、多くの働く人々のおかげであること、それらの人々によって自分が生活できていることを知ることにより、他者への感謝の気持ちが育つと考える。一方で、自分の生活は誰かのおかげで成り立っているという受け身的な理解だけではなく、自分にも必ず大切な役割というものがあり、それを果たすことにより自分自身も感謝される存在なのであるという、積極的な理解と意欲を高め行動につなげていきたい。

以上のような考えから、中学部では「支えあっている生活に気づき、これからの自分に期待する授業づくり」をテーマとして、

- ①「進路学習のステップ」の作成を通して、項目「将来の生活」と項目「将来の仕事」における「こころ」の目標を明確にする。
- ②中学部3年間における指導形態「進路」の学習内容を整理し、系統性のある授業を展開する。
この2点を研究の目的とし、今回の研究に取り組むこととした。

2 研究の方法



3 研究の経過

本研究は、指導形態「進路」において、「支え合っている生活に気づき、これからの自分に期待する授業づくり」を研究として行った。第二次性徴期であり、身体的な変化や人間関係などに迷い、悩む中学部の生徒にとって周りの環境に目を向け「支えあっている」ことに気づくこと、自分自身の存在意義を感じ「自分に期待する」ことは、とても大切であると考えられる。このような生徒の気持ちや構えを高めるために、指導形態「進路」では、生徒の内面「こころ」に着目して授業実践したいと考えた。そこで、「進路学習のステップ」の作成を通して指導形態「進路」における「こころ」の目標を明確にし、これまで不十分であった指導形態「進路」の項目「将来の生活」の整理、さらに項目「将来の仕事」を創出し系統的に授業実践することを目指して研究を進めた。

(1) これまでの進路学習に関連した授業の把握

中学部では、これまでの進路学習に関連した学習内容にどのようなものがあったのか確認するための把握を行った(表1)。これによると、課題として以下の点があがった。

- ほとんどの内容が3年生で実施されている。
- 指導形態「進路」以外にも総合的な学習、学級活動など様々な学習形態で実施されている。
- 担当する教師によって目標や内容や設定されている。

これらから考えると、進路学習に関連した授業においては系統性が欠けているということが分かった。

そこで、これまでの進路学習に関連した学習内容をもとに、「将来の生活」と「将来の仕事」に分けてみることにした(表2)。「将来の生活」には、「家庭や学校の生活に関連した内容」や「生い立ちや将来に関連した内容」、「将来の仕事」には「両親など身近な人の仕事に関連した内容」や「地域の仕事に関連した内容」「福祉就労に関連した内容」に分けることができた。しかし、これまででは何かしらの知識や技能を育てようと考えた学習内容となっており、生徒の内面に着目した授業実践としては、さらに学習内容を深める必要があると考えた。

(2) 指導形態「進路」項目「将来の生活」における指導計画と「こころ」の目標の設定

これまでの「将来の生活」は、単元名「将来の仕事や生活を知ろう」として、「高等部の授業体験」「現場実習報告会への参加」という学習内容となっていた(参考資料① p 92参照)。単元名も「将来の生活」と「将来の仕事」の区別がなく、内容としても中学部として「現場実習報告会」の位置づけが「将来の生活」の内容なのか、「将来の仕事」の内容なのか明らかにされていなかったという課題もあった。また、「こころ」区分の項目を「自立心」を中心に考えていたが、「自立心」をねらった授業となっていたか検証ができていなかった。

そこで、「将来の生活」を生徒の内面に着目した授業とし系統性をもって展開していくために、「将来の生活」において大切にしたい生徒の内面を整理し、「こころ」の目標を見直す作業を行った。生徒の内面の整理は、「進路学習のステップ」の作成を通して明確にしていっていった。「進路学習のステップ」は、「大切にしたい項目」と「ねらい」から構成されている。教師の思い描く「将来の生活」で大切に

表1 これまでの進路学習に関連した学習内容

学習内容	指導形態
・現職実習報告会への参加	進路
・高等部への就職体験	進路
・父親(母親)に対するまごころ	孝敬元由
・身近な仕事調べ	孝敬元由、総合的な学習の時間
・働く人見学	孝敬元由、総合的な学習の時間
・教科書「わたんけん」「はたらくひとと見つめた」の活用	孝敬元由、総合的な学習の時間
・お金の流れや生活する環境について	孝敬元由
・大人と子どもの違い	からだの学習
・自分史(過去～未来)で今の自分を振り返る	孝敬元由
・今の自分に気づく(中学生ということ)	孝敬元由
・学校生活について知る	孝敬元由
・中学部2年、3年や高等部の先輩	孝敬元由
・近い将来の生活に対する気持ち	孝敬元由

表2 「将来の生活」と「将来の仕事」に分隔

将来の生活	☐ 中学部2、3年や高等部の先輩 ☐ 学校生活について知る ☐ 進路先を考える(高等部体験) ☐ 自分史(過去～未来)で今の自分を振り返る ☐ お金の流れや生活する環境について ☐ 大人と子どもの違い ☐ 近い将来に対する気持ち
将来の仕事	☐ 身近な仕事(父親の仕事など) ☐ 父親(母親)に対する感謝 ☐ 働く人見学

したい生徒の内面を、「こころチェックリスト」の「項目」から選択することで「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」とし、さらに「こころチェックリスト」の「下位項目」から「将来の生活」の学習内容にあった内容を選択し学習に沿った文言とすることで「進路学習のステップ」の「ねらい」とした。(図3)



図3 「進路学習のステップ」作成の流れ

「将来の生活」では、生徒に「夢（憧れ・期待感）」をもたせたいという考えのもとに、「進路学習のステップ」を作成していった。その結果、最初の「将来の生活」の「進路学習のステップ」案として作成されたものが（表3）である。

表3 「将来の生活」の「進路学習のステップ」案

大切にしたい項目	ねらい
夢	☐ 「高校生になりたい」「大人になりたい」などと言う ☐ 先輩や身近な人に憧れる ☐ 自分で買いたい物があつたり、恋人や家庭を持ちたいと思ったりする ☐ やってみたい学習（作業）がある ☐ 数年後（卒業後、20歳）の自分の姿を言う
自立心	☐ 自分のしなければならないことに取り組む ☐ 自分なりに目標をもって取り組む ☐ 活動に対して考え、工夫して取り組む
協調性	☐ 家の手伝いを考える ☐ 友だちや家族、仲間の良さに気づく
社会規範	☐ 未来の自分を考える（態度や話し方） ☐ 生活上のルールや規則を守る ☐ 自分の言動の善し悪しが分かり、よりよい言動をしようとする
自己理解	☐ 成長した自分に気づく

「将来の生活」の「進路学習のステップ」案の「ねらい」をすべて学習内容として取り扱うことはできないため、さらに整理をすすめて、中学部における「将来の生活」の学習内容を検討することとなった。

中学部で生徒にどのような「夢（憧れ・期待感）」をもたせるか、これまでの学習内容や「進路学習のステップ」を作成する中で共通理解した考えをもとに整理していくと、中学部の「将来の生活」で取り扱う生活場面は「学校」とし、憧れの対象として「先輩」を思い描き、期待感として「進級・進学」に対する期待がもてるような内容にしたいと考えた。そこで、整理されていたのが「将来の生活」年間指導計画（表4）である。

表4 「将来の生活」年間指導計画

学年	実施時期	単元名	題材名
1年生	1学期	1年生になった自分を知ろう	1年生になった自分を知ろう
	3学期	進級について考えよう	中学部で経験したり、できるようになったことを考えよう
			中学2年生の自分に手紙を書こう
2年生	1学期	2年生になった自分を知ろう	2年生になった自分を知ろう
	3学期	進級について考えよう	3年生の先輩を見てみよう
			3年生の係活動を知ろう
3年生	1学期	3年生になった自分を知ろう	3年生になった自分を知ろう
	2・3学期	進学について考えよう	中学部と高等部との違いについて考えよう
			高等部の学習について調べよう
			高等部での授業を体験しよう

「将来の生活」では、進級や進学に関連した内容を中心に取り扱うこととした。1学期は、これまでの生い立ちや学校生活などを振り返ったり、これからの行事などを通して新しい学年になったことを知ったりするような学習内容を設定した。また、3学期は進級、進学に向けて、次年度の学年の特徴的な学習やその学年特有の係などの役割を知る学習内容を設定した。また、「将来の生活」の学習内容が定まると、「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」についても、「自立心」「社会規範」の内容は「将来の生活」よりも学級活動などで取り扱う方が適していると考えた。このようにして考えた結果、「将来の生活」の「進路学習のステップ」（表5）が作成された。

表5 「将来の生活」の「進路学習のステップ」

大切にしたい項目	ねらい
夢	○先輩や身近な人に憧れる ○高校生になりたい、大人になりたいなどと言う ○やってみたいこと（授業、作業）がある
自己理解	○頑張ったことが分かり、喜ぶ ○成長した自分に気づく ○得意なこと、苦手なことが分かる
知的好奇心	○先輩や身近な大人に関心をもつ ○やってみたいと思う
協調性	○友達や家族のよさに気づく ○家の手伝いをする

さらに、「進路学習のステップ」をもとに、「将来の生活」の「こころ」の目標を考えると以下のようになった。

項目「将来の生活」の「こころ」の目標 ○成長した自分に気づき、先輩や身近な人に憧れの気持ちをもつことで、これからの生活への期待を膨らませる。
--

この「年間指導計画」と「進路学習のステップ」をもとに各学年において「将来の生活」についての授業を実践し、系統性のある授業を構築するための検証を行うこととした。

（3）「将来の生活」の授業の実践

これまで題材レベルでこころの目標を設定し授業を行ってきた。今回の研究では、「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」から、各題材で中心となる項目を二つ選び、その項目をもとにこころの目標を設定し、授業を計画していくこととした。

①単元名「進級について考えよう」題材名「中学2年生の自分に手紙を書こう」（事例1）

ア)「進路学習のステップ」を通して考えた単元とは

a 「進路学習のステップ」のねらいと題材の意図について

〈単元計画（全4時間）〉

- ・中学部で経験し、できるようになったことを考えよう……………2時間
- ・中学2年生の自分に手紙を書こう……………2時間（本時1／2）

単元「進級について考えよう」（計4時間）は、上記の二つの題材からなる。3学期に行い、「次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ」ことがねらいである。題材「中学部で経験したり、できるようになったことを考えよう」では、知的好奇心をもって自己理解を高めるために、運動会、合宿、買い物学習、文化祭での劇、市内巡りなどをポートフォリオなどで振り返り、書き出して頑張ったことを理解させるようにした。題材「中学2年生の

自分に手紙を書こう」では、「先輩や身近な人に憧れる」気持ちをもち、2年生になることへの夢を育むために、2年生の自分宛に手紙を書いた。更に保護者が書いた2年生への望みや願いの文章を読むことで、期待され支えられている自分に気づき、2年生になることへの夢をもつようにした。

b 「進路学習のステップ」と本単元の関連表

		単元	題材	大切にしたい項目			
				夢	知的好奇心	自己理解	協調性
1 年 生	1 学 期	1年生になった 自分を知ろう (1時間)	1年生になった自分を知ろう			◎	○
	3 学 期	進級について考 えよう (4時間)	中学部で経験したり、できるようになったことを考えよう		◎	○	
			中学2年生の自分に手紙を書こう	◎		○	

イ)「夢」と「自己理解」に視点をおいた学習活動とは

a 授業構成の工夫について

本時の授業は、主に①中学2年生が学習している教室を覗く、②2年生の自分に手紙を書く、③保護者からの1年生時の様子と2年生に向けての願い等を記した文を読む、で構成される。まず2年生に興味関心を持たせるために、2年生の授業中の教室をテラスから覗きみるようにした。次に自らが2年生になった時に頑張りたいことや望みなどを明らかにするために、2年生の自分に手紙を書くようにした。更に周りからも期待され支えられていることに気づかせるために、保護者からの願いを読むことにした。以上のように三つの構成場面を通し「自己理解」「夢」が確かなものになるようにした。

b 働きかけの工夫について

本時の授業の見通しが持てるようにするために、まず授業の当初に授業の流れをカードで提示した。「中学2年の教室を見る」では、教室外への移動を行い、生徒自らが目的的な行動を促すために、指導者は文字表記、丁寧な言葉かけ、興味をもつての行動を生徒の一体となって行うように努めた。「2年生の自分に手紙を書く」では、基本的な手紙の書き方を伝えた後、個別指導に徹するようにした。一人一人の生徒に応じた選択肢を提供し言葉かけにも配慮した。全般的に、生徒自らが考えながら、活動が出来るように、生徒が十分に考え、書くための時間を保障するように努めた。

c 教材・教具の工夫について

教材・教具の工夫として、手紙文が挙げられる。全く支援なしで手紙文を書くことは、日常の様子から判断して、まだ難しい生徒である。そのような生徒にとっての2年生像は、結果として何かができる2年生像ではなく、何かをする状態としての2年生像が表現しやすい。手紙文の内容もそのように書くようにした。そのことでどの生徒も支援されつつ割合無理なく2年生像を描くことができた。手紙には「楽しかったこと」「できるようになったこと」「がんばること」を書くように()書きでそれらを記したものを準備した。

ウ)「夢」と「自己理解」に視点をおいた授業の実践

a 本時の目標

[内容に関する目標]

○中学2年生の自分に手紙を書くことに気づき、分かりやすく手紙を書く

[こころに関する目標]

○ 中学2年生の教室を覗いたり、自分に手紙を書いたりすることで、成長した今の自分を再確認し、中学2年生になったら、何をしたいかという気持ちや、2年生への期待感を高める

b 生徒の実態

- 中学一年生、男子1名、女子4名で構成されている。MA2歳9ヶ月～MA6歳8ヶ月
- 自閉症、ダウン症など様々な障害種の生徒が在籍している。概して、あまり自己主張することの少ない生徒たちである。2年生への関心をもちつつある生徒たちであるが、自ら2年生になったら、何をしたいと自ら語ることが少ない生徒たちである。

生徒名	実態
A	もうすぐ中学2年生という意識が育ちつつある。仲間意識が高まり、友だちに優しい。少々体調が悪くても休むことなく登校し、日々の学習や係等を熱心に行い、朝のランニングや宿題等も意欲的に取り組む。人に頼ることなく、自分のことは自分でしたいという意識が高い。
B	動物図鑑を見たり、それらを描いたりして過ごすことを好む。大分自ら視線を合わせて話すようになった。周りの人との関わりをもつことが苦手であるが、友だち意識を随分もつようになり、Dとふざけ合うようにして遊ぶことがある。委員長としての役割意識が育ちつつあるなど、日常でその場に応じた好ましい行動が培われつつある。
C	小さい声であるが随分言葉がはっきりしてきて、友だちとよく会話をするようになった。話しをすることに自信をもつようになり、友だちに対し、時として命令口調の場面も見られる。昼休みなど、野球、バトミントンなど意欲的に行う。
D	「ありがとう」など、簡単な会話をその場面に応じてできるようになった。クラスの友だちの名前をしっかりと覚えて言うことができる。着替えもほぼ一人でできるようになった。帰りの会の司会など、順序や言葉かけを随分理解し、言うようになるなど、その場に応じた発言をよくするようになった。悪戯をほとんどしなくなった。
E	文字の読み書き等ができるようになり、行動など自信をもちつつある。友だちとの関わりにぎこちないところがあるが、丁寧語を使つての言葉遣い等、大人の人との会話がスムーズにできる。切り紙等を随分集中してするようになった。小学6年生が体験入学したこと等で中学2年生になるという意識が芽生えつつある。

c 学習過程

※以下、網掛けをした部分は、「夢」及び「自己理解」に関する部分である。

学習活動	指導上の意図・留意点	準備物等
1. 本時の学習内容を知る ○ 本時の学習の概要を知る ・「中学2年生の自分に手紙を書く」ことを知る ○ 先に学習したことを確認する。 ・中学1年生で楽しかったこと ・中学1年生でできるようになったこと ・中学2年生でやりたいことなりたいこと	○ 本時のテーマや学習の概要を、黒板に示すことで、主な学習内容に気付かせたり、本時の学習の見通しを持たせたりするようにする。 ○ 先に学習した「中学1年生で楽しかったこと」、「できるようになったこと」、「2年生でやりたいこと・できるようになりたいこと」を、ポートフォリオ（写真・ワークシート）で確認させるようにする。本時でそれらを使って、2年生の自分に向けて手紙を書くということを知らせる。	板書 カード（授業内容の手順） ポートフォリオ（写真・ワークシート、できる自分表、他）

2. 中学2年生の自分に手紙を書く ○ 中学2年生の教室を覗く ○ 手紙の構成・書き方を知る ○ 手紙を書く ○ 封筒に宛名等を書く ○ 発表する 3. 本時で学習したこと振り返り、次時の内容を知る ○ 本時の学習内容を振り返る ○ お母さんの手紙を聞く ○ 次時の内容を知る	○ 中学2年生への関心を持たせ、中学2年生の自分に手紙を書くという意識を高めるために、中学2年生の教室をテラスから覗かせ、説明するようにする。 ○ 基本的な手紙の書き方を教えた後に、(手紙の書き方中心の学習にならないようにする)手紙を書きやすいように、一部作成した手紙文(ワークシート)を渡し書かせるようにする。 ○ 手紙の構成・書き方を黒板に示し、要点を伝え、理解させるようにする。・はじめの挨拶 ・今の様子 ・中学2年生の願い ・おわりの挨拶 ○ 手紙文のワークシートを渡す。中学1年生で楽しかったこと、中学1年生でできるようになったこと、中学2年生でやりたいこと、なりたいことを、ポートフォリオやそれらを書き出したカードを見て、書くように働きかける。Dは手を添えて書かせるようにする。ただし、本人が全く書きそうでない時には無理強いしない。 ○ 封筒を渡し、宛名等を書かせる。生徒の状況に応じて、各自の宛名等のカードを渡し、書かせるようにする。 ○ (希望をとり)生徒を黒板の前に立たせ、書いた手紙を発表させるようにする(A等)。 ○ 振り返りとして、中学1年生で何をし、何ができるようになったか、中学2年生で何をしたいか、できるようになりたいか、について、中学2年生になった自分に向けての手紙を書いたこと、中学2年生のこの時期にこの手紙を開けてみたらよいということを、生徒が書いた手紙を見せつつ、説明するようにする。ポートフォリオのファイルに入れるように働きかける。 ○ それぞれの生徒の保護者から手紙を貰っていることを伝え、一部読み聞かせる。 ○ 次時には、支えられ期待されている自分、新しい中学1年生がきて「先輩」になること、2年生での活動と中学2年生以後の活動、期待などについて学習することを伝える。	手紙文(ワークシート) カード(各自の宛名等) ポートフォリオ(ワークシート) 封筒 保護者からの手紙
--	---	---

d 評価

以下の項目について観察法により評価する

[内容に関する評価]

- 先の学習で書いた中学1年生になってから自分のできるようになったことをしっかりと手紙に書くことができたか。
- 先の学習で書いた中学2年生になったときに、やりたいこと、頑張りたいことをしっかりと手紙に書くことができたか。

[こころに関する評価]

- 中学2年生になりたいという表情で中学2年生の教室を眺めたか。
- 手紙を書くことを意欲的に行ったか。
- 自ら手紙を発表したり、友だちの発表を聞いたりすることに興味をもって聞いていたか。

e 備考

図省略(主に中1教室、通常の机配置(スクール形式))

エ) 考察

○「夢」について

本授業は2月に行われた。この時期には周りの教師が機会ある毎に「～ができるようになったのだね」「もうすぐ2年生だね。2年生になったら～がんばろうね」などと声をかけるなど、自らの成長を振り返り、次年度へ向けての構えを促す働きかけが目立つ時期である。そのような意味で、本授業は将来の生活の「夢」を考える適切な時期であったと思われる。「夢」に関する目標として、「2年生になったときの気持ちや期待感」を取り上げ、それらを「2年教室を眺める様子」「手紙を書くことへの意欲」「手紙文を発表したり聞いたりする様子」で評価するようにしたが、生き生きとした活動が見られ適切な目標であったと思われる。2年生の自分を想起し、自分に手紙を書くという学習活動はいくつかの工夫を必要としたが、「夢」を具体的な活動としている点で適切であったと思われる。授業の展開では、幾分手紙の書き方の学習に成りがちであったが、手紙文を工夫したことから、授業全体を通しては「夢」を高める学習活動になった。

本授業で生徒が記した2年生の自分に向けての手紙の一部を以下に記す。

A:「宿題をしたいです。日記をいっぱい書きたいです。」 B:「数学の勉強をしたり、自分で考え、気持ちをいえるようになりたい。」等

どの生徒も2年生像として、1年生にほぼ毎日取り組んできた認知等の宿題や日記、それに買い物学習、運動会等を頑張るということを書いていた。2年生への「夢」を、「がんばること」として書くようにしたこと、どの生徒もスムーズに2年生像を描くことができたと考えられる。

○「自己理解」について

「自己理解」に関しての目標として「成長した今の自分を再確認」「2年生になったら・・・したいという気持ち・・・期待感」を挙げた。前回の授業を想起する時間を設けたり、自らへの手紙文を書いたりする学習活動等から「自己理解」が高まったと思われる。

「自己理解」は、自らの将来像を描く上で、欠かせられないことである。先の授業において、それぞれの生徒と一緒に保護者の協力やポートフォリオを活用し、一年間を振り返り、自らが成長した事柄を「できるじぶん表」としてまとめた。一人の生徒が一年間を振り返る中で、書き出した一部が下記の内容である。

A:①日記を毎日書くようになった。②紙や折り紙を丁寧に切れるようになった。③洗濯たたみや食器の片付けなどを自分からした。④近くの店で、一人で買い物ができるようになった。⑤電車で一人で乗れる(家に戻れる)ようになった。⑥必要な物やお金を、しっかり覚えて学校に持ってくるようになった。⑦ちょっと変なことをする友だちがいた時、おかしいと気づくようになった。⑧困っている人がいると手助けしようとするようになった。⑨40分間、切り紙等を黙々とするようになった。⑩登校から朝の会までと、着替えから帰りの会まで、一人でするようになった。⑪時間を意識して、準備し、授業に遅れず行動できるようになった。⑫先生や大人の人に丁寧な言葉を使おうとするようになった。⑬字をよく読めるようになった。⑭よく考えて話しができるようになった。⑮宿題を毎日し、日記を書くようになった。⑯自分からなんでもよくするようになった。⑰身体の調子が悪い時など、細かく自ら伝えられるようになった。⑱自ら風邪をひかないようにこまめに手を洗うようになった。⑲国語や数学のワークシートを、40分間、取り組めるようになった。⑳質問をよくするようになった。

まずは、内容の豊かさに驚かされる。小学生から中学生になり、学習する内容が大きく変わること、はじめて経験したり、学習したりすることが多く、変わった自分、成長した自分に気づくようである。今回の授業の題材は「夢」の基盤として「自己理解」は欠かせられないものであり、前回の題材を受けて「自己理解」を高める授業となった。

②中学部2年 単元名「進級について考えよう」 題材名「3年生の係活動を知ろう」（事例2）

ア)「進路学習のステップ」を通して考えた単元とは

a 「進路学習のステップ」のねらいと題材の意図について

<単元計画（全4時間）>

- ・ 3年生の先輩を見てみよう・・・・・・・・・・2時間
- ・ 3年生の係活動を知ろう・・・・・・・・・・2時間（本時2／2）

単元「進級について考えよう」は、二つの題材から構成した。題材「3年生の先輩を見てみよう」では、日頃から憧れの存在でもある3年生について「すごい」「カッコいい」と感じた部分を発表しあうことで、改めて先輩について考えることにした。特に挨拶、礼儀等のマナー面やリーダーとしての行動面など自由に意見を引き出しながら、「自分も早く3年生になりたい」といった知的好奇心につなげるようにした。題材「3年生の係活動を知ろう」では、特に3年生の係活動に絞って考えるようにした。3年生の係活動について、実際に先輩が取り組む様子を想起したり、ロールプレイングに取り組んだりすることで、ここでも知的好奇心の高まりにつなげるようにした。また、「後輩のために係をがんばろう」「皆に喜んでほしい」といった協調性にもつながるような指導を行なってきた。授業後は学活等の授業において、3年生の先輩から引継ぎを受け、さらに期待感を高めるようにした。

b 「進路学習のステップ」と本単元の関連表

		単元	題材	大切にしたい項目			
				夢	知的好奇心	自己理解	協調性
2 年 生	1 学 期	2年生になった自分を知ろう (1時間)	2年生になった自分を知ろう			◎	○
	3 学 期	進級について考えよう (4時間)	3年生の先輩を見てみよう	◎	○		
			3年生の係活動を知ろう		◎		○

イ)「知的好奇心」と「協調性」に視点をおいた学習活動とは

a 授業構成の工夫について

3年生の先輩は、下級生にとって憧れの対象であり、その先輩たちが取り組む係活動もまた憧れの対象である。ここでは、3年生の係活動について、やってみたい係や挑戦してみたい係について考えてみることで、「早く3年生になりたい」といった知的好奇心を高めるような工夫を行なった。また、係活動に取り組むことで、学部の役に立ったり、後輩が喜んでくれたりすることを伝えることで、協調性の高まりにもつながるようにした。

b 働きかけの工夫について

係活動を考える際に、やってみたい係活動を尋ねることからはじめ、できそうな生徒については学部のリーダー的な役割（農耕長、縦割りグループリーダー等）についても提案をしながら挑戦を促すようにした。このような働きかけによって生徒のやってみようとする意欲はさらに高まり、「上手になりたい」「先輩はどうしていたのかな」といった知的好奇心につなげるようにした。

また、係活動に取り組む中で、「どうしたら後輩に喜んでもらえるか」「学部のために役に立てるか」を考えさせることで、「自分だったらこうしよう」といった友達のことを考えながら行動しようとする協調性の高まりにもつながるようにした。

c 教材・教具の工夫について

3年生に進級することを視覚的に分かりやすくするために、学年を段階で示したステージを用いることにした。このことによって生徒は、今の自分の位置（2年生）や進級後の姿（3年生）に見通しがもてるようになると思った。また、ステージに乗せる自分たちのコマ（人の形をし生徒の顔写真が

貼ってある人形)や先輩が係活動に取り組んでいる姿のコマを用いることで、興味をもってコマを操作しながら知的好奇心につなげるようにした。係活動のロールプレイングには、係活動が書かれたカードをくじ引き形式で選び取り組むようにし、ゲームの要素を取り入れることで期待感を高めることができるようにした。

ウ)「知的好奇心」と「協調性」に視点をおいた授業の実践

a 本時の目標

〔内容に関する目標〕

○段階的に示された学年のステージ模型や3年生のモデル(人物コマ)を見て、進級や3年生の係活動について知る

〔こころに関する目標〕

○3年生の係活動について、学年のステージ模型や3年生のモデル(人物コマ)を見て考えることで、先輩として後輩のために頑張ろうとする気持ちをもつ

b 生徒の実態

○中学部2年生、男子3名、女子2名で構成されている。MA0歳4ヶ月～6歳1ヶ月

○自閉症やダウン症など様々な障害種の生徒が在籍している。また中度から重度の生徒が在籍しており、実態としても幅広い。進級については、ほとんどの生徒が日頃の3年生の先輩の様子から興味をもっており、リーダーの真似をしたり、修学旅行等で3年生がいないときに率先して代役を務めたりするなど、意欲が感じられる。言語だけの理解が難しい生徒についても1年生から「先輩」と呼ばれることに喜びを感じたり、自分のことを「お姉さん」と言ったりするなど一定の理解や興味が見られる。

生徒氏名	実 態
A	○3年生に進級することや優しい先輩になることに憧れをもっている。ランニング後の汗拭きなど3年生の係活動を見て、自分でも真似をすることがある。
B	○「せんばい」や「お姉さん」といった言葉に笑顔で応じるなど、先輩としての喜びや期待感をもつことができるようになっている。
C	○進級することへの意識や期待感は薄い、合宿等でリーダーとして活躍するなど先輩としての自覚も高まってきている。赤白黄のグループリーダーに興味がある。
D	○3年生に進級することや優しい先輩になることに憧れをもっている。赤白黄のグループリーダーには、特に興味を示している。
E	○3年生に進級することや係活動についての基本的な理解がある。マラソンをはじめスポーツが得意な特定の先輩に憧れをもっている。

c 学習過程

*以下、網掛けをした部分は、「知的好奇心」及び「協調性」に関する部分である。

学習活動 (授業構成)	指導上の意図・留意点 (働きかけ)	備考 (教材・教具)
1. 本時の学習内容を知る ○現在の自分の位置(年齢や学年)について考える	○前時を思い出しながら、かっこいい先輩(挨拶、マナー等)について再度確認をし、学習への期待感を高める。 ○今、自分は何歳なのか、中学何年生なのか等の質問をすることで、身近な過去を振り返ったり、現在の位置を確認したりできるようにする。	・プリント (前時)

2. 3年生の係活動について知る	○段階的に示された学年のステージ模型を用いることで、現在の位置を視覚的に確認できるようにする。 ○それぞれの段階に自分や友達のコマを置くことで学年や先輩後輩の関係を把握できるようにする。	・学年の ステージ模型  ・人物コマ (顔写真、胴体)
○自分の成長や進級について考える	○ステージ模型から3年生のコマを取ってしまうことで、「どうしよう」といった揺さぶりや「自分たちが頑張ろう」といった期待感につなげる。 ○人物コマは顔写真と胴体で構成し、胴体は係活動をしている様子を再現することで、生徒Bや生徒Cにも視覚的に分かりやすいようにする。 ○3年生のコマ(顔写真のみ)を高等部に移動させることで中3のステージにスペースを作り、3年生がいなくなった場面を考えさせることで、「自分たちが、後輩のために係活動を頑張ろう」などの気持ちにつなげる。 ○3年生がいなくなったスペース(胴体)に、自分たちのコマ(顔写真)を移動させることで、新たに取り組む係活動について視覚的にイメージをしやすいようにする。 ○3年生が係活動に取り組む様子を想像させることで、部や後輩の役にも立てることを伝えるようにする。 ○自分がやってみたい係活動を尋ね、憧れの先輩をイメージさせながら考えを促すことで、さらに興味を高めたい。	
○係活動のロールプレイングをする	○係活動が書かれたカードをくじで引かせ、ロールプレイングに取り組ませることで期待感や緊張感を促す。 ○どの係活動のロールプレイングにも取り組めるように、各係をキーワードで示す。(例：赤白黄リーダー「赤組、そろいました」等) ○選んだ係活動を実際にロールプレイすることで、皆で合いながらやる気を高めたり、賞賛したりする。 ○友達にも感想を聞いてみることで、上手な部分や今の自分に足りない部分(声の大きさ、ハキハキ等)を皆で確認できるようにする。	・係活動カード ・キーワードの カード 
3. まとめをする ○次時(引き継ぎ)について知る	○今後、正式に係活動を決定することや3年生になったら実際に取り組むことを伝え、先輩として頑張ろうとする気持ちを高める。 ○次時では、3年生からの引き継ぎやそれに伴うアドバイスがあることを伝えることで期待感を高める。 ○後輩の手本になれるような3年生になるために、残された期間をしっかりと頑張ることを伝える。	

d 評価 以下の項目について観察法により評価する。

〔内容に関する評価〕

- 学年のステージ模型の3年生の段階に自分のコマを置いたり、移動させたりすることができたか。
- 自分がやってみたい係活動を選んだり、発表したりすることができたか。
- 自分のコマを当てはめたり、ロールプレイングに取り組んだりすることができたか。

〔こころに関する評価〕

○「早く〇〇の係活動をやってみたい」などの発言があったか。

エ) 考察

a 生徒の様子

題材「3年生の先輩を見てみよう」では、日頃からかかわることの多い3年生の先輩について、改めて格好いい部分やすごいと感じた部分について、自由に生徒の意見を引き出すようにしてきた。「声が大きい」「キビキビしている」「リーダーがかっこいい」などの意見が出てきたが、生徒によっては特定の先輩の名前を挙げるなど、私たちが気づかない部分でも、先輩を意識して行動し、次は自分たちの番であることを考えていることが分かった。また、幅広く自由に意見を引き出すようにしてきたが、やはり多く出た意見としてはマナー面や態度面等についてであった。「身なりがきちっとしている」「キビキビ行動している」「挨拶ができる」などの意見が出された。ここでは、ともすると対等に見がちな3年生について改めて憧れの気持ちをもったり、「次は自分たちの番だ」といった期待感につなげることができたと考える。

次に題材「3年生の係活動について知ろう」では、前題材で学習した内容をさらに絞り、特に3年生が活躍する場でもある係活動について考えるようにした。ほとんどの生徒が日頃から先輩の係活動に取り組む様子を見ており、その姿は憧れの対象でもある。今回は、数種類ある係活動の中から、くじ引きをして選んだ係のロールプレイングに取り組んだが、どの生徒も声かけや実際の動きなど正確に取り組むことができ、日頃からの興味の高さを感じさせた。また、「〇〇くんがやっている～の係活動がしたい」といったように、特定の先輩を名指しする生徒や「後輩のために頑張りたい」と張り切る生徒も見られ、目標とする先輩や手本を示すべき後輩の姿がいかにか大切に考えさせられた。実際に係活動について考え、ロールプレイングに取り組むことで、生徒の興味は一気に高まったと考える。授業後は3年生の先輩から心構え等について引継ぎも兼ねたアドバイスをもらうことで、さらに頑張ろうとする気持ちを高めることができたようである。アドバイスを受ける生徒の表情は生き生きとしており、その期待感が窺えた。

本単元を通して、3年生に対する憧れから、「次は、いよいよ自分たちが3年生になる番だ」という気持ちの変化を感じることができた。この経験を通して、5名の生徒に頼もしさを感じるようになってきたことが授業後の収穫である。

b 授業の変容

○「知的好奇心」について

生徒には進級を考える上で、現在自分たちが置かれている立場やこれまで育ってきた経緯についても確認を行なった。これまで家庭をはじめ学校においても様々な場面で周りの人に支えてもらったことを振り返ることで、成長を積み重ねてきたことを実感し、「次は自分たちが頑張ろう」「早く3年生になって係の仕事をしたい」といった気持ちを高めることができたと考える。ここでは、将来の進級した自分、現在の自分の位置、そしてこれまで自分が育ってきた過去を分かりやすく振り返ることができるように段階で示したステージ模型を用いることにした。ステージ模型として段階的な高さで示したことから、自分が経験を積み重ねて次の学年に進んでいることや先輩後輩の関係についても分かりやすかったと考える。

また、先輩が係活動に取り組んでいる様子を人物コマ（写真1）にして提示をすることで、イメージがしやすく、知的好奇心の高まりにもつながったのだと考える。3年生の係活動を取り上げたが、合宿や運動会のリーダーとしての役割りや汗ふき、トイレ掃除などが下級生の憧れの対象にもなっている。日頃の3年生の様子を思い浮かべながら、実際にロールプレイング等に取り組むことでさらにやってみたいという知的好奇心につながったと考える。



写真1

○「協調性」について

係活動について考える中で重要視したことは、中学部のために頑張ろう、後輩のためにやってみようといった部分であり、協調性の高まりをねらったことにもある。ここに重点をおいて授業構成を行なってきたことで、単にスキルの習得や向上にとどまらない、生徒の期待感を高めるような工夫ができたと考える。また、段階的なステージを用いることで、進級のみならず現在の自分が置かれている立場や育ってきた環境についても考えるように促した。これまでに取り組んできたことや頑張ったこと、楽しかったことなどを考えることで、支えてくれた家族をはじめ仲間に感謝をすることやこれからは自分たちが頑張ろうとする気持ちを高めるようにした。



写真 2

係活動について知る学習では、どの生徒もやってみたい係があったようだが、今回は敢えてくじ引きをしてランダムに選ばせることで、生徒の期待感をさらに高めるようにした。また、自分の希望とは異なる係に当たった場合もチャレンジするような後押しをすることで「自分にもできる」といった自信をもたせるようにしてきた。また、リーダーとしての役割りや係活動に取り組む際、特に大切なこととして心構え（キビキビする、後輩には優しくする等）についても取り上げながら、友達のために頑張ろうとする気持ちを高めるようにしてきた。

③中学部3年 単元名「進学について考えよう」題材名「高等部の学習について調べよう」（事例3）

ア) 「進路学習のステップ」を通して考えた単元とは

a 「進路学習のステップ」のねらいと題材の意図について

＜単元計画（全8時間）＞

- ・ 中学部と高等部との違いについて考えよう・・・2時間
- ・ 高等部の学習について調べよう・・・・・・2時間（本時2／2）
- ・ 高等部での授業を体験しよう・・・・・・4時間

単元「進学について考えよう」では、三つの題材を計画した。この単元では次項で示しているように、三つの題材すべてで「知的好奇心」と「夢」を大切にしたい項目としている。

まず、題材「中学部と高等部との違いについて考えよう」では、中学部と高等部との見た目の違いや、授業名の違いをみんなで調べた。見た目の違いについては普段からよく見ており、女子制服のリボンの色や通学靴、鞆など、自分たちで気づくことができた。しかし、普段見ることができない「授業名」については知らないことが多く、学校要覧を見ながら興味津々という様子で調べていた。

しんる
進路の学習
～中学部と高等部のちがいをさがそう～

せいふく
(制服など)

- ・ 女子のリボンが
- ・ カバンが
- ・ くつが
- ・ 鞆が

しやぶよう
(履物)

- ・ なまえが かわる！
- 国 語 →
- 数 学 →
- 音楽・美術 →

・ あたらしい 勉強！

せいふく
(行事など)

- ・ 運動会
- ・ 文化祭
- ・ マラソン・運動大会
- ・ 修学旅行
- ・ 映画鑑賞(えんが)
- ・ 校外実習(がくがいじつしゆ)
- ・ 王将士卓(おうしやうし)

だれにきく？ せんぱい

何のことをきく？

プリント「中学部と高等部のちがいをさがそう」

「高等部についてもっと知りたい」という気持ちは、「知的好奇心」そのものであり、「先輩や身近な大人に関心をもつ」というこの題材でのねらいを達成させるためには適した内容であったと考える。

次の題材「高等部の学習について調べよう」では、前題材で調べた高等部の行事や授業について、よく分からないことを実際に先輩たちに尋ねてみるという活動を行った。尋ねることについては「生徒がよく知らないこと」と、「生徒が楽しみにしていること」を考え、一人ずつ担当を割り当てるようにした。担当を決めることで、より意欲的に活動することができるのではないかと考えた。そこで尋ねたことの報告を本時ですするという流れになっている。



本時の授業後は、高等部での授業体験を行った。自分たちが調べた授業を実際に体験することで、近い将来の自分の姿をイメージすることができたようである。また、そこで実際に学習している高校生の姿を見ることで、「先輩や身近な人に憧れる」というこの題材のねらいが達成されたと考えられる。

前にも述べたように、この単位では「知的好奇心」と「夢」という二つを大切にしたい項目としている。単元全体を通して、「高等部での新しいことを知りたい」「高等部へ行きたい」という気持ちを高めていくことを考え、授業を組み立てた。

b 「進路学習のステップ」と本単元の関連表

		単元	題材	大切にしたい項目			
				夢	知的的好奇心	自己理解	協調性
3 年 生	1 学 期	3年生になった自分を知ろう (1時間)	3年生になった自分を知ろう			◎	○
	3 学 期	進学について考えよう (8時間)	中学部と高等部との違いについて考えよう	○	◎		
			高等部の学習について調べよう	◎	○		
			高等部での授業を体験しよう	◎	○		

イ)「夢」と「知的好奇心」に視点をおいた学習活動とは

a 授業構成の工夫について

生徒たちがもっている高等部の漠然としたイメージから、「もっと知りたい」「自分たちで調べてみよう」という気持ちをもって取り組むことができるような題材を考えた。また、自分たちで調べて今までより具体的に高等部のことを知った上で、「〇〇が楽しみ」「やっぱり高校生になりたい」という気持ちにつなげたいと考え、授業を構成した。

今回の授業では、発表する生徒には「自分が調べたことをみんなに知らせる」という気持ち、聞く生徒には「知らないことをもっと知りたい」という気持ちをもたせたいと考えた。高校生の先輩に尋ねる内容については、よい面ばかりではなくきつい部分や嫌だったことなども含んでいる。そこまで踏まえた上で何が楽しみか、何が心配かを考えることができるようにした。最後には、心配なこともあるがやっぱりみんなで高等部へ行きたい、という気持ちにつなげるように工夫した。

b 働きかけの工夫について

授業中は、生徒の素直な気持ちに共感するような態度や言葉かけを意識した。前にも述べたように、今回の授業では高等部での楽しみな活動だけではなく、少し心配な活動についても選ぶようにしている。友達の発表を聞き、生徒が不安に感じた活動については「そうだね、こんなことは心配だね」

と共感するようにした。そうすることで友達の気持ちを聞いた他の生徒も、自分とは異なる友達の気持ちを否定することなく、受け入れる雰囲気が出たのではないかと考える。また今回の授業では、一人ひとり高等部の先輩に尋ねてきたことを発表する場があった。発表中は、「へー、知らなかったね」などの相づちを打つことを意図的に行った。発表者には「みんなが知らないことを自分が伝えられた喜び」を、聞いている生徒には「新しいことを知ったという喜び」を感じてほしいと考えた。

c 教材・教具の工夫について

生徒が調べてきたことを発表するときは、聞いている生徒が分かりやすいよう、実際の授業や行事の写真とインタビューしている様子の写真、発表内容を簡単にまとめた文章を一つの色画用紙にまとめ、提示するようにした。これは発表後も黒板に貼っておくことで、後で見直すこともできるようにした。自分が楽しみな活動と心配な活動を選ぶ際は、まずは自分でしっかりと考えることができるよう、プリントを作成した。プリントの中にも一つの活動についてのよい面ときつい面の両方を表記しておくことで、そのどちらも踏まえた上で活動を選ぶことができるように工夫した。自分で選んだ活動を発表する際は、みんなで一斉に意思表示ができるための工夫として、札を準備した。楽しみな活動の番号を赤で、裏には心配な活動の番号を青で、自分で記入するようにした。これにより、友達の意見に惑わされることがなく、自分の意見をきちんと伝えることができた。

高等部の活動について「楽しみなこと」に「△」
「心配なこと」に「△」

① 体験・体験 （体験・体験）	上手にできるようになる たくさんできる ずっと遊んでしごと	→うれしい →うれしい →うれしい
② 校外学習 （校外学習）	きれいなところ ひろく自由に きれいな ずっと遊んでしごと	→うれしい →うれしい →うれしい
③ 青い山脈 （運動会）	上手にできるようになる いちばん、うまい ほだして 足がいたい	→うれしい →うれしい →うれしい
④ バレー （文化祭）	たくさん遊んだ 楽しかった 準備ができていい	→うれしい →うれしい →うれしい
⑤ 体験学習 （体験学習）	仕事のと ほかの はじめて行くときは緊張 きつい仕事がある	→うれしい →うれしい →うれしい
⑥ 修学旅行 （修学旅行）	旅行の電車や電車へ ディズニーランド 3日4日で ながい	→うれしい →うれしい →うれしい

自分の考えを整理するためのプリント



ウ)「夢」と「知的好奇心」に視点をのいた授業の実践

a 本時の目標

〔内容に関する目標〕

○自分が調べてきたことを発表したり友達の報告を聞いたりすることで、高等部の活動について知る

〔こころに関する目標〕

○高等部の活動について知りたいという気持ちから、高等部に行きたいという期待感を高める

b 生徒の実態

○中学部3年生（男子5名、女子1名）の学級である。

○MA 2歳9か月～8歳（自閉症2名、その他の知的障害4名）

○高等部へ進学することについては、運動会や文化祭などでの高等部の様子を見た経験から、それぞれに憧れや期待感をもっている。しかし、まだ漠然としたイメージであり、実際にどんなことがあるのかについては、知らないことが多い。高等部に憧れの先輩や仲のよい友達がいる生徒もいる。

○個人の实態

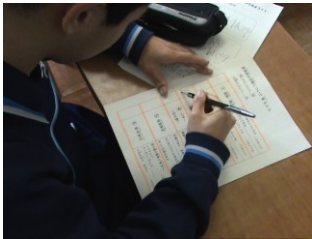
生徒名	実 態
A	高等部になるとカバンや靴、学習内容などが変わるということについて、大まかに理解している。高等部へと進学することを楽しみにしている。
B	特に運動会や文化祭などを見て、高等部がどのような活動をしているか知っている。高等部の仲がよい先輩と一緒に勉強できることを楽しみにしている。
C	「卒業」や「高等部」という言葉を聞いて、自分もそうなるのだということを理解している様子が見られる。友だちと一緒に高校生になることを楽しみにしている。
D	高等部の女子生徒に憧れの先輩がおり、一緒に勉強することを楽しみにしている。新しい環境には不安になりがちであるが、高等部への進学については期待感が高まっている。
E	環境が変わることに対して不安になりがちであるが、「進路」の学習をすることで少しずつ不安が減ってきている。具体的に知ること、高等部への興味が高まってきている。
F	高等部へ進学することに大きな喜びと期待感をもっている。運動会での「青い山脈」や文化祭での「バザー」、現場実習など、新しい学習に憧れている。

c 学習過程

網掛けをした部分は、「知的好奇心」及び「夢」に関する部分である。

学 習 活 動	指導上の意図・留意点	備 考
1. 本時の学習内容を知る ○前回決めた役割を確認する 2. 高等部の学習について知る ○先輩から聞いたことを報告する	○前時のプリントを見ることで、前回の学習を思い出せるようにする。 ○高等部の先輩たちに尋ねる役割があったことを確認し、本時で報告することを知らせ、緊張感をもって取り組めるようにする。 ○友だちからの報告を聞いた後、感想を尋ねることを予告することで、よく聞こうという意識を高めたい。 ○報告していることについてイメージがしやすいように、その活動とインタビューしたときの写真を準備しておく。 ○報告する内容をあらかじめ簡単にまとめたものを準備しておき、報告後に黒板に貼るようにすることで、後で見直ししやすいようにする。 ○前に出て一人ずつ報告するようにし、自信をもって報告できるよう、気持ちを高めたい。 ○したい生徒から挙手をして報告するようにし、生徒たちが自主的に活動したいという気持ちを大切にしたい。 ○報告内容には、楽しいことばかりではなく、きついことや不安なこと等も盛り込むことで、期待や不安などいろいろな気持ちをもつことができるようにする。 ○報告時は意図的に「なるほど」「知らなかった」などの声を上げることで、報告する生徒には調べてきたことへの喜びを、聞いている生徒には新しく知ることへの喜びを感じることが	・前時のプリント ・写真 ・黒板掲示用のカード ・インタビューの用紙



○自分の気持ちを考える 3. まとめをする	できるようにしたい。 ○報告された6つの活動について、「楽しみなこと」「心配なこと」について考えるようにする。 ○黒板に貼っているカードを見ながら、報告されたことをもう一度振り返り、みんなで確認する。 ○友だちの意見を真似するのではなく、自分がどう思うかを考えるよう伝える。考えを整理しやすいよう、プリントを準備し、選ぶ時間をとる。   ○「楽しみなこと」「心配なこと」に、それぞれどの活動を選んだかを発表する。それぞれの活動に番号をつけておき、選んだ活動の番号札を一斉に挙げることで、友だちの意見に左右されないようにしたい。 ○誰がどの活動をどのように感じているか、名前カードを黒板に貼り、みんなで共有できるようにする。  ○高等部の活動について、それぞれが尋ねてきたことを称賛し、詳しく分かったところで改めて高等部に行きたいという気持ちを確認する。 ○残りの中学部の生活をしっかりと頑張り、高等部に進めるよう気持ちを高め、授業を終了する。	・プリント ・番号札 ・名前カード
-------------------------------------	---	---

d 評価

以下の項目について観察法により評価する。

〔内容に関する評価〕

- ・高等部の活動について話を聞き、「楽しみなこと」や「心配なこと」を自分で選んだり、理由を考えたりすることができたか。

〔こころに関する評価〕

- ・友だちの報告を、うなずいたり疑問を抱いたりしながら、興味をもって聞くことができたか。
- ・「高等部での勉強が楽しみ」「早く高校生になりたい」などの発言があったか。

e 考察

中学部3年生のこの時期、高等部についての学習は以前から行っていたが、生徒たちが実際に高等部生徒の声を聞くことはなく、楽しいこと、事実のみを知るにとどまっていた。今回は、尋ねる内容に「きつかったこと」などを入れ込むことで、生徒にとっては楽しみにしている気持ちが揺らぐ場面もあったことが考えられる。また、教師側もただ「楽しみなね」と盛り上げるだけではなく、「こんなにきついこともあるんだね」と、意図的に揺さぶりをかけるような言葉かけを行っている。生徒たちの気持ちは、このような過程を経て、より具体的に「〇〇をしたいから高等部に行きたい」「△△は不安

だけど頑張りたい」という強い気持ちに変化していったのではないかと考える。

今回の授業内容を計画する際に「知的好奇心」と「夢」というキーワードを特に意識しながら考えていったことで、教師側も「高等部での授業、行事を伝える」ということを第一の目的にせず、生徒の気持ちをより考えながら授業内容を構成し、進めることができた。

○「夢」について

本校では、小学部、中学部、高等部が同じ校舎で生活をしているため、中学部の生徒は普段から高等部の生徒と接することができる環境である。また入学式を始め、歓迎遠足、運動会、文化祭、マラソン駅伝大会など、様々な行事で高等部の活躍する姿を見てきている。そのため、どの生徒も「中学生の次は高校生になる」「高校生になったら仕事の勉強をしたい」「高校生になったら『青い山脈』（運動会での高等部演技）をしたい」という気持ちが自然に生まれている。今回の授業では、今まで何となく感じていた「高校生になりたい」という気持ちを、よりはっきりとした「夢」につなげたいと考えた。生徒Fは、授業前までは「運動会の『青い山脈』が楽しみ」と言っていたが、この授業で先輩の「裸足なので足が痛くなる」という感想を聞き、「心配なこと」に気持ちが変化していた。しかし、だからといって高校生になりたくないかといったらそうではなく、それでもやはり高校生になりたいという気持ちは変わらないのである。それどころか、強くなっていっているということが生徒Fの表情や口調からは伝わってきた。このように、今まで知らなかった情報を知ったことで、再度自分の気持ちを見直す時間になったのではないかと考える。この授業でそれまでの「夢」を壊すという意味ではなく、不安なことはあるけど、それでもやはり高校生になりたい、という確かな気持ちをもつことができたと考ええる。

○「知的好奇心」について

この授業は、前題材からのつながりを大切にしてきた。中学部と高等部との違いを調べるところから高等部に対する「知的好奇心」が始まり、疑問をもたせることで「更に知りたい」という気持ちを高めていくようにした。今回は実際に聞くことや、インタビューをする先輩など、一人ずつ担当を決めた。この時点で生徒たちの気持ちは高まり、インタビューに行く日を楽しみにしている様子がうかがえた。今回の授業で、自分がインタビューして知り得た情報を友達に知らせるという活動を通し、それぞれが同様に主役になれる場面があった。「自分しか知らないこと」をみんなに伝えることができるという自信があったからこそ、友達が調べてきたこともしっかりと聞きたい、知りたい、という「知的好奇心」を更に膨らませることができたのではないかと考える。

（４）指導形態「進路」項目「将来の仕事」における指導計画と「こころ」の目標の設定

「将来の仕事」については、これまで教育課程の中で項目名だけは挙がっていたが、高等部の学習内容とどのようにつなげていくか思案されてきたが解決できないままだった。

今回の研究で指導形態「進路」を、生徒の内面「こころ」に着目した授業実践としようとする中で、「仕事」に関連した生徒の内面という新たな視点で学習内容を創出しようと試みた。「将来の生活」同様、「将来の仕事」において生徒に大切にしたい内面のもと、作成したのが「将来の生活」の「進路学習のステップ」（表６）である。

表６ 「将来の仕事」の「進路学習のステップ」

大切にしたい項目	ねらい
夢	○やってみたい仕事がある ○見てみたい仕事などがある
自己理解	○仕事などを知って、好き嫌いが言える
知的好奇心	○ いろいろな仕事の内容を調べて知る ○ 身近な人の仕事に関心をもつ
協調性	○友達や家族、仲間の良さを言う ○手伝ってくれた人に「ありがとう」と言う ○ 友達や家族の手伝いをしようとする

「将来の仕事」では、「将来の生活」と同様、「夢（憧れ・期待感）」をもたせることを大切にしつつも、「協調性（役割・所属感）」といった、身近な人や地域社会の仕事に対する関心や働くための土台となるような集団の中での役割を果たそうとする気持ちが大切になるのではないかと考えた。

さらに、「進路学習のステップ」をもとに「将来の仕事」の「こころ」の目標を考えると以下のようになった。

項目「将来の仕事」の「こころ」の目標

○いろいろな仕事について見たり聞いたりすることで働くことへの気持ちを膨らませるとともに、家族や働く人への感謝の気持ちをもつ。

また、年間指導計画では、自分とのつながりのある職業の社会見学を中心に、家庭や学校の中での自分の役割を考えたり、自分の生活とつながりのある仕事や働いている人について知ったりすることをねらった指導計画（表７）となった。

表７ 「将来の仕事」年間指導計画

学年	実施時期	単元名	題材名
全学年	1・2学期	生活と仕事のつながりを考えよう	私たちの生活と仕事のつながりを見てみよう
			仕事を見に行こう
			見たことを発表しよう
			家族や働く人に感謝しよう

この「将来の仕事」の「こころ」の目標をもとに、さらに学習内容をさらに深めることとなるが、中学部で「仕事」に関連した内容を創出するにあたり、「仕事」に関連した生徒の内面についての実態をさらに把握する必要性を感じ、「将来の仕事」に関連するアンケートを作成し実施することとした。

(5)「将来の仕事」に関するアンケートについて

a 調査内容について

中学部では、「将来の仕事」の授業実践は初めてであり、学習内容で取り扱う「仕事」に関連した生徒の実態把握については十分ではなかった。そこで、「仕事」に関連したアンケート調査(表8)を生徒、保護者に実施して、「将来の仕事」の学習内容に生かそうと考えた。質問事項は「進路学習のステップ」とも関連(表9)させることで、進路に関連した生徒の内面を捉えることができるのではないかと考えた。生徒へのアンケートは、実態に合わせ質問紙もしくは口頭による質問によって実施した。

表8 「将来の仕事」に関連したアンケート

対象	調査内容
本校 中学部 生徒	生-1 家族の中で働いている人は誰か。 ・(お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん)の中から選択して回答
	生-2 家族のなかで給料をもらっている人は誰か。 ・(お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん)の中から選択して回答
	生-3 お父さん、お母さんのようになりたいか。 ・(思う、思わない)から選択して回答 ・「思う」の場合、どうしてそう思うか記述して回答
	生-4 家庭でお手伝いをするか。 ・(はい、いいえ)から選択して回答 ・「はい」の場合、どのようなお手伝いをするか記述して回答
	生-5 してみたい仕事があるか。 ・(ある、ない)から選択して回答 ・「ある」の場合、どのような仕事をしたいか記述して回答
本校 中学部 保護者	保-1 子どもは、身近な大人のなかで働いている人がいるか。 ・(いる いない 分からない)から選択して回答 ・「いる」の場合、それが誰か、どうしてか記述して回答
	保-2 子どもは、「〇〇になりたい」など、願をすることがあるか。 ・(ある ない 分からない)から選択して回答 ・「ある」の場合、どのような願をしているか記述して回答
	保-3 子どもは、親が仕事をしていることを知っているか。 ・(知っている 知らない 分からない)から選択して回答
	保-4 子どもは、親がどんな仕事をしているか知っているか。 ・(知っている 知らない 分からない)から選択して回答 ・「知っている」の場合、どうして知っているか、思っているか記述して回答
	保-5 子どもは、両親が給料をもらっていることや、給料で生活していることを話したことがあるか。 ・(ある ない)から選択して回答
	保-6 子どもは、家事も仕事だと知っているか。 ・(知っている 知らない 分からない)から選択して回答
	保-7 子どもは、家庭で決まったお手伝いはあるか。 ・(ある ない)から選択して回答
	保-8 子どもは、決まった手伝い以外にも自分から手伝いをしようとすることがあるか。 ・(ある ない)から選択して回答
	保-9 子どもは、お手伝いのあとなど、感謝の気持ちを伝えたときどのように反応するか。 ・記述して回答

表9 アンケート項目と「進路学習のステップ」の関連

大項目	調査内容 番号
夢	生-3 生-5 保-1 保-2
自己理解	生-5 保-2
知的好奇心	生-1 生-2 保-3 保-4 保-5 保-6
協調性	生-4 保-7 保-8 保-9

b 集計と結果について（表10：生徒用アンケート集計 表11：保護者用アンケート集計）

表10 生徒用アンケート集計

生-1 家族の中で働いている人は誰か。 (回答数18 複数回答可) お父さん・・・13名(81%) お母さん・・・6名(31%) お姉さん・・・1名(6%) 無回答・・・2名(13%)	
生-2 家族のなかで 給料をもらっている人は誰か。 (回答数18 複数回答可) お父さん・・・9名(58%) お母さん・・・6名(31%) 無回答・・・2名(13%)	
生-3 お父さん、お母さんのようになりたいか。 (回答数18 複数回答 不可) なりたい・・・12名(75%) お父さん4名 お母さん8名 なりたくない・・・1名(6%) 無回答・・・3名(内1名は「恥ずかしい」と回答) (19%)	
生-4 家庭でお手伝いをするか。 (回答数18 複数回答 不可) する・・・11名(89%) 手伝い内容：掃除、洗濯、料理、配膳、皿洗い、布団ひき しない・・・2名(13%) 無回答・・・3名(19%)	
生-5 してみたい仕事があるか。(回答数18 複数回答可) ある・・・10名(83%) してみたい仕事：お父さんの仕事、洗濯、おでかけ、茶碗洗い、動物の仕事 ざるの仕事、お米研ぎ、お寿司屋、ケーキ屋、ガソリンスタンド ない・・・2名(13%) 無回答・・・4名(25%)	

表 1-1 保護者用アンケート集計

[illegible]

- 「夢」に関連した調査項目では、生徒のアンケートでは、「ないりたい」「したい」という生徒の憧れに対する考えを聞いた。両親のようになりたいと感じている生徒は多いが、理由として「好きだから」という回答が多く、「憧れる」という気持ちの形成にまだ未熟さが見られた。また、してみたい仕事に対しても、職業的な仕事の他にお手伝いをあげる生徒が多く、実生活で行っている「仕事」と職業的な「仕事」の整理ができていない生徒もいた。
- 「知的好奇心」に関連した調査項目では、両親の職業、職業に関連した知識について聞いた。親が働いていることは何となく分かっているが、「何をしているか」「何のために」などといった内容については分からない生徒が多かった。
- 「自己理解」に関連した調査項目では、してみたい職業についての考えを聞いた。してみたいと感じるほど、職業に関して接していないことや自分のこととして捉えられていない様子が見受けられた。
- 「協調性」に関連した調査項目では、家庭での手伝いについて聞いた。家庭の中で継続して手伝いをしている生徒が多く、その内容も多岐にわたることが分かった。

この「年間指導計画」と「進路学習のステップ」をもとに各学年において「将来の生活」についての授業を実践し、系統性のある授業を構築するための検証を行うこととした。

（６）「将来の仕事」の授業の実際

「将来の生活」と同様に「将来の仕事」においても、「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」から、各題材で中心となる項目を二つ選び、それをもとにこのころの目標を設定し、授業を計画していくこととした。

①中学部全学年 単元名「生活と仕事のつながりを考えよう」

題材名「私たちの生活と仕事のつながりを見てみよう」（事例４）

ア）「進路学習のステップ」を通して考えた単元とは

a 「進路学習のステップ」のねらいと題材の意図について

〈単元計画（全７時間）〉

・私たちの生活と仕事のつながりを考えよう	・・・	１ 時間（本時１／１）
・仕事を見に行こう	・・・	４ 時間
・見たことを発表しよう	・・・	１ 時間
・家族や働く人に感謝しよう	・・・	１ 時間

「進路学習のステップ」として表４および次項の欄で示しているように、本授業の「夢」に関するねらいは、「やってみたい仕事がある」「見てみたい仕事などがある」であり、生徒たちが発達過程で必要とされる仕事に対する情動や感情の生起にあるととらえた。また、「協調性」に関するねらいは、「友だちや家族、仲間のよさを言う」「手伝ってくれた人に“ありがとう”と言う」「友達や家族の手伝いをしようとする」であり、共に生活を営んでいる人への感謝の気持ちと同時に、みんなと一緒に生活していこうとする喜びの生成にあるととらえた。これらのねらいを、「学校」や「家庭」「地域」といった生活単位を基本枠とした身近な生活環境の中に見出し、働く姿への憧れを抱かせようとするものである。

以上のようなねらいから題材名「私たちの生活と仕事のつながりを見てみよう」に至った。知的障害のある中学生にとって、夢の設定や、夢に対する自己理解をどのような背景情報によって行わせたらよいか、さらにその夢を仕事とどのように関連づけていくかということが授業の焦点である。そこで、事前のアンケート結果から、馴染みのあるお手伝いを三つ選び、そのお手伝いに関連のある生活シーンや仕事を一組の情報として提示し、働くことのイメージや働いている人への感謝、そして仕事への憧れにつなげようと考えた。

b 「進路学習のステップ」と本単元の関連表

		単元	題材	大切にしたい項目			
				夢	知 的好奇心	自己理解	協調性
全 学 年	1 学 期 ・ 2 学 期	生活と仕事のつながり を考えよう (7時間)	私たちの生活と仕事のつながりを見てみよう	◎			○
			仕事を見にいこう	○	◎		
			見たことを発表しよう	○		◎	
			家族や働く人に感謝しよう	○			◎

イ）「夢」と「協調性」に視点をおいた学習活動とは

これまで述べた二つのねらい「夢」「協調性」により、本授業の「このころに関する目標」を次のように設定した。「自分たちの生活と仕事のつながりを知ることで、お手伝いをしたいという気持ちを膨らませる」である。

まず、「生活と仕事のつながりを知る」とは、働いている人への感謝の気持ちを想起することとらえた。また、「お手伝いをしたい気持ちを膨らませる」とは、意図的に設定した「生活」－「お手伝い」－「仕事」という関連付けにより、「お手伝い」、あるいは「お手伝いができること」が、生活と仕事の間に

位置し、自分たちにとってとても重要なことであることを理解し、自分の憧れの仕事に期待感をもつことととらえた。

a 授業構成の工夫について

〔「夢」について〕

「将来何になりたいですか？」という問いに生徒たちは、目を輝かせて夢を語ってくれる。一般的に夢というものは果てしないものである。これにくりを設けないと現実から空想の世界にまで広がってしまい、收拾がつかなくなる。このことは本校の中学部の生徒の夢世界にとっても同じであると考えてよいだろう。本授業で大切にしたい項目「夢」では、働く姿への憧れや期待感を想定している。子どもたちが働く姿に憧れを抱くには、まず、日ごろ当たり前のように目にしている生活シーンを教材とし授業構成することが適していると考えた。

〔「協調性」について〕

生徒たちが実際に働く時期は将来にあり、時間的にはまだ先のことである。しかし、働くという営みは、身近なところに存在していることに気づかせたい。そこで、「夢」という項目に加え、「協調性」という土台を据えることで夢をくくる操作を行った。このくくりの操作は、単に空想から現実を引き戻そうというのではなく、つかみ所のない漠然とした夢の構築から、目に見える具体的な夢の構築への転換を図ろうとしようと考えた。

b 働きかけの工夫について

働きかけの工夫で重視した点は、現在と将来という時間軸の扱いである。進路学習では、中学部から高等部につなげること、すなわち生徒たちが短期的な憧れから長期的な目標につなげることが大切である。よって、「生徒たちがお手伝いの遂行に対してどれだけ期待値を高められるか」に注目し、それを支援するためには、どのような働きかけが教師に必要なかを考えてみた。そこで、お手伝いが定着している生徒やそうでない生徒、また、全然取り組んでいない生徒がいる現状を踏まえ、「お手伝いをしたい」という気持ちを膨らませたり、今後につなげたりするための働きかけを、自己効力感の視点で工夫を試みたのである。具体的には、次のように考えた。まず、何らかの形で手伝いをしている生徒には、「やってきてよかった」などの思いを生起し、まだ手伝いをしていない生徒には、「自分にもできそうだ」という思いを抱かせるような言葉かけを重視した。

c 教材・教具の工夫について

事前の実態調査より、生徒たちが、取り組む可能性の高いお手伝いをまず選んだ。「洗濯物干し・たたみ」「米研ぎ」「風呂洗い」の3つである。次に関連する生活シーンや仕事の組合せを考えた。それらの組合せを提示する際には、日常生活を想起したり、やってみようという気持ちを引き出したりするために、教師の実演による提示にした。

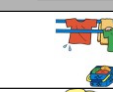
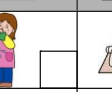
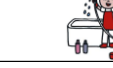
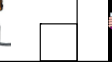
また、見せ方の工夫として、3枚のパネルを使うことで、思考の整理を促したり、授業内容に対する関心を高めたりする効果をねらった。

まとめのプリント（下図）は、生徒たちが学習中、感じたことや考えたことが表現しやすいように、学習中の視覚的な情報と同じ配列のものにした。

しんろ
「進路」学習プリント ()ねん なまえ ()

せい かつ 生 活	てつだ お手伝い	し こと 仕 事
たのしく ふくをえらぶ	せんたくものほし せんたくものたたみ	ふく 服をつくる
おいしく ごはんをたべる	こめとぎ	こめ 米をつくる
きもちよく ふるにはいる	ふるあらい	みず 水をつくる

しんろ
「進路」学習プリント ()ねん なまえ ()

せい かつ 生 活	てつだ お手伝い	し こと 仕 事
		
		
		

ウ)「夢」と「協調性」に視点をおいた授業の実践

a 本時の目標

〔内容に関する目標〕

- お手伝いがいろいろな仕事とつながっていることを知る
- いろいろな仕事に自分の生活が支えられていることに気づく

〔こころに関する目標〕

- 自分たちの生活と仕事のつながりを知ること、お手伝いをしたいという気持ちを膨らませる。

b 生徒の実態

本授業は、全学年対象の授業として設定した。ダウン症5名、自閉症6名、その他の障害5名の知的障害を伴う中学生である。

家庭で、お手伝いが定着している生徒は、数名である。たまにする程度の生徒がほとんどであり、全くしたことがない生徒も数名いる。

c 学習過程

学 習 活 動	指導上の意図・留意点	備考
1. 本時の学習内容を知る ○「お手伝い」について発表する ○お父さんやお母さんは、昼間何をしているか考える ○「生活と仕事」という言い方を覚える 2. 生活にかかわりのある「仕事」を知る ○身近な生活シーンを見て、どんな仕事をしている人がいるかを考える	○お手伝いパネルを用意する。 ○いくつかのお手伝いを提示し、したことがあるものを発表させ、名札を貼る。考え中のカードも用意し、該当する生徒に「これからがんばろうと思っているだね」と確認をとる。 ○全体に問いかけ、回答を集約する。「仕事」、「そうじ・洗濯」などのキーワードが導かれるように配慮する。 ○キーワードが得られたら、本時の学習内容「私たちの生活と仕事のつながりについて」勉強することを伝え、生活と仕事という組合せを印象づける。 ○生活パネルと仕事パネルを立て、視覚的に生活と仕事とを関連づけやすくする。 ○生活パネルを開き、楽しく服を選んでいる(ST1)シーンであることを確認したあと、服は、どうやって作られたかを考えさせる。 ○仕事パネルを開け、ミシンで服を作っている(ST3)シーンを見せた後、「仕事をしている人はすごいね」と教師自ら賛美し、生徒に気づかせる。 ○してみたいという気持ちを高めるために2名程度、仕事シーンを演じさせる。 ○文カードは、そのつど読み上げ、パネルに貼り、整理していく。	・パネル1枚 ・目隠しパネル2枚 ・名前札 ・お手伝いカード 洗濯物たたみ 米どぎ 風呂掃除など 仕事 生活 ・パネル2枚 ・文カード6枚 ・シーンに必要な道具



○お手伝いが生活と仕事の間にあることを知る

○同様に、【下表】の2つのシーンを見せる。

生活シーン	仕事シーン
おいしくご飯を食べている	米を作っている
気持ちよく風呂に入っている	雨水から水を作っている

○**お手伝いパネル**を生活と仕事のパネルの間に立て、双方にかかりがあることを視覚的に知らせる。



○授業の冒頭で尋ねたお手伝いのことをカードで思い出させ、今取り組んだ3つのシーンにそれぞれ、関連のあるお手伝いを考えさせる。この場合、生活シーンと仕事シーンをST1・ST3で見せる。【下表】その後、パネルを閉じ、文カードに置き換える。

○関連のあるシーンを選んだ生徒に、パネルの裏に待機させ、パネルを取り払い、本人が適確なお手伝いをしていた場合、拍手で称賛する。



○お手伝いシーンは、可能な限り全員が取り組めるようにする（1シーンあたり5人程度）。実際にやっている生徒の場合は、「さすが上手だね」と、まだ取り組んでいない考え中の枠の生徒については、「できるよ」などとどちらにも自信を持たせる言葉かけをする。



生活	お手伝いシーン	仕事
たのしく服をえらぶ	洗濯物干し・洗濯物たたみ	服をつくる
おいしくご飯を食べる	米研ぎ	米をつくる
気持ちよく風呂に入る	風呂洗い	水をつくる

○掲示物の情報は、プリントとリンクしやすい配置にする。

○生活とお手伝いと仕事の関連を重視するために、テープでつなぐ。

○全員になぞりまたは絵のプリントを用意する。視写や書字が難しい生徒に配慮するとともに、学習内容の理解を優先する。

○「今度は、仕事をしている人の様子を見に行こう」と提案し、歓声を引き出した後、終わりの挨拶をする。



・パネル3枚

3. まとめをする

○プリントで振り返る

○次時の予告をする

・まとめのプリント

d 評価

〔内容に関する評価〕

- お手伝いのことについて、選択できたか。
- 教師や友だちの話を聞いたり、演じるシーンをみたりしたか。
- 教師からの質問に対して考えようとしたか。
- プリントで振り返りができたか。

〔こころに関する評価〕

- お手伝いをしている自分をカッコイイと思ったか。
- お手伝いをしてみようと思ったか。
- 仕事をする人になりたいと思ったか。

エ) 考察

今回の授業により、「将来の仕事」を中心に、単元ならびに進路学習全体（「将来の生活」と「将来の仕事」）の系統性や連動補完性を検証することができた。事前アンケート結果にもあるように、「お手伝い」と「仕事」の違いについて、本校の生徒たちは曖昧なとらえの時期にあり、時間をかけて取り組むべき学習であると言ってよいだろう。またそれだけに、この「お手伝い」と「仕事」の違いについては、単元全体を通してさらに理解を深める内容として扱われることが重要であると捉えている。

○「夢」について

教室前方に、**生活**、**お手伝い**、**仕事**という3つの異なる空間をつくり、終始その三者の違いを伝えようとした。この点については、視覚的にも思考的にも分かりやすい構成であったと振り返った。反面、それらの空間をパネルに置き換えたことが、意図的に配列した三者の違いや、関連性の理解につなげることができたかについては評価が難しいところである。ただし、少なくとも三者が存在することについては、伝えることができたのではないかと評価している。

また、教師による実演後、生徒たちによる実演という学習活動のルーティンにより、「無理かな」「やれるかな」「やりたいな」「やれるよ」という情動や感情を生起させ、生徒たちの心に揺さぶりをかけることができたと感じている。しかし、時間に制限があり、全員の生徒に実演させることはできなかった。この点については、全学年での実施の限界もあるが、実演させる対象学年を設定し、3か年のうちでどの生徒も実演経験ができるようにする方法等も検討していく必要がある。

○「協調性」について

本授業では、「お手伝い」と「仕事」について、それぞれを説明するのではなく、生徒たちに、「お手伝い」の魅力を存分に知らせることにより、仕事との違いに気づかせようとした。「お手伝い」という教材は、生活することができているという感謝と、仕事をしている人への感謝を膨らませることができた。また、本授業の題材は、以降の授業の題材「仕事を見に行こう」「見たことを発表しよう」「家族や働く人に感謝しよう」と連動しており、実際に働いている人を見ることで「お手伝い」と「仕事」の違いに気づく場面を設定した。

このように本単元は、校内学習と校外学習という相互に補完し合う学習であることを再確認した。校外学習は、「職場の人は、“遊んでいる”“お手伝いをしている”“働いている”のうちどれだろう？」という視点で取り組む活動とし、「お手伝い」と「仕事」の違いを見学先の情報から感じとらせるようにし、本授業との連動性を図ったところである。

本授業で生徒の変容を確かめる一つの方法として、事前アンケートによる「お手伝いに関する意識調査結果」と、授業終盤で行った「お手伝いへの意識に関する評価」との比較が挙げられる。実際、生徒たちが、授業の終盤、教師などの働きかけなどを受けながら、「どのお手伝いをしようかな」というような自己選択する様子から、「私にもできそうだ、お手伝いをしてみよう」というようなお手伝いの遂行に対する期待値の高まりが感じられた。しかし、この生徒の変容、すなわち生徒の情動や感情

の生起は、本授業という特定場面が導いたものであり、これだけでは、授業内変容で終わってしまう。

この「お手伝いをしてみたい」という憧れや期待感を学校生活や家庭生活場面につなげ長期的なものにするためには、それぞれの生徒のお手伝いに対する憧れや期待感が何によって生起しているかが焦点になるだろう。この、「何によって生起するか」については、それぞれ生徒によって違うと考えられるが、その中でも共通したものとして「遂行可能感」いわゆる「自己効力感」があったのではないかと振り返る。「できるかな」から「できた」という成功体験を通して、それぞれの生徒の特性的な自己効力感を育むことにより、長期的な憧れや期待感につなげることができると感じた。

4 研究成果と今後の課題

中学部ではテーマを「支えあっている生活に気づき、これからの自分に期待する授業づくり」とし、指導形態「進路」についての研究を行ってきた。本校の指導形態「進路」を構成する「将来の生活」「将来の仕事」の学習内容を、生徒の内面の育ちに着眼して、整理、創出し、授業を通して検証し考察を行った。結果、これまでよりも系統的な学習形態が再構築されたと言える。その成果物として、①「新しい指導形態『進路』の『モデルカリキュラム』」（参考資料②p 93）（以下、「新モデルカリキュラム」と記す）、②「進路学習のステップと題材との関連表」（以下、「関連表」と記す。）（参考資料③p 94）がある。「関連表」は、指導形態「進路」の年間指導計画とモデルカリキュラムの学習内容、そして、「進路学習のステップ」との関連を表したものである。

今回の研究をまとめるにあたって、成果物である「新モデルカリキュラム」「関連表」をもとに整理していきたい。

（１）「モデルカリキュラム」からみた指導形態「進路」の系統性

旧モデルカリキュラムと新モデルカリキュラムを比較していくことで、明らかになったことを以下に示す。

①内容の目標の整理

表 1 2 指導形態「進路」における、「旧・新モデルカリキュラム」の内容の目標

旧	将来の生活	○ これまでの自分の <u>成長</u> を振り返り、現在の自分の <u>成長</u> を知る ○ 先輩の学習に取り組む様子を見たり、実際に作業等を体験したりすることを通して、 <u>これからの生活や進路</u> について考える
新	将来の生活	○ これまでの自分の <u>生活</u> を振り返り、現在の自分の <u>生活</u> を知る ○ 先輩の学習に取り組む様子を見たり、実際に体験したりすることで、これからの自分の生活や <u>進級、進学</u> について考える
	将来の仕事	○ <u>身の回りに色々な仕事があることを知り、それらが自分の生活とつながっていることを知る</u>

旧モデルカリキュラムでは、項目「将来の仕事」の内容を明確にしていなかったということもあり、学習で取り扱われる内容が「これからの生活や進路」というように広義に捉えられる表現となっていたが、新モデルカリキュラムの「将来の生活」では、「これからの自分の生活や進級、進学」と目標とすべき内容をより明確にすることができた。また、「成長」を「生活」と表現することで、個人だけではなく、周囲の環境の変化を含めライフステージとして考えることをねらうこととした。「将来の仕事」では家庭での手伝いや地域社会での職業などを「いろいろな仕事」として学習することで、「自分の生活とつながっている」ことにロールプレイや見学などを通して気づいたり、知ったりすることを目標とした。

②「こころ」の目標の整理

表 1 3 指導形態「進路」における、「旧・新モデルカリキュラム」の「こころ」の目標

旧	将来の生活	○ 将来について考えることで、今の自分の生活を振り返ったり、憧れをもったりしながら自分にあった進路について見通しをもつ
新	将来の生活	○ 成長した自分に気づき、先輩や身近な人に憧れの気持ちを持つことで、これからの生活への期待を膨らませる
	将来の仕事	○ いろいろな仕事について見たり聞いたりすることで働くことへの気持ち膨らませるとともに、家族や働く人への感謝の気持ちをもつ

旧モデルカリキュラムの「将来の生活」の「こころ」の目標では「葛藤」することなどを経て、「自立心」を育てることを中心に考えていたため「見通しをもつ」ということが目標であった。新モデルカリキュラムの「将来の生活」の「こころ」の目標では、「自己理解」を「成長した自分に気づく」、「夢」を「憧れの気持ち」や「これからの生活への期待」、「将来の仕事」では「知的好奇心」を「いろいろな仕事について」、「夢」を「働くことへの気持ち」、「協調性」を「感謝の気持ち」といった表現にすることで、「進路学習のステップ」の作成を通して明らかになった「大切にしたい項目」を目標として具体的に表現することができた。

③単元・指導内容の整理、深化

表 1 4 指導形態「進路」における、「旧・新モデルカリキュラム」の単元名と指導内容

旧	将来の生活	単元名	「将来の仕事や生活を知ろう」		
		指導内容	I	II	III
			○高等部の授業を体験し、高等部生活の雰囲気を感じる ○高等部の実習先を見学して、作業を経験させてもらい、雰囲気を感じる ○身近な人の仕事を知る	○高等部の授業を体験し、高等部生活への大まかな見通しをもつ ○高等部の実習先の見学をして、作業を見学させてもらい、自分が好きな作業かどうか考える ○身近な人の仕事を知り大まかな職業について興味をもつ	○高等部の授業を体験し、高等部生活への見通しや期待感をもつ ○高等部の実習先の見学をして、作業を見学させてもらい、自分ができる作業かどうか考える ○いろいろな仕事を知り自分の将来の生活に興味をもつ
新	将来の生活	単元名	「〇年生になった自分を知ろう」 「進級・進学について考えよう」		
		指導内容	I	II	III
			○現在の生活の場や大まかな生い立ちが分かる ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活の雰囲気を感じる	○生い立ちやこれからの大まかな生活の場が分かる ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ	○これまでの自分の生活を振り返り、これからの生活に見通しをもつとともに、自分のこれからの目標について考える ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への見通しや期待感をもつ

将来の仕事	単元名	「生活と仕事のつながりを考えよう」		
	指導内容	I	II	III
		○身近な人や自分の身の回りの仕事を知る ○いくつかの仕事を見て、好き嫌いを選ぶ ○身近な人から何かしてもらったときに「ありがとう」と言う	○身近な人や自分の身の回りの仕事を知り、大まかな職業について興味をもつ ○いくつかの仕事の中からしてみたい仕事を選ぶ ○家族や周りの人の仕事自分が自分と繋がっていることを知り、感謝の気持ちをもつ	○いろいろな仕事を知り、自分の生活にどのように関係しているかを知る ○いろいろな仕事の中からしてみたい仕事を選び、自分も大人になったら仕事をしたいという気持ちをもつ ○家族や働く人に対して感謝の気持ちをもち、自分もできることを頑張ろうと考える

内容の目標、こころの目標が明確になることで、これまで以上に学習内容も精選することができた。旧モデルカリキュラムでは、単元名においても「将来の生活」と「将来の仕事」が混在しており、授業担当者にとっても把握し難いものとなっていた。今回の研究で、「将来の生活」は、「進級・進学」を中心に扱うことが明確になったため、単元名もそのことが分かりやすいものに変更した。さらに、これまで3年生で実施されてきた「現場実習報告会に参加しよう」という題材の位置づけは、担当者により変わってきていたが、今回からは3年生の単元「進学について考えよう」の学習内容として扱うことで、高等部の学習内容を知るための題材として位置づけることとした。また、「〇年生になった自分を知ろう」という単元ができたことで、「自分の生活の場」や「生い立ち」を知るといった指導内容が新たに加わった。「将来の仕事」では、指導内容として、ただ単に仕事についての知識を拡げるのではなく、家族の仕事や生活とつながりのある仕事を知ったり、仕事という観点から、家族や地域社会から支えられていることに気づいたり、生活の中で当たり前と思っていたことに対する感謝や自分も支えたい（役割や仕事を通して）という気持ちをもったりすることを育む指導内容となった。

④「こころ」区分の整理

表 1 5 「旧モデルカリキュラム」の「こころ」区分

旧「将来の生活」	こころ	自己活動	自立心	夢	知的好奇心	情緒の安定
		自己調整	協調性	表現	社会規範	葛藤
		自己決定	自己理解	自己選択		

表 1 6 「新モデルカリキュラム」の「こころ」区分

新「将来の生活」	こころ	自己活動	自立心	夢	知的好奇心	情緒の安定
		自己調整	協調性	表現	社会規範	葛藤
		自己決定	自己理解	自己選択		

新「将来の仕事」	こころ	自己活動	自立心	夢	知的好奇心	情緒の安定
		自己調整	協調性	表現	社会規範	葛藤
		自己決定	自己理解	自己選択		

「こころ」区分から見ると、「旧モデルカリキュラム」では「自立心」「葛藤」が選択されており、その上、「自立心」が一番大切にしたいものとして取り上げられていた。これは、「自分にあった進路に対する見通しをもつ」ことが、こころの目標とされてきた背景があった。しかし、今回の研究を通して、「自立心」「葛藤」は進路選択の場面で大切になる項目であり、中学部段階だからこその必要な内面（こころ）が他にあるのではないかと考えた。そこで、進級や進学など新しい生活の場を知ろうとする「知的好奇心」、先輩や身近な人に目を向けたり、自分の生活が支えられていることに気づいたりする「協調性」が着目された。「進路学習のステップ」を通して「大切にしたい項目」を精選していったことから、生徒に育みたい内面をより明確に示すことができたと言える。

⑤「将来の生活」「将来の仕事」の位置づけ

今回、「将来の仕事」の内容が創出されたことで、「将来の生活」「将来の仕事」の項目の位置づけを明確にすることができた。どちらの項目も内面（こころ）の育ちとしては「夢（憧れ・期待感）」を中心としているが、「将来の生活」は、進級・進学を中心に生徒の生い立ちこれからのライフステージについて考えさせることで、時系列として現在とつながりのある「夢（憧れ・期待感）」を育てようとしている。また、「将来の仕事」は家庭や地域など周囲への視野を広げ、生活の中の役割や自分の生活と仕事のつながりを考えさせることで、空間として現在とつながりのある「夢（憧れ・期待感）」を育てようとしている。これら二つの項目を学習することで、自分の生活と結びついた現実的な「夢」を抱く土台ができるのではないかと考えた。

（２）「進路学習のステップと題材との関連表」から見た指導形態「進路」の授業

表 17 「将来の生活」単元「〇年生になった自分を知ろう」「進級・進学について考えよう」の「進路学習のステップと題材との関連表」

		状況	題材	学習内容	学習形態				学習内容
					対 面	少 人数 対 面	少 人数 対 面	少 人数 対 面	
1 年 生	1 年 生	1年生になった自分を知ろう (1時間)	1年生になった自分を知ろう	1年生になった自分を知ろう			○		1年生になった自分を知ろう
		進級について考えよう (1時間)	中学部で勉強したい、できること、できないこと	中学部で勉強したい、できること、できないこと	○	○			中学部で勉強したい、できること、できないこと
			中学部での生活に準備をしよう	中学部での生活に準備をしよう	○	○			中学部での生活に準備をしよう
2 年 生	2 年 生	2年生になった自分を知ろう (1時間)	2年生になった自分を知ろう	2年生になった自分を知ろう			○		2年生になった自分を知ろう
		進級について考えよう (1時間)	2年生の生活を知ろう	2年生の生活を知ろう	○	○			2年生の生活を知ろう
			2年生の生活を知ろう	2年生の生活を知ろう	○	○			2年生の生活を知ろう
3 年 生	3 年 生	3年生になった自分を知ろう (1時間)	3年生になった自分を知ろう	3年生になった自分を知ろう			○		3年生になった自分を知ろう
		進級について考えよう (1時間)	3年生の生活を知ろう	3年生の生活を知ろう	○	○			3年生の生活を知ろう
			3年生の生活を知ろう	3年生の生活を知ろう	○	○			3年生の生活を知ろう
			3年生の生活を知ろう	3年生の生活を知ろう	○	○			3年生の生活を知ろう
			3年生の生活を知ろう	3年生の生活を知ろう	○	○			3年生の生活を知ろう

表 1 8 「将来の仕事」 単元「生活と仕事のつながりを考えよう」の「進路学習のステップと題材との関連表」

	単元	題材	学習内容	大切にしたい項目				ねらい
				◎	○	□	◇	
1 年 生	将来の仕事と生活のつながりを考えよう	職業の多様性について考える	職業の多様性について考える	◎				職業の多様性について考える
		職業の多様性について考える	職業の多様性について考える	◎				職業の多様性について考える
		職業の多様性について考える	職業の多様性について考える	◎				職業の多様性について考える
		職業の多様性について考える	職業の多様性について考える	◎				職業の多様性について考える
		職業の多様性について考える	職業の多様性について考える	◎				職業の多様性について考える

「関連表」は、各項目の検証授業を経て、以下の①～⑤のような作成過程を経て一覧表にしたものである。

- ①「単元」はモデルカリキュラムから単元名を抜粋
- ②「題材」は本研究で授業者が実施した題材名を記入
- ③「学習内容」はモデルカリキュラムの指導内容の段階Ⅱを抜粋
- ④「大切にしたい項目」は授業者が題材レベルで一番に中心としてねらったものを「◎」、次にねらったものを「○」として記入
- ⑤「ねらい」は「◎」の項目について「進路学習のステップ」のねらいから題材と関連のあるものを抜粋

以下に、「関連表」を通して明らかになったことを示す。

表 1 7 の「将来の生活」単元「進級・進学について考えよう」では、「進路学習のステップ」の作成を通して「大切にしたい項目」を考えたと、検証授業を行うために各授業担当で「大切にしたい項目」に重みづけを行った。表 1 8 の「将来の仕事」単元「生活と仕事のつながりを考えよう」では全学年による授業ということもあり学部内で「大切にしたい項目」の重みづけを行っている。その結果、「将来の仕事」では、単元内でも重みづけのバランスがとれた形になっている。

指導形態「進路」を通して育てたい内面は「憧れ・期待感」であった。その結果、題材レベルで「大切にしたい項目」を見ていくと、「憧れ・期待感」と関連のある「夢」「知的好奇心」がどの授業でも多いことが分かる。しかし、重みづけの中でも「○」の選択では、同じような題材においても各学年で異なることが分かる。これは大まかな学習内容はモデルカリキュラムによって示されているが、実際の授業では生徒や集団の実態に応じて、授業者が指導形態「進路」で育てたい生徒の内面（こころ）を「大切にしたい項目」から選択していることによる。「3 研究の経過」の「授業の実際」を見ても分かるように、特に「大切にしたい項目」の「○」の選択によって、授業構成や働きかけ教材・教具など、教師の工夫がみられることが分かった。

（3）指導形態「進路」の研究を通して、さらに共通理解できた育てたい内面（こころ）

検証授業として紹介できなかったが、項目「将来の仕事」：単元「生活と仕事のつながりを考えよう」：題材「仕事を見にいこう」では、生徒の学校生活や家庭生活につながるのある仕事を学年ごとに見学した。働いている人の真剣な表情や動きに見入っている姿や、積極的に質問をする姿、学校に戻ってからも「働いている人にありがとうの手紙を書きたい」と発言する姿などからも、これまでとは異なる生徒の姿を多く見る事ができた。

今回の研究を通して設定した内面（こころ）は、生徒が授業を通して気づくことはできるが、生徒の変容として言動として表れるには、今後も継続して授業を実践していくことが欠かせない。その上でも、「進路」を中学部で系統性のある指導形態とし再構築できたことに価値があると思われる。また、「こころ」の目標を考えていく中で、指導形態「進路」における生徒の気持ちのもち方や心構えの在

り方として、次のような五つの観点が大切であると考えた。

- ①自分の普段の生活が、たくさんの人々に支えられていることに気づくこと
- ②誰かのためにすることに喜びを感じることに
- ③自分の存在が誰かのためになるということ
- ④自分も何か（役割や仕事など）をしたいと思うこと
- ⑤夢や憧れ、期待感をもてること

これらの観点を生徒が気づいていけるように、今後も授業を展開していきたいと考える。

（４）今後の課題

最後に本研究を通して得られた課題をまとめたい。

① 指導形態「進路」のとらえ・意義・必要性について

これまでの指導形態「進路」は、高等部への進学、卒業後の生活の関心を高めることを中心に学習されてきた。今回の研究では、生徒の内面の育ち、進級を含めた将来の生活の場、社会への視野や関心などをねらった学習として再構築している。第１７次研究において考えられてきた指導形態「進路」のとらえ・意義と異なる点も出てきているため、指導形態「進路」の定義を再度、検討していく必要がある。また、区分「いきがい」には、「進路」に関連した指導形態として、本研究で取り扱った指導形態「進路」の他に、指導形態「役割・しごと」がある。指導形態「役割・しごと」は「農耕」や「手作業」など、実際に働くことを通して、将来の働く場での構えなどを培うことをねらった学習である。「進路」に関連した他の指導形態と、目標や学習内容等を比べることで、生徒を多角的にとらえられているかや、学習に偏りがいないかなど確認する必要がある。

②小・中・高の一貫性

今回の研究で、指導形態「進路」における中学部内の系統性を再構築することができた。学部間で「進路学習のステップ」を検討するときは生徒の内面（こころ）のねらいの視点から、他部とのつながりを見ることはできた。しかし、「将来の仕事」の学習内容が新しく創出されたことにより、他部の学習内容とどのようにつながっているのかについては、今後、さらに検討を重ねていく必要がある。

《引用・参考文献》

- 長崎大学教育学部附属養護学校（2004）教育課程の再編成 その２－実践的課題研究と卒業生の実態調査をととして、自立と社会参加をめざした教育課程再編成の手がかりを探る－. 研究紀要第１６集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2007）教育課程の再編成 その３－自己の形成へつながる教育課程の創造－. 研究紀要第１７集
- 長崎大学教育学部附属特別支援学校（2009）自己を育む授業実践－「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計－. 研究紀要第１８集
- 菊池一文（2011）知的障害教育におけるキャリア教育の在り方に関する研究. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究紀要第３８巻
- 菊池一文（2011）キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善・充実を図るためのツールの開発と試行. 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 研究紀要第３８巻

No.		区分	指導形態	くらし	いきがい	まなび	からだ
高	進路			あそび	余暇	役割・しごと	芸術
中				進路			
小				項目	将来の生活	将来の仕事	

授業名		進路				
目標	内容	○これまでの自分の成長を振り返り、現在の自分の成長を知る ○先輩の学習に取り組む様子を見たり、実際に作業等を体験したりすることを通して、これからの生活や進路について考える				
	こころ	○将来について考えることで、今の自分の生活を振り返ったり、憧れをもったりしながら自分にあった進路について見通しをもつ				
学習形態		全学年				
実施時期	単元名	4月	～	3月	「将来の仕事や生活を知ろう」	
指導内容	将来の生活	Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ
		○高等部の授業を体験し、高等部生活の雰囲気を感じる ○高等部の実習先を見学して、作業を経験させてもらい、雰囲気を感じる ○身近な人の仕事を知る		○高等部の授業を体験し、高等部生活への大まかな見通しをもつ ○高等部の実習先の見学をして、作業を見学させてもらい、自分が好きな作業かどうか考える ○身近な人の仕事を知り、大まかな職業について興味をもつ		○高等部の授業を体験し、高等部生活への見通しや期待感をもつ ○高等部の実習先の見学をして、作業を見学させてもらい、自分ができる作業かどうか考える ○いろいろな仕事を知り、自分の将来の生活に興味をもつ
こころ	自己活動	自立心		夢		知的な好奇心
	自己調整	協調性		表現		社会規範
	自己決定	自己理解		自己選択		情緒の安定

新モデルカリキュラム

No.		進路	区分	くらし	いきがい	まなび	からだ
高	指導形態			あそび	余暇	役割・しごと	芸術
中				進路			
小				項目	将来の生活	将来の仕事	

授業名		進路			
目標	内容	○これまでの自分の生活を振り返り、現在の自分の生活を知る ○先輩の学習に取り組む様子を見たり、実際に体験したりすることで、これからの自分の生活や進級、進学について考える			
	こころ	○成長した自分に気づき、先輩や身近な人に憧れの気持ちをもつことで、これからの生活への期待を膨らませる			
学習形態		全学年			
実施時期	単元名	4月	「〇年生になった自分を知ろう」		
		1月～3月	「進級・進学について考えよう」		
指導内容	将来の生活	I	II	III	
		○現在の生活の場や大まかな生い立ちが分かる ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活の雰囲気を感じる	○生い立ちやこれからの大まかな生活の場が分かる ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ	○これまでの自分の生活を振り返り、これからの生活に見通しをもつとともに、自分のこれからの目標について考える ○次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への見通しや期待感をもつ	
こころ	自己活動	自立心	夢	知的好奇心	情緒の安定
	自己調整	協調性	表現	社会規範	葛藤
	自己決定	自己理解	自己選択		

No.		区分	くらし	いきがい	まなび	からだ
高	指導形態		あそび	余暇	役割・しごと	芸術
中			進路			
小			項目	将来の生活	将来の仕事	

授業名		進路			
目標	内容	○身の回りに色々な仕事があることを知り、それらが自分の生活と繋がっていることを知る			
	こころ	○いろいろな仕事について見たり聞いたりすることで働くことへの気持ちを膨らませるとともに、家族や働く人への感謝の気持ちをもつ。			
学習形態		全学年			
実施時期	単元名	4月～3月	「生活と仕事のつながりを考えよう」		
指導内容	将来の仕事	I	II	III	
		○身近な人や自分の身の回りの仕事を知る ○いくつかの仕事を見て、好き嫌いを選ぶ ○身近な人から何かしてもらったときに「ありがとう」と言う	○身近な人や自分の身の回りの仕事を知り、大まかな職業について興味をもつ ○いくつかの仕事の中からしてみたい仕事を選ぶ ○家族や周りの人の仕事自分が自分と繋がっていることを知り、感謝の気持ちをもつ	○いろいろな仕事を知り、自分の生活にどのように関係しているかを知る ○いろいろな仕事の中からしてみたい仕事を選び、自分も大人になったら仕事をしたいという気持ちをもつ ○家族や働く人に対して感謝の気持ちをもち、自分もできることを頑張ろうと考える	
こころ	自己活動	自立心	夢	知的好奇心	情緒の安定
	自己調整	協調性	表現	社会規範	葛藤
	自己決定	自己理解	自己選択		

《参考資料②》

新モデルカリキュラム

「進路学習のステップと題材との関連表」(中学部)

項目「将来の生活」

		単元	題材	学習内容	大切にしたい項目				ねらい
					夢	好奇心	知的理解	自己協調性	選択した◎の内容
1年生	1学期	1年生になった自分を知ろう (1時間)	1年生になった自分を知ろう	生い立ちやこれからの大まかな生活の場が分かる			◎	○	成長した自分に気づく
	3学期	進級について考えよう (4時間)	中学部で経験したり、できるようになったことを考えよう	次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ		◎	○		頑張ったことが分かり、喜ぶ
			中学2年生の自分に手紙を書こう		◎		○		先輩や身近な人に憧れる
2年生	1学期	2年生になった自分を知ろう (1時間)	2年生になった自分を知ろう	生い立ちやこれからの大まかな生活の場が分かる			◎	○	成長した自分に気づく
	3学期	進級について考えよう (4時間)	3年生の先輩を見てみよう	次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ	◎	○			先輩や身近な人に憧れる
			3年生の係活動を知ろう			◎		○	身近な人の仕事に関心をもつ
3年生	1学期	3年生になった自分を知ろう (1時間)	3年生になった自分を知ろう	生い立ちやこれからの大まかな生活の場が分かる			◎	○	成長した自分に気づく
	2学期・3学期	進学について考えよう (10時間)	現場実習報告会に参加しよう	次学年や高等部の授業を見たり体験したりすることで、これからの生活への大まかな見通しをもつ	◎	○			やってみたいこと(作業)がある
			中学部と高等部との違いについて考えてみよう		○	◎			先輩や身近な大人に関心をもつ
			高等部の学習について調べよう		◎	○			先輩や身近な大人に関心をもつ
			高等部での授業を体験しよう		◎	○			先輩や身近な人に憧れる

項目「将来の仕事」

		単元	題材	学習内容	大切にしたい項目				ねらい
					夢	好 奇 心	知 理 解 自 己	協 調 性	選択した◎の内容
全 年 生	1 学 期 ・ 2 学 期	生活と仕事のつながりを考えよう (7時間)	私たちの生活と仕事のつながりを見てみよう	○身近な人や自分の身の回りの仕事を知り、大まかな職業について興味をもつ ○いくつかの仕事の中からしてみたい仕事を選ぶ ○家族や周りの人の仕事が自分と繋がっていることを知り、感謝の気持ちをもつ	◎			○	見てみたい仕事などがある
			仕事を見にいこう		○	◎			いろいろな仕事の内容を調べて知る
			見たことを発表しよう		○		◎		仕事などを知って、好き嫌いが言える
			家族や働く人に感謝しよう		○			◎	手伝ってくれた人に「ありがとう」と言う

Ⅳ 高等部の研究

「大人になっていく自分を見つめ、
将来へのビジョンを描く授業づくり」

目次（高等部の研究）

研究の概要	95
1 高等部研究テーマについて	
（1） 高等部における進路の位置づけ	95
（2） 高等部の目指す指導形態「進路」について	96
（3） テーマの設定について	96
2 研究の方法	97
3 研究の経過	
（1） 題材の整理について	98
（2） 進路学習のステップについて	98
（3） 進路学習のステップと題材の関連表について	101
（4） 進路学習のステップの大切にしたい項目を検討する ための授業	102
（5） 進路学習のステップと題材との関連表をもとにした授業実践	
① 題材「自分の進路について話し合おう」（1年生）	106
② 題材「現場実習を振り返ろう」（2年生）	110
③ 題材「行きたい進路について考えよう」（3年生）	114
4 研究成果と今後の課題	
（1） 研究成果	
① 進路学習のステップとの関連表の作成	119
② 各学年における進路学習の指導内容の整理と精選	119
③ 学年間の一貫性、継続性、系統性を意識した授業実践	120
（2） 今後の課題	
① 生徒の発達段階やニーズに応じたグループ別学習の設定	120
② より支援が必要な生徒の進路学習の内容について	120
③ 指導内容の精選を通しての実践と検証 (指導内容表 Ver.2／モデルカリキュラム／単元別指導計画表)	121
④ 小・中学部の進路学習との関連についての検証	121
《引用・参考文献》	
《参考資料》進路学習のステップとの関連表（高等部）	123

研究の概要

高等部の研究では、これまで取り組んできた指導形態「進路」を、小学部から高等部までの進路学習の体系化を試みた「進路学習のステップ」の作成を通して検証する取り組みを行った。高等部では、これまでの先行研究によって指導形態「進路」の内容は確立されてきたが、新たに小・中・高一貫した進路学習の在り方を検討していくにあたり、再度指導形態「進路」の指導内容を整理する必要があった。教育課程において区分「いきがい」に位置づけている指導形態「進路」の指導内容と「こころ」区分との関連を明らかにしていくことによって、小・中・高の一貫性を重視した教育課程の検討が可能になると考えた。

本研究の取り組みの成果としては、以下の3点が挙げられる。

○「進路学習のステップと題材との関連表」作成によって、指導形態「進路」の題材と授業におけるこころの「ねらい」、「大切にしたい項目」などの関連の共通理解を図ることができた。

○関連表の作成と検討を通して、指導の時期や内容に関する課題を明らかにしながら指導形態「進路」の学習内容について整理を行うことができた。

○関連表の作成によって、各学年間の相互の関連を確認し、学年間の一貫性、継続性、系統性を意識した授業実践を意識できるようになった。

今後の課題としては、生徒の発達段階やニーズに応じたグループ別学習の設定、より支援が必要な生徒の進路学習の内容についての検討、整理した指導内容の実践と検証、小・中・高の進路学習の具体的な関連についての検証などが示された。

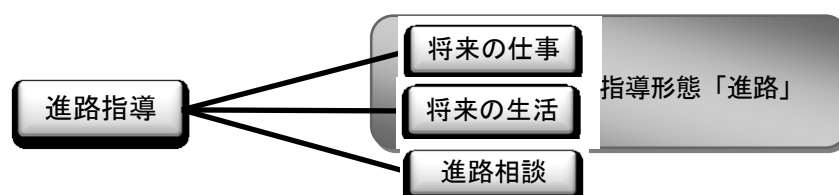
1 高等部研究テーマについて

(1) 高等部における進路の位置づけ

高等部段階は、卒業を目の前に、社会人として新たな生活を決定していく大切な時期であり、その適切な進路の選択を行うために進路指導は重要な役割を担っている。本校高等部においては、これまで継続的に進路に関する研究に取り組みながら、教育課程の編成や進路指導の理念、指導方法などを探ってきた。

本校の教育課程は、「自己の形成」に視点を置いた本校独自の教育課程を編成しており、指導形態「進路」を区分「いきがい」に位置づけている。先の研究において、高等部における自己の姿を「客観的な自己の形成期」とであるととらえ、その定義を「客観的な自己評価や生き方のイメージをもち、自立的な社会生活の場へ積極的な参加を志向する自己」としている。つまり高等部は、客観的に自己を見つめ、自分自身にかかわる様々なことについて考え、選択し、決定していく時期であり、「自己決定」に重点をおいて指導していくことが大切な時期である。

現行の進路指導は、指導形態「進路」として、自分の将来の仕事についての内容を取り扱う「将来の仕事」と、将来の生活・支援などの制度・余暇等の情報を取り扱う「将来の生活」の2項目と、さらに保護者も生徒の進路に参画する場として「進路相談」の大きく二つで構成している。(図1)



高等部における指導形態「進路」の教育課程の授業時間上の位置づけを見てみると、その割合は区分「いきがい」の中で年間の総授業の60パーセント以上を占めている。その割合の多さが示す通り、主体的でよりよい自己決定を目指す指導形態「進路」は本校高等部の教育を特徴づける学習といえる。

（２）高等部の目指す指導形態「進路」について

進路学習を通して目指す生徒像とは、卒業後の具体的な生活について、自分の意思や判断に基づいて選択することができる生徒である。自分の進路を決定するためには、まず、自分自身を十分に理解することが必要である。例えば、自分の好きなこと、得意なこと、できることとできないことなどの自己理解を深め、自分にとって必要な情報の収集や情報の吟味をしながら、最も重要となる自分の判断基準をもち、選択する力を身につけなければならない。近年よく聞かれる「キャリア教育」は「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技術を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路選択する能力・態度を育てる教育」であり、高等部が目指す「自己理解」「自己選択」「自己決定」に重点をおく本校高等部の進路学習と重なる部分が多いといえる。いわゆる従来の進路指導が出口指導に偏重して本人の意向を軽視する傾向にあったものを、本校の指導形態「進路」は、生徒の「こころの育ち」を見据えながら、生徒自身が自分の体験を通して選び、判断するような自己決定の場面を重ね、最終的に自分自身にあった仕事を選択し、自分の意思による進路の決定をねらいとしている。

（３）テーマ設定について

高等部研究テーマ「大人になっていく自分を見つめ、将来へのビジョンを描く授業づくり」の「大人になっていく自分」とは、1年生の校外実習や2・3年生の現場実習など実際に働く経験を通して将来について考えながら、自分の進路を選択・決定していく時期と考えている。

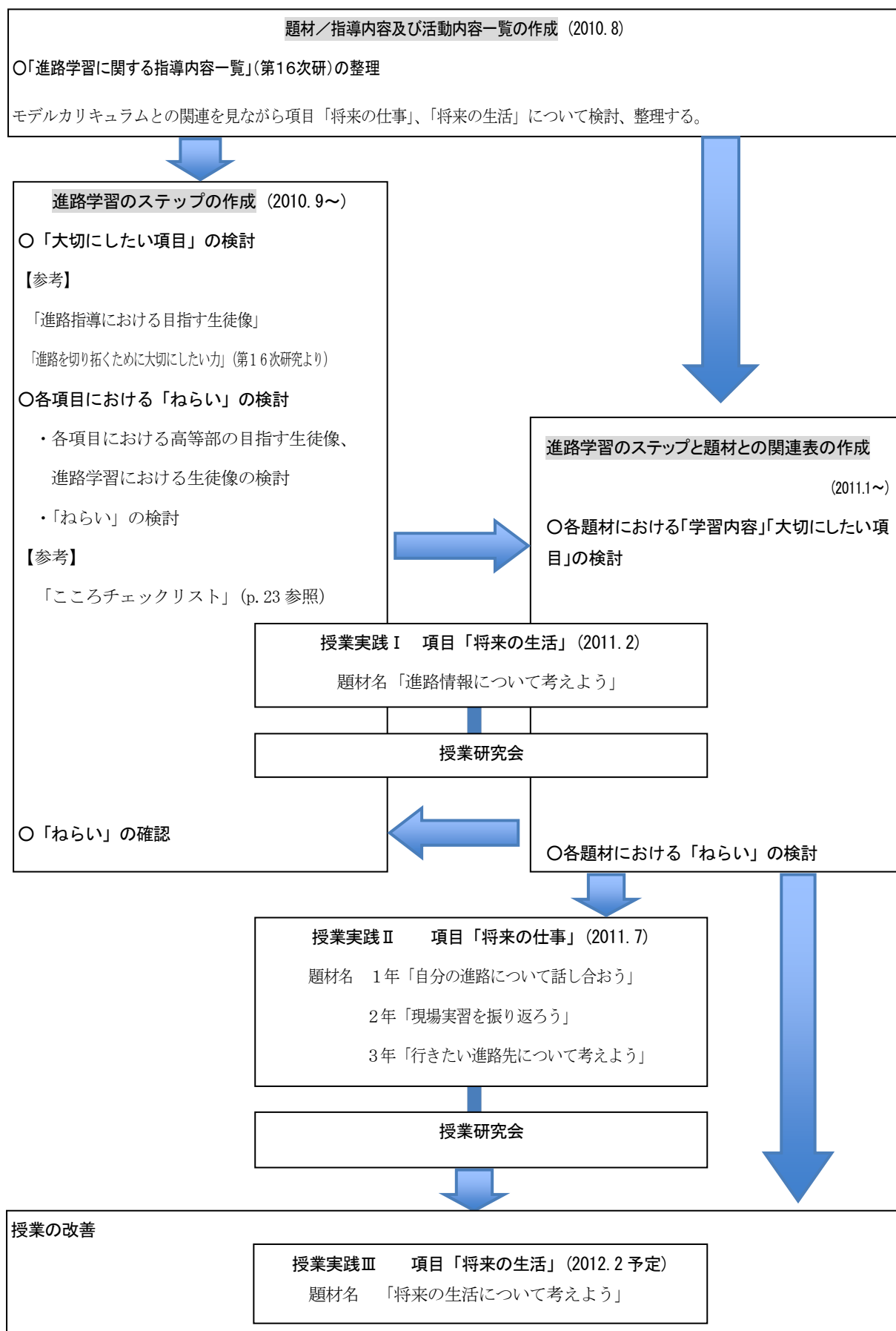
「自分を見つめる」とは、高等部3年間を通じて、大人の自分の姿、将来像を思い描きながら、仕事や生活、生き方などを自ら考えることであり、自分がどんな仕事や生活をしたいのか、どんな仕事や生活ができ、自分に合っているかを判断し、選択できる力そして自分の思い描くビジョンを実現していくために必要な力であるにとらえた。

「将来へのビジョンを描く」とは、生徒自身が思い描く将来の姿を具体化していく期間にとらえている。高等部3年間の在学期間は、卒業を控え、社会への入り口に最も近く、現場実習や進路先見学など、具体的な将来の仕事や生活の体験を生徒たちは経験し、卒業後の仕事や生活などについて将来像（ビジョン）を描きやすい。また、3年間の指導形態「進路」の系統性についても、1年生は現場実習を経験する前段階で仕事や将来の生活への期待感を高める段階、2年生は初めて実習を経験し、体験を広げていく段階、3年生はこれまで実習を経験した中から選択・決定していく段階と、各学年のつながりや関連が見えやすいと考えた。

一方、現在の生徒たちをとりまく状況は、多様化する暮らしや生き方のニーズに応じ、障害のある人の社会への「完全参加と平等」という理念のもと、法的制度の改革が推進され、障害のある人を取り巻く環境が大きく変化してきている。地域生活支援の場の充実や様々な福祉サービスの充実が図られる中で、一人ひとりのニーズに応じ、自分に合ったサービスや生活の場などの選択肢が多様化している。

以上のような多様化する社会情勢にも対応し、生徒一人ひとりがより豊かな社会生活を送るため、主体的に項目「将来の生活」や「将来の仕事」について学習を行っていくことを目指し、本テーマを設定した。

2 研究の方法



3 研究の経過

(1) 題材の整理について

高等部では、第17次研究において、現場実習の事前・事後学習を含め、自分の将来の仕事についての内容を取り扱う項目「将来の仕事」と、将来の生活・支援・余暇の情報や進路先のことを知る活動を取り扱う項目「将来の生活」の2つの項目から構成される指導形態「進路」を定義し、すでに授業実践を行っている。一方、小・中学部では、本研究において指導形態「進路」を再定義し、モデルカリキュラムや指導内容を検討していく必要があり、小・中・高一貫した進路学習を行ううえで、高等部の指導形態「進路」についても指導内容の再確認が必要となった。また、全体研究で実施した指導形態「進路」に関する質問会では、小・中学部から高等部における指導形態「進路」の指導内容や授業時数について、題材の整理や授業時数検討の必要性が提案された。

そこで、高等部における指導形態「進路」の指導内容の基準となる「進路学習に関する指導内容一覧」(第16次研究において作成)をもとに各学年の指導内容、実施時期や授業時数の配分等について、モデルカリキュラムとの関連を考慮しながら、項目「将来の仕事」及び項目「将来の生活」のそれぞれについて、学年毎に整理を行った。その際、全学年の題材や指導内容(活動内容)を一覧に表した「題材／指導内容及び活動内容一覧表」(表1)を作成することで、題材や指導内容の偏りや重複、実施時期や授業時数の妥当性を確認できるようにした。なお、項目「将来の仕事」では、現場実習や校外実習に関連する内容がそのほとんどを占めるため、指導内容を「実習前」「実習中」「実習後」に分けて整理を行った。さらに、高等部における指導形態「進路」では、学年単位に行われる学習と高等部全体または生徒の実態に応じた2グループによる縦割りの学習が行われているため、高等部全体またはグループ毎の学習において指導している内容についても、同様に整理を行った。

確認作業を通して、題材名の統一や指導内容精選、一部をグループ別学習へ移行することの必要性が判明したため、今後、段階的に次年度以降の教育課程に反映していくこととした。

表1 項目「将来の仕事(現場実習前)」の題材／指導内容及び活動内容一覧表

	題材／指導内容・活動内容		
	1年	2年	3年
単元	いろいろな仕事を知ろう	将来の仕事を考えよう	進路を選んだり決めたりしよう
題材	校外実習をしよう(6月、11月)	いろいろな進路先を知ろう	進路決定までの手順を確認しよう(4月～5月)
	進路先見学をしよう(6月、11月)	実習先や卒業後の進路について考えよう	進路先の特徴を知ろう;前期・後期現場実習(6月・11月)
		現場実習に取り組もう(6月・11月)	自分の進路を選ぼう(4月～3月)
		実習を振り返ろう(7月・12月)	自分にあった進路先を決めよう(4月～3月)
4月	【進路学習について知ろう】 ※4時間	【進路学習について知ろう】	【進路学習について知ろう】 ※1時間
	○進路に興味をもつ ・「進路」の意味を知る	○進路決定に対する意欲をもつ ・いろいろな仕事について知る	○進路決定に対する意欲をもつ ・自分が社会人になるという意識をもつ
	・進路に対して思っていることを話す	・どんな仕事をしたいか考える	・社会人として働きながら生活するということを理解する
	○1年生の進路学習の内容を知る ・進路学習のプリントや進路ファイルを見て先輩の進路先を知る	○2年生の進路学習の内容を知る ・1年生の校外実習を振り返る	○3年生の進路学習の内容を知る ・先輩の生活や仕事をし、自分が将来どうありたいかを考える
		・前期、後期の現場実習や進路先見学などとおして自分の適性を知り進路先を考える	・これまでの実習や見学などのから、自分が本当にしたい仕事や生活の場を考える
			・自分の考えている将来像が実現するためにどうすればよいか考える
5月	【働くことについて考えよう】 ※2時間		
	○いろいろな職業を知る ・父や母の仕事を考える		
	・先輩の仕事について話を聞く		
	○働く人の一日を知る ・家族の生活を考える		

(2) 進路学習のステップについて

前項でも述べたように、現在の高等部における指導形態「進路」の指導内容は、第16次研究がも

とになっていることから、第16次研究で検討された「進路学習で目指す生徒像」や「進路を切り拓くために大切にしたい力」を参考にし、それらのなかの表現が「こころチェックリスト」の10の項目のどの項目と関係が深いのかを考えていくこととした。その結果、「自立心」「夢」「協調性」「葛藤」「社会規範」「自己理解」「自己選択」というキーワードが浮かび上がった。このなかで、「葛藤」については、他のどの項目とも関連があり、キーワードとして独立して考えることが難しいことから、進路学習のステップ作成における「大切にしたい項目」を「自立心」「夢」「協調性」「社会規範」「自己理解」「自己選択」の6項目とした。

【進路学習で目指す生徒像】

○自分の進路を意識し、自分の課題を解決しようと前向きに努力する生徒

→自己理解

→夢

○今の自分を受け止めながら、よりよい自分を思い描き、大人になろうとする生徒

→自己理解

→自己選択

→夢

○自立した社会生活を営むために必要な知識・理解・技能・態度を身につけている生徒

→自立心・自己理解

○今の気持ちを何らかの方法で伝えながら、自分の進路を選択・決定する生徒

→協調性

→自己選択・葛藤

表2 進路を切り拓くために大切にしたい力

大切にしたい力		具体的な力	
人間関係を形成する力	自他を理解し、豊かな人間関係を築いていくために必要となる力	情緒の安定	自分の気持ちをコントロールしながら、 <u>周りとの調整や調和をしようとする力（→協調性）</u>
		表現・コミュニケーション	多様な集団・組織のなかで、他とのかかわりやコミュニケーションを通して、 <u>自己を表現していく力（→協調性・社会規範）</u>
		自己理解力	<u>自分の能力や特性を認め、自分自身の考え方や取り組み方をしようとする力（→自己理解）</u>
課題を解決する力	自分あるいは自分から援助を求めながら、主体的に物事に取り組んだり、判断したりするために必要となる力	選択・決定力	様々な選択肢について、 <u>比較検討したり（→自己選択）、葛藤を克服したり（→葛藤）して、主体的に判断し、選択・決定していかうとする力（→自己選択）</u>
		計画・実行力	<u>自己の課題を把握し（→自己理解）、それを解決するための方法を考え、解決に取り組んでいこうとする力（→自立心）</u>
		自己評価	<u>自己の計画や取り組みを振り返り（→自己理解）、新たな課題を見つけていく力（→夢）</u>

職業観をつくる力	社会の現実を踏まえながら前向きに自分の将来を考えるために必要となる力	役割の認識・把握力	生活・仕事上の多様な役割や意義を知り（→ <u>自己理解</u> ）、 <u>自分の果たすべき役割などについて理解していく力</u> （→ <u>自己理解</u> ）
		職業理解力	現場実習や校外実習をとおして、社会・職業生活に必要なことや今しなければいけないことを理解していく力
		情報収集・活用力	進路や職業などに関する様々な情報を探し、収集するとともに、必要な情報を選び、活用しようとする力

一方、進路学習のステップにおける「大切にしたい項目」は、第18次研究で定義した「こころ」区分の各項目のなかから選択されたものであり、「進路学習で目指す生徒像」の上位概念を含んでいる。

そこで、まず、それぞれの「大切にしたい項目」について、「進路学習で目指す生徒像」を再検討した後、他区分との関連を考慮しながら、その上位概念である高等部の目指す生徒像を検討し、進路学習のステップを定義する際の指針とした。また、進路学習のステップにおける「ねらい」については、「題材／指導内容及び活動内容一覧」や「こころチェックリスト」（p. 23参照）の各項目との関連を踏まえながら、整理した。

表3 進路学習のステップ（試案）

	大切にしたい項目	高等部の目指す生徒像	進路学習で目指す生徒像	ねらい
将来の生活	夢	実現させたいことに向けて前向きに努力する	社会人になることを意識し、なりたい自分の姿を思い描く	○「すてきな大人になりたい」「おしゃれな人になりたい」などと言う ○先輩や身近な人に憧れる ○独り暮らしがしたいと思う気持ちをもつ ○恋人や家庭をもちたいと思う気持ちをもつ ○行ってみたいところがある ○給料で買いたいものがある ○卒業を楽しみにする ○卒業後の自分の姿を言う
	自立心	自分の課題を解決する	自分の生き方、在り方を考える	○周りの人の様子にあわせて自分のすべきことを考える（自分から？） ○自分の行動を振り返り、次にすべきことを考える ○自分のおかれている状況や立場を理解して取り組む ○課題（目標）を見つけ、自分の力で解決しようとする ○大人になる気持ちを持つ

(3) 進路学習のステップと題材との関連表について

まず、各題材の指導内容毎に「大切にしたい項目」の各ねらいのなかから、最も重点を置きたいねらいを選択（表中では、各題材のそれぞれのねらいをもとに○印をつけた）していくことで、「大切にしたい項目」を明確にした。

表4 最も重点をおきたい大切にしたい項目

題材	学習内容	大切にしたい項目とねらい					
		夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	社会規範
【進路学習について知ろう】	○いろいろな仕事について知る ○どんな仕事をしたいか考える ○いろいろな進路先があることを知る ○2年生の進路学習の内容を知る	やってみたい仕事がある(CL12)	自分のすべきことを考えて取り組む	自分の行きたい実習先の条件が分かる	自分の得意な(したい)仕事や苦手な(したくない)仕事を比較して選ぶ(CL69)	職場のルールを守って、周囲の人と仲良くする	
		見てみたい職場や施設がある(CL13)	しおりなどを見て自分の次のめあてを考える	自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事に分かる(CL58, 63)		役割を理解して協力する(仕事に取り組む)	
		先輩の実習の様子を知る(CL10)	大人になって仕事をする気持ちをも	実習先の評価を受け止める(CL6)			

この「進路学習のステップと題材との関連表」(以下、関連表と記す)は、項目「将来の仕事(1・2・3年生)」、項目「将来の生活(1・2・3年生)」のそれぞれの学年において作成した。(参考資料p.123~128)

また、学年間の系統性についても考慮し、全学年を一覧にした「全学年の関連表」を項目「将来の生活」と項目「将来の仕事」それぞれにおいて作成した。(参考資料p.129・139)

この「関連表」を作成することで、月ごとの学習内容の整理(重複や不足がないかなど)や、学年間における「大切にしたい項目」や学習内容の相互の関連性を確認することができた。

「こころチェックリスト」との関連においては、項目「将来の生活」においては、6つの大切にしたい項目を、項目「将来の仕事」においては5つの大切にしたい項目を設け、関連のある項目を◎と○の2段階で関連を示した。また、◎については、そのねらいについても記すようにした。

（４）進路学習のステップの大切にしたい項目を検討するための授業

各学部で考案した「進路学習のステップ」をもとに小・中・高のつながりを見ると「夢」の項目が共通のキーワードとして挙がった。「夢」（憧れ・期待感）を全学部共通のテーマとして授業実践を行い、大切にしたい項目やねらいについて検討することとなった。

項目「将来の生活」

題材名「進路情報について考えよう」（２年生）

ア）授業に向けて

高等部２年生は、現場実習を初めて体験する学年であり、すでに２回の現場実習を体験し、生徒によっては現場実習期間中に１週間程度の入所施設体験を行っている。前時には、通勤寮の見学を行い、利用者の様子を見学することで、生徒たちの中には「自分も家庭から離れて生活してみたい」や「将来は一人暮らしをしてみたい」など卒業後の生活に「夢」（憧れ・期待感）の気持ちが芽生え始めた。以前から「卒業後は家から出たい」と考えていた生徒には、一人暮らし以外の生活の仕方を知るよい機会となった。高等部入学の段階では、漠然とした「夢」だったものが、１年間高等部で過ごし、先輩たちの進路先を知ることや現場実習、施設見学等を経験した高等部２年の段階になると、より現実的な「夢」を思い描くことができるようになってくる時期だと考えている。

授業を実践するにあたって、「進路学習のステップ」の６項目の中から学習内容と照らし合わせて、教師が生徒たちのどの部分を大切に授業を行っているかを考え、関連表を作成した（表５）。社会への出口の段階にあたる高等部では、憧れや期待感を重視している小中学部の「夢」というとらえ方をより現実的なものに近づける必要がある。本授業では、生徒の将来像やこころの目標を考えた時に「自立心」や「自己理解」が重視されるものであると考えたが、生徒の「夢」をもつこころも大切にしながら授業の実践をした。

表５ 進路学習のステップと題材との関連表

題材	学習内容	大切にしたい項目					
		夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	葛藤
自分のことについて考えよう	・自分のプロフィール ・自分のことについて知ろう		○	◎			
大人として必要なマナーについて考えよう	・高校生らしい生活や社会人としての生活を考えよう		◎	○	○		
生活や身だしなみについて考えよう	・高校生らしい「おしゃれ」について話し合おう		○		◎		
将来の生活について考えよう	・進路先の生活について知ろう		◎		○		○
	・進路情報について考えよう（本時）		◎	○			
	・卒業後の進路について考えよう		○	○	◎		○
	・自分の卒業後の生活について考えよう		○	◎	○		○

イ) 目標

【内容に関する目標】

○宿泊型自立訓練事業所やグループホームなどを比べることで、くらしの場の違いを知る。

【こころに関する目標】

○くらしの場に関する情報を整理することで、将来の生活に対する関心を高める。

内容に関する目標については、前時に宿泊型自立訓練施設の見学を行っているので、家庭以外の他のくらしの場について知ることを中心とした。くらしの場を知ることで、3年時の現場実習で体験してみたいと考えたり、お手伝い（家事）を意欲的に取り組んだりできるのではないかと考え、内容に関する目標を設定した。

こころに関する目標は、「進路学習のステップ」の「自立心」と「自己理解」と関連させた内容にした。くらしの場に関する情報を整理することで「自分もできそう」や「やってみようかな」など生徒のこころの変化が期待できるので、「自己理解」の「自分のできそうなことを考えてする」につながると考えた。また、将来の生活に対する関心を高めるということは、生徒たち自身が卒業後の仕事や生活に目を向けることや社会人になることを意識することなので、「自立心」の「大人になる気持ちをもつ」につながると考え、こころに関する目標を設定した。

ウ) 授業の工夫

- ・家事を3つの視点（料理・洗濯・そうじ）でイメージできるように働きかけていながら、くらしの場（家庭・入所・自立訓練・グループホーム）を比較できるようにした。
- ・くらしの場や家事などのイラストや写真をカード化して、机上で操作しながら考えを整理できるように工夫した。
- ・くらしの場の違いによって、家事の量が違うことに気づかせながら、自分で身の回りのことや家事などに取り組むことに対する意欲を高めることを心がけた。
- ・全てが1人でできなくても家庭から離れて生活できる場があることを知り、不安はあるけれど「自分も体験してみたい」や「自分も家庭以外で生活できそう」などくらしの場についての興味や関心を高めるようにした。

エ) 授業の実施

学習活動	指導上の意図・留意点	備考
1. 本時の学習内容について知る ○ くらしの場で生活することについて考える	○ 社会人になってからの生活を、くらしの場と働く場として整理し、くらしの場で活動することを思い出すことで、くらしの場について学習することへの関心を高める。 ○ くらしの場と働く場の絵カードを提示し、今の家庭から学校への通学と社会人になってからの生活を照らし合わせることで、社会人になってからの生活が大きく分けてくらしの場と働く場に分かれることに気づかせる。 ○ 学校から帰って家庭ですることなどを思い出すような言葉かけをすることで、くらしの場では食事、入浴、睡眠などの活動をしていることを確認する。 ○ くらしの場の活動は誰が準備しているか尋ねることで、料理や掃除などの家事をイメージできるようにする。 ○ これまでの現場実習や進路先見学の中でくらしの場に関する情報を整理する様子	絵カード（家庭、職場） 絵カード（家事）

2.卒業後のくらしの場の違いについて知る ○ 進路先見学や現場実習の施設を思い出す	しの方があったか尋ねることで、家庭以外にくらしの場があることに気づくことができるようにする。 ○ 家庭、入所施設、グループホーム、宿泊型自立訓練事業所の4カ所について、一緒に生活する人や家事をする人に着目することで、それぞれのくらしの場の違いに気付くことができるようにする。 ○ 生徒は絵カードを分類することで、それぞれのくらしの場での生活する人、家事をする人が視覚的に分かりやすいようにする。 ○ 進路先見学や現場実習で行った入所施設などが出てこないときは、入所経験がある生徒の発言を促したり、施設の写真を提示したりすることで思い出すことができるようにする。 ○ 入所施設、宿泊型自立訓練事業所、グループホームという言葉聞いたことがあるのか考えさせる。生徒の意見から出た施設がどのくらしの場に当てはまるのかを考えさせ、くらしの場によって生活の仕方に違いがあることを気づかせるようにする。 ○ 施設の名称や種類などが生徒から出てこないときは、見学や現場実習で経験した各施設のパフレットを見せる。	写真（施設） 文字カード（施設名） パフレット
○ 各くらしの場で一緒に生活する人の絵カードを貼る	自分、父、母、施設職員、仲間の絵カードを選択することで、自分で考えることができるようにする。 ○ A・Bグループの生徒はイラストカードを選択することで、両親から離れて生活することが気づけるようにする。 ○ C・Dグループは宿泊体験や進路先見学のことを思い出すような声かけやパフレットを見るように促すことで、自分で学習を進めることができるようにする。	ホワイトボード 絵カード（自分、家族、施設職員、仲間）
○ 各くらしの場で家事をする人の絵カードを貼る	○ 家事の中でも、食事の準備、掃除、洗濯に着目して、学習を進める。 ○ Aグループは教師と一緒に入所施設の経験を写真や絵を使って思い出すことができるようにしたり、家族や施設の人など指示された人を選んだりすることができるようにする。 ○ Bグループは教師や友達から入所を経験した友達の話を聞いたり進路先見学の話を思い出したりすることで、自分で絵カードを選択し、各くらしの場での生活をイメージできるようにする。 ○ C・Dグループは、現場実習や宿泊実習を思い出すことで、自分で絵カードを選択する。また、家事ができないときはどうするのか尋ねることで、自分だけではなく仲間や職員と一緒にしたり、教えてもらったりすることができることを気づけるようにする。 ○ 入所を経験した友達が生活したときの様子を聞くことで、取り上げた家事以外にも、朝の準備、片付けや起床・就寝、入浴など、それぞれのくらしの場に対する考えを深めさせる。	絵カード（食事、掃除、洗濯）

○ それぞれのくらしの場を比べる	○ それぞれのくらしの場で一緒に生活する人を比べることで、両親と離れて暮らすことや、仲間と一緒に生活することに気づかせる。 ○ 家事に対して自分がどの程度行うのかイラストカードの数から気づけるようにすることで、入所施設は「いっしょにする」、宿泊型自立訓練所は「教えてもらう」、グループホームは「自分でする」など、くらしの場で家事の量や施設職員のかかわり方が異なることが分かるようにする。 ○ 入所を経験した友達の話や先輩の様子など教師の話聞くことで、家庭から離れて生活することへの憧れ、仲間と生活する楽しさや自分で身の回りのことや家事などに取り組むことに対する意欲を高めた。	絵カード（父、母、自分、施設職員、仲間）
3. まとめをする ○ 学習内容を確認する	○ 施設の種類の名称を尋ねることで、それぞれの名称を覚えているか確認し、それぞれのくらしの場の違いや特徴を板書で振り返る。 ○ 進路先見学での説明を思い出させ、宿泊型自立訓練事業所で生活の訓練をしてグループホームに行くことができるなど、複数のくらしの場を組み合わせることができることを伝える。 ○ 各施設で卒業生が生活していることを伝えることや友達も現場実習で入所経験をしていることを伝えることで、入所したことがない生徒も自分もしてみたいという気持ちを持たせたい。 ○ 入所施設やグループホーム等もそれぞれの場所で雰囲気が異なることを気づかせ、現場実習等で経験してから考えることの大切さを教えるようにしたい。	

オ) 授業研究会を受けて

【進路学習のステップについて】

- ・ ころに関する目標の表記の仕方も「自立心」や「自己理解」が分かるような表記の仕方の工夫が必要であった。
- ・ 高等部の指導形態「進路」では、題材の内容が多いため「進路学習のステップ」の項目を絞り込むことが難しかった。

【生徒・教師の変容について】

- ・ 生徒の中には、家庭を出ることが一人暮らしと直結しており、家事は一人でやらないといけないものと考えていたが、支援してもらいながら生活できる場もあることを知り、「私（僕）も家庭から出て生活できるかな」と一人暮らしのイメージを広げることができた。
- ・ 生徒の実態に応じて手だてを工夫しながら授業を進めていったが、入所施設やグループホーム、宿泊型自立訓練事業所と言った単語を理解させることの難しさを感じた。生徒たちは「体験してみようかな」や「自分もできそう」など前向きな変化が見られたので、単語で理解させるよりもどのようなくらしの場だと自分が生活できるかなと考えさせることで「自己理解」を高めることにつながると考える。
- ・ 家事を授業の中で取り上げたことで、将来、家庭を離れて生活したい生徒や、その生活をやってみたいと思う生徒たちには、改めて手伝いの大切さを感じさせることができた。くらしの場の違いを知ることで、できないことは人に教えてもらったり、一緒に取り組んだりしてもいいと生徒たちが気づき、不安から「ちょっとできそう」と自信に変化することができた。自分で何でもするという考えだけでなく、助けも求めながらできる限り自分の力で頑張ってみようという「自立心」に揺さぶりをかけながら授業を行い、将来の生活に期待をもてるような授業作りを今後も考

えていかなければならないと考える。

【授業について】

- ・一学年の授業だけでは、他学部との連携を見つけることは難しかった。また、指導形態「進路」の将来の生活だけでなく、将来の仕事について学年のつながりや他学部とのつながりを検討していく必要がある。
- ・3年間の成長を考えながら指導内容をこれまで作り上げてきたが、生徒の実態等により学年進行の授業に難しい面がでている。今後の課題としては、授業内容の精選や単元題材の整理が挙げられる。

カ) 大切にしたい項目について

今回の授業では、こころに関する目標をもとに「自立心」と「自己理解」を大切にしたい項目として授業内容を展開した。指導形態「進路」の授業で、題材や指導内容ごとに大切にしたい項目を考えていくと「自立心」や「自己理解」等が上位にあがるが、決して「夢」を軽視しているものではない。「夢」の「先輩や身近な人に憧れる」や「独り暮らしをしてみたいと思う気持ちをもつ」などは、もちろん生徒に思い描いてほしいことではあるが、高等部では「自立心」や「自己理解」の先に「夢」はあると考えている。単一の授業で「夢」を全面に出して授業を展開することは難しいが、生徒の「夢」をもつところは大切にしていきたいと考えている。「進路学習のステップ」では、「夢」が小・中・高と一直線で表されているが、ア)の項目でも述べたように、小・中学部と高等部ではとらえ方に多少なりとも違いがある。「進路学習のステップ」の表し方や学部間で大切にしたい項目のとらえ方など今後の課題である。

また、授業で大切にしたい項目としてあげた「自立心」と「自己理解」は、オ)授業研究を受けての生徒の変容で述べたように生徒により変化が見られた。しかし、ねらいの「自分のできそうなことを考えてする」や「大人になる気持ちをもつ」などは、1回の授業だけでは見えにくいものであった。今後「進路学習のステップ」を作り上げていく中で、題材間や学年間のつながりを高等部として考えていきたい。

(5) 進路学習のステップと題材との関連表をもとにした授業実践

①項目「将来の仕事」 題材「自分の進路について話し合おう」(1年生)

高等部1年生は「知る」ということをテーマにして、指導形態「進路」の項目「将来の仕事」では6月、11月に行う校外実習や実習先見学などを中心に「いろいろな職業や進路先を知り、働くことや仕事への関心をもつ」ことをねらいとして指導を行っている。

本題材は、7月と12月に各6時間ずつ設定されている。ここでは7月に行った授業実践について紹介する。主な学習内容は、先に実施する「実習先を見学しよう」という題材で学習する2・3年生の実習先見学などを基に、「やりたい仕事」「やりたくない仕事」などを生徒自身に考えさせる学習を通して2年生で経験したい現場実習先を考えることである。

そこで、実習先見学の時に実際に先輩たちが行っていた仕事や現場実習報告会のビデオの中で先輩たちが行っていた仕事の内容を振り返り、それらの仕事を「軽作業」「箱折り」「パソコン」「食品」「工芸品」「接客」「屋外」「会社」の8つのグループに分ける学習を行った。さらにそれら一つ一つの仕事について「やりたい仕事」「やりたくない仕事」「わからない」を考える学習を通して、生徒たちが「〇〇先輩と同じ仕事をしてみたい」「〇〇先輩のようになりたい」などの憧れの気持ちを持ち、自分も仕事をやってみたいという期待感を高めていくことを目的とした。

ア) 題材における大切にしたい項目

本題材では、実習先見学などを通して得た進路に関する情報の中から興味があることを見つけ、身近な先輩の働く様子を見て「自分も〇〇先輩のようになりたい」という憧れや働くことへの期待感を

もつことを大切にしている。

そこで本題材で大切にしたい項目として「夢」「自己選択」を挙げ、それらを中心に授業を展開することにした。

イ) 目標

【題材の目標】

(内容に関する目標)

○自分でやってみたい仕事やできるようになりたい仕事を基に、行きたい実習先を選ぶ

(ことに関する目標)

○先輩が実習先で働く姿に憧れをもち、自分も現場実習に行きたいという期待感を高める

題材の目標について、2年生で経験したい現場実習先を生徒自身に考えさせるために大切にしたい項目の中の「夢」「自己選択」と関連させた内容にした。また進路学習のステップ項目「将来の仕事」高等部のねらいの中から以下のねらいと関連させながら目標を設定した。

「夢」:「やってみたい仕事がある CL12」
「自己選択」:「自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事分かる CL58、63」

【本時の目標】

(内容に関する目標)

○実習先でどんな仕事があるか知り、そこから自分のやってみたい仕事を選ぶ

(ことに関する目標)

○先輩が実習先で働く姿に憧れをもち、自分も現場実習に行きたいという期待感を高める

実習先見学などを基に得た情報の中から、興味をもった仕事を考えさせると共に働くことへの期待感をもたせるため以上のように設定した。

ウ) 授業の実施

学習活動	指導上の意図・留意点	備考
1. 本時の内容を知る ○ 前時までに学習したことを振り返り、確認する	○ 前時のワークシートを見ることで、前回までの学習を思い出させるようにする。 ○ 報告会で見た内容を思い出させるために、どんな仕事や実習先があったか質問する。 ○ 自分のやりたい仕事を選ばせることを伝え、仕事の様子などをよく見たり、聞いたりする意識を高めさせる。	前時のワークシート
2. やってみたい仕事について考える ○ どんな仕事があるか知る	○ 実習の様子や実習先見学のビデオを見ることで、実習先での仕事内容を思い出させる。  ○ 視聴中に「実習先見学ではどんな仕事があったかな」や「○○先輩はどんな仕事をしていたかな」などの声かけをし、仕事内容を振り返るだけでなく先輩を意識させる発問をしてきながら、一つ	DVD プロジェクター 仕事カード 名前カード

	一つの仕事を具体的に取り上げていく。 ○ 生徒が仕事の種類を理解できるように、仕事内容を整理した形で仕事カードを教師が助言を与えながら生徒で分類させていく。(軽作業、箱作り、工芸品、接客、食べ物、清掃、パソコンなど) ○ 分類した仕事の中から自分のやりたい仕事を選ばせることで、同じ分類であっても、他にもいろいろな仕事があることを知らせるようにする。 ○ 仕事内容については写真付きのカードで提示し、生徒にイメージがしやすいようにする。	
○ やってみたい仕事を選ぶ	○ 自分の考えや気持ちを整理しやすいように、ワークシートを準備し、やりたい仕事→○、苦手な仕事ややりたくない仕事→×、分からない→△を記入させ、自分の得意な(好きな)仕事や苦手な(嫌い)仕事があることを分かるようにしたい。 ○ 友達の考えに左右されないよう、初めにワークシートで自分のやりたい仕事を選択しておくようにする。 ○ ワークシートで選択した内容を基に、黒板に自分の名前カードを選択したカードの横に貼らせ、友達の気持ちも知ることができるようにする。 ○ 生徒Aは、仕事内容のイメージをもたせるために、手で仕事写真カードを見せながら、ひとつひとつ確認していくようにする。(ST)	ワークシート 仕事カード
○ やってみたい仕事と理由を発表する 4. まとめをする ○ 本時の学習内容を振り返る ○ 後期の学習の見通しをもたせる	○ 一人ずつ前に出て、行きたい実習先と理由について発表するようにし、自分の気持ちを発表できたときは拍手で賞賛して自信をもたせるようにする。 ○ それぞれの生徒の実態に応じて発表用カードを用意し、自信をもって発表できるよう、必要な生徒には発表用カードを見ながら発表させる。 ○ 生徒の述べた理由に対して、生徒の気持ちを受け入れ、「なるほど」などの反応を示しながら、仕事をしてみたいという気持ちや期待感を高めるようにしたい。 ○ やってみたい仕事が発表できたことを称賛し、それぞれの生徒が現場実習に行ってみたいという気持ちを確認する。 ○ 自分の行きたい実習先でやってみたい仕事に取り組むためには、これからの学校生活においてがんばっていく必要があることを気づかせ、気持ちを高めるようにする。	発表用カード

	○ 自分がやってみたい仕事はどこの実習先でできるのかを理解させるため、進路先カードを提示し、仕事内容と職場のイメージを結びつけるようにする。 ○ やってみたい仕事は他の実習先にはないか、生徒に確認させながら、複数の実習先を比較させ、施設によっていろいろな仕事があることを知らせるようにする。	進路先カード
--	---	--------



クッキーづくり
(くっきーづくり)

「自分の進路について話し合おう」
自分のやってみたい仕事を選ぼう

仕事内容を記入し、自分のやってみたい仕事に印をつけてみよう。
(やりたい○、やりたくない×、わからない△)

制作業 (けいさぎょう)	○×△	食品 (しょくひん)	○×△	農林 (のうりん)	○×△
ラベル		パンづくり		農耕 (のうこう)	
シールはり		クッキーづくり		動物 (どうぶつ)	
ヘアピン		袋詰め (ふくろづめ)		コンタクト	
ごみ袋 (ごみぶくろ)		皮むき (かわむき)			
ビニール・リサイクル		乾いもの (あらいもの)			
チラシ折り (ちらしおり)		弁当盛り付け (べんとうもりつけ)			

服飾 (はくおくり)	○×△	工業品 (こうがいひん)	○×△	会社 (かいしゃ)	○×△
箱折り (はこおり)		さきり織り (さきりおり)		老人ホーム (ろうじんほむ)	
しきり折り (しきりおり)		さしこ		タリーニング	
めんこけずり		ミシン		事務 (じむ)	
ひも通し (ひもとおし)		ビーズ		清掃 (せいそう)	
組み立て (くみたて)				食品製造・販売 (しょくひんせいぞう・はんばい)	

パソコン	○×△	雑 業 (ざつぎやく)	○×△	学習した日 () 月 () 日 () 曜日
印刷 (いんさつ)		レストラン		なまえ
		食品の販売 (しょくひんのはんばい)		

図2 仕事カード

図3 ワークシート

エ) 教師の働きかけと生徒の変容

教師の働きかけ	生徒の変容
・知っている先輩たちの現場実習中の仕事について授業を進めていった。	・仕事に対する意欲や関心が高くなった。
・仕事内容を8つのグループ分けをしてから、その一つ一つに対して「やりたい仕事」「やりたくない仕事」「わからない」を考えさせた。	・表が完成した後に自分がどのグループの仕事内容が好きかを知ることができた。
・「やりたくない仕事」や「わからない」仕事があることは、悪いことではないことを十分に説明してから考えさせた。	・「やりたくない仕事」や「わからない」の選択肢を選ぶことへの抵抗感が減り、自分の気持ちを素直に表すことができた。
・実際に仕事を体験し自分の力を考えた上で「やりたい仕事」「したくない仕事」などを考えさせるのではなく、仕事に対するイメージから「やりたい仕事」「やりたくない仕事」「わからない」を選択させた。	・一つ一つの仕事についての興味・関心を中心に「やりたい仕事」「やりたくない仕事」「わからない」を選択することができ、仕事に対する夢や憧れをもちやすくなった。
・「〇〇先輩がしていた仕事は何だったかな」や「〇〇先輩がしていた仕事はやってみたいかな」など先輩を意識させた発問を多くし、先輩たちへの憧れの気持ちや自分も仕事をやってみたいという期待感が高まるような声かけをした。	・「〇〇先輩がしていたので僕もその仕事がしてみたいです」という発言をする生徒がいた。

オ) 授業研究会を受けて

- ・「やりたい仕事」だけでなく、「やりたくない仕事」を選ばせたのは考えが明確になりやすくよいと感じたという意見が出された。進路学習のステップのねらいの中にも「自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事に分かる」とある。また生徒たちの中には「やりたくない仕事」「わからない」という選択肢に強い抵抗感がある生徒がいることや何にでも「好き」「やりたい」と答えてしまい自分の気持ちを整理することが難しい生徒がいることから、このような自分の気持ちを考える学習は繰り返し行う必要があると考える。
- ・題材の「ここに関する目標」と本時の「ここに関する目標」が同じであるのはなぜかという指摘があった。題材の目標は、「現場実習に行く」ところまで高めていきたいと考えており、本時は「やってみたい(仕事)」のレベルで憧れ、期待感を高めることとして捉え、区別をしたつもりである。
- ・本時の目標から「工芸品」「軽作業」等まで仕事の分類を細かく考えさせることに難しさを感じたという指摘を受けた。施設等におけるグループ分けが分類の元になっていたが、本時の目標からすると、次の学習段階において、仕事内容だけでなく職場を選択していく段階で分類すべきだった。
- ・教材が分かりやすく生徒たちの意見がよく出ていた、まとめて生徒の色々な意見を紹介してはどうか、評価をもう少し具体的に書いた方がよいのでは、といった意見が出された。

②項目「将来の仕事」 題材「現場実習を振り返ろう」(2年生)

将来の仕事について、2年生では「広げる」ということをテーマにして学習を行っている。初めて現場実習を経験するため、様々な仕事の種類を経験する中で、その中から本当に好きな仕事は何か考えさせる。そして、3年生で進路先を決定する際に、本人が納得して決めることができるように活かせるように指導を行っている。

授業において、主に現場実習とその事前・事後学習を行っている。先程も述べたが、2年生では、初めて現場実習を経験する。6月、11月の実習の中で1日を通して仕事をするとはどのようなことであるかを実感し、卒業後のビジョンをよりはっきりともてるようになるための学習を行っている。事前学習では個人のめあてを決めさせて、実際にめあてを意識しながら作業に取り組むことを体験し、その感覚を実感させる。事後学習では、実習期間中に個人のめあてをどの程度達成できたのかを振り返ると共に、今後の課題をまとめてこれから努力をしていくことをはっきりとさせる。

今回の実践は、現場実習の事後学習の中に位置づけられている。題材計画を以下に示す。

- | |
|--------------------------------|
| ・現場実習のビデオを見て、自分の仕事を振り返ろう・・・5時間 |
| ・めあてを達成できたか、確認しよう・・・5時間 |
| ・現場実習全体の振り返りをしよう・・・3時間 |
| ・現場実習先の条件について知ろう・・・2時間 |
| ・後期現場実習でやってみたい仕事を考えよう・・・2時間 |
| ・現場実習報告会の練習をしよう・・・4時間 |
| ・現場実習報告会をしよう・・・2時間 |
| ・後期現場実習で行きたい実習先を考えよう・・・2時間(本時) |

ア) 題材における大切にしたい項目

現場実習事後学習では、自分自身の評価と、教師や実習先から客観的に見ての評価が異なり、生徒自身、現実を受け入れるためには時間が必要である。このように自己評価と他者評価との違いを知り、

自分のよい点と課題を認識させ、よりよい自分であるために自主的に行動しようと思う気持ちを育てることを大切にしたいと考えた。

そこで、本題材で大切にしたい項目として、「自己理解」、「自立心」を挙げ、それを中心に授業を展開することにした。

イ) 目標

【題材の目標】

(内容に関する目標)

○現場実習において自分ができたことや難しかったことを知り、今後の目標を立てることができる

(こころに関する目標)

○現場実習をやり遂げた達成感を感じる

○今後の目標について、日常生活の中で生かそうとする意欲を高める

題材の目標について、大切にしたい項目である「自己理解」「自立心」と関連させた内容にした。進路学習のステップ表のねらいより本題材に必要なものを取捨選択、目標を立てる際に反映させた。関連させたねらいは以下の通りである。

「自己理解」:	「自分の行きたい実習先が分かる」
	「自分の得意な仕事や苦手な仕事分かる CL63」
	「自己評価と他者評価の違いを知る」
	「実習先の評価を受け止める CL65」
	「自分の課題が分かる」
「自立心」:	「自分の仕事について、客観的に評価できる」
	「自分のすべきことを考えて取り組む CL4」

本題材では、現場実習を振り返る授業である。現場実習のしおりを使って、めあてをどの程度達成することができたかをできるだけ客観的に振り返りを行っていく。生徒の多くは、実習中自分は作業に励み、よくできたという評価をもつが、一方で、実習先の方から見ての評価が異なる場合がある。そのため、生徒がその違いを知り、今後、どのようなことを努力していくとよいのかを明確にもってもらうことを目標としたいと考えている。

【本時の目標】

(内容に関する目標)

○様々な情報を整理して、本当に自分がしたい仕事を知り、行きたい実習先をあげることができる

(こころに関する目標)

○好きな仕事やしたい仕事に分かり、次の実習に向けて前向きに取り組む意欲をもつ

本時について、大切にしたい項目である「自己選択」と関連させた内容にした。進路学習のステップにおいて関連したねらいを挙げると、「自分の得意な仕事や苦手な仕事を比較して選ぶ」「自分が行きたい実習先や進路先を選ぶ」である。生徒一人ひとりが、今まで得た多くの情報（1年の進路先見学、2年の現場実習で他の生徒が行った実習先の様子をビデオで見たり、話を聞いたりする等）より、今度、自分が本当にしたい仕事は何か、考えを深めていき、最終的に行きたい実習先を上げることができるようになってほしいと考えている。「こころに関する目標」では、選ぶという表現が出てきていないが、最終的には自分が好きな仕事に分かるという「自己理解」の内容、次の実習に向けて前向きに取り組むという「自立心」の内容も深く関係すると判断したため、2つのねらいの要素を入れた目標を設定した。

ウ) 授業の実施

学習活動	指導上の意図・留意点	備考
1. 本時の学習内容を知る ○ したい仕事について思い出す 2. 後期現場実習の仕事や実習先を考える ○ 自分がしたい仕事をあげる	○ 現場実習報告会を見て、様々な仕事があることを実感した。先週、あらかじめ選択した仕事に加えて、報告会で新しく挙げたものも含め、本当にその仕事をしてみたいのか、もう一度考える時間にする。 ○ 現場実習報告会において、先輩の仕事の様子が分かったことを話し、様々な仕事があったことを改めて実感できるようにしたい。 ○ 先週考えた「したい仕事」についてのプリントを出し、自分が挙げている仕事を見て、本当にこれでよいのか問いかけ、もう一度見直してみたい気持ちを高める。 ○ できる限り生徒が選択した「好きな仕事・やってみたい仕事」を次の現場実習先につなげることができるようにという基本姿勢で臨んだ。しかし、場合によっては、6月の実習と同じ、または本人の体力的に厳しい仕事内容を行う事業所を選択する生徒がいた。 ○ 部屋の内もしくは外の仕事、泊まりの有無等、前回考えた条件について、もう一度見直すことで、よりそれぞれに適した仕事を選択できるようにしたい。 ○ 現場実習報告会で見た仕事の中で、したいと挙げた仕事と、今まで挙げている仕事とどちらがよいのか、比較して考えるようにする。 ○ 複数を一度に比較することが難しい場合、2 択を繰り返したり、すべての項目を一度に出して、順番をつけたりするように促す。 ○ 自分が好きな仕事固定化しそうな生徒には、1 年生の3学期に挙げている好きな仕事のリストより他の作業内容も挙げていることに触れ、関心を広げるようにした。その際、本人が大切にしたい条件（送迎バス、給食、知っている先輩の有無等）になりそうなことも併せて説明を行うことで、安心して選択できるようにした。 ○ 本人の体力面と選択している仕事が合わない生徒には、おもりを持って移動する等の実体験をして、本当にできるかどうか考える。	前時のワークシート 高3の現場実習先一覧ワークシート ワークシート おもり平均台
○ したい仕事がある事業所を調べる	○ したい仕事ができる事業所について、1 年生のファイルを見て確認する。また、ファイルにない実習先は、進路のカードを見て確認する。 ○ 宿泊しながら実習をしたい希望をもっている生徒に対しては、グループホームや入所施設での生活について具体的に話して、本当に自分ができるか改めて考えるように促す。 ○ 仕事をイメージすることが難しい生徒に対して、仕事をしている場面の写真をみせることで、選択しやすいようにする。 ○ 前期現場実習で行った事業所を挙げている生徒に対して、様々な仕事	1 年次現場実習・校外実習ファイル 進路カード資料 写真

○ 事業所を絞る ○ 発表する 3. まとめをする ○ 話を聞く	を経験するために異なる仕事内容を選択するように促す。 ○ 同じ仕事内容で異なる事業所がある情報も提供する。その際、条件等の話も行い、どちらがよいか考えを深めることができるようにしたい。  ○ 報告会で見た仕事内容の中からしたい仕事が見つけることが難しい場合、本人の実態や好みに応じた仕事内容を提供することで、より自分がしたい仕事は何か考えるようにする。 ○ 調べた事業所の中から、後期の現場実習で行きたい所を3つ（多くて4つ）に絞り、本人の中での希望をはっきりさせる。 ○ 希望の順位をつけることが難しい生徒に対して、選択肢を2択もしくはすべて提示し、より行きたい事業所を選択できるようにする。 ○ 場合によっては、本人たちが知らない企業などを挙げて、仕事に挑戦してみたいか、葛藤させる。その際、写真や進路先カード（事業のことについて説明が書いてある教材）を提示しながら説明を加えていくことで、よりイメージをもちやすくする。 ○ 自分が選択した事業所について、一人一人発表する。  ○ 友達が選んだ場所をしっかりと聞くために、発表した後にはどの事業所を選択したか、聞いていた生徒に尋ねる。 ○ 事業所を選択した理由も述べることで、それぞれ選ぶ視点が異なることに注目させると共に、自分はこの事業所でよいことを改めて確認できるようにする。 ○ 後期現場実習先を決めるためには家の人の話を聴くことも大切であることを話し、夏休みの進路相談の際にもう一度話をして、決定することを伝える。 ○ 今回の報告会以外にも事業所はあるため、進路のボードやカードを見て、考えを深めることもよいことを伝え、より後期現場実習への意欲を高めたい。	
--	---	--

エ) 教師の働きかけと生徒の変容

教師の働きかけ	生徒の変容
・現場実習報告会で見た仕事の中で、したいと挙げた仕事と、今まで挙げていた仕事とどちらがよいか比較するように伝える。 ・養殖をしてみたい生徒が複数いた。重い荷物を持って移動をすることを実際に体験させることを通して、本当にやりたい仕事かどうか考えさせるようにした。	・先輩がしている仕事の名前を挙げたり、「〇くん（さん）がしていることをしたい」と具体的に挙げたりした。 ・養殖をしてみたいという気持ちは変わらないが、体験したことで純粋にしたい気持ちだけではなく、迷っている様子もみられるようになった。

・今まで見学及びビデオを通して見たことがない実習先については、進路カードや写真を使って、生徒がイメージをもちやすくした。 ・宿泊を伴う仕事については、宿泊についても詳しく説明をして、行きたいかどうか考えさせた。	→	・カードや写真を見ながら話を聴くことによって、イメージがもちやすくなり、やってみたい仕事として選択することにつながった生徒がいた。 ・「好きな時間にDVDが見られない」「工作ができない」という話を聴くとそれは嫌であることをはっきりと主張し、宿泊を伴わない仕事も選ぶことにつながった。
--	---	--

オ) 授業研究会を受けて

- ・本授業は、生徒にとっては現場実習の事後学習の一つとして学習を進めている。そのため、題材の位置づけを「現場実習を振り返ろう」とした。しかし「自分の進路について考えよう」という本授業の中身に近い学習内容の題材があるため、紛らわしい部分がある。「自分の進路について考えよう」は、「自分の長所、短所、適性などについて考える」「できること、できないことを考える」等、単純に実習先を決めるためだけの授業ではない。そのために、7月の授業をするとしていた「自分の進路について考えよう」の題材を通年で扱うようにして、「現場実習を振り返ろう」との住み分けを行うとよいのではないかと考えられる。また、「現場実習を振り返ろう」の学習内容に、次にやってみたい仕事や行きたい事業所を考え、選ぶという内容が加わると本題材の流れが分かりやすくなると思われる。
- ・教材の使い分けについて、写真カード、進路先カード、進路先見学のファイルを使用した。教材が多すぎて使い分けが分かりにくいという課題を指摘された。
- ・今回の授業では、一律の内容の中個別の支援を行うと授業が成立したが、支援を多く必要とする生徒がいる場合は座学でもあり、難しい一面があると考えられる。必要に応じて個別の課題を準備するなど、指導方法に工夫する必要があると考える。
- ・今回の授業では2年後期の実習先について一人で考え、まとめる時間を多く取りすぎたため、共同思考の時間を充分に取ることができなかった。しかし、授業では「自己選択」を大切にしたい項目として挙げているため、協同思考の場を設定するとして最後の発表の時間程度にとどめておいてよいと考える。

③項目「将来の仕事」 題材「行きたい進路について考えよう」（3年生）

高等部3年生は、これまで卒業後の進路先や生活について考えてきたことを、最終的に決定していく段階にある。そこで、指導形態「進路」の項目「将来の仕事」では、これまで2度経験した現場実習や3年生で経験する現場実習を通して自分が働きたい場所を選択し、決定する学習を年間指導の中心に据えて展開している。

本題材は、6月に3週間実施された前期現場実習を終えて振り返りをした後に行った。ここでは、これまでの実習先について自分のやりたいことや行きたい場所について整理をし、進路決定の最終確認となる後期現場実習先について、さらにはその先にある進路先について考えていく。その中でも本時は最後の授業であり、それまでの授業では実習先について写真や動画、実習をした際に使用したワークシートを見ながら、仕事内容や環境について振り返りをし、行きたいかどうか、その理由について考えたが、本時では実習先を比較しながら卒業後行きたい進路先や、やりたい仕事を順番に並べることを通して、自分の気持ちを整理する授業を行った。

ア) 題材における大切にしたい項目

本題材では、自分の行きたい進路先（やりたい仕事）や、行きたくない進路先（やりたくない仕事）を比較し選択することを大切にしている。選択するためには、これまで経験した実習先が好きか、自分に合っているのかなど、自分を見つめて理解を深める必要がある。

そこで、題材で大切にしたい項目として「自己選択」、「自己理解」を挙げ、それを中心に授業を展開することにした。

イ) 目標

本校では、「内容」の目標とは別に「こころ」の目標を設定するようにしている。しかし、今回の3年生の授業では「内容」と「こころ」が重なる部分が非常に大きかったので、「内容」と「こころ」に分けずに目標を設定することにした。また、3年生の生徒の実態が、職業訓練校や就労移行支援事業所への進路先を希望している生徒から支援を多く必要とする生徒まで幅広いために、目標はどの生徒にもあてはまるものを設定し、評価を実態ごとに分けて行うようにした。

【題材の目標】

○これまでに経験した実習先の作業内容や特徴を振り返り、行きたいどうか考える。

題材の目標は、進路学習のステップにおける題材との関連表から、以下の項目・ねらいに関連させたものにした。

「自己理解」：	「好き嫌いを言える C L 58」 「自分の得意なこと、苦手なことがわかる C L 63」
「自己選択」：	「したいことを選ぶ C L 68」 「選択肢のそれぞれの意味が分かって選ぶ C L 69」

目標設定には、さらに行きたい進路先ややりたい仕事について考える際に、記憶が新しいものや、その時の思いつきで漫然と選択することがないように、動画を見せたりしながら実習先や作業内容1つ1つについてしっかり思い出させ確認をしながら、自分の気持ちについて考えさせようと次のように設定した。

【本時の目標】

○これまで経験した実習先や作業内容を比較しながら行きたい進路先ややりたい仕事について整理をする。

本時の目標は進路学習のステップにおける題材の関連表の「大切にしたい項目」、「ねらい」は題材と同じものを選択し、さらに、それまで実習先や作業内容について考えてきたことを、他の実習先や作業内容と比較しながら考えさせるために次のように設定した。

ウ) 授業の実施

先にも述べたように、高等部3年生の生徒の実態は幅が広いので、実態に合わせて「自己選択」「自己理解」ができるように3つのグループに分けて学習活動を設定した。グループは、これまでの実習先を比較しながら行きたい順番について考える活動を行う生徒（Aグループ）、実習先ではなく、作業内容から好き／嫌いを考える活動を行う生徒（Bグループ）、手指を使いこれまで実習で行った写真を画用紙に貼る活動を行う生徒（Cグループ）である。

- ・ Aグループでは、実習先の名前、行きたいかどうか、その理由を記入したカードを用意し、そのカードをホワイトボードの上で操作することで理由を比較しながら並べられるようにした。
- ・ Bグループでは、これまでに実習で行った作業の写真カードを使用することで、作業のイメージが持てるようにした。複数の作業を行きたい順番に並べることが難しい生徒もいるので、2枚のカードからどちらが好きかを選び、選んだ作業の欄にマグネットを貼っていくことで、最終的にどの作業が好きか分かるようにした。
- ・ 3年生ではこれまでやりたい仕事ではなく行きたい進路先について考える授業を行ってきたが、現時点で、やりたい仕事についてはっきりしていない生徒がおり、繰り返し考えさせる必要がある生徒の実態を考慮し、Bグループでは1、2年生でも考えてきた仕事について考えさせるようにした。
- ・ Cグループの生徒は、これまで行った実習先の写真を貼る活動を通し、雰囲気など思い出させるようにした。
- ・ 他の生徒がどのような順番に並べたか、最後に伝えることで自分と友達の違いや友達の気持ちについても知ることができるようにした。

学習活動	指導上の意図・留意点	備考
1. 本時の内容を知る ○ 進路先を決める時に大切な気持ちについて振り返る ○ 前時までに考えた自分の気持ちについて振り返る	○ 進路先を決める時には3つの気持ちが大切な事を伝え、その3つとは何か問いかけることで自分の行きたい気持ちだけではなく、進路先や家族の意見も大切なことを思い出させる。 ○ 前時までに考えた、実習先ごとに自分の気持ち（行きたい・行きたくない・まよう）とその理由を書いたカードを配り、机上に置かせることで前時までに考えたことを一目で振り返られるようにする。 ○ 自分が卒業して行きたいところがあっても、定員などの理由から行けないこともあることを伝え、行きたいところを複数考えておくことが必要なことを知らせる。 ○ G、Hは前時までのワークシートにある写真を見せることで振りかえらせるようにする。 ○ 本グループは実態の幅が大きいので、3グループに分かれて活動をするようにする。	イラストカード（自分、両親、進路先の人） 実習先カード（気持ち、理由を記入したもの） 進路ファイル
2. これまでの実習先について比較しながら自分の気持ちを考えて整理する Aグループ （A、B、C、D） ○ これまでの実習先を比較しながらカードを行きたい順番に並べる	○ 各自にホワイトボードを配布し、その上でカードを操作しながら行きたい順に並べさせることで、行きたい順番を考えやすいようにする。 ○ 比較する時に迷っている生徒には、前時までのワークシートでその実習先がどのような場所だったかを振り返らせることで考えられるようにする。 ○ 行きたくないと答えていた実習先が、迷っている実習先よ	ホワイトボード 進路ファイル

B グループ (E、F、G) ○ これまで経験した作業内容を比較しながら、自分の好きな仕事について考える C グループ (H) ○ これまで経験した実習先について写真を貼りながら思い出す 3. まとめをする ○ 自分の気持ちをしっかり考え、伝えることの大切さを確認する	りも上位にある場合は、本当にその順番でよいのか問いかけて考えさせるようにする。 ○ Bはカードを並べる前に気持ちごとに分類させ、その中で順番を考えさせるようにすることで行きたい順番に並べることができるようにする。 ○ C、Dは上位に挙げている実習先の理由が、他の実習先にもあてはまらないか具体的な実習先の名前を挙げ、他の理由も引き出すようにする。  ○ ワークシートにある二つの写真から好きな作業に○をさせ、ホワイトボードの同じ作業の欄にマグネットを貼らせるようにする。この活動を繰り返す行することで最終的にホワイトボードに貼ったマグネットの数で好きな作業の順番がわかるようにする。 ○ 最後に好きな作業と実習先がつながるように、好きな作業がどこの実習先で経験できたかを確認するようにする。  ○ これまでの実習先の様子を写した写真を実習先ごとに画用紙に貼らせることで、実習先で経験した作業や雰囲気について思い出させるようにする。  ○ 数人の生徒のホワイトボードの内容を伝え、皆自分の気持ちを考えられたことを賞賛する。その気持ちを家族や進路先の人に伝えられることが大切であることを伝え、今月の進路相談で早速伝えるように話をする。	ワークシート ホワイトボード マグネット 色ペン 画用紙 (3 枚) 写真 (両面テープをつけたもの)
--	---	---

エ) 教師の働きかけと生徒の変容

教師の働きかけ	→	生徒の変容
・進路先は誰が決めるのか、一番行きたいところがもし行けない時はどうするか問いかける。		・自分がどこに行きたいか、しっかり意見を持っておくことや、一番行きたい所以外にも考えておく必要について感じていたようで、表情から楽しみにしている様子が窺える生徒もいれば、不安な表情を見せる生徒もいた。

・行きたい進路先のカードに記入した理由について一緒に確認しながらカードを操作させ、一つ一つ比較して順番をつけさせる。	→	・これまで、経験した進路先はどれも“行きたい”と答え、一番行きたい進路先の具体的な名前が出ていなかった生徒が、比較していく中で行きたい順番をつけることができた。
・“行きたい”進路先が見つからなくても、全て“行きたくない”ではなく、“迷う”場所ができたことを認め、その中から順番をつけるように促す。	→	・卒業後の不安から、進路先を決めることに消極的で、行きたい進路先が見つからなかった生徒が、行きたい進路先ではないが、行ってもいいと思う進路先について考えることができた。
・上位に挙げている進路先の理由について考えさせる中で、2番目の進路先で挙げていた理由が1番目の進路先にもあてはならないか問いかける。	→	・順番や理由について整理ができただけでなく、自分にとって大切な進路先の条件についても明らかになった。
・作業内容の写真カードを提示しながらどちらが好きか選ばせ、選んだ方にシールを貼って、どの作業が好きかをシールの量で視覚的に提示する。	→	・これまで好きな作業を尋ねると、一つの作業しか挙げず、それから広がりが見られなかった生徒も、これまで考えていた作業以外にどんな作業が好きか考えることができた。また、文字での理解が難しい生徒も、写真カードを使いながら自分の気持ちを表すことができた。

オ) 授業研究会を受けて

- ・授業研究会では、生徒同士のやりとりや協同思考の場が少ないという意見が出された。生徒の実態の幅が大きい中での一斉授業であったことや、生徒それぞれが自分の気持ちをしっかり見つめてほしいという教師の願いがあり、教師と生徒のやりとりが中心の授業になってしまった。どうすれば生徒同士の学びが深められるか考えていく必要がある。
- ・授業研究会では、生徒の実態の幅が大きい学級の場合、どのような授業が効果的かについて協議を行った。授業の内容によっては、学級での指導よりも実態別に指導をした方が効果的なものもあるので、現在高等部で年に3回実施している「縦割り進路」（3学年を実態ごとにグループに分け授業を行っている）の回数、内容を検討して増やしてはどうかという意見が多く出された。指導形態「進路」の学習では、進路について1年生で「知る」ところから3年生の「決める」ところまで、系統的に指導を行っているので学年ごとに学びの段階が異なっている。実態ごとにグループを分けて指導を行うと、今度は同じグループの中で学びの段階が異なる生徒達が学習を行うことになるので、「縦割り進路」で授業を行うには、3学年一緒に授業を行っても生徒それぞれの目標が達成されるか、扱う内容を熟考することが重要である。

4 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

①「進路学習のステップと題材との関連表」の作成

指導形態「進路」の指導内容を昨年度から検討してきた小・中学部とは異なり、高等部では以前より「進路学習」に取り組んできた。しかし、先に述べたように、小・中・高一貫した進路学習の在り方を検討するうえでは、再度、高等部の指導形態「進路」の指導内容を整理する必要があった。

まず第17次研究の教育課程の再編成では、「自己の形成」を柱として小・中・高一貫教育の理論的背景の確立を目指した。そこで、区分「いきがい」の指導形態「進路」が設定された。そして第18次研究では、「こころ」区分を、「4区分¹の指導内容の土台や中核」と位置づけた。今回の研究では、その区分「いきがい」の指導形態「進路」と「こころ」区分の関連を明確にすることで、小・中・高の一貫性を重視した視点にたった教育課程の検討が可能となる、と考えたのである。

また、すでに先行研究の中で確立されてきた進路学習の指導内容を、4区分を柱とした新教育課程への移行に合わせて再検討するという意義もあった。

そこで、まず高等部各学年の進路学習の内容を整理した一覧表を作成し、その後、全学部を通して検討してきた「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」及び「ねらい」との関連を確認した。その関連表（一部抜粋）が、表6である。

表6 進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の仕事」 2年 年間単元「将来の仕事を考えよう」					進路学習のステップと題材との関連表 高等部	
月	行	事等	題材	学習内容	大切にしたい項目	ねらい
4			進路学習について知ろう	○いろいろな仕事について知る	夢	選択した◎の内容
				○どんな仕事をしたいか考える	自立心	
				○いろいろな進路先があることを知る	自己理解	
				○2年生の進路学習の内容を知る	自己選択	やってみよう仕事がある(CLI12)
5	運動会	現場実習について知ろう		○2年生の現場実習の意味を知る	協調性	大人になって仕事をする気持ちをもつ
				○実習先のこと(場所、通勤方法、仕事など)について知る		
		いろいろな仕事をしてみよう		○作業にはいろいろなものがあることを知る		
				○校内でいろいろな作業に取り組む		自分のすべきことを考えて取り組む

②各学年における進路学習の指導内容の整理

上記の関連表の作成により、「進路学習のステップ」における「大切にしたい項目」について、各学年の指導内容のなかでどのように取り扱っているか、または不十分な点はないか、といったことについて高等部職員全体で検討し、共通理解することができた。関連表を見ると、「いつ」「どのような題材で」「どのような内容を」指導し、「どの項目に重点をおいて指導するのか」が、一目瞭然となった。そのうえで明らかになってきた課題（指導の時期や内容、グルーピングなど）をもとに、指導内容を整理することができた。その検討を通して改めて、生徒の様々な実態に対応するグループ別学習の必要性が浮き彫りになってきた。

また、関連表の作成と合わせて行った授業実践から、「進路学習のステップ」の「ねらい」の文言の妥当性についても検討することができた。

¹ 4区分とは、第17次研究で整理した本校の教育課程の柱で、「くらし」「いきがい」「まなび」「からだ」の4つのまとまりをいう。

③学年間の一貫性、継続性、系統性を意識した授業実践

これまでの進路学習の実践のなかでも、高等部1年生は「知る」、高等部2年生は「広げる」、高等部3年生は「決める」というキーワードを用い、系統性のある指導をねらってきた。しかしさらに、全学年を網羅したこの関連表を見ることで、各学年で重点的に扱う「大切にしたい項目」について全学年を通して比較することができた。例えば、高等部1年生では「夢」の項目に重点をおいていることが多いなど、学年ごとの「大切にしたい項目」や他学年の学習内容との相互の関連性について、確認することができたのである。

その確認作業を通して、全学年の関連表（表7）ができたが、これまでの過程をふまえ、生徒たちにとって一貫性のある学習につながるように意図した授業実践を、高等部職員一人ひとりが意識できるようになってきたことも、大きな成果の一つであった。「3 研究の経過」で報告しているように、「進路学習のステップ」の「大切にしたい項目」や「ねらい」をより意識した指導上の留意点や教材の工夫の在り方を明らかにすることができたのである。

表7 全学年の関連表

項目「将来の仕事」 全学年									
月 行		1年				2年			
		ステップ				ステップ			
		夢	自立心	進路先	協働性	夢	自立心	進路先	協働性
4		単元(網かけ)/題材				単元(網かけ)/題材			
		「いろいろな仕事を知ろう」				「将来の仕事を考えよう」			
		進路学習について知ろう				進路学習について知ろう			
5	運動会	働くことについて考えよう				現場実習について知ろう			
		進路情報について知ろう				いろいろな仕事をしてみよう			
						現場実習について考えよう			
6	校外・現場実習	校外実習について知ろう				仕事に挑戦しよう			
		実習をがんばろう				進路決定をめざして仕事をしよう			
		見学する実習先のことを調べよう							
7		先輩の実習先を見学しよう				現場実習を振り返ろう			
		実習先を見学しよう				自分の進路について考えよう			
		進路先見学の様子について話し合おう				みんなで進路先見学しよう			

(2) 今後の課題

今回の研究により、指導形態「進路」の指導内容やねらいの整理が進んだが、今後の更なる充実に向けて、取り組むべき課題は、以下のとおりである。

①生徒の発達段階やニーズに応じたグループ別学習の設定

グループ別学習については、これまでも「縦割り進路」として取り組んできたが、その内容については、「時期的に妥当なもの」や「毎年繰り返し学習することが効果的なもの」を指導内容からピックアップしていたに過ぎなかった。運用面でも、2005年までは年に2単位時間程度の設定であり、年度ごとの反省により現在は、4月のオリエンテーションを除き、各学期に2単位時間ずつの計画となっていた。

今回の指導内容の整理によって、「グループ別による学習が、学年毎の学習より効果的」と考えられる内容が明らかになった。そこで、生徒の発達段階や希望の進路先等のニーズに対応して学習グループを分け、「将来の仕事」や「将来の生活」のそれぞれのバランスを考えながら、年間を通して取り組める内容を計画的に設定していくようにしたい。

②より支援が必要な生徒の進路学習の内容について

先行研究から、本校では、「自己の形成」という視点で高等部の時期を「客観的な自己の形成期」ととらえ、「客観的な自己評価や生き方のイメージをもち、自立的な社会生活の場への積極的な参加を志向する自己」と定義づけている。そのとらえを基礎としつつも、幅広い生徒の実態の中でも、特により支援が必要な生徒にとっての進路学習の内容やねらいの在り方を、明確にしておく必要がある。

ここで、キャリア教育の視点が、社会的な関係性の中で「人間が自己の役割（職業的・余暇的・家庭的・市民的）を発揮していく力」を育むことの重要性を示していることに注目したい。本校でも区分「いきがい」の中の指導形態「進路」として改めてその位置づけを明確にしているように、進路学習は、単に「職業的自立」を目指すものではなく、一人ひとりの「豊かな生き方」を追求するものであり、障害の程度に関わらず、その機会を提供されるべきものである。

しかし、今回の授業実践では、より支援が必要な生徒に、「自分の将来の生活について考える」といった「考えたり、調べたり、考えをまとめて発表したりする」学習をどのような体験をとおして味わわせるのか、また、「自分の将来像」をどのようにしてイメージさせていくのか、という点が課題として残った。

そこで今後は、進路学習の内容やねらいを、生徒の認知や理解の仕方に配慮しながら年間を通して計画的に設定し、「進路」の時間を、生徒一人ひとりにとってより充実した学習の時間としていきたい。例えば、「進路学習のステップ」の中の「情緒の安定」を中心的な項目とした授業も考えられるであろう。また、他の指導形態における代替（「進路」としてではなく「余暇」として授業を行うなど）という考え方も含め、広い視野から整理していくようにしたい。

③指導内容の精選を通しての実践と検証（指導内容表 Ver. 2²/モデルカリキュラム³/単元別指導内容計画表⁴）

今回の研究を通して整理された進路学習の指導内容については、まず年間を通して取り組み、実践をふまえた反省を行うことで、再度その内容を精選するという作業が必要である。そのために、指導内容表 Ver.2 やモデルカリキュラムを部分的に改訂し、それを授業に反映することができるよう、単元別指導内容計画表でも検討を加えていきたい。特に、「グループ別学習」の形態で取り組む内容やねらいに関しては、モデルカリキュラムができていない現状なので、早急に整理できるようにしたい。

④小・中学部の進路学習との関連についての検証

卒業生の A さんは、第一希望の事業所の定員がいっぱいで、やむなく別の行きたい事業所に進路を決定した。卒業前には、後輩たちにむけ、「進路先は、一つでなく、いくつか行きたいところを考えた方が良いと思う」と語った。卒業生の B さんは、第一希望の事業所に進路を決定することができたが、通勤してしばらくたった頃、家庭で、「生きていて、良かった。『〇〇の里』に行けて、良かった。」と語った。また卒業生の C さんは、卒業後、小さい頃からの夢であった会社に就職した。しかし、適応が難しくなり、1年後に退職した。そしてその後は、職業訓練校での訓練を受け、現在は新たな就職先で、生き生きと働いている。

卒業生の姿からも見えてくるように、高等部では、進路学習において、「自分の進路は自分で決める」ということをおさえてきた。卒業生の殆どが、自分の進路について意思表示をしたり、自己選択をしたりしており、高等部の進路学習の成果は、確実に実っているものととらえている。

しかし、生徒の中には、「卒業後の進路先」というイメージを持つことが難しい生徒や自分の気持ちよりも周囲の意見や反応を意識して、「〇〇に行きたい」と言う生徒もいる。また、「〇〇が好き」と感じていても、表現することが難しい生徒もいる。知的障害のある生徒たちが、好き・嫌いや適性など自分のことを理解したり、複数の情報から自分にとって大切なものを選択したり、それを人に伝えるなどの行動に移したりしていくためには、小学部や中学部から少しずつそういった経験を積み重ねていくことが重要である。

今回の研究を通して、小・中・高における進路学習の大まかな骨組みができたが、さらに、学部間での系統性や他の指導形態との関連について、さらに細かにみていく必要がある。

² 指導内容表 ver.2 とは、「調理」等の項目ごとに小・中・高の指導内容を表したものである。

³ モデルカリキュラムとは、各学部、学年（学習グループ）ごとに、その目標や実施時期、指導内容等を表したものである。

⁴ 単元別指導内容計画表とは、単元ごとに計画や反省を行い、指導内容や指導の充実、教育課程の改善に活かすものである。

本校に入学した生徒が、3年間、あるいは6年間、12年間の学校生活を通して、「卒業後の自分の進路（生き方）を自己決定する」という社会人としての一步を踏み出すまでのビジョンをまずは描けるよう、またさらにその先では、社会の一員としての生活を送りながら、人生の節目におとずれる転機にも変わらず自分の生き方を選択・決定できるよう、小・中・高で一貫した指導理念をもち、今後も研究を深めていくようにしたい。

《引用・参考文献》

- 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所（2011）：「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック キャリア教育の視点による教育課程及び授業の改善、個別の教育支援計画に基づく支援の充実のために」 ジアース教育新社
- 全国特別支援学校知的障害教育校長会（2010）：「特別支援教育のためのキャリア教育の手引き」 ジアース教育新社
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2004）研究紀要 第16集 教育課程の再編成 その2 ー実践的課題研究と卒業生の実態調査をととして、自立と社会参加をめざした教育課程再編成の手がかりを探るー
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2007）研究紀要 第17集 教育課程の再編成 その3 ー自己の形成へつながる教育課程の創造ー
- 長崎大学教育学部附属特別支援学校（2009）研究紀要 第18集 自己を育む授業実践ー「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計ー

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の仕事」1年 年間単元「いろいろな仕事を知ろう」

高等部

月	行事等	題材	学習内容	大切にしたい項目					ねらい
4		進路学習について知ろう	○進路に興味をもつ ○1年生の進路学習の内容を知る	夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	選択した◎の内容
				◎	○				先輩の実習の様子を知る(CL10)
5	運動会	働くことについて考えよう	○いろいろな職業を知る ○働く人の一日を知る ○どんな仕事をしたいか考える	◎		○			やってみたい仕事がある(CL12)
		進路情報について知ろう	○どんな仕事をしたいか考える ○企業就労、福祉的就労、進学の違いを知る ○通所と入所の違いを知る	◎					やってみたい仕事がある(CL12)
6	校外・現場実習	校外実習について知ろう	○校外実習の内容を知り、実習に対する意欲をもつ	◎					自分のめあてを考える
		実習をがんばろう	○めあてを意識して仕事をする	◎		○			
		実習を振り返ろう	○ビデオを見て実習を思い出す ○めあてについて自分で評価する ○「つづける」など、5つの働く力がついたか考える ○自分の課題を知る		◎	○			しおりなどを見て自分のめあてを考える
		見学する実習先のことを調べよう	○見学する実習先を調べる	◎					見てみたい職場や施設がある(CL13)
		先輩の実習先を見学しよう	○先輩の実習先の名前を知る ○実習先を見学する ○見学した感想を話し合う	◎					先輩の実習の様子を知る(CL10)
7		実習先を見学しよう	○実習先を見学する	◎					先輩の実習の様子を知る(CL10)
		進路先見学の様子について話し合おう	○進路先見学のことを振り返る	◎					先輩の実習の様子を知る(CL10)
		自分の進路について話し合おう	○2年生で経験したい現場実習先を考える	◎		○			やってみたい仕事がある(CL12)
9									
10	文化祭								
11	校外・現場実習	実習をがんばろう	○めあてを意識して仕事をする	◎		○			自分のすべきことを考えて取り組む
		実習を振り返ろう	○ビデオを見て実習を思い出す ○めあてについて自分で評価する ○「つづける」など、5つの働く力がついたか考える ○自分の課題を知る		◎	○			しおりなどを見て自分の次のめあてを考える
		見学する実習先のことを調べよう	○見学する実習先を調べる	◎					見てみたい職場や施設がある(CL13)
		先輩の実習先を見学しよう	○先輩の実習先の名前を知る ○実習先を見学する ○見学した感想を話し合う	◎					先輩の実習の様子を知る(CL10)
12		自分の進路について話し合おう	○2年生で経験したい現場実習先を考える	◎		○			やってみたい仕事がある(CL12)
1		これまで進路について学習したことを思い出そう	○これまでに進路に関して学習してきた内容を振り返る		○	◎			自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事に分かる(cl58、63)
2									
3									

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の生活」1年 年間単元「いろいろな生活を知ろう」

高等部

月	行 事等	題材	学習内容	大切にしたい項目						ねらい
通 年		今とこれからの生活を考えよう	○今までの成長を振り返り、今後の生活について知る	夢	自 立 心	自 己 理 解	自 己 選 択	協 調 性	社 会 規 範	選択した◎の内容
					○	◎				今までの自分の成長を知り、大人になっていく自分に気づく(CL62)
4										
5	運動会									
6	校外・現場実習									
7										
9		自分について知ろう	○自分について知る ○友達の得意、苦手について話し合う ○友達の評価と自己評価の違いを知る ○自分の課題がわかる ○障害について知る ○療育手帳について知る			◎		○		できること、できないことが分かる(得意、不得意) (CL63)
10	文化祭									
11	校外・現場実習									
12										
1										
2 ～ 3		自分の進路について話し合おう	○先輩のライフステージを知る ○2年生で経験したい現場実習先を考える	○			◎			いろいろな生活の仕方を知り、自分が何を したいのかを考える(CL69、70)

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の仕事」 2年 年間単元「将来の仕事を考えよう」										高等部
月	行	事等	題材	学習内容	大切にしたい項目					ねらい
4			進路学習について知ろう	○いろいろな仕事について知る ○どんな仕事をしたいか考える ○いろいろな進路先があることを知る ○2年生の進路学習の内容を知る	夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	選択した◎の内容
					◎	○				やってみたい仕事がある(CL12)
5	運動会	現場実習について知ろう	○2年生の現場実習の意味を知る ○実習先のこと(場所、通勤方法、仕事など)について知る	○	◎					大人になって仕事をする気持ちをもつ
		いろいろな仕事をしてみよう	○作業にはいろいろなものがあることを知る ○校内でいろいろな作業に取り組む ○自分の課題やがんばらなければならないことを知る		◎					自分のすべきことを考えて取り組む
6	校外・現場実習	仕事に挑戦しよう	○自分のめあてを意識して仕事をする ○実習先の人と正しい接し方を知り、それに慣れる		◎	○				自分のすべきことを考えて取り組む
		現場実習を振り返ろう	○ビデオを見て実習の様子を客観的に見る ○自分のめあての達成状況を知る ○現場実習でがんばったことや難しかったことを考える ○次の現場実習に向けての課題を考える			○	◎			実習先の評価を受け止める
7		自分の進路について考えよう	○自分の長所、短所、適性などについて考える ○自分のできること、できないことなどについて考える ○自分の行きたい進路先ややってみたい仕事を考える	◎		○				やってみたい仕事がある
		みんなで進路先見学をしよう	○見学先の仕事がどんなものかを知る ○自分の長所・短所・適性から見学先の仕事やれるかどうかを考える				◎	○		自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
9										
10	文化祭	現場実習について知ろう	○実習先のこと(場所、通勤方法、仕事など)について知る ○後期の現場実習の意味を知る	○	◎					大人になって仕事をする気持ちをもつ
		いろいろな仕事をしてみよう	○作業にはいろいろなものがあることを知る ○校内でいろいろな作業に取り組む ○自分の課題やがんばらなければならないことを知る		◎					自分のすべきことを考えて取り組む
11	校外・現場実習	仕事に挑戦しよう	○自分のめあてを意識して仕事をする ○実習先の人と正しい接し方を知り、それに慣れる		◎	○				自分のすべきことを考えて取り組む
12		現場実習を振り返ろう	○ビデオを見て実習の様子を客観的に見る ○自分のめあての達成状況を知る ○現場実習でがんばったことや難しかったことを考える ○次の現場実習に向けての課題を考える			○	◎			実習先の評価を受け止める(CL65)
1		行きたい進路先を調べよう	○卒業生の進路先を参考にして、行きたい進路先を考える ○行きたい進路先の仕事内容や通勤方法などを調べる ○進路先見学の計画を立てる	◎						やってみたい仕事がある(CL12)
		高3の現場実習先を考えよう	○見学した内容についてまとめて、進路先を考える ○高3の現場実習で行きたい実習先を発表する				◎	○		自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
2		高3で行きたい進路先を訪ねてみよう	○進路先を見学する ○案内する人の話をよく聞いたり、メモしたりする ○どんな仕事をしているか、どんな人がいるか、 どんな生活をしているかなどをよく見る ○勤務時間や給料など、聞きたいことを尋ねてメモする	○				◎		自分の得意な(したい)仕事や苦手な(したくない) 仕事を比較して選ぶ(CL69)
3										

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の生活」 2年 年間単元「将来の生活を考えよう」

高等部

月	行事等	題材	学習内容	ステップ						ねらい
				夢	自立心	理解自己	選択自己	協調性	規範性	
通年		高校生らしい生活や社会人としての生活を考えよう	○決まりを守ることの大切さを知る ○気持ちのよい挨拶・返事をする ○目上の人に丁寧な言葉遣いをする					○ ◎		未来の自分を考える(態度や接し方)
			○身なりを整える ○自分の体を清潔にする ○髭剃りや化粧の仕方について知る		◎			○		大人になる気持ちをもつ
通年		将来の生活について考えよう	○「福祉の手引き」について知る ○日中受け入れ制度について知る ○デイサービスについて知る ○通勤寮やグループホームの生活について知る		○		◎			いろいろな生活の仕方を知り、自分が何をしたいかを考える(CL69、70)
4・3		自分のことについて考えよう	○1年間の自分の成長を振り返る ○自分の長所や短所(得意・不得意)を知る ○自分の限界や可能性を知る ○自分の障害について知る		○	◎				今までの自分の成長を知り、大人になっていく自分に気づく できること、できないことが分かる 自分の障害について知る
9										
10	文化祭									
11	校外・現場実習									
12										
1		卒業後の進路について考えよう	○企業就労・福祉的就労・進学の違いを知る ○自分はどの進路に進みたいか考える ○どのような働く場を経験したいか考える ○どのような生活の場に住みたいか考える	◎	○					卒業後の自分の姿を言う
2										
3		自分のことについて考えよう	○1年間の自分の成長を振り返る ○自分の長所や短所(得意・不得意)を知る ○自分の限界や可能性を知る ○自分の障害について知る		○	◎				今までの自分の成長を知り、大人になっていく自分に気づく できること、できないことが分かる 自分の障害について知る
3		自分の卒業後の生活について考えよう	○卒業後まであと1年しか残っていないことを知る ○先輩の仕事や生活について知る ○自分の将来の仕事や生活について考える	○			◎			いろいろな生活の仕方を知り、自分が何をしたいかを考える(CL69、70)

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の仕事」 3年 年間単元「進路を選んだり決めたりしよう」

高等部

項目「将来の仕事」 3年 中間半九「進路を選んだり決めたりしよう」				大切にしたい項目					ねらい	
月	行	事等	題材	学習内容	夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	
4										選択した◎の内容
5	運動会	進路学習について知ろう	○進路決定に対する意欲をもつ ○3年生の進路学習の内容を知る ○進路決定の手順を知る		○	◎				自分の行きたい実習先の条件が分かる
		現場実習について考えよう	○前期現場実習の意味について考えよう ○自分のめあてを意識する ○めあてを理解して模擬作業をする		○	◎				自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
6	校外・現場実習	進路決定をめざして仕事をしよう	○めあてを意識して実習をする		◎				○	大人になって仕事をする気持ちをもつ
7		前期現場実習を振り返ろう	○実習の反省をし、実習先の評価を知る		○	◎				自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
		行きたい進路先について考えよう	○これまで取り組んだ現場実習を振り返る ○経験した実習先の中から行きたい進路先を考える			○	◎			自分の得意な(したい)仕事や苦手な(したくない) 仕事を比較して選ぶ(CL69)
9										
10		現場実習について考えよう	○後期現場実習の意味について考えよう ○自分のめあてを意識する ○めあてを理解して模擬作業をする		○	◎				自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
11	校外・現場実習	進路決定をめざして仕事をしよう	○めあてを意識して実習をする		○				◎	役割を理解して協力する(仕事に取り組む)
12		現場実習を振り返ろう	○実習の反省をし、実習先の評価を知る		○		◎			自分の得意(好き)な仕事や苦手(嫌い)な仕事 が分かる(CL58、63)
1 2 5 2		自分を見つめよう	○卒業して行きたいというはっきりした自分の気持ち をもつ ○希望進路先で合格をもらうために、今後自分が頑 張ることを理解する				○	◎		自分の得意な(したい)仕事や苦手な(したくない) 仕事を比較して選ぶ(CL69)
3										

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

項目「将来の生活」 3年 年間単元「自分の将来の暮らしについて考えよう」

高等部

明日・将来の生活」をテーマに、自分の将来の人生について考えよう											高等学校	
月	行	事等	題材	学習内容	ステップ						ねらい	
					夢	自立心	自己理解	自己選択	協調性	社会規範		
4		プロフィール表を作ろう									選択した◎の内容	
	○プロフィール表の内容を考える ○高校3年間の自分の成長を見つめる				○	◎				今までの自分の成長を知り、大人になっていく自分に気づく（CL62）		
通年		自分を見つめよう		○進路先の生活が自分の生活の場になるか考える ○先輩の生活から自分の生活を考える ○余暇の過ごし方について考える ○卒業して行きたいというはっきりした自分の気持ちをもつ ○希望進路先で合格をもらうために、今後自分が頑張ることを理解する		○		◎			いろいろな生活の仕方を知り、自分が何をしたいかを考える（CL69、70）	
3学期		卒業後の生活について考えよう		○家族と話し合うことの大切さを知る		○			◎		社会人としてきまりを守ることと周囲の人と仲良くする	
3学期		社会人としての心構えをもとう		○自分の進路先の見通しやシステムについて知る ○仕事をする上で必要な心構えを知る			○		◎		社会人としてきまりを守ることと周囲の人と仲良くする	
3学期		将来困ることを考え、相談できるところを調べよう		○卒業後相談できる所を調べる ○困った時の具体例を考える ○相談できる所を知る		○	◎				課題（目標）を見つけ、自分の力で解決しようとする	

《参考資料》

進路学習のステップと題材との関連表

高等学校

項目「将来の生活」全学年																		
月 行		1年			2年				3年				ステップ					
単元	単元(細かけ)／題材	夢	自己理解	自己選択	協調性	社会規範	単元(細かけ)／題材	夢	自己理解	自己選択	協調性	社会規範	単元(細かけ)／題材	夢	自己理解	自己選択	協調性	社会規範
通年	「いろいろな生活を知ろう」 今とこれからの生活を考えよう						「将来の生活を考えよう」						「自分の将来のくらしについて考えよう」 プロフィール表を作ろう					
5	運動会						通年 高校生活らしい生活や社会人としての生活を考えよう						通年 自分を見つめよう					
6	校外・現場実習						通年 社会人の身だしなみについて考えよう						3学期 卒業後の生活について考えよう					
7							通年 将来の生活について考えよう						3学期 社会人としての心構えをもとう					
9							4・3 自分のことについて考えよう						3学期 将来困ることを考え、相談できるところを調べよう					
10	文化祭												3学期 社会人としての心構えをもとう					
11	校外・現場実習												3学期 将来困ることを考え、相談できるところを調べよう					
12																		
1							卒業後の進路について考えよう											
2							自分のことについて考えよう											
3							自分の卒業後の生活について考えよう											

進路学習のステップと題材との関連表

月	行事等	1年			2年			3年			高等部		
		単元(網かけ)／題材	参	自立心	協自調性	単元(網かけ)／題材	参	自立心	協自調性	単元(網かけ)／題材	参	自立心	協自調性
4		「いろいろな仕事を知らう」 進路学習について知らう	◎	○		「将来の仕事を考えよう」 進路学習について知らう	◎	○		「進路を選んで決めたりしよう」			
5	運動会	働くことについて考えよう	◎	○		現場実習について知らう	○	◎		進路学習について知らう		○	◎
		進路情報について知らう	◎			いろいろな仕事をしてみよう	◎	◎		現場実習について考えよう		○	◎
6	校外・現場実習	校外実習について知らう 実習をがんばろう		◎		仕事に挑戦しよう		◎		進路決定をめざして仕事をしよう		◎	○
		見学する実習先のことを調べよう	◎										
		先輩の実習先を見学しよう	◎			現場実習を振り返ろう		○	◎				
7		実習先を見学しよう	◎			自分の進路について考えよう	◎					○	◎
		進路先見学の様子について話し合おう	◎	○		みんなまで進路先見学をしよう		◎	○	現場実習を振り返ろう			
9		自分の進路について話し合おう	◎	○						行きたい進路先について考えよう			○ ◎
10	文化祭					現場実習について知らう	○	◎					
						いろいろな仕事をしてみよう		◎		現場実習について考えよう		○	◎
11	校外・現場実習	実習をがんばろう 見学する実習先のことを調べよう	◎	◎		仕事に挑戦しよう		◎	○	進路決定をめざして仕事をしよう		○	◎
		先輩の実習先を見学しよう	◎										
		現場実習を振り返ろう		◎	○								
12		自分の進路について話し合おう	◎	○		現場実習を振り返ろう		○	◎	現場実習を振り返ろう		○	◎
1						行きたい進路先を調べよう	◎			自分を見つめよう		○	◎
						高3の現場実習先を考えよう		◎	○				
2						高3で行きたい進路先を訪ねてみよう	○		◎				
3													

V 個人研究及び部研究以外の取り組み

小中高一貫した性教育「からだの学習」の実践

長崎大学教育学部附属特別支援学校 教諭 田中真季子 遠藤 茂 野口 誠 田口眞弓

Key Word：一貫 自己肯定感 誕生や成長の喜び 性教育のニーズ 保護者への啓発

(はじめに)

本校では、平成元年度より、「からだの学習」に取り組み始め、20 数年、継続した取り組みを行っている。取り組み始めた頃は、思春期を迎える中学部のみでの実践であったが、性に関する情報の氾濫や性犯罪、性体験の低年齢化など性に関することが社会問題として取り上げられることが多くなり、性教育の在り方についても様々な意見が交わされ、中学部だけでなく、小学部や高等部においてもその必要性が語られるようになった。

本校では、平成 19 年度に教育課程の再編成を行った際に小中高で一貫した指導形態や内容等を設定した。実施に関しては、各部で年間の指導計画を作成して取り組むようにしている。

前回 18 次研究の紀要において、中学部の実践について紹介したが、今回は、小中高の一貫した指導に焦点を当て紹介したい。

(目的)

小中高の「からだの学習」の目標は以下のとおりである。

<小学部>

- 自分の身体に目を向け、成長を感じたり、清潔にしたりする気持ちや知識・技能を育てる。

<中学部・高等部>

- 自分の身体やその変化に見通しをもちながら、大人へなることへの期待感を高める。
- 誕生や成長の喜び、命の大切さを知り、自分や周囲の人もかけがえのない存在であることを知り、自己肯定感をもつ。
- 身体の構造及び機能、男女の違い、第二性徴、性器の仕組み等、基本的な身体の知識を身につけることで、自分の身体を客観的に捉える力を育み、自己意識を高める。
- 清潔や身だしなみ等の生活習慣や男女間の協力、異性との対人関係等について理解を深め、健康で安全な生活を営もうとする態度を身につける。(中学部)
- 健康な食生活や運動、清潔や身だしなみ等について理解を深め、生涯を通じて自らの健康を維持管理する力を身につける。(高等部)

(方法)

各学部における授業実践は以下のような方法で行っている。

i) 保護者への啓発とアンケートの実施

性に関する学習はプライベートな部分が多く、保

護者との共通理解や協力が必要である。「からだの学習」を始めるにあたり、中学部、高等部においては、年 1 回アンケートを実施している。

ii) 生徒の実態把握

小学部においては、低学年、中学年、高学年でのグループで実施。実態については、担当の教師が前年度の様子や保護者からの聞き取り等で把握するようにしている。

中学部は 4～5 名のグループ学習、高等部は 3 名～11 名のグループ学習形態で行うため、個別に実態を把握し、生徒の発達の状況や生活経験などを加味しグループ編成を行う。

iv) 授業

年間を通し、小学部：10 単位時間、中学部：14 単位時間、高等部：15 単位時間 を実施。(単位時間は 40 分) 中学部、高等部では、模擬誘拐等の校外学習も含まれている。

《実践内容》

学習内容(題材)については以下のとおりである。学部や発達に応じて内容(題材)は設定するようにしている。

「からだを知ろう」「男女の違い」「大人と子どものからだちがい」「清潔なからだ(排泄の仕方、トイレマナー、からだ洗い、手洗い・うがい)」「誘拐や性被害にあわないために(人間関係、ロールプレイングの実施)」「性器の仕組みと働き(男子：マスターベーション、女子：月経)」「赤ちゃん誕生」「健康なからだ(保健室利用、健康と栄養)」「好きな人ができたら」「リラクゼーション(マッサージ、足湯)」「誕生日」「医療機関の利用(大学保健管理センターでのロールプレイング)」「模擬誘拐(大学生による模擬誘拐の経験)」「ブラッシング指導」

(結果と考察)

小中高一貫した「からだの学習」は、本校の特色として定着し、体系化された授業や系統的な内容を実践することができてきている。教材や教具について学校の財産として蓄積され引き継がれている現状である。また、このような継続した取り組みは我々教師にとっても性教育の必要性を共通理解し、意識や実践力を高める場となっている。今後も児童生徒の実態や保護者の願い、社会状況などを踏まえ、よりよい「からだの学習」が実践できるように、これからも小中高の連携や情報交換などを深め、実践していければと考える。

就学前幼児・児童及びその家族に対する地域支援の役割

～「のびのび教室」の取り組みから～

長崎大学教育学部附属特別支援学校地域支援部門 教諭 堀克彦・末次明子・坂田信吾・田中真季子・上田尚子

Key Word : 教育相談 就学相談 のびのび教室

1 はじめに

本校では、平成10年度より「幼児教育相談室」を開設し、平成14年度より、対象者を幼児及び小学生に広げて相談活動を実施している。現在は教育支援部地域支援部門において、教育相談教室「のびのび教室」を年に10回ほど計画、実施している。子どもの家庭・学校での悩みについての相談や情報交換、のびのび教室での集団活動を実施することを目的に、就学前、または就学後の子どもたちを対象に実施している。

平成22年度は、教育支援部地域支援部門の重点方針の一つに、「のびのび教室の円滑な運営を図る」とある。平成22年度ののびのび教室の実施は、のべ12回であった。ここに、平成22年度ののびのび教室の運営や活動状況、相談の概要などを報告する。

2 取り組みの実際

1) のびのび教室の実施時期と利用児童数

	①	②	③	④	⑤	⑥
実施時期	5.26	6.17	7.7	7.28	7.29	7.30
児童数（人）	10	5	8	10	10	5
（未就学児）	(2)	(2)	(0)	(1)	(1)	(0)

	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
実施時期	9.24	10.14	11.11	11.25	1.20	2.16
児童数（人）	3	6	1	8	5	8
（未就学児）	(2)	(0)	(0)	(1)	(1)	(0)

※④⑤⑥は、夏季教育相談週間として設定している。

※未就学児は、精神発達遅滞、自閉症児が多い。

※就学児では、ダウン症、自閉症に加え、広汎性発達障害、アスペルガー症候群、学習障害の利用が目立った。

2) のびのび教室の活動内容

昨年度の反省より、対象児の年齢を制限して活動を計画した。(②⑦⑨⑪)は未就学児～小学2年生、③⑧⑩⑫は小学3～6年生) そのため、活動内容の工夫や相談対応の充実が図りやすくなった。平成23年度の主な活動内容は、以下の通りである。

- ・始めの歌
- ・運動遊び（サーキット運動・玉入れ）
- ・音楽遊び

- ・感触遊び（水、新聞紙）
- ・パラシュート（掛け声に合わせて動かす・上に乗ったり、中に入ったりして遊ぶ）
- ・創作活動（紙飛行機・ぶんぶんゴマ）
- ・自由遊び

3) 相談内容と対象児童の年齢

- 「就学・進路について」→年長・小学校高学年
- 「就学に関する情報収集」→年少・年中
- 「学校生活・学校との連携」→小学校低学年
- 「学習面について」→小学校中学年・高学年
- ※「家庭における療育」「問題行動」については、年齢別の差は見られないものの、最も多い相談内容であった。

4) 利用者のニーズ（アンケートによる把握）

○児童への支援

- 「対人関係や社会性にかかわる集団活動」
- 「発達の評価」
- 「個別の学習支援」 など

○保護者への支援

- 「就学・進学に関する情報提供」
- 「障害に応じた具体的な助言」
- 「保護者同士の情報交換」
- 「研修会・学習会の実施」 など

3 まとめ

地域支援の充実を図るため、学校外の幼児・児童に本校を解放し、のびのび教室を開いている実践を報告した。

保護者にとって、「のびのび教室」は本校の就学につながるケースもあるものの、子どもの発達や成長を専門的な立場にある第三者と共に見守っていけるという安心感を得られる場となっている。

現在、「のびのび教室」の取り組みの一環として、大学教員による相談会や子育て学習会なども実施している。このような取り組みを含め、今後もニーズを把握しながら地域支援活動を充実していきたいと考えている。

最後に、一年間を通して、ボランティアとして来ていただいた長崎大学の学生に、ここに感謝の意を表し、お礼にかえさせていただきます。

ワークシートによる知的障害児の認知的力や発音の明瞭さ等を高める指導事例

長崎大学教育学部附属特別支援学校 教諭 岡元和正

Key Word : ダウン症、認知、構音障害

1. 目的

基礎概念などの認知的力や文字表記・数量等の力を高め、言葉への細かい注意力、発音の明瞭さ、学習の持続力、学習の構えの向上を図るためのワークシートの効果を探る。

2. 方法

対象生徒に対し、本目的を達成するために、通常行っている学校での授業等の他に、保護者と連携し、ほぼ毎日の家庭学習として、独自に作成した基礎認知、言語、数量のワークシートを行う。

①期間

20××年4月～20××+1年10月。計1年6か月間（中学1年から中学2年2学期半ばまでの期間）

②対象

男子、ダウン症、構音障害、聴覚障害。療育手帳A1、身障者手帳一種3級。開始時、好んで表記する文字読解困難。

③手続き

ワークシートを保護者と連携し取り組む。自作の基礎認知、言語、数量の1～3問からなるワークシート（A4サイズ）。三千種以上。言語、数量が易から難の順序、認知が生徒の内的な偏りの度合を配慮して取り組ませる。保護者と指導者が連携し、主に家庭学習として実施。取り組みを見守り、出来終えた時に称賛し○を即時的に行うなどの支援。ほぼ毎日4～8問の課題。

4. 結果・考察

①基礎認知、言語、数量のワークシート学習の変化

開始前、11・12ヶ月、15ヶ月、17ヶ月、19ヶ月目にワークシートを使ったテスト等を行った。その結果がFIG.1,2,3である。当初は基礎認知的な課題の伸びが見られ、1年後には、言語、数量的な課題達成度に変化がみられた。

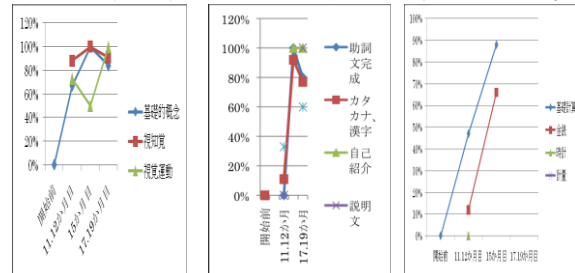


FIG. 1 基礎認知の獲得状況 FIG. 2 言語の獲得状況 FIG. 3 数量の獲得状況

○11.12ヶ月目の様子

基礎認知であるが、視覚運動の線・図形・文字等を正確になぞれるようになった。基礎的概念で簡単な身近なことばの意味、関係あることばなどの課題ができるようになった。

○15, 17, 19ヶ月目の様子

言語、数量が大きく伸びてきた。基礎認知であるが、基礎的概念、視知覚、視覚運動共に伸びてきた。言語でも伸びが見られた。

②文字表記の変化

当初は黒板や紙などが目には入ると、すぐに文字らしいものを書いてた。しかし、それが何を書いてあるか読み取ることができなかった（Fig.4）。19か月後では、一部助詞が抜けることもあるが、十分に理解できる文字表記、文章になった（Fig.5）。

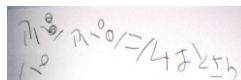


Fig.4 開始時の表記文字

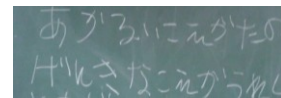


Fig.5 19か月目の表記文字

③難聴の軽減

11.12ヶ月目において、身近な指導者や保護者間で、大分話することが分かるようになったと言われ始めた。専門医による聴覚障害の診断の結果は、中度難聴から軽度難聴へと変化（本開始時の診断で右左90dBであったが、12か月後の診断で50dBへ）した。

④構音障害の変化

5か月目と19か月目の同じ内容の発語の結果がFig.6の通りであった。5ヶ月目で助詞「を」が抜けるが19ヶ月目では正確に言った。5ヶ月目では、その他の文言が抜けている。語尾が抜け、助詞が抜けているが他者にとって意味理解上問題ない。5ヶ月目で「わるい」を「わしい」と発音するが、19ヶ月目には「わるい」としっかり言えた。「る」は、所謂[r]の構音で有声の弾音であり、発音の困難な音であるが改善されたと考えられる。

①	おじいさん、じゃがいもを うえてよいですか。（台本） おじいさん、じゃがいもを うえてよいですか。（5ヶ月目「を」がぬける。） おじいさん、じゃがいもを うえてよいですか。（19か月目全て正確にいう。）
②	おじいさん、おばあさん、さようなら、さようなら。（台本） おじいさん、おばあさん、さようなら、○○○○。（5ヶ月目「さようなら」を2回言うべきところが一回になる） おじいさん、おばあさん、さようなら、さようなら。（19か月目全て正確にいう）
③	ふん、これは なんだ。（台本） ふん、これ〇 なんだ。（5ヶ月目「助詞「は」が抜ける。」） ふん、これ〇 なんだ。（19ヶ月目前回と同様に助詞「は」が抜ける。）
④	なんと、わるいことを したのだろう。 そうだ。みずを まこう。（台本） なんと、わしいことを ○○○○○。（5ヶ月目「わるい」を「わしい」と発音。「したのだろう」が抜ける。「みずを」「みず」になり、助詞「を」が抜ける） なんと、わるいこと〇 したのだろう。 そうだ。みずを まこう。（19ヶ月目「わるいことを」が「わるいこと」になり、「を」が抜ける）

Fig.6 構音障害の変化

⑤その他の変化

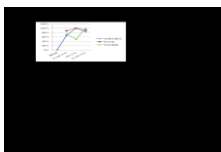
開始時、継続してのワークシートの取り組みが10分程度で限界であったが5か月後に40分以上集中して取り組めるようになる。12か月後に、話している人を中断するようなふざげがなくなり集中して最後まで聞くようになる。

以上のことから、本生徒は認知的能力の向上や文字表記等の正確さの高まりにより、相乗的に細かい音韻の違いに注意を向けるようになり、そのことが正しく発音することへの一役を担ったと示唆される。また音韻に注意を向けるようになったことから、聴覚障害の方も改善されたと思われる。日常的にはコミュニケーション、社会的相互関係の力の改善がみられた。

4. 最後に

本事例は、保護者と連携し、生徒に習慣化するほどの一定量と質のワークシートを日常的に取り組ませたことの報告である。本生徒のみでなく、他の生徒においても、日々取り組ませた。その結果は想定以上の成果がみられ、多くのことを気付かされる日々である。ご協力・ご理解頂いた保護者と同僚の教師に感謝したい。

文献：岡元和正 知的障害児に対する認知的学習による効果日本福祉心理学会大会抄録集 9他



「なぞり書き」につながる指導の一事例

隈部 有希

(長崎大学教育学部附属特別支援学校)

KEY WORDS: ダウン症 なぞり書き 平仮名

I. 目的

特別支援学校学習指導要領解説では、中学部の国語について「生徒の生活の広がりに伴って、「聞く・話す」、「読む」、「書く」力を高め、表現力を更に伸ばして生活で活用することに意義がある。」としている。本事例では、平仮名で書かれた自分の名前を読むことができている生徒に対し、名前の「なぞり書き」につながるための指導を行った。自分の名前を書くことができるようになることで、更に生活が広がると考える。目的的に書くことが難しい生徒Aに対し、文字として認識できている自分の名前（5文字）について、なぞり書きをすることを目標に取り組んだ。国語の授業での生徒の取り組みと変容について検討する。

II. 方法

1. 対象生徒（生徒A）

特別支援学校に通学する中学部2年、ダウン症の女子である。簡単な指示はほぼ理解でき、指示通りに活動することができる。自ら気持ちや欲求を伝えることも増えてきた。言葉はやや不明瞭であるが、友達や身近な大人と簡単な会話や言葉のやり取りを楽しむことができる。自分の名前に使われている平仮名は読むことができる。書くことが好きで自由になぞり書きをするが、なぞり書きはまだ難しい。気分にはむらがあり、活動に意欲的に取り組めないときもある。先天性白内障で弱視、視野も狭い。

2. 期間

201X年6月～201X+1年10月

(中学部1年6月～中学部2年10月)

3. 指導の実際

国語の時間（週2回）のうち、5～10分程度を使い、以下のような活動を組み合わせながら指導を行った。ただし長期休業中や行事などにより、指導は間が空くこともあった。

(1) 名前に使われている平仮名（5文字）について、文字カードで読みの確認を行う。その際名前の順番ではなく、順不同で提示することで、きちんと文字を見て識別するよう、意識を高めた。

(2) 仕切りがついた容器の数カ所におはじきを入れておき、同じ場所に木製の玉を入れていく活動を行う。きちんと見て、ポイントを捉えるように練習と確認を行った。(Fig. 1)



Fig. 1 木製の玉を入れている様子

(3) 点むすびを行う。点は色つきの丸シール（8mm）を使用し、生徒には自分が書いた線が見やすいよう、フェルトペンを使用させた。

(4) 名前に使われている平仮名のなぞり書きを行う。下書きの文字が見えていることを確認するために、

何と書いてあるか読ませてから取り組むようにした。点むすびと同様、フェルトペンを使用させた。

以上、4つの活動を行っている。(1)については毎回行ったが(2)～(4)については、組み合わせを変えて行った。(2)は中学部1年6月から9月頃まで、(3)は中学部1年6月から、(4)は中学部1年7月から継続して指導している。

III. 結果と考察

今回の指導では、視力の面にも十分に配慮をしながら指導を進めた。(1)は生徒Aが好きな活動であるため、文字の学習の導入として毎回行うことで、学習に対する意識を高めることができた。一文字ずつ提示された文字を読む活動やランダムに置かれてある文字カードを自分の名前になるよう並べ替える活動は、ほぼ確実にできた。(2)の活動では、生徒Aがきちんとポイントを捉えることができ、見え方に大きなズレがないことが分かった。繰り返すことで素早くポイントを捉える練習にもなったのではないかと考える。(3)の点むすびは、色の識別が確実にできていることを確認した上で、丸シールの色を1色から3色まで増やした。初めは色に関係なく点をつないでいたが、目の前で色を確認しながらシールを貼り、始点と終点を丁寧に伝えることで、同じ色同士をつなぐことができるようになった。これにより一筆書きではなく、2本、3本の線を書くことにもつながり、横線や縦線だけでなく交差する線も引くことができるようになった。(4)のなぞり書きは初めは「線に沿って同じように書く」ということが難しかった。そこで下書きの線の始点と終点に(3)で使用した丸シールを貼るようにした。そうすることで目印になり、下書きの線を捉えやすくなったようである。回を重ねていくことで、丸シールがなくても下書きの線を意識することができるようになっていった。また、文字の大きさについても、A4用紙1枚に一文字から初め、現在はA4用紙に5文字を書く程度の大きさに発展している。

まだ文字として形が整っていないことが多いが、確実に下書きの線を捉え、しっかりと線を書くようになってきている。以前は教師が止めるまでいつまでも書き続けていたが、最近では自分なりになぞり書きが終わると「できました」と伝えるようになってきている。このような姿からも、生徒A自身が「文字」を意識しながら書いていることが分かる。なぞり書きの練習については、国語の時間だけではなく学級や家庭でも行ったことで定着が進んだと考える。今後更に連携し、書く機会を増やしていくことで、しっかりとなぞり書きができるようにしていきたい。

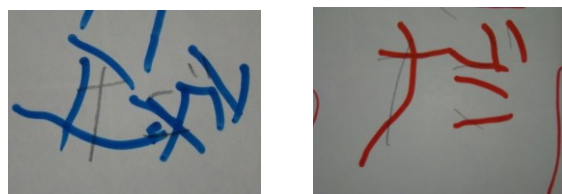


Fig. 2 なぞり書きの変化（左5月、右10月）

余暇活動「どれみコーラス」の実践

長崎大学教育学部附属特別支援学校 教諭 田口眞弓 遠藤 茂 坂田信吾 田中真季子

Key Word : 余暇活動 地域支援 大学との連携 ボランティア

(はじめに)

本校では、平成14年から「どれみコーラス」として、附属特別支援学校の在校生とその家族、卒業生や盲・ろう・特別支援学校、特別支援学級の児童・生徒が月に1回、週末に集まり、歌やダンスなどの音楽を中心に活動している。ここでは、歌うことの楽しさや、仲間と過ごす喜びを大切に取り組んでおり、当初からのメンバーや、新しく入った仲間がそれぞれのペースで音楽を楽しんでいる。本校の教師や長崎大学の学生と一緒に歌ったり音楽に合わせて身体を動かしたりすることを楽しみに、月に1回の練習と年に2回のコンサートに取り組むようになって10年目である。

(目的)

知的障害児者やその家族、長崎大学の学生、教員が、一緒に歌やダンス等の音楽を通した活動することによって、歌うことを楽しんだり、仲間と過ごす喜びを感じたりし、余暇活動の一つとしての楽しみを見つけてほしいと考える。

また、保護者にも、保護者同士で悩みを相談したり、ゆっくりと話をしたり、一緒に歌ったりすることで、息抜きをしたり、活動を楽しんだりする場になればと考える。

(方法)

次のような内容を行った。

i) 毎月1回、週末に集まって歌を歌ったり曲に合わせて身体を動かしたりするなどの音楽を通した活動を行う。

ii) 練習した成果を年に2回の「わくわくコンサート」や「ほのぼのコンサート」で発表する。

《実践例》

i) 替え歌『ドレミの歌』みんながよく知っている『ドレミの歌』の歌詞を、「ドはドラえもん、レはレストランのレ…」と子どもたちと一緒に考えたり、機会あるごとに歌い続けることで、これまでよりも歌に愛着を感じたり、喜びを感じたりしながら歌うことができています。また、どれみコーラスのテーマ曲としても定着している。『ドレミの歌』の他にも『ビリーブ』、『カントリーロード』など、継続した取り組みを行うことで、積極的に声を出したり、笑顔が見られたり、楽しそうに身体を揺らしたりする様子が見られるようになってきた。また、オリジナルソングとして教師が、『コーラスどれみ』と『青い機関車』を作詞作曲した。この曲ができたことで、「自分たちの歌ができた」という、これまでにない

喜びを感じ、よりいっそうの愛着を感じながら歌うことができるようになった。

ii) 『わくわくコンサート』『ほのぼのコンサート』

の年に2回のコンサートに取り組んでいる。コンサートでは、附属小学校、中学校、幼稚園、と協力しながらステージを作り上げている。5年目のわくわくコンサートでは、5周年記念公演として、「どれみコーラス」の活動を始めるきっかけを作ってくださった東京学芸大学附属特別支援学校の「若竹ミュージカル」を招いてコンサートを行った。大きなホールで歌う経験をすることで、たくさんの観客の前に、普段味わうことのない緊張感を味わったり、大勢の人に聴いてもらう達成感や喜びを感じたりすることができたと感じる。

(結果と考察)

どれみコーラスの取り組みを始めて10年が経過した。在校生の中には、活動を楽しみにし、校内で出会うと、「先生、今度はどれみコーラスいつあるの?」と尋ねてくる児童生徒もいる。また、卒業生も保護者と一緒に参加したり、一人で参加したりする人など、活動の定着が感じられる。参加人数についても保護者等を含めると毎回20人前後の参加者がいる。活動し始めた頃は、主に中高生や卒業生が参加者が多かったが、最近は小学生も保護者と一緒に参加するようになった。さらに、本校の在校生や卒業生だけでなく、育成会のタイムケア事業による地域の特別支援学校や特別支援学級の児童生徒の参加する機会も多くなった。

どれみコーラスの活動は、歌ったり、身体を動かしたり、ゲームをしたりという楽しみだけでなく、在校生にとっては、休日に友達と一緒に話をしたり、遊んだりする場として、また、卒後生にとっては、慣れ親しんだ学生時代の友達や保護者と出会う場としても休日の余暇活動としての役割を果たしていることが考えられる。しかし、一方では運営面において、学生ボランティアの参加が少なくなっているという課題等がある。また、年1回の附属校園の交流コンサート(わくわくコンサート)もこれまで学生の総合演習として学生中心で行ってきたが、総合演習のセミナーが閉講となったため、附属校園や教育学部の教師中心で運営している状況である。どれみコーラスの活動を継続していくためには、学生ボランティアの存在は大きい。これからも、教育学部との連携を取りながら、どれみコーラスの活動が余暇活動の一つとして継続していききたいと考える。

長期病氣療養者の「自尊心」に関する支援の一考察

～進行性筋ジストロフィーFさんの作詞活動のサポートを通して～

遠藤 茂

(長崎大学教育学部附属特別支援学校・岐阜大学大学院)

KEY WORDS: 進行性筋ジストロフィー 作詞活動 自尊心

(目的)

長期病氣療養生活にある子どもたちの日々は、自分のこれからに対する不安や失望との向き合いであり、自尊心が育まれにくい状況にあるといえる。このような子どもたちの教育は、自ずと「生きるとは」や「生きがいは」といった QOL の視点が重視され、それに対応しうる教育の展開が期待されていることは周知の通りである。特に、進行性筋ジストロフィーの子どもたちの卒後は、継続入院であったり、自宅などの療養であっても一時期を過ぎると再入院したりというケースが少なくない。このような生活環境で生きる支えになるものの一つに趣味活動がある。しかし、趣味があるからそれでいいというわけではない。趣味活動もその人の成長や年齢に応じて求めるものが変容し続けることによって QOL 向上に繋がるのではないかと考える。その過程において自尊心の形成に視点をおいた支援が重要ではないかと考えた。

(方法)

1. 対象者

Fさんは、進行性筋ジストロフィー、27歳の男性である。県立S特別支援学校中学部と高等部に在籍中、音楽やコンピュータと出逢い、それが主な趣味活動になった。卒業後、ネットで知り合った健常の友とバンドを結成しボーカルを務めたこともある。その後、病状が進行し、2年前に肺機能の低下により気管切開を余儀なくされ、完全にベッド上の生活に入った。考えた挙げ句、楽曲づくりに着手することを自分で決め、私に協力依頼を求めた。

2. 支援の方法

楽曲づくりは、作る喜びに留まらず、聴いて喜んでもらう喜びを期待するものである。そのためには、多くの人に共感してもらうようなものを作る必要があり、非常に高度な感性や技術が要求される。特に作詞はそうである。「楽曲づくりを再開したいので、新しく作曲ソフトを準備したいということと、私の最近作った曲を聞きたい」ということの要求がメールであった。それから程なくして、詞が送られてきた(作詞メールⅠ)。この詞を目にしたとき、彼が中学生時代にかいた詞を思い出した。というのも、ものの見方や考え方が当時と全く変わっていなかったからである。予想通り、彼のおかれている物理的・心理的な立ち位置でつい作詞したのであろう。ネガティブな感情が全体を覆い、これでは、楽曲づくりの本来の満足感は得られないと考えた。

作詞メールⅠ

作詞してみました。女性をイメージして書きました。曲、楽しみにしていますね。

もう忘れたはずなのに どうして夢に出てくるの あなた
もう全てを消したのに 幸福の日々鮮明に 映る
懐かしき溢れ とまらない 今日だけは泣かせてよ
どしゃぶりの雨のように 明日からは泣かないよ
強い心であなたの分まで 生きていくわ 私
いつも私がピンチの時 そっと手を差しのべてくれたね
忘れてたりしてごめんなさい ずっと あなたを 忘れない
今日だけは泣かせてよ どしゃぶりの雨のように
やがて空は晴れわたり 光輝くあなたの微笑み
抱きしめるわ 私

早速、病院に行き、直接会って次のようなことを具体的な例を交えて話した。

- ①ベッドの上でかいたって思われないようにしよう
- ②自分を慰める唄ではなく、誰かに勇気を与えるような内容にしよう
- ③時間軸をつくろう
- ④季節を感じる情景を取り入れよう

私は、やや強い口調になった。というのも、年齢は下ではあるが、Fさんは私以上に生きることと向き合ってきた人間である。詞には、本人の生き方や考え方が投影される。そこに描かれた世界観でまたFさんが成長する。そう思うと、自己満足で終わって欲しくない。これを機に本人の思いや考え方を引き出し、納得のいくものになったならば、自尊心が形成されたと考えたのである。本人は、書き直しをさせられるなど思ってもいなかったようで、困惑している様子だった。「いい詞だね。よくがんばったね」と言葉掛けをする支援も選択肢の1つであったが、より質の高い自尊心の形成に期待した。しかし、1か月以上連絡がなかった。もしかしたら、あまりのショックで創作意欲が失われたのではないかと、健康を損ねたのではないかと心配が過ぎた。積極的な支援を後悔しかけていた頃、書き直された詞(作詞メールⅡ)が添付されたメールが届いた。

作詞メールⅡ

詩が出来ました。
希望、明るさ、未来をテーマにして書きました。
タイトルは、「目の前の扉開けてごらん」

目の前の扉開けてごらん そこには きっと
きらめく世界が待っているから Sunshine Life
いつもより晴れた空 優しい風がそっと
僕を包み込むよ
こんなにもあたりまえの事が 嬉しく思えるのだろう
目の前の扉開けてごらん そこには きっと
きらめく世界が待っているから Sunshine Life
ありふれた現実 飛び出して 新しい夢 見ようよ
ずっと君のそばにいれるように がんばる もっと
幸せ未来を作っていくのさ Sunshine Smile
愛する人を守るため 心 強く
今日も必死に戦っています Sunshine Heart
目の前の扉開けてごらん そこには きっと
きらめく世界が待っているから Sunshine Life

(結果と考察)

送られてきた詞は以前のもものと明らかに違った。本人の物理的、心理的位置の変容や、時間空間的な表現の拡がりなどが感じられるものだった。このようにFさんは、自ら自尊心の形成に挑み、QOLを向上させたと推察される。

私たち教師は、先人の経験知により子どもたちに「趣味をもつ」ということを提案し、卒後その趣味活動が活かされQOLの向上につながっているものと思っていた。しかし、そこには、さらなる支援や精神的なステップアップが必要であることに気づかされた。作詞活動を通して、自分と対話し、自分なりに物事をとらえ直し、表現をしていくことは、何より自尊心を高め、客観的な視点から主観的でスピリチュアルな部分まで複雑に絡みあう QOL の向上につながったと感じている。

知的障害者の認知教具の開発について

凸型板による触覚情報処理機能支援の試み

遠藤 茂

(長崎大学教育学部附属特別支援学校)

KEY WORDS: 知的障害 触覚情報処理機能 認知教具

(目的)

特別支援教育現場では、子どもたちの認知処理過程に配慮した教材教具開発などが盛んに進められている。その背景には、近年活用されることが多くなった WISC-III や K-ABC、DN-CAS など心理アセスメントの影響も大きいと思われる。これら心理アセスメントの実施目的は、各検査の認知機能の評価から援助の手がかりを推定することにある。これらの認知評価により、私たち教師は、既存の教材の中から効果的な教材を選択したり、新たに教材や教具を開発したりし、子どもたちの認知処理過程の特性に配慮した授業づくりが考えやすくなったと言える。本校においても、認知・心理面に視点を置いた評価に注目し、新しい授業づくりの展開に伴い、効果的な活用法を含めた教材教具の開発や、指導法の研究が進められているところである。

さて通常、教材教具の開発は、子どもたちの視覚・聴覚をはじめとする感覚機能を活用・刺激するような視点から進められていると推察される。特に視覚教材については、一般に脳機能の情報量の80%が視覚情報で占められていると言われていることからその開発数は多い。しかし、視覚優位、聴覚優位と判断される子どもたちに優位さを生かした支援も重要ではあるが、優位さを生かせば生かすほど、他の感覚機能の育成が損なわれていることにも留意したい。そこで感覚の優位性にとらわれることなく、子どもたちの五感の可能性を再評価し、教材開発を見直していくことも開発の重要な視点になると考えた。今回は、視覚情報処理機能において、認知・記憶・イメージできている数字や図形などを触覚機能の情報でとらえることにより、視覚情報としての記憶やイメージを触覚情報として共有することをねらい開発を試みた。

(方法)

1. 期間と対象者

20XX年4月～20XX+1年3月の1年間。知的障害の中学生男子2名、女子2名、計4名。MA4歳6か月～8歳。本校における数学Aグループの生徒である。

2. 使用教具

制作ならびに使用した凸型板は、「数字」「演算記号」「図形」「時刻」の4種である(Fig. 1)。凸型板の材料は、板(85×85×12mm)と細いチューブと細い釘である。



Fig. 1 凸型板(時刻は4時)



Fig. 2 脳のトレーニングの様子

3. 実施方法

40分間の数学の授業で実施した。授業の基本的な構成、①脳のトレーニング(7分間程度)②課題の提示③課題解決のための視覚的教材による情報提供④ワークシート⑤まとめの①で取り組んだ。この「脳のトレーニング」と命名した時間帯は、これまでカードを使用することが多かった。しかし、子どもたちの頭の準備体操になるものは他にないかと考え

作したのがこの凸型板である。アイマスクを装着し、指先から凸型板の数字や図形の情報を読みとる学習活動を二人組で行ったのである(Fig. 2)。まず、5枚の凸型板を二人で選び、選んだ凸型板を確認する。出題者と回答者に別れ、お互いに提示し合う。提示する順番は出題者の計画で進めることにした。

(結果)

11月から12月の2か月間に実施した分で、課題に要した時間をグラフ化した(Fig. 3)。課題は、それぞれ違っているため、ランダムな課題に対しての個人の変化を読み取ることにした。ただし、課題の質は、数字ばかりの5枚や、図形が一枚混じっている5枚などほぼ同じであると考えてよい。なお、Fig. 3では、前回より時間が長くかかっている日が4名とも2回みられる。これが、課題の質的な変化が大きくあったときである。

課題は、難しくなっても簡単にはなっていない。その中で、全体的に横ばいであるということは、読み取る時間が短くなっているといえる。

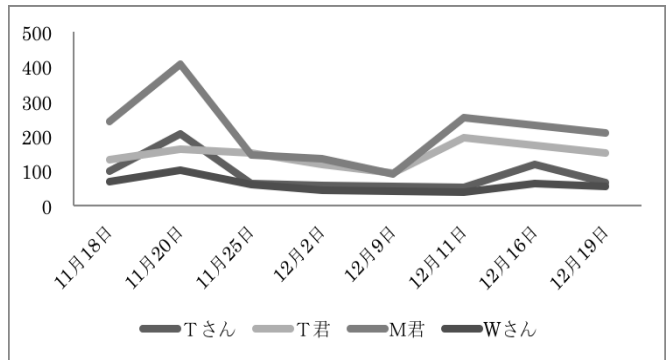


Fig. 3 5枚の凸型板の課題に要した時間(秒)

(考察)

4名ともに、読み取る時間の短縮がみられた。指先→脳→回答という触覚情報処理機能に必要な入力・出力機能も含めた一連の認知処理機能が向上したと考えられる。その要因の1つとして意欲の向上があげられる。当初、間違えることを恐れ、アイマスクの透き間から覗き見しようとしていた子どもたちも、視覚情報を遮断することを恐れなくなった。そのことは大きな成長であり自信につながったであろう。さらに、同種5枚の凸型板で読み取りを楽しんでいたある日、その枠を子どもたちが自ら取り払った(11/20以降)。その難しさを楽しむために異種の5枚組を選択しようと自らハードルをあげたのである。そのことから意欲の向上がうかがえる。

このように、情報量を減らし、回答しようとする子どもたちの様子を見てみると、子どもたちが分かりやすい情報ばかりを求めているわけではないことが再確認できた。そしてただ単に指先の感覚が研ぎ澄まされたということの評価ではなく、学習に対する意欲の向上を評価したい。未開発な感覚機能を使った代替手段により、子どもたちの脳内に快の刺激として受け入れられ喜びが生成されたのではないだろうか。

この教具の学習効果の検証は、まだ不十分であるが、触覚情報処理過程という、通常の情報処理環境に制限を加えた本学習は、知的障害者のある子どもたちにとって学習意欲を駆り立て、自信や主体的な行動を導く効果があることを確認することができた。

研究紀要バックナンバー一覧（第1集～第19集）

■ 特殊学級時代

1)第1次研究〈表現力を豊かにする学習指導〉

精神薄弱児の表現力を伸ばすために、身体表現・絵・文字に視点をあて、文献の研究と授業研究で指導方法を追究した。

2)第2次研究〈事象の認識過程〉

精神薄弱児の認識の過程を知るため実態調査をした。この結果をどう生かしていくかをまとめた。（「精神薄弱児の研究」金子書房、1970）

3)第3次研究〈小中学部の一貫した教育課程の編成〉

以前の研究をふまえ、基礎資料となる計画案をもちより、討論と作業をくりかえして、要素表作成へ第一歩を踏み出した。

■ 養護学校時代

研究紀要 第1集（1972.2）

ひとりひとりの力を伸ばすには
養護・訓練をどのように計画し指導したらよいか（i）

- I 研究のあゆみ
- II 養護・訓練の研究と実践
 - 1. 研究へのとりくみ
 - (1)養護・訓練のうけとめ
 - (2)内容へのとりくみ
 - (3)障害・遅滞について
 - (4)実態調査
 - 2. 授業へのとりくみ
 - (1)小学部
 - (2)中学部
 - 3. 仮説へのとりくみ
 - (1)初期の実践から
 - (2)現在のとりくみ
- III 今後の課題

今次の研究を、精神薄弱教育の本質にせまる問題としてとらえ、3か年の研究計画とした。そして、そこから派生すると思われる精神薄弱教育の諸問題を基本的に解決しようと試みた。

第1年次〈養護・訓練の受けとめと児童・生徒の障害・遅滞の把握〉

養護・訓練とは、障害と遅滞を対象にした教育であ

り、個人的サービスであるとした。テーマは、児童、生徒の障害・遅滞の把握とし、日常生活の観察、言語障害児選別テスト、狩野・オゼレツキー運動能力発達検査から、実態把握につとめた。課題として「障害・遅滞とは」を残した。

第2年次〈障害・遅滞に応じた指導の方法をさぐる〉

対象児選定の方法の確立と診断テスト、および指導のあり方を中心に実践した。

第3年次〈教育課程の中に養護・訓練を位置づけ、教科等と関連を明確にする〉

養護・訓練の目標や内容をあきらかにし、教育課程の位置づけを考える。

研究紀要 第2集（1974.10）

ひとりひとりの力を伸ばすには
養護・訓練をどのように計画し指導したらよいか（ii）

- I はじめに
 - 1. 研究の経過
 - 2. 障害と遅滞
- II 養護・訓練と教育課程
 - 1. 養護・訓練の位置
 - 2. 養護・訓練の目標
 - 3. 養護・訓練の内容
 - (1)内容のとらえ方
 - (2)他領域との関連
- III 養護・訓練の指導
 - 1. 対象児の選定と診断テスト
 - 2. 指導形態と指導時間
 - 3. 言語班での指導
 - 4. 運動班での指導
- IV おわりに

養護・訓練の実践面での問題点や課題を追究して、本校における養護・訓練についてまとめた。子どもたちは、ひとりひとりちがう」ことや「教育課程の二重構造的性」についてまとめた。

研究紀要 第3集（1978.3）

「意欲的な学習」をめざした精神薄弱児の指導はどうあればよいか ～教育課程の改訂をめざして、欲求の発達をさぐる～

- I はじめに
- II 研究テーマについて
- III 意欲・欲求・動機づけ
- IV 研究計画と方法
- V 実践

- 1. 授業の展開および記録
- 2. 各グループのとりくみ〔生活科、家庭科、技術科、作業、体育科グループ〕

VI 考察および今後の課題

学習意欲という視点から「意欲」「欲求」「動機づけ」をキーワードに教育課程を見直し、改訂していこうとした。

研究紀要 第4集 (1979. 6)

生活力を伸ばすための合宿単元学習はどのように計画したらよいか ～生活単元学習のあり方を求めて～

- I 研究主題と設定理由
- II 合宿単元の実践
- III 合宿単元における課題研究

【小学部】合宿の個人目標設定〔身辺処理能力に関すること、集団参加能力に関すること〕

【中学部】合宿の個人目標設定〔基本的生活習慣、心身の鍛錬、集団適応能力〕

【高等部】記録と個人評価〔働きかけを受けないで、促されて、指導を受けて〕～生活意識の評価〔積極性、分担の自覚、協力性、完達性、指導性、素直さ〕

研究紀要 第5集 (1981. 6)

教育課程の編成 ～教育課程の手順をさぐる～

- I 研究主題と設定の理由
- II 研究の目的
- III 研究の方法
- IV 各学部の研究
 - 1. 小学部
 - 2. 中学部
 - 3. 高等部
- V 研究の結果と考察

生きていくために必要な能力や資質を整理する中で6つの領域が設定された。「身辺の自立」「社会性」「感覚・運動」「知的能力」「情操」「態度的能力」がそれぞれある。特に「情操」や「態度的能力」は、次のような

下位項目で構成されている。

情操：情緒、欲求、興味、余暇の利用、表現、鑑賞、飼育、栽培

態度的能力：意欲、協調性、積極性、持続性、注意力、責任感、素直さ、自主性、明朗性、忍耐力、公共心、競争意識

意欲づくり(小学部)、基盤づくり(中学部)、適応づくり(高等部)の段階的な構造を構築。

特に高等部では、指導領域を「くらし」「しごと」「たのしみ」「からだ」4つにまとめられた。この頃、「目ざす人間像」が下記のように示された。

- 愛される人間
- けじめのある人間
- がん張る人間
- 自分でお金をかせげる人間
- 余暇利用
- 社会に役立つ人間

研究紀要 第6集 (1983. 6)

指導法の研究 ～よりよい授業の創造をめざして～

- I 研究主題と設定の理由
- II 研究の具体化
- III 小学部の研究
- IV 中学部の研究
- V 高等部の研究
- VI 考察および今後の課題

(付) 保健室における女子の生理指導

研究紀要 第7集 (1985. 10)

教育課程の見直しの方法をさぐる

～「数と計算」の学習を通して

- I 研究主題と設定理由
- II 研究の具体化
- III 内容班の研究
- IV 方法班の研究
- V 調査班の研究
- VI 小学部の研究
- VII 中学部の研究
- VIII 高等部の研究
- IX 考察および今後の課題

研究紀要 第8集 (1987.6)

一人ひとりの子どもをみつめた実践と評価

- I 主題設定の理由
- II 研究方法
- III 各班の研究 [重い子班、運動班、養護・訓練班、国語班、作業班、職場実習班、性教育班]
- IV 結果と考察

自己選択・自己決定するための効果的な指導法をさぐる

- III 中学部の研究
生活に生き、生活を楽しむための教科別指導(国語)のあり方をさぐる
- IV 高等部の研究
卒業生の実態調査を通して、よりよい生活を願った高等部教育を考える

研究紀要 第9集 (1989.6)

社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導
(その1) ～発達段階に応じたコミュニケーションの指導内容を探る～

- I 主題設定について
 - 1. コミュニケーション研究の必要性
 - 2. コミュニケーションのとらえ
 - 3. 研究の焦点化
- II 研究構想
- III 研究の目的と方法
- IV 各学部の研究
- V 考察と課題

研究紀要 第12集 (1995.11)

自立を支える指導法の研究 ～自ら考えて行動する子供を育てる授業のあり方を探る～

- I 研究テーマについて
- II 研究の目標
- III 研究の方法
- IV 小学部の研究
子供が工夫して遊びを楽しむような課題あそびの仕組み方と働きかけの方法を探る
- V 中学部の研究
自ら思考し、解決する力を引き出すための授業計画や働きかけの方法を探る
- VI 高等部の研究
生活中心の授業を通して、将来も自らの意思と判断で生活を充実させようとする指導のあり方を探る
- VII 研究の結果と提言

研究紀要 第10集 (1991.6)

社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導
(その2) ～コミュニケーション指導内容表、コミュニケーション基本指導プログラムの作成と実践事例を通して～

- I 研究テーマの設定理由
- II 研究の目的
- III 研究の手続き
- IV 本校のコミュニケーションの様相
 - 1. コミュニケーションの考え方
 - 2. 本校の児童・生徒の実態とコミュニケーションの指導内容
 - 3. コミュニケーションの指導方法
 - 4. コミュニケーションの指導の評価
- V 小学部の研究
- VI 中学部の研究
- VII 高等部の研究
- VIII まとめと今後の課題

研究紀要 第13集 (1997.6)

子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～
(その1: 診断的評価から目標設定を考える)

- I 研究基調
- II 小学部の研究
のびのびと自分らしさを発揮する子どもを育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
- III 中学部の研究
生き生きと個性を発揮し、自ら生活に取り組もうとする生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
- IV 高等部の研究
生きることに自信をもち、向上心と思いやりのある生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善

研究紀要 第11集 (1993.6)

「自らが生活を充実させようとする」教育を求めて

- I テーマとその背景
- II 小学部の研究
課題に自ら取り組み、自ら解決する子供をめざして、

研究紀要 第14集 (1999.6)

子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善
～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～
(その2：形成的評価から授業改善の方法を考える)

I 研究基調

II 小学部の研究

のびのびと自分らしさを発揮する子どもを育てる
ための内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改
善

III 中学部の研究

生き生きと個性を発揮し、自ら生活に取り組もうと
する生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価
のあり方と授業改善

IV 高等部の研究

生きることに自信をもち、向上心と思いやりのある
生徒を育てるための内面に焦点を当てた評価のあ
り方と授業改善

研究紀要 第15集 (2002.2)

教育課程の再編成 その1 ～アセスメント機能をも
った内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかり
を探る～

I 研究基調

1. はじめに
2. 目的
3. 研究の基本姿勢と方法
4. 結果と考察
 - (1)教育課程に関連した学校教育の動向
 - (2)教育課程のとらえ
 - (3)内容表試案の機能と構造など
 - (4)今後の教育課程の研究の手がかり
5. 最後に

II 小学部の研究

Keyword: 教育課程、意欲づくり、発達の視点、
育てたい子ども像、不易の視点、教育内容、中核
的内容、順序性、発達のステージ、領域別教育内
容表、生きる力

III 中学部の研究

Keyword: 厳選の視点、中核的内容、根源的な力、
基盤づくり、問題解決的な学習、内容知、内面、
方法知

IV 高等部の研究

Keyword: 教育課程、内容表試案、完全学校週5
日制、個別移行支援計画、自己選択・自己決定、
自己理解

研究紀要 第16集 (2004.6)

教育課程の再編成 その2 ～実践的課題研究と卒業
生の実態調査をとおして、自立と社会参加をめざした
教育課程の編成の手がかりを探る～

I 研究基調

1. 全体研究テーマについて
2. 全体研究目的
3. サブテーマについて
4. 研究方法
5. 研究成果と教育課程再編成への提言のまとめ
6. 研究その2のまとめと研究その3の展望

II 小学部の研究

一人一人の教育的ニーズに応じる教育課程への再
編成の手がかりを探る ～現教育課程で指導の難
しさを感じる子どもの事例をとおして～

Keyword: 生活のニーズ、発達のニーズ、教育的
ニーズ、情緒の育ちと安定、一人一人に応じる、
集団学習のよさ、発達の視点、柔軟な構造をも
つ教育課程

III 中学部の研究

思春期を迎える中学生の発達と「からだの学習」の
検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る
～アイデンティティの形成につながる自己意識・自
己概念の発達に焦点をあてた発達課題の検討に基
づいて～

Keyword: 思春期(青年期前期)、発達課題、から
だの学習(性教育)、自己意識・自己概念、アイ
デンティティ

IV 高等部の研究

自ら進路を切り拓く生徒を育てる「進路学習」の在
り方の検討をとおして、教育課程再編成の手がかり
を探る ～卒業生の実態調査と高等部段階におけ
る個々の発達をふまえて～

Keyword: 進路を切り拓く、進路指導、進路学習、
自己選択、自己決定、発段階に応じた進路学習、
「大人の自分」づくり、自己理解、前向きな姿
勢

V 卒業生の調査研究

「卒業生保護者への本校教育課程についてのアン
ケート調査」と「卒業生の生活についてのアンケー
ト調査」をとおして、教育課程再編成の手がかり
を探る

Keyword: アンケート調査、卒業生、卒業後の生
活実態、労働実態

研究紀要 第17集 (2007. 2)

教育課程の再編成 その3

～自己の形成へつながる教育課程の創造～

I 研究基調

II グループ研究

1. 区分「くらし」
2. 区分「いきがいの」
3. 区分「まなび」
4. 区分「からだ」
5. 4区分を支える「こころ」

III 小学部の研究

小学部における自己の姿：「自己活動の充実期」

～身近なものとかかわるなかで自分に気づき、発見していく自己～

IV 中学部の研究

中学部における自己の姿：「自己の拡大・肯定期」

～自分の成長を実感し、他社と協調しながら新たな自分をみつめる自己～

V 高等部の研究

高等部における自己の姿：「客観的な自己の形成期」

～客観的な自己評価や生き方のイメージをもち、自立的な社会生活の場への積極的な参加を志向する自己～

VI 今後の課題

Keyword：自己決定、自己理解、自己選択、自己評価、他者評価

V 研究の成果と展望

研究紀要 第19集 (2012. 2)

自己の育ちを支える小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を考える

～「進路学習のステップ」の作成と指導形態「進路」の実践～

■ 特別支援学校時代

研究紀要 第18集 (2009. 6)

自己を育む授業実践

～「こころチェックリスト」を取り入れた授業設計～

I 研究基調

- 1 研究の概要
- 2 全体研究テーマについて
- 3 研究の目的
- 4 研究の方法
- 5 研究の経過

II 小学部の研究

自己活動に視点をのいた授業づくり

Keyword：自己活動の発現期、行為主体の自己、要求主体の自己、自己調整の芽生え、こころチェックリスト、授業分析表、重要な他者

III 中学部の研究

自己調整に視点をのいた授業づくり

Keyword：自己調整、個別目標チェック表、授業分析表、仲間関係

IV 高等部の研究

自己決定に視点をのいた授業づくり

あとがき

私は平成 5 年度から、8 年間、本校高等部で進路指導主事をしていました。当時は毎日のように企業や福祉施設、職業訓練機関などに訪問し、現場実習先や進路先の開拓をしていたことを思い出します。また、進路指導に関しては、高等部入学時に、卒業後の進路について具体的なイメージをもっている生徒は殆どいせんので、高等部の 3 年間、学級担任と協力して進路指導に取り組んでいました。

当時の高等部での進路指導は、6 月、11 月に実施する現場実習で、本人、保護者が希望した企業や福祉施設などでの仕事や生活の経験を基にして、自分は何をしたいか、何ができるかなどを考えながら、卒業後の進路先を選択し、高 3 で決定していきました。進路を決めていく指導は、現在と大きく変わっていないと思いますが、進路指導は高等部から始まるといった印象をもっていました。小・中学部の進路指導は最終学年において、次の中学部、高等部で学習する内容やそれに対してどのような準備や心構えが必要かなどについて指導していました。その中で、高等部卒業後の仕事や生活についてもふれていましたが、小学部段階からの系統立った進路学習ではありませんでした。各部毎に必要と考えられる学習内容を選んで進路指導に取り組んでいましたので、いつかは、全教員の共通理解の基に小・中・高一貫した進路指導に取り組むことが必要であり、それは本校の進路指導の課題だと考えていました。本研究はその課題を解決するために、一歩踏み出したものであると期待しています。

本研究は研究の目的にあるように、小学部から高等部までの一貫した組織的、系統的な観点から、進路学習の意義をとらえ直し、進路学習におけるねらいやキーワードの共通理解を図り、児童生徒が生きることの喜びや期待感を感じながら将来の生き方を考えることにつながる指導内容や指導方法を明らかにするために、全校研究として取り組んできました。

本研究の成果として、全校で「進路学習のステップ」を検討しながら、指導形態「進路」の授業づくりに取り組み、小学部から高等部までの指導内容など、系統性を考慮した進路学習を考えることができました。さらに、小・中学部については、単元や題材の配列を考えた年間指導計画を作成して、次年度に引き継いでいく体制づくりもできました。ただ、小・中学部で指導形態「進路」にかけられる時数は、他の指導形態との関係から多くは取れません。また、進路学習と関連ある内容のうち、進路学習の基礎学習はどういった内容があるのか、その中でも小・中学部はどのような内容に重点をおくべきかなどは、実践を重ねて検討する必要があります。授業実践は各部で検討した内容を取り入れた実践に取り組みましたが、各部間で系統性をもたせ、つながりがある内容には、まだなっていないなどの課題も残っています。

本研究において、指導形態「進路」の小・中・高各部による実践的研究を行うことで、小・中・高一貫した進路学習の授業の在り方を提案することができました。まだ、課題はあるものの進路学習の指針となるものが少しずつ明らかになったと考えています。本研究が御参会の皆様の進路指導の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本研究会開催にあたりまして、適切な御指導、御助言をいただきました長崎大学教育学部の諸先生方並びに県内の特別支援学校はじめ関係各位の皆様方に暖かい御支援を賜りましたことに心から厚くお礼申し上げます。

教 頭 山 田 勝 大

研究同人

【校長】池田 英俊

【教頭】山田 勝大

《小学部》

田口 眞弓（主事）
上田 尚子
末次 明子
堀 克彦○
開 珠美○
坂田 信吾
山中 祐造
田中真季子
中村 詩織（養護教諭）

《中学部》

森川 元（主事）
岡元 和正
遠藤 茂
伊藤 公裕○
隈部 有希
坂井 梨香
松本 雄平
松本 明子
市丸 恵

《高等部》

島田啓一郎（主事）
井手 純郎
野口 誠
野坂 知布○
長野 裕子
田渕 康代
谷 美緒子
古峨 美鈴
山口 真司※
西岡万木子

（○は研究部）

（※は、平成 22 年度研究部）

《小学部共同研究者》

綿卷 徹
（長崎大学教育学部教授）

《中学部共同研究者》

鈴木 保巳
（長崎大学教育学部准教授）

《高等部共同研究者》

平田 勝政
（長崎大学教育学部教授）

《平成 21 年度研究同人》

野原 嘉泉
福井 昭史

《平成 22 年度研究同人》

峯 信幸（校長）
高谷 有美
新納 友二

研究紀要 第 19 集

平成 24 年 2 月発行

編 集 者
発行代表者
発 行 所

長崎大学教育学部附属特別支援学校
池 田 英 俊
長崎市柳谷町 4 2 番 1 号
長崎大学教育学部附属特別支援学校
TEL (095)845-5646
FAX (095)845-0521